

都市計画道路博多駅築港線関係
埋蔵文化財調査報告(II)

博 多

福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集

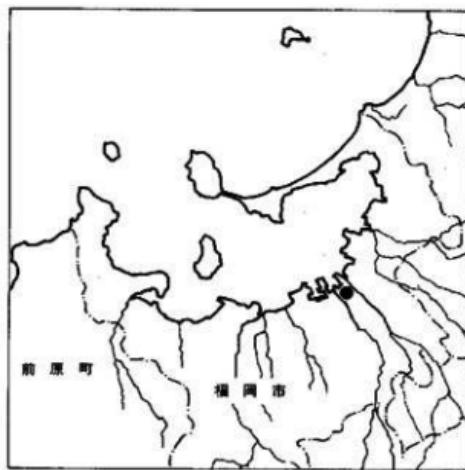
1988

福岡市教育委員会

都市計画道路博多駅築港線関係
埋蔵文化財調査報告(II)

博 多

福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集



1988

福岡市教育委員会

M.15824

都市計画道路博多駅南港埠頭整理及文化財調査報告(Ⅰ) 博多 正誤表

頁	行	誤	正
卷頭図版 1	下欄	つきあたりは博多湾、龍古島	つきあたりは博多湾、志賀島
卷頭図版 2	上段	(紋背側)	(結節側)
33	32	360号土塙出土遺物2	214号土塙出土遺物2
117	写真下		182 548号土塙出土遺物2
216	21	(1/8)	(1/80)



V面積出造構全景(南東より、つきあたりは博多湾、能古島)



1. 683号土塚出土湖州八棱鏡(鏡背側)



2. 541号土塚出土黄釉绘盒

序 文

博多遺跡群は、古代から大陸貿易の門戸として栄え、現在の福岡市の基礎となった都市遺跡です。現代に至るまで、絶えることなく生活の場となっていました。

都市計画道路博多駅築港線は、博多遺跡群を南北に縦貫する道路で、福岡市の玄関口JR博多駅を結ぶ国際シンボルロードとして、整備がすすめられています。昭和57年から62年まで、福岡市教育委員会では、道路拡幅部分を対象に埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。博多遺跡群からは、多彩な輸入陶磁器類に代表される中世都市博多の繁栄を物語る夥しい資料が出土しました。本報告書はその第2次調査の報告書です。

本書が市民の皆さんに文化財に対する御理解を深めていく上で広く活用されるとともに、学術研究の分野においても貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの方々の御協力に対し、心から謝意を表すものであります。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐 藤 善 郎

例　　言

1. 本書は、都市計画道路博多駅築港線(通称大博通り)の拡幅工事に伴なって福岡市教育委員会が実施した、福岡市博多区上呉服町1番地における第2次発掘調査の報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、力武卓治、大庭康時が協議して行なった。
3. 本書に使用した遺構実測図は、力武・大庭・山口満・池田光男・日野光嗣が、遺物実測図は、吉留秀敏・大庭・山口・池田・崎山伸一・田中克子・小川泰樹・荻村昇二・永瀬昭子・松本美保が作成した。また整図には、力武・大庭・常松幹夫・山口・池田・小川・荻村・永瀬が分担してあたった。
4. 本書に使用した方位は、すべて磁北である。
5. 本書に使用した遺構写真は、白石公高・力武が撮影した。また、遺物写真は力武が撮影し、541号上塙出土の墨書き上器・683号土壌出土の漆器については、福岡県立九州歴史資料館において撮影していただいた。
6. 墨書き上器の判読に際しては、福岡県立九州歴史資料館横田義章氏、倉住靖彦氏の御協力・御教示をいただいた。
7. 第2次調査における遺構番号は、第1次調査からの通し番号とした。ただし、整理作業後の重複をさける為、土壙は201番、柱穴状小土壙は251番、井戸は51番、配石遺構は10番、溝は5番から番号を付けた。
8. 本調査地点のすぐ東に、江戸時代の建築にかかる家屋が存在した。第2次調査中、この建物の貴重さに鑑み、九州大学工学部助手山本輝雄氏にその調査を御相談申し上げていたが、第4次調査中、残念ながら都市再開発の流れの中で解体・移築されることになった。解体に際しての調査には、九州大学工学部建築学科第九講座の方々があたり、山本輝雄氏からその成果について、玉稿をいただいた。その後、同地は博多遺跡群第35次調査として発掘調査がなされているが、上の様な経緯で、本報告書の付篇として収録させていただいた。
9. 本調査に関する全ての記録類、出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理される予定である。

遺跡調査番号	8331		遺跡略号	HKT-R 2	
調査地地番	博多区上呉服町1番地		分布地図番号	天神49	
開発面積	1,380m ²	調査対象面積	1,380m ²	調査実地面積	564m ²
調査期間	1984年2月1日～9月18日				

目 次

第一章	はじめに	1
1.	発掘調査にいたるまで	1
2.	発掘調査の組織と構成	1
3.	調査地点の位置と環境 (Fig.1・2)	3
第二章 発掘調査の梗概		4
1.	発掘調査の経過 (Fig.3)	4
2.	I面の調査 (Fig.4・5)	6
3.	II面の調査 (Fig.6・7)	8
4.	III A面の調査 (Fig.8・9)	10
5.	III B面の調査 (Fig.10・11)	12
6.	IV面の調査 (Fig.12・13)	14
7.	V面の調査 (Fig.14・15)	16
8.	遺構と遺物	18
(1)	整理の記録	18
(2)	近世の遺構	19
①	土壤	19
	201号土壤 (Fig.16)	19
	217号土壤 (Fig.17・18)	19
	221号土壤 (Fig.19)	20
	237号土壤 (Fig.20・21)	21
	240号土壤 (Fig.22～24)	21
	242号土壤 (Fig.25～27)	23
	243号土壤 (Fig.28)	25
	248号土壤 (Fig.29)	25
	250号土壤 (Fig.30)	25
	254号土壤 (Fig.31)	26
	273号土壤 (Fig.32)	26
	290号土壤 (Fig.33・34)	27
	283号土壤 (Fig.35・36)	28

214号土壤 (360号土壤・552号土壤) (Fig.37~41)	30
(2) 井戸	
53号井戸 (Fig.42・43)	34
54号井戸 (Fig.44~47)	35
55号井戸 (Fig.48・49)	37
56号井戸 (Fig.50)	38
62号井戸 (Fig.51)	38
63号井戸 (Fig.52~54)	38
65号井戸 (Fig.55, 56)	41
66号井戸 (Fig.57)	42
68号井戸 (Fig.58~61)	42
79号井戸 (Fig.62~65)	46
94号井戸 (256号土壤) (Fig.66~70)	48
(3) 配石遺構 (Fig.71~73)	
12号配石遺構 (Fig.74~76)	52
16号配石遺構 (Fig.77)	53
17号配石遺構 (Fig.78・79)	54
20号配石遺構 (Fig.80・81)	55
(3) 中世Ⅲ期の遺構	
① 土壙	
253号土壤 (Fig.82)	56
264号土壤 (Fig.83・84)	57
292号土壤 (Fig.85・86)	58
305号土壤 (Fig.87)	60
322号土壤 (Fig.88・89)	60
347号土壤 (Fig.90)	61
348号土壤 (Fig.91・92)	61
349号土壤 (Fig.93・94)	62
350号土壤 (Fig.95・96)	62
359号土壤 (Fig.97)	63
362号土壤 (Fig.98)	63
409号土壤 (Fig.99)	64

446号土壤 (Fig.100~103)	64
461号土壤 (Fig.104~108)	66
487号土壤 (Fig.109~110)	68
504号土壤 (Fig.111~112)	69
508号土壤 (Fig.113~114)	70
545号土壤 (Fig.115~117)	71
②井戸	74
71号井戸 (Fig.118~120)	74
③配石造構	75
39号配石造構 (Fig.121~124)	75
40号配石造構 (Fig.125~127)	79
④柱穴状小土壤	81
339号ピット (Fig.128)	81
428号ピット (Fig.129)	81
(4) 中世Ⅱ期の造構	82
①土壤	82
338号土壤 (Fig.130~132)	82
411号土壤 (Fig.133~136)	83
414号土壤 (Fig.137~138)	87
441号土壤 (Fig.139)	87
472号土壤 (Fig.140~142)	89
480号土壤 (Fig.143~145)	91
486号土壤 (Fig.146)	91
490号土壤 (Fig.147~150)	92
501号土壤 (Fig.151~152)	94
549号土壤 (Fig.153~155)	96
568号土壤 (Fig.156)	98
576号土壤 (Fig.157~159)	99
586号土壤 (Fig.160)	102
641号土壤 (Fig.161~163)	102
②井戸	104
87号井戸 (588号土壤) (Fig.164~166)	104

95号井戸 (565号土壤) (Fig.167~170)	108
③柱穴状小土壤	111
528号ビット (Fig.171)	111
567号ビット (Fig.172~174)	111
701号ビット (Fig.175~177)	113
(5) 中世Ⅰ期の遺構	114
①溝状遺構	114
6号溝 (Fig.178・179)	114
②土壤	115
548号土壤 (Fig.180~183)	115
620号土壤 (Fig.184・185)	118
635号土壤 (Fig.186~190)	120
649号土壤 (Fig.191~195)	124
683号土壤 (Fig.196~206)	128
③井戸	136
70号井戸 (Fig.207~210)	136
④配石遺構	140
44号配石遺構 (Fig.211・212)	140
(6) 古代Ⅱ期の遺構	141
①土壤	141
313号土壤 (Fig.213)	141
434号土壤 (Fig.214・215)	141
515号土壤 (Fig.216・217)	143
519号土壤 (Fig.218~222)	144
523号土壤 (Fig.223・224)	148
537号土壤 (Fig.225)	150
540号土壤 (Fig.226・227)	150
541号土壤 (Fig.228~234)	152
542号土壤 (Fig.235・236)	158
543号土壤 (Fig.237)	158
544号土壤 (Fig.238・239)	161
562号土壤 (Fig.240~243)	162

566号土壤 (Fig.244~247)	165
569号土壤 (Fig.248~253)	166
570号土壤 (Fig.254~255)	172
579号土壤 (Fig.256~258)	172
582号土壤 (Fig.259~260)	174
587号土壤 (Fig.261)	175
600号土壤 (Fig.262~264)	176
606号土壤 (Fig.265~266)	177
622号土壤 (Fig.267~270)	179
626号土壤 (Fig.271~275)	182
637号土壤 (Fig.276)	186
638号土壤 (Fig.277~278)	187
651号土壤 (Fig.279~280)	188
662号土壤 (Fig.281~282)	189
665号土壤 (Fig.283~288)	190
②井戸	195
74号井戸 (Fig.289~291)	195
78号井戸 (Fig.292~294)	198
82号井戸 (Fig.295~296)	200
③溝状遺構	202
7号溝 (Fig.297~300)	202
(7) 古代I期の遺構	205
①井戸	205
88号井戸 (Fig.301~304)	205
89号井戸 (Fig.305~310)	208
②柱穴状小土壤	214
1022号ピット (Fig.311)	214
1054号ピット (Fig.312)	215
1107号ピット (Fig.313)	215
(8) その他の遺構	216
①竪穴状礫石建物 (Fig.314~315)	216
②525号土壤 (Fig.316)	217

③E-08区 I面下出土遺物 (Fig.317~320)	217
④F-04区 III B面下出土遺物 (Fig.321・322)	222
⑤その他の出土遺物	223
律令期の遺物 (Fig.323)	223
綠釉陶器、灰釉陶器 (Fig.324)	225
越州窯系青磁、高麗青磁 (Fig.325・326)	227
その他の輸入陶磁器 (Fig.331~334)	229
その他の国産土器、陶器 (Fig.331~334)	231
その他の遺物 (Fig.335)	234
墨書き土器 (Fig.336~340)	236
石塔 (Fig.341)	240
銅鏡 (Fig.342・Tab.1・2)	242
 第三章 小結	244
 付篇 解体移築された旧飯尾家住宅について	
九州大学工学部 山本 輝雄	247

付 図

1. I面遺構実測図 (1/100)
2. II面遺構実測図 (1/100)
3. III A面遺構実測図 (1/100)
4. III B面遺構実測図 (1/100)
5. IV面遺構実測図 (1/100)
6. V面遺構実測図 (1/100)

第一章 はじめに

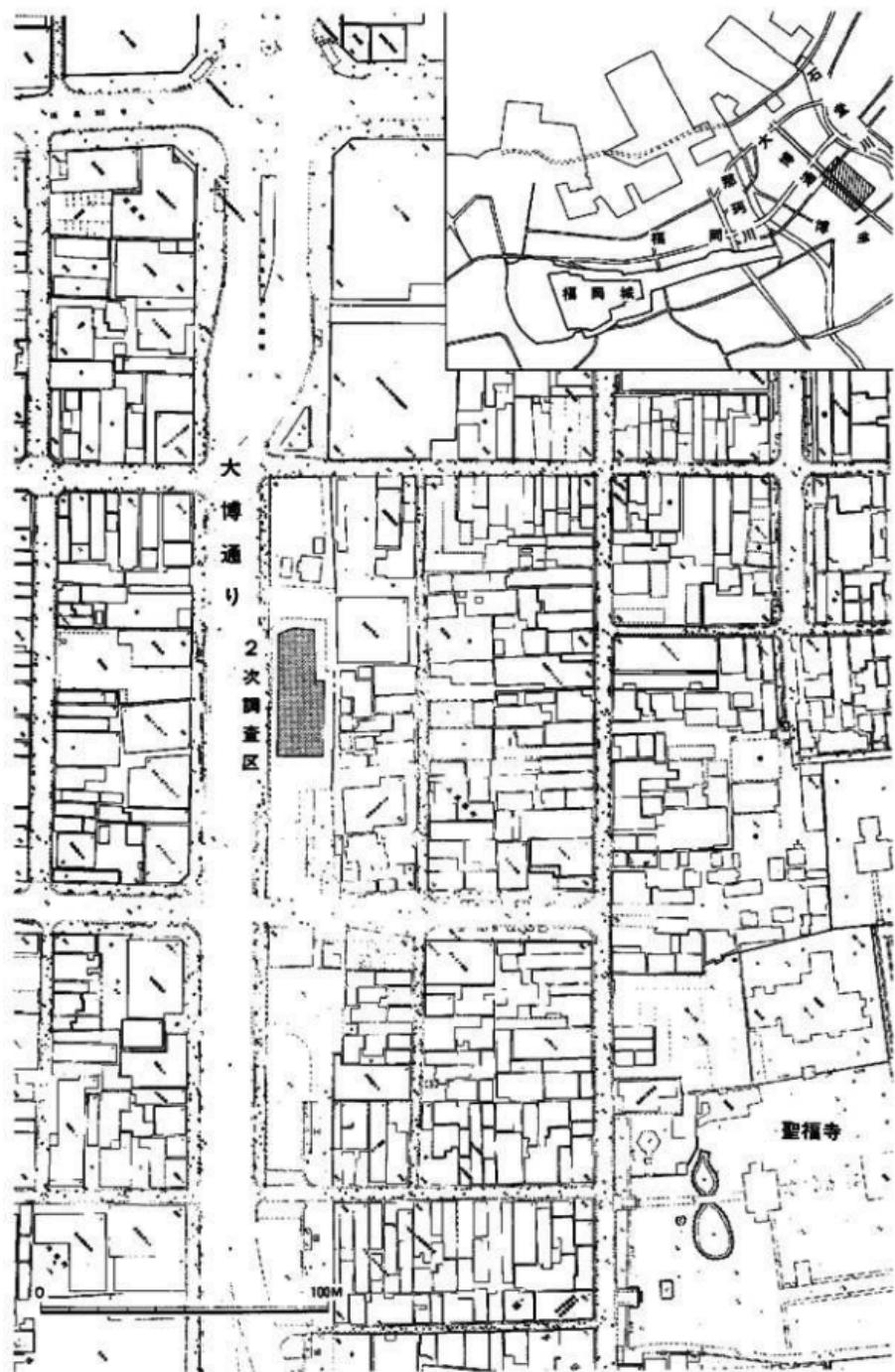
1. 発掘調査にいたるまで

都市計画道路博多駅築港線は別称を大博通りと言い、JR 博多駅から博多湾に向って一直線にのびる道路である。その起源は古く、新しく見ても豊臣秀吉による博多復興（天正15年＝1587年）を下らない。福岡市土木局街路課では、中世以来のこの博多のメインストリートを、現代都市にふさわしく拡幅・整備する計画を立てた。この拡幅工事は1982年3月に着手されたが、当初は文化財への考慮を欠き、急拗福岡市教育委員会文化課より街路課へ申し入れをして協議を持ち、同11月15日より拡幅用地内の発掘調査にとりかかった。これが第1次調査であり、その後断続しつつ1987年1月まで5次の調査が実施された。第2次調査は、1984年1月30日より第1次調査の北に隣接する564m²について調査を開始したものである。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	福岡市土木局道路部街路課		
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 西津茂美（前任） 佐藤善郎		
調査総括	文化課長	生田征生	（附和60年4月組織改正）
	埋蔵文化財課長	柳田純孝	（元文化課埋蔵文化財第1係長）
	埋蔵文化財第1係長	折尾学	
調査庶務	埋蔵文化財第1係	古藤国生（前任）	松延好文
調査担当	埋蔵文化財第1係	力武卓治	大庭康時
写真撮影	白石公高		
調査作業	山口満 池田光男 日野光嗣 諸藤茂樹 井口英雄 人部茂久 山崎光一 権藤利雄 三浦力 高田勘四郎 大神嘉彦 徳永英臣 江越初代 古賀博子 久良木シズエ 中山スエ子 脇板正子 関加代子 関政子 黒木静子 桑野正子 井手口美代子 曾根崎昭子 安部国恵 池見恭子 安部サエ子 野口ミヨ 徳永道子 尾崎文枝 尾崎君枝 川崎道子 西本スミ 村上エミカ 村上エミ子 高野皓代 古原京子 長野康子 酒井もと子 生垣綾子 林朝美 小金丸京子 村田喜代美 松田美富 川崎美佐子 深沢美代子 末永トシ子 寺田祥子 寺田康子 水崎智以 玉木美佳子 稲益貴子 金子幸世 世利裕美 北原章子 実渕祥子 井手口千寿子 前田直子 高原祐子 中島智子 中村美穂		

大博通り 2次調査図



3. 調査地点の位置と環境

博多遺跡群は、博多湾に面して形成された砂丘上に立地する遺跡群で、東を石堂川・西を那珂川によって区切られている。北は博多湾の埋め立てによって大きく変貌しているが本来は海、南は旧比恵川流路で中世末堀とした穿たれた房州堀で区切られている。都市計画道路博多駅策港線は、この博多遺跡群の中央を東南から西北へ一直線に貫通しており、第2次調査地点は更にその中央に位置する。第2次調査地点から200m程海寄りにある国道202号線との交差点を呉服町交差点と呼ぶが、博多遺跡群は国道202号線をはさんで、北の沖ノ瀬と南の博多湾にわかれる。沖ノ瀬が鎌倉時代以降栄えたのに対し、博多瀬は弥生時代以来居住の場となっており、古代末から中世初頭にかけて国内で最も繁栄した港津都市であった。その後、室町時代以降博多繁栄の核は沖ノ瀬に移る様であるが、聖福寺・承天寺などの大刹を容した博多瀬は衰えることなく、戦国時代の博多焼亡・鎖国へと流れるのである。



2 第2次調査地点遠景（東南より）

◀ 1 第2次調査地点位置図（1 / 2,000）

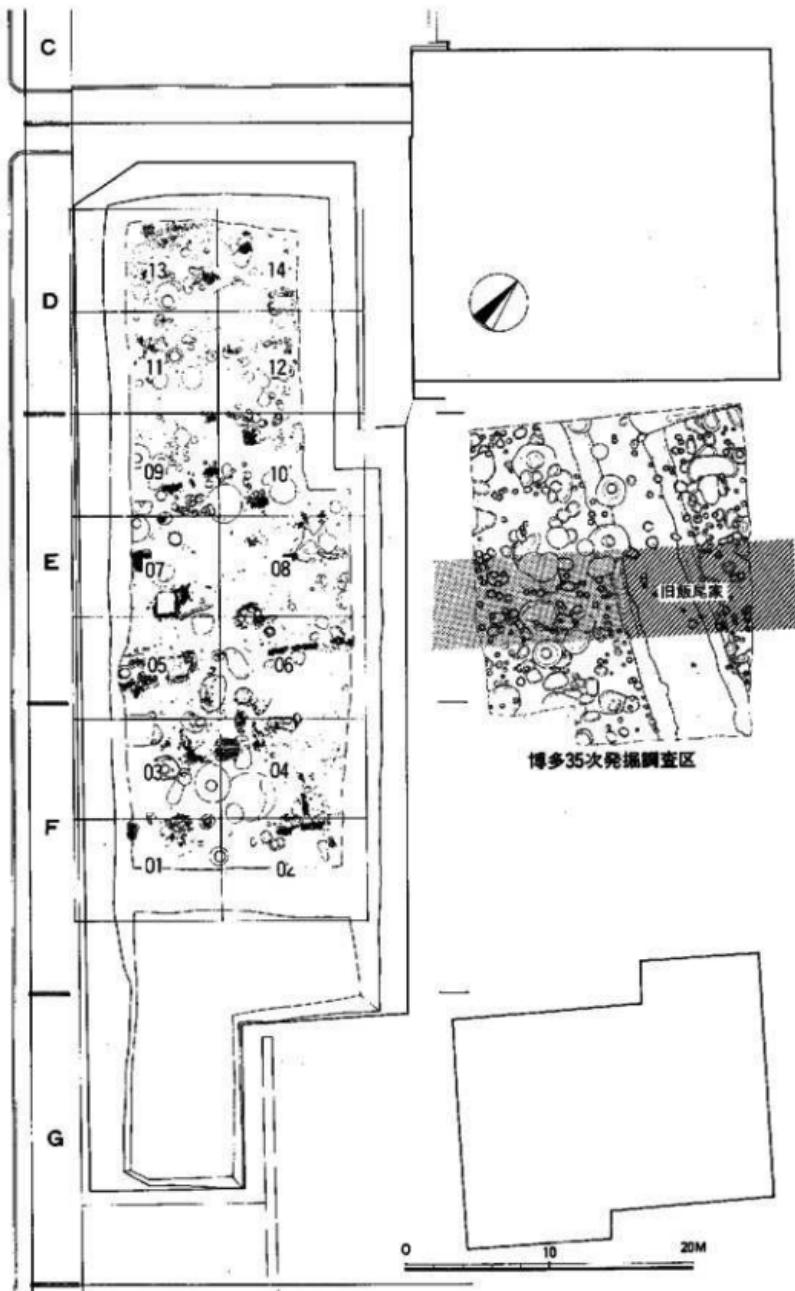
第二章 発掘調査の概要

1. 発掘調査の経過

第2次調査は、1984年1月30日より9月18日まで行なわれた。ただし、これに先立って、重機による近現代の搅乱層の除去が行われている。除去作業は、第1次調査の経験から現道路面下1.5mまでを一率に掘り取った。第1次調査を担当した福岡市教育委員会文化課坪藏文化財第1係池崎謙二が立会して行なったが、搅乱層中の近現代遺物にまじって元様式の染付鉢の破片が出土している（施屋勝利・池崎謙二「博多上呉服町出土の釉裏紅と元青花」『貿易陶磁研究No.3』日本貿易陶磁研究会 1983）。

博多遺跡群の場合、最下層は砂層上面を遺構検出面とするが、その上に数メートルにわたって繰り返した生活面が形成されている。この間堆積土壤の変化はほとんどなく、變層となりうべき焼土層が検出されても、更に上からの遺構の掘り込みで乱され、面的に拡げて検出しえないのが実状である。その為、同一生活面の検出はほとんど不可能である。発掘調査においては、一定の掘り下げ→遺構検出→精査→記録→掘り下げを繰り返すことによって、目的意識的（恣意的）な遺構面を設定して遺構確認と遺物取り上げをなさざるをえない。第2次調査においては、第1次調査における遺構面の標高を目安に5面の遺構検出を行なった。上層から順次Ⅰ面・Ⅱ面と呼ぶ。ただし、Ⅲ面調査において、調査区域内の南端と北端で標高に差がついた為、これを調整すべく、南側半分について掘り下げ、遺構検出を行なった。ⅢA面は、Ⅲ面調査当初に検出した遺構面で、ⅢB面は、南側半分を掘り下げて標高をそろえた際の遺構検出面である。調査経過の概略は以下の通りである。

- 2月3日～3月13日 Ⅰ面調査
 - 3月15日～5月23日 Ⅱ面調査、ただし4月1日～4月25日まで作業は中断
 - 5月24日～6月15日 ⅢA面調査
 - 6月15日～7月9日 ⅢB面調査
 - 7月10日～8月4日 Ⅳ面調査
 - 8月6日～9月11日 Ⅴ面調査
 - 9月12日～9月14日 西側壁・北側壁について土層断面図実測
 - 9月14日～9月18日 西側壁を崩し、木棺墓（683号土壙）調査。周辺の平板実測。調査終了
- 上述した様に、遺構は各々の遺構面で検出しているが、必ずしも遺構の時代観と構造面の深さとは整合しない。その為、以下の記述においては、遺構面の概略についてふれた後、各遺構を新しいものから順に時代別にふれる。（時代区分については「8. 遺構と遺物」を見よ）



3 第2次調査地点グリッド設定図 (1 / 400)

2. I面の調査

I面は、近現代の擾乱を取り除いた直下の遺構検出面である。現地表からは、1.5~1.8m下であり、標高4.0~4.2mをはかる。

この遺構面の30cm程上には、一面に焼土層がみとめられる。第1次調査他の調査成果から、戦国時代末島津氏の博多侵略の戦火によるものと考えられている。この推定が正しいとすれば焼土層は天正14年（1586年）のものであり、I面はおおむね16世紀後半にあてられる。

I面で検出された遺構は、土壙83基、柱穴状小土壙214基、井戸16基、配石遺構10基等である。これらの大半は、I面よりも上から掘りこまれたもので、土壙にも江戸時代に下るものは少くない。井戸は、ほとんどが明治時代以降に廃棄されたものである。

I面は生活面として考えうると思われる。すなわち、列石遺構が全面に見られ、その配置、形状に時間的な大きな隔りがみとめがたいことによる。列石遺構とは、浅く溝状に掘りこんで、それに礫を集めてつめたもので、建物の基礎部分を形成していたと考えられる。I面では少なくとも3列が平行してみとめられ、N-44°-Eをとる。これは、既往の調査で知られた、太閤街割り（天正15年=1587年）に先行する街割りN-48°~60°-Eとほぼ一致するものである。なお、列石については、「8. 遺構と遺物（2）近世の遺構（3）配石遺構」でふれる。



4 I面遺構全景（南東より）



D-土塁
 P-ピット
 S-配石遺構
 E-井戸
 M-溝

3. II面の調査

II面は、標高3.6m～3.8mで遺構を検出した面である。

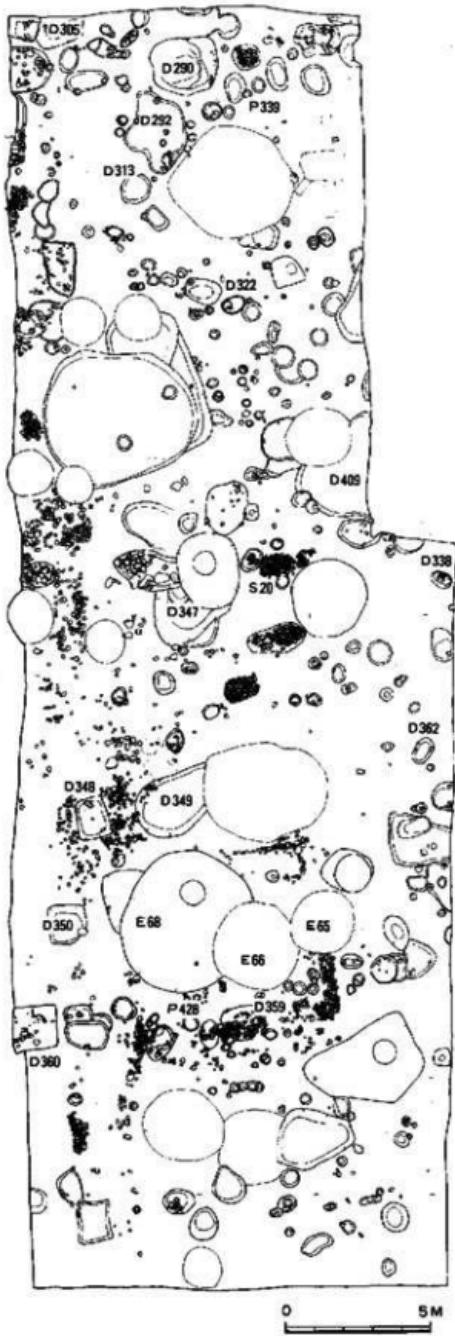
3月15日より、I面からの掘り下げを開始したが、同日E-08区より「和同開珎」(P.242, Fig.342) が出土した。また、E-08区からは明代の青磁が一括して出土した。周辺を精査したが、遺構としては確認できていない。掘り下げは、3月22日に終了した。

II面で検出した遺構は、土塙102基、柱穴状小土塙141基、井戸6基、配石遺構15基である。列石は、I面で検出した列石と同様に建物の基礎と考えられるもので、II面も生活面としてとらえて大過なかろう。

II面の年代観としては、上述したE-08区I面下(I面からの掘り下げ時に出土した遺物について)、II面とは分けてI面下とする。以下各面についても同じ)出土の明代の青磁類から推定できる(P.217～221)。厳密には一括資料とは呼べないが、出土層位は單一で出土状況もまとまって出土しているので準一括資料として考えたい。青磁の器種は、碗・皿・香炉である。碗は、劍頭文化した蓮弁文を沈線で描くタイプと、口縁に雷文帯をめぐらすタイプがある。皿は、稜花の腰折れ皿で内面に片切彫と印花文を持つ。香炉は獸面の鼎足を持つものである。これらが遺構として掘りこまれたものとすれば、II面はおおむね14世紀代を考えてよかろう。



6 II面遺構全景(南東より)



7 II面造構配図 (1 / 200)

4. IIIA面の調査

5月24日より6月7日まで掘り下げを行ない、III A面の調査にはいった。

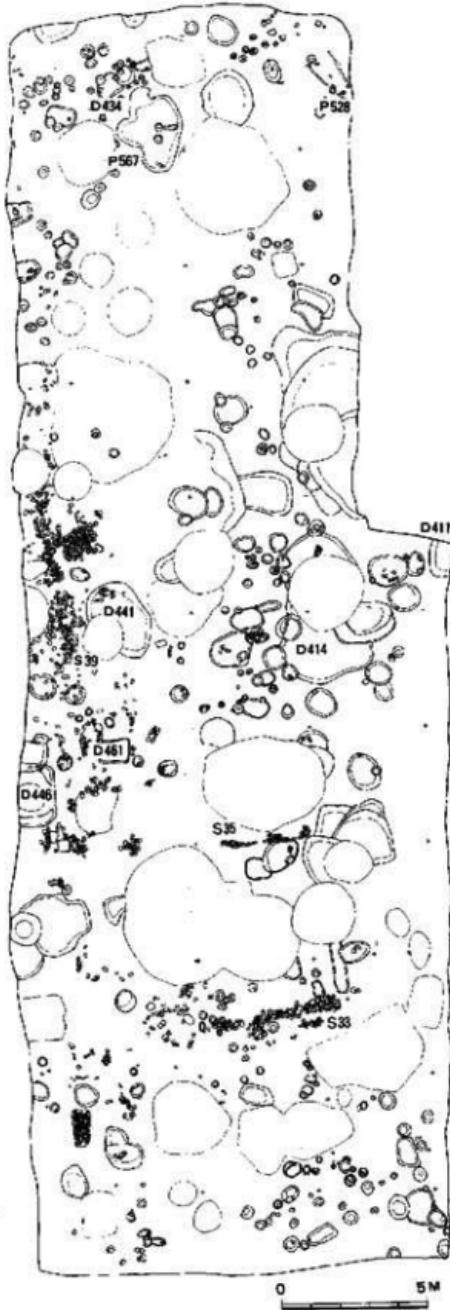
前述した様に、III A面は掘り下げの結果、北側で標高3.3m、南側で標高3.7mと、かなりの標高差がついてしまった。その為、南半部ではII面からの遺構の基部が残存し、33号列石、35号列石などは、II面の列石のほりかたの最下部にあたる。

III A面では、土壙72基、柱穴状小土壙194基、井戸2基、配石遺構8基を検出した。とりわけ留意すべきは、III A面からIII B面において、五輪塔がかなりみられる点である。五輪塔は原位置を保っているものは、V面の44号配石遺構にみられるだけではなくて散乱した形状を示している。五輪塔が供養塔なのか墓石なのか、旧状を示してくれる遺構がないので検討できないが、五輪塔の出土は博多遺跡群の従前の調査でも決して多くはなく、第2次調査地点の特徴のひとつであると言える。(「第三章 小結」参照)

III A面の年代を示す遺構としては、411号土壙があげられる。411号土壙では、土師皿、坏、白磁碗・皿類、青磁碗・香炉、東播系須恵質鉢が出土している(P83~86)。14世紀前半代において差支えないと思われる。土層の検討によると411号土壙はIII A面の少し上から掘りこまれており、III A面も14世紀前半代から下ることはないと思われる。



8 III A面遺構全景(南東より)



9 III A 面構造配図 (1 / 200)

5. III B面の調査

6月15日より、III A面の南側半分について掘り下げにかかった。

遺構を検出した標高は、おおむね3.3mである。

III B面では、土壙52基、柱穴状小土壙120基、配石遺構1基を検出した。配石遺構の内、列石はIII A面（II面からのはりこみと思われるものも含む）でみられなくなるが、集石遺構（列石状を呈さないもの）はIII B面までみられる。40号配石遺構は、III A面で検出しているが、跡の配置状況から本来はIII B面上に作られたものと思われる。III B面の段階で作られた五輪供養塔の倒壊したものであろう。また、F-04区からは埋蓋遺構（472号土壙）が検出された（P.89～90）。地面を掘りくぼめて、軸輪四耳壺を据えたもので、上半部は内部におちこんで出土した。出土状況からみて、体部の2分の1程を埋めこんでいたと思われる。

III B面の年代を示す資料としては、490号土壙（P.92～93）があげられる。土師器窓の様相を呈する遺構で、出土した土器は細片が多い。備前焼のすり鉢片が出土しており、年代を推定することができる。それらをみると、III B面もIII A面と同様に14世紀前半ごろにおくのが無難であると思われる。



10 III B面遺構調査風景



11 里B而遣構配圖 (1 / 200)

D-土壤
P-ピット
S-配石造構
E-井戸
M-溝

6. IV面の調査

IV面への掘り下げには、7月10日よりとりかかった。同12日、F-04区ⅢB面下より、白磁小碗・青磁小碗の一括出土をみた。周辺の土を掘り下げずに残して、土層を確認、遺構の検出に努めたが、明瞭な遺構は検出できなかった。土層観察からは、明らかに同一層よりの出土であり、堆積はレンズ状を呈し浅い皿状の凹みが想定できた。

IV面の標高は、3.00m～3.15mである。

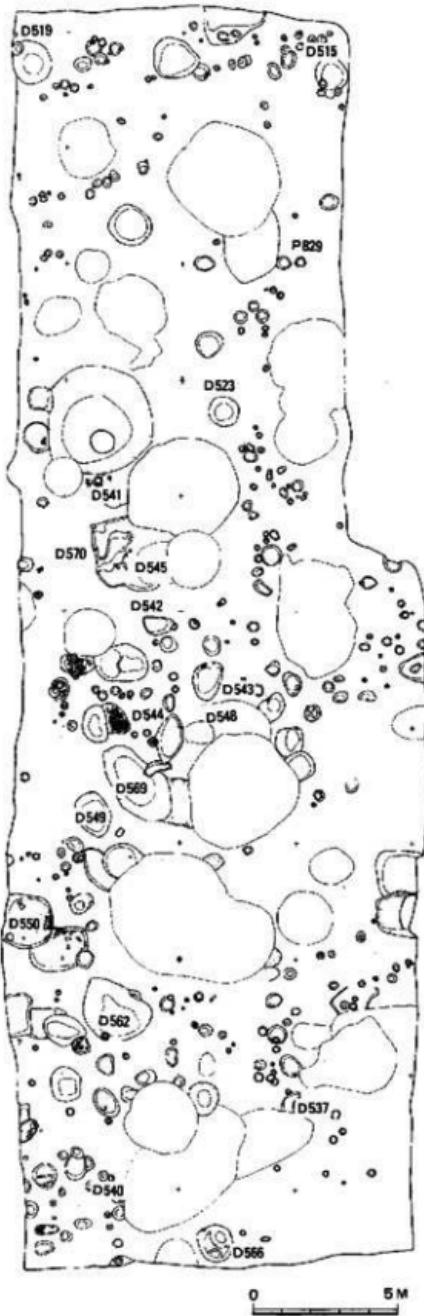
IV面では、土壙61基、柱穴状小土壙219基が検出された。ただし、IV面で土壙として検出された545号土壙、565号土壙などは、ⅢA面より上からの井戸であると考えられる。

IV面から、検出面に砂がまじりはじめ、全体的に砂質土となってくる。

IV面の年代観を示すものとしては、541号土壙と、土器窯である569号土壙があげられる。541号土壙は、大量の土師皿・壺と共に白磁の碗・皿・黄釉鉄絵盤を出土した土壙である(P.152～157)。569号土壙では、土師皿・壺、筑前型及び楠葉型瓦器、白磁碗、皿等が出土した(P.166～171)。541号土壙出土の土師皿・壺には、外底部を回転糸切りするものがまじるが、569号土壙では、全てがヘラ切りである。したがって、IV面の年代はおおむね11～12世紀頃と言うことができる。



12 IV面遺構全景（南東より）



13 IV面造構配図 (1 / 200)

7. V面の調査

8月6日よりV面への掘り下げにとりかかった。8月10日、D-12区V面上より、青銅製帶金具（蛇尾？）が出土した（P.233）。

V面は、最終遺構面であり、地山は砂丘である黄白色の砂となる。全体として、南側へやや深くなる傾向にあり、標高で2.6m～3.1mをはかる。

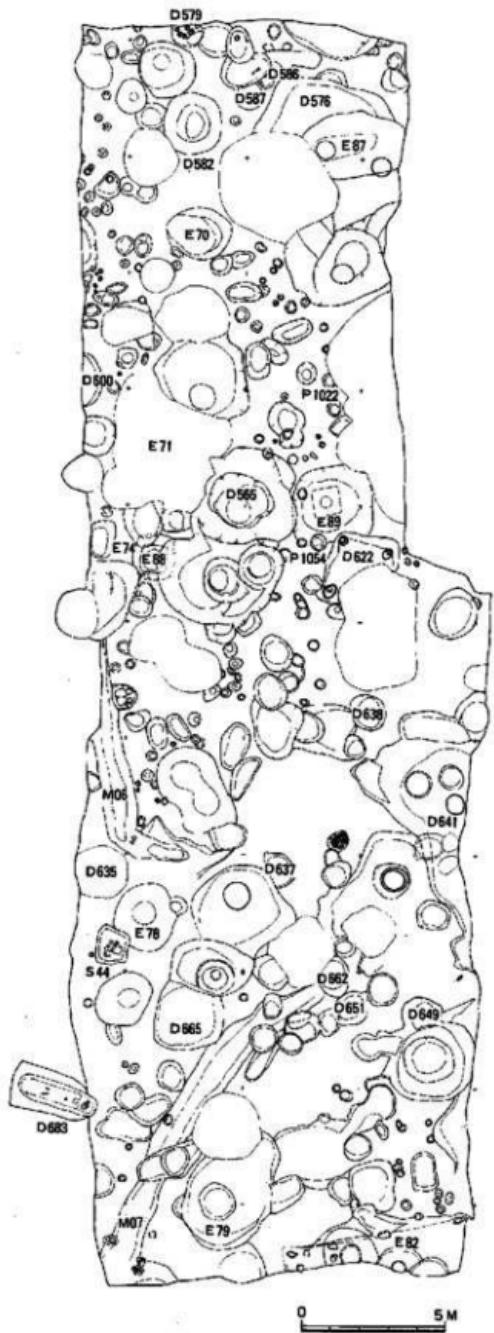
検出された遺構は、土壙116基、柱穴状小土壙120基、井戸17基、配石遺構2基を数える。最終遺構面である為、各時代の遺構が一緒になって検出された。とりわけ井戸においては、IV面以上において、埋土の見極めにくさと相俟って見落していたものが少なくない。

V面において特筆すべきは、622号土壙、683号土壙、89号井戸である。622号土壙は、竪穴式住居とも言えるもので、一辺2.5mの方形の掘りこみの床面に、四隅に柱穴を持つ（P.179～181）。683号土壙は、その大部分が調査区西壁にかくれていたもので、調査最終段階で壁をほり崩して調査した。木棺墓で、棺内には漆塗の化粧箱を副葬していた（P.128～135）。89号井戸は、奈良時代の井戸である。「長官」と墨書きされた須恵器片が出土している。第2次調査では最も古い遺構である（P.208～214）。

V面は、奈良時代～平安時代の遺構面であり、調査地点における上限を示している。



14 V面遺構全景（南東より）



15 V面造構配置図 (1 / 200)

8. 遺構と遺物

(1) 整理の記録

発掘調査は、前述の通り I ~ V 面までの遺構面を基準に実施した。遺構の呼称である遺構番号も、検出した順に付けている。しかし、もとよりそれは個々の遺構の属する年代に対応するものではない。そこで、以下の記述においては検出した遺構面の如何によらず、遺構の年代観にしたがって述べることとする。遺構の年代観は、図化した遺物に限らず、全ての出土遺物を通して、決定した。当然のことであるが、古い時代の遺物が新しい時代の遺構より出土することはままあることであり、遺構の属する年代が新しくなるほど、この種の紛れこみは多くなる。

記述における時期区分は、以上の点及び博多遺跡群における土器編年が未だ確立していないことから、指標となる遺物を設定し、大まかに括った。

- | | |
|------|---|
| 近世 | 国産磁器（もっぱら古伊万里に代表される肥前系の染付）・唐津焼などを含む遺構、おおむね江戸時代にあたる。 |
| 中世Ⅲ期 | 明代の染付、青磁（沈線で細蓮弁を描くもの、雷文を口縁に巡らすもの）を出す時期。朝鮮陶磁器では、李朝青磁、三島手などがみられる。備前焼では、甕の口縁に巾広の玉縁がみられる。室町時代後半を主とする時代である。15世紀～16世紀。 |
| 中世Ⅱ期 | 鈎蓮弁文の青磁・口ハゲの白磁碗・皿に代表される時期。備前焼では、すり鉢の口唇外端部が下方に垂れる。土師皿・壺は、体部が直線的に開き比較的器高の高いものがみられる様になる。鎌倉時代末～室町時代初め、おおむね14世紀前半を中心にして、その前後を含む。 |
| 中世Ⅰ期 | 土師皿・壺は、外底部の切り離し技法として回転糸切り技法が確立する。中国磁器では、青磁が一般化する。青磁碗では、見込みに画花文・雲文などを描く。12世紀後半から13世紀代。 |
| 古代Ⅱ期 | 白磁に代表される時期である。専ら白磁が輸入されている。土師皿・壺では、底部ヘラ切りから回転糸切りへの転換期までを含む。瓦器では、浜津岡楠葉牧（大阪府高槻市）で生産された楠葉型瓦器が出土する。平安時代後半、11世紀後半から12世紀代。一部、中世Ⅰ期と重複する。 |
| 古代Ⅰ期 | 白磁の出現以前の時期、奈良時代から平安時代中頃までにあたる。8世紀から11世紀中頃。 |

(2) 近世の遺構

① 土壙

201号土壙

I面F-01区で検出した土壙である。長径100cm、短径85cmの横円形を呈する。I面からⅢB面までの間では掘りかたを検出していないが、位置関係から後述する79号井戸井筒である可能性が高い。

1は、青藍色の釉をかけた磁器である。合子蓋であろう。

2は、明代の染付碗である。外底部に「宣德年造」銘の一



16 201号土壙出土遺物（1／3）

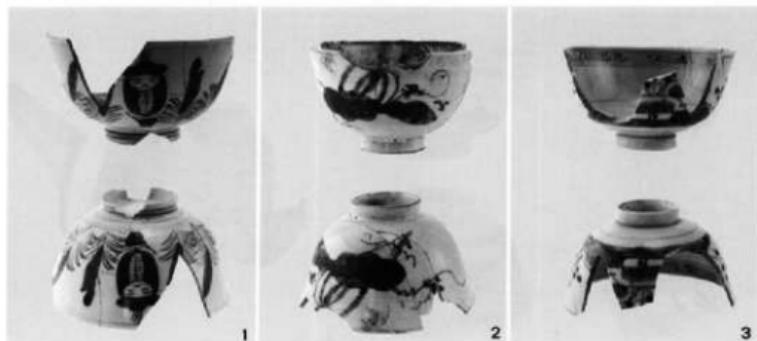
部がみとめられる。その他、肥前磁器片等が出土している。

217号土壙

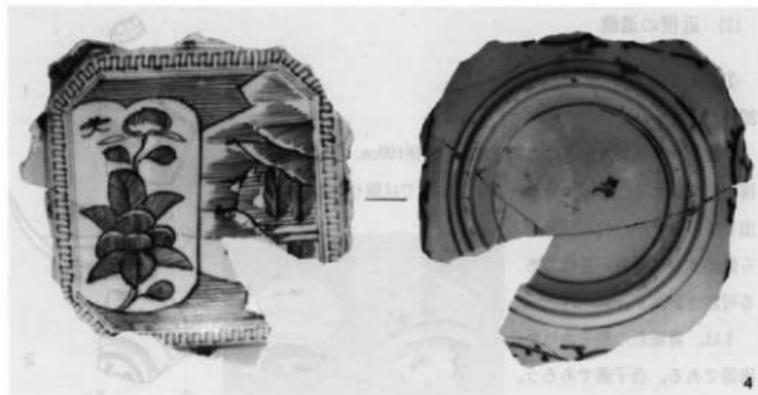
I面E-06区で検出した不整形の土壙である。長軸135cm、短軸100cm、深さ44cm前後をはかる。埋土は、しまりのない暗褐色土で、炭の破片を含んでいる。

出土遺物には、近世の瓦片、肥前磁器片が多く含まれていた。Fig.17・18に示したものは、肥前磁器の染付である。1～3は碗である。1の体部外面には、袖に入れた両腕を胸の前で合わせた唐子の図柄が描かれている。4は皿である。

その他、玉縁の白磁碗、龍泉窯の鷲蓮弁文碗など各時代の遺物が含まれている。



17 217号土壙出土遺物



18 217号土壤出土遺物

221号土壙

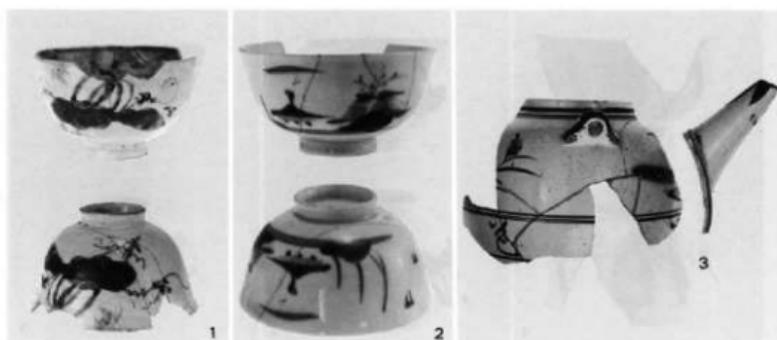
I面E-06区で検出した、ほぼ円形の平面形を持つ土壤である。径95cm前後、深さ55~60cmをはかる。埋土は、炭粒をまじえた暗褐色土である。

出土した遺物は、土師皿・壺、白磁碗・皿、青磁碗・皿、明代染付碗・皿、輸入陶器類、備前陶器、肥前陶磁器など多岐にわたる。

Fig. 9に図示したのは、近世国産陶磁器類である。

1・2は染付磁器である。確で、いずれも肥前磁器であろう。

4は陶器である。白釉をかけた上に、褐色釉で文様を描く。急須である。221号土壤からはこれと対になると思われる陶器蓋も出土している。



19 221号土壤出土遺物

237号土壙

I面E-05区において検出した遺構である。遺構は、大きく2つの部分よりなる。すなわち、南側の方形土壙の部分と、北側の配石部分である。土壙部分は、148cm×172cm（石列内側で144cm）深さ30cm前後をはかる。配石部分は、25cm前後の扁平な礫をコ字形にならべている。土壙の壁部分は素掘りのままであるが、二つの部分からなる平面構成は、土壙壁に礫を貼った12号配石遺構（石組土壙、P.50・51）と共通する。

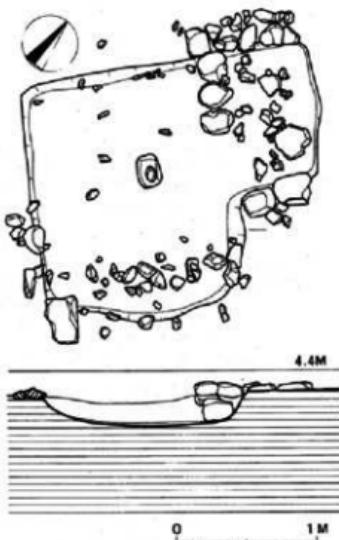
出土遺物は、古代末の白磁から近世陶磁器まで多岐にわたる。

図示したのは、青磁碗の底部片である。おそらく明代のものであろう。

見込みにスタンプがある。 20 237号土壙出土遺物

240号土壙

I面F-04区検出した土壙である。平面形は隅丸の長方形を呈する長辺。175cm、短辺150



21 237号土壙遺構実測図 (1 / 40)



22 240号土壙 (北東より)

cm、遺存していた深さは28
cm前後をはかる。

土壤床面には、大振りの
礫をしきつめる。礫は、長
軸方向中央に一列と、それ
と15cm前後の間をおいて両
側にびっしりとおかれる。

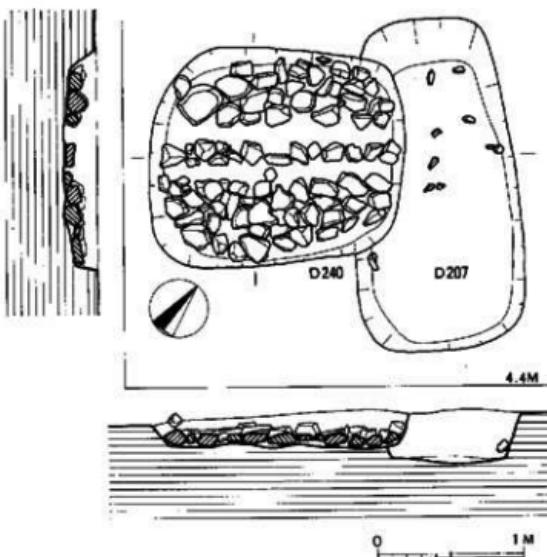
埋土は、暗茶褐色土で、
壁土の小塊と赤色粒土、炭
片を含む、いわゆる焼土で
ある。

土壤の壁面には、顕著な
焼けた痕跡はみめられな
い。床面にしかれた礫は、
大部分が焼けた痕跡をとど
めていた。

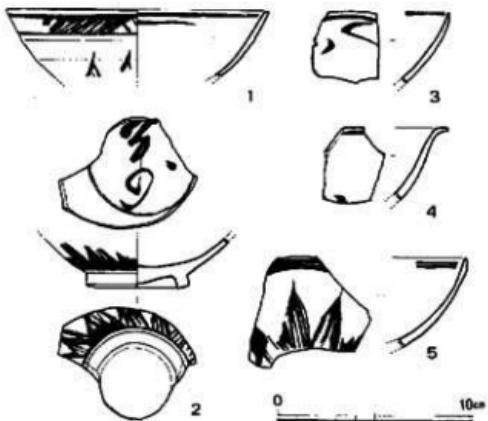
構造的に特異な土壤であ
るが、その機能・用途は不明である。しかし、礫をしかれていない2条の空間は、おそらく空
気（風）を通すためのものであろう。また、しきつめられた礫は、大体その上面のレベルをそ
ろえている。礫は、その上に
何か物をのせるためにならべ
られたものと解したい。

図示したのは、明代の染付
碗である。1・2・5は、体
部外面下半に芭蕉文を描くも
ので類品は545号土壤より出
上している（P.72, Fig.116）。

1は口径13.5cmをはかる。
3・4は小片である。体部外
面に文様がみられるが、全体
は崩うべくもない。



23 240号土壤遺構実測図 (1 / 40)



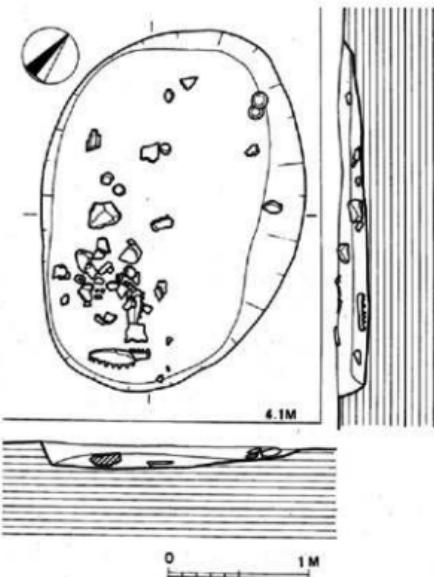
24 240号上出土遺物 (1 / 8)

242号土壙

I面のE-05・06区、F-05・06区にまたがって検出された、不整形の土壙である。おおむね椭円形の平面を呈し、長径245cm前後、短径165cm前後、深さ15~20cmをはかる。

イルカのあごの骨が、3点出土している(Fig.26)。その他にも魚骨等が出土しており、生活廃棄物の廃棄壙であると思われる。

出土遺物は、肥前染付、唐津焼等、瓦など近世の遺物が多い。Fig.27に示したのは、それら出土遺物の一部である。1~3は土師皿である。1の底部は、静止糸切り技法によって切り離されている。2・3は、回転糸切りによる。4~6は土師壺である。全て回転糸切り技法で切り取られている。土師皿・壺の口径は、1が6.7cm、2・3は7.7~7.9cm、4~6

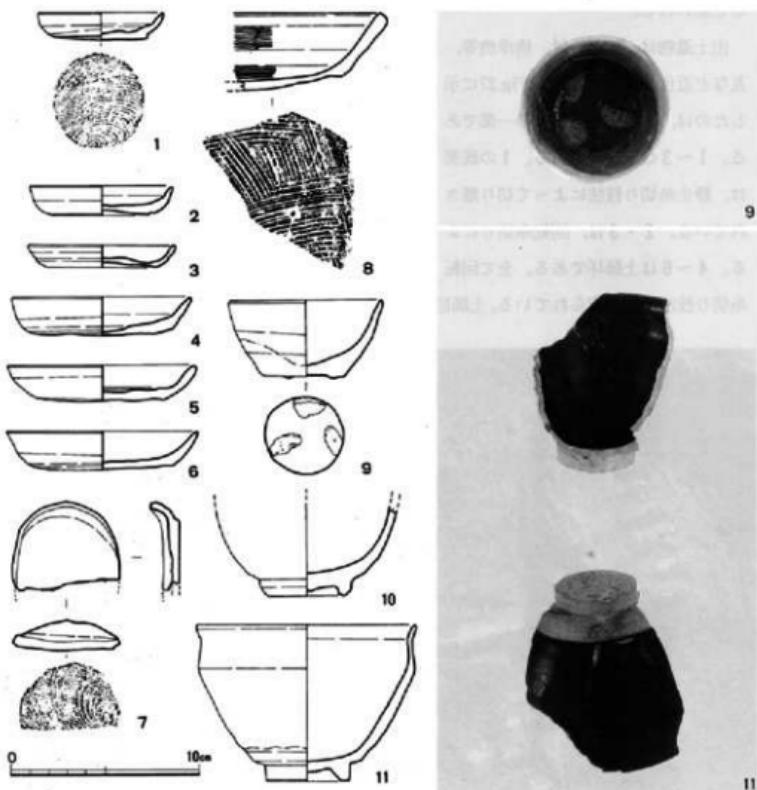


25 242号土壙遺構実測図 (1 / 40)



26 242号土壙出土イルカ骨

は9.6~10.05cmをはかる。7は、土師器であるが皿・坏頬にはならず、両側縁の立ちあがりをケズリおとしている。おそらく%弱を失なっていると思われ、原形を知るべくもないが、耳皿の様な形にでもなるのだろうか。立ち上り部分の口縁部にはススが付いており、焼明皿として使われた可能性もある。土師皿の再加工品か。8は、瓦質土器の大皿片である。内外面ともにハケ調整を行なう。9・10は、いわゆる磨津焼であろう。9の外面部には、重ね焼きの三叉トチンの痕跡がついている。11は、瀬戸・美濃窯で作られた天目茶碗である。釉色は黒色で、つけ分けによってたっぷりとかけられている。露胎部の化粧がけはなされていない。付高台である。江戸時代、登窯期の所産であろう。



27 242号土壤出土遺物 (1 / 3)

243号土壤

1面F-04区より検出した遺構である。長楕円形の土壤で、長軸125cm、短軸78cm、深さ20~33cmをはかる。

図示したのは、いずれも明代の染付の碗である。体部外面向下半には、芭蕉文を描く。2・3の口縁部には、波溝文がめぐっている。2で口径11.3cm、1で高台径5.7cmをはかる。

248号土壤

1面E-09区より検出された遺構である。平面は長軸134cm、短辺103cmをはかる楕円形の土壤である。深さは22~25cm残っている。

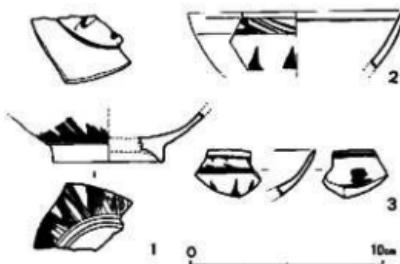
埋土は灰茶褐色土で炭粒を含み、埋土中には角礫が多く含まれている。

図示したのは、明代染付の碗である。1は、体部外面に動物と思われる文様を描くが祥かではない。2は高台付近の小片である。外底部に「永」と思われる文字がみられる。「永楽年造」銘の一部であろうか。

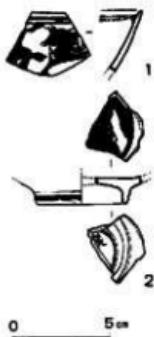
250号土壤

1面D-12区より検出された小判形の平面を呈する上壙である。長軸約100cm、短軸約65cm、深さ約10cmをはかる。茶褐色土によつて埋っていた。

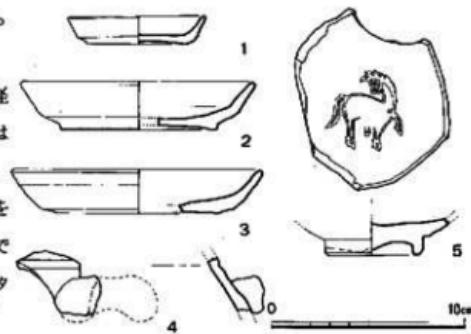
1は土師皿である。口径7.2cm底径5.1cm器高1.35cmをはかる。2・3は上師環である。口径は12.2~13.0cm、底径8.1~8.4cm、器高2.25~2.5cmをはかる。4は輪軸陶器の耳壺の破片である。5は、青磁碗である。馬のスタント文が、見込みにうたれている。



28 243号土壤出土遺物 (1/3)



29 248号土壤出土遺物 (1/3)



30 250号土壤出土遺物 (1/3)

254号土壙

I面D-12区で、おそらく地下室と思われる大規模な攪乱孔の下から検出した遺構である。したがって、I面の他の遺構よりも20~25cm低位で検出している。

図示した遺物は、1—土
師碗、2—青磁碗、3—白
磁壺、4—銅鏡である。4

は、北宋の元豈元年（1078

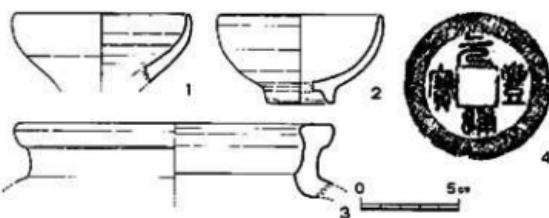
年）初鉄の「元豈通寶」である。

273号土壙（290号土壙）

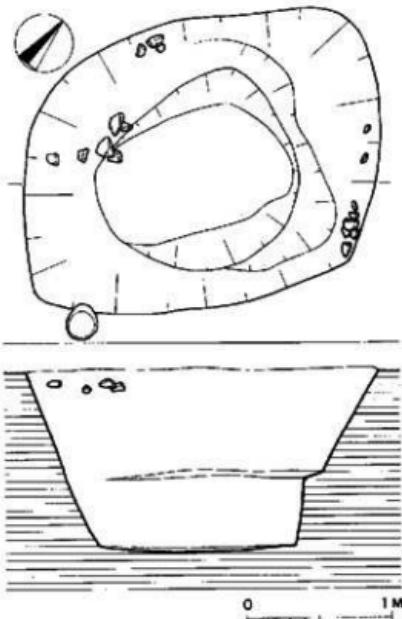
I面D-13~14区で検出した、長軸286cm、短軸200cm、深さ128cmをはかる不整形の土壙である。II面の調査時に、重複して290号土壙の呼称を与えたが、同一のものである。ただし、出土遺物の様相は、273号土壙としたI面検出のものと、290号土壙としたものでは、全く異なる。また、埋土の上質も、273号土壙は砂まじりの茶褐色土、290号土壙では炭屑まじりと若干の違いを示す。この相違を、上層、下層とすると、上層には肥前染付・唐津陶器など近世の国産陶磁器が含まれるが、下層には近世に下る遺物は含まれず中世Ⅲ期のものである。ひとつの可能性として、中世Ⅲ期末に掘られた廃棄物処理の為の土壙（ゴミ穴）が、近世初頭まで用いられたことが考えられる。

Fig.33・34に図示したのは、下層出土の遺物である。以下にその概要を示す。

1~11は土師器である。1~6は皿、7~10は壺、11は高台壺である。皿は、口径6.6~7.8cm、器高1.1~1.5cmをはかる。器形・法量的には、口徑6.9~7.2cm、器高1.5cm前後の2~4が

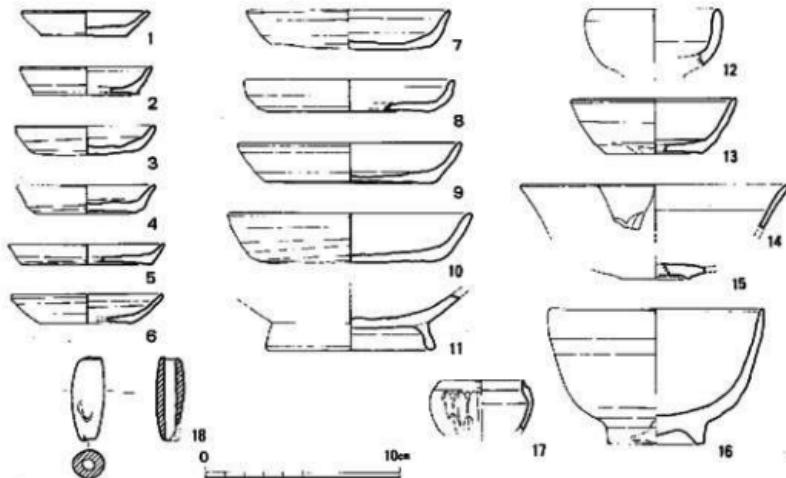


31 254号土壙出土遺物（1 / 3, 4-1 / 1）

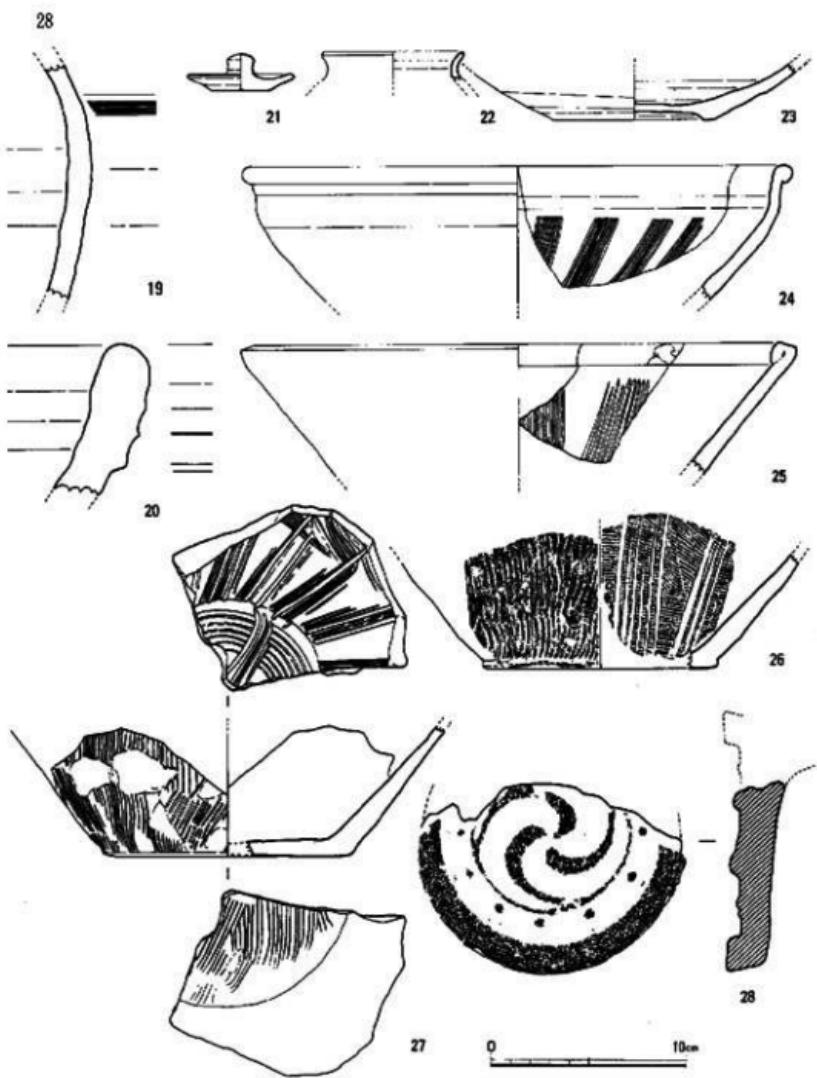


32 273号土壙実測図（1 / 40）

典型であると言える。坏は、口径10.5~12.6cm、器高1.68~2.55cmをはかる。8はやや器高が低い。7・9・10が典型であろう。12は青磁小碗である。13は、口唇部が露胎となる、いわゆる口ハゲの白磁皿である。14~15は、青白磁である。14は碗で、体部外面に片切彫の蓮弁と思われる文様が認められる。器壁はうすくひき出す。15は、平底の皿である。16は、朝鮮青磁の碗である。17は、青白磁の小壺である。体部外面には、スタンプで花弁を陽刻する。口唇部から口縁部内面にかけては、露胎なる。小片である。復原口径で、4.2cmが推定される。18は、土師質の土鍾である。筒形で、長さ4.35cm、径1.6cmをはかる。器壁は、平滑になでて仕上げる。19・20は、備前陶器である。19は壺の肩部で、5条の平行沈線が横走する。20は、壺の口縁部である。口縁部の傾き、形状は、文禄三年（1594年）銘の大壺に類似する。21~23は陶器である。21は蓋、22は褐釉の壺、23は蓋の底部である。24~27はすり鉢である。24は陶器、25・26は瓦質上器、27は須恵質土器である。いずれも、比較的近接した間隔でスリットを刻んでいる。25は、口縁部を内側に折りまげて、断面三角形につくる。28は、軒丸瓦の瓦当である。瓦当径13.4cmをはかる。三巴文は左回りで、尾は界線につながる。巴頭は、やや尖り気味である。瓦当面の上半を欠くが、外区の珠文はおそらく12個あると推定される。戦国時代頃にあてられる。



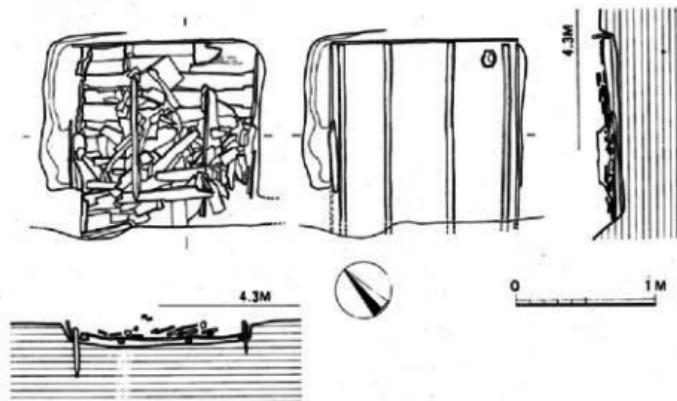
33 273号土壙出土物1 (1 / 3)



34 273号土壙出土遺物 2 (1/3)

283号土壙

I面E-07区で検出した方形土壙である。一端は、調査区外に出ているので、1辺の長さしか確定できないが、150cm×130cm以上のほりかたを持つ。



35 283号土壤造構実測図 (1 / 40)



36 283号土壤 (南東より)

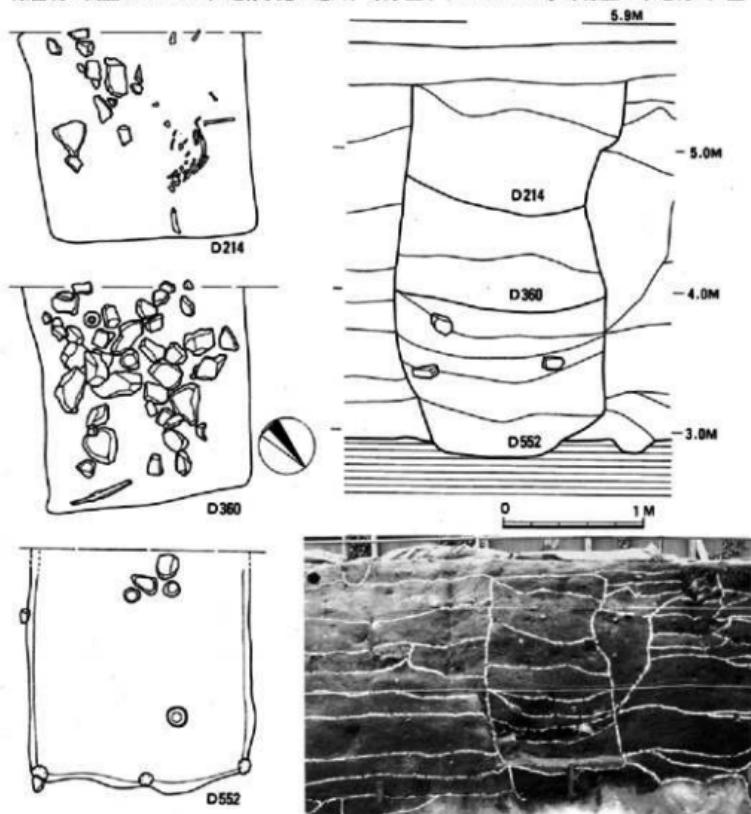
土壤の底には、30~36cm間隔で1寸幅の角棒を置いて棊とし、その上に横に幅12cm（4寸）前後の板をわたして床を作っている。床の周辺には、やはり板を立て、板の内側には杭を打って支える。この側板で囲まれた床部分は、132cm（4尺）×132cm以上になる。床板材の上には、更に板材が散乱しており、それを押えるかの様に、やはり棊木と思われる棒材が、床下の棊と平行する方向で検出されている。土壤の蓋が、下に押ちこんだものであろうか。いずれにしても、地下倉様に地下空間を作っていたことは疑いないと思われる。

214号土壤 (360号土壤, 552号土壤)

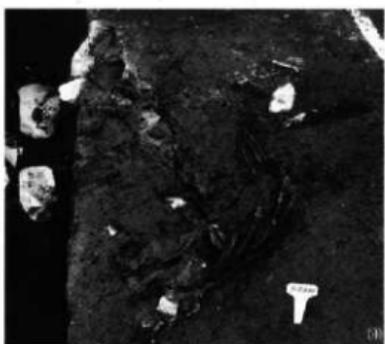
I面 F-03区より検出された方形の土壤である。II面で360号土壤、IV面で552号土壤の呼称を与えていたが、最終的に土層図の検討から、I面よりも上からほぼ真直に掘りこまれていた単一の土壤であることが判明した。土壤断面上では、2.6 mをはかる深いものだが、他の近世の井戸と比較すれば浅く、またその程度の深さでは湧水レベルに達することは不可能である。したがって214号土壤は井戸ではなく、単なる土壤と考えられる。

Fig.38に示した様に獸骨が出土している。おそらく犬かと思われるが、頭骨・前肢骨を欠いている。

漆器駒が出土しているが、遺存状態が悪く、取り上げられなかった。朱漆塗の木地碗で、土



37 214号土壤実測図 (1/40)



38 獣骨出土状況



39 漆器碗出土状況

圧でひずんでいるが、口径（長径）14cm、高台径7.3～9.2cm、高台高1cm、器高6.5cmをはかる。出土遺物の一部をFig.41に示した。

1～3は土師皿である。口径5.85～6.75cm、器高1.32～1.95cmをはかる。4は、土師器の坏である。口縁部を欠く。底径は7.2cmである。5は、内黒土器（黒色土器A類）の破片である。もとより、年代的には11世紀頃までさかのぼりうるものである。内面は密にヘラミガキを施す。6は土師器の壺である。把手部が折れたと思われる突起部が2ヶ所みとめられる。胎土はやや粗く、整形も難で、焼成はあまり。

7～9は白磁である。7・8は、うすい輪高台のつくりもので、体部は丸味を持った腰部からゆるく内湾して、小さく外反して口縁を作る。9は小碗である。

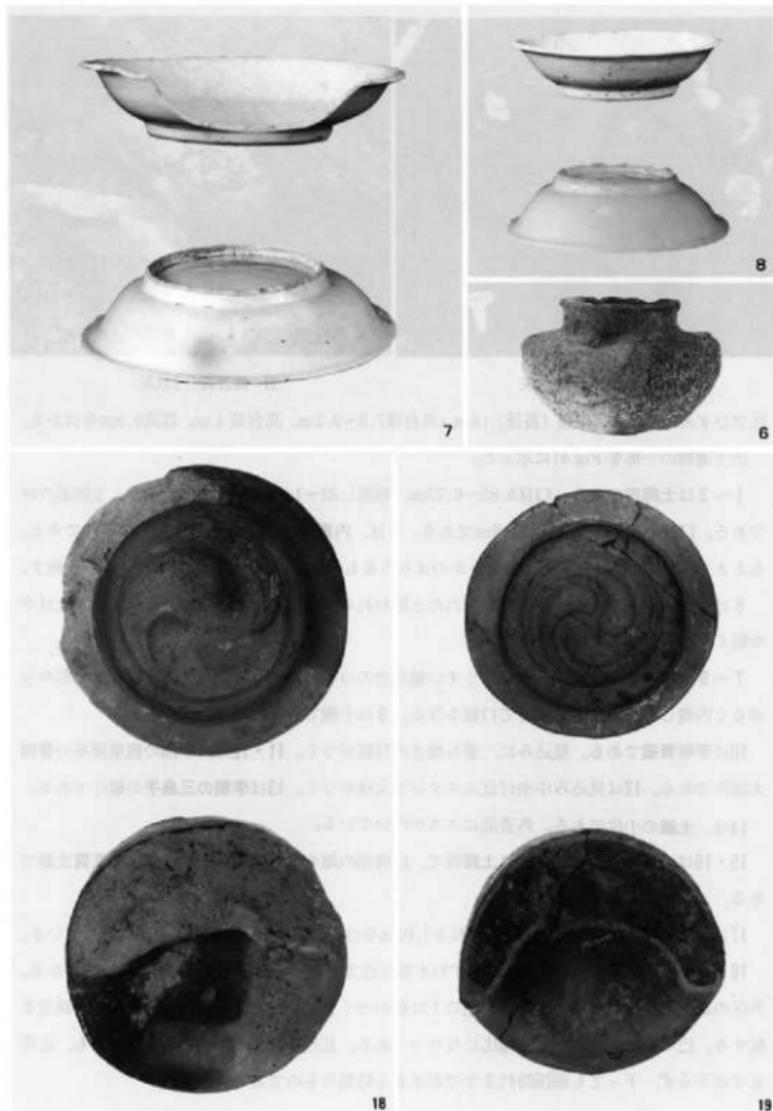
10は李朝青磁である。見込みに、重ね焼きの目痕がつく。11・12は、中国の龍泉窯系の青磁大皿片である。12は見込み中央付近にスタンプ文様がつく。13は李朝の三島手の破片である。

14は、土鍋の小片である。外表面にススが付いている。

15・16は、こね鉢である。15は土師質で、口唇部内端を上方に引き出す。16は、瓦質土器である。

17は、緑泥片岩の硯である。短辺で長さ7.05cmをはかる。陸の部分には、墨が付着している。

18・19は、軒丸瓦の瓦当である。いずれも左三巴文をあしらう。18は、瓦当径15cmをはかる。外区の珠文はみられない。巴文は、巴の上に稜がつくタイプである。19は、外区に14の珠文を配する。巴の頭は丸味が強く、幅広になりつつある。瓦当径12.6cmをはかる。いずれも、近世までは下らず、下っても戦国時代までおさまる時期のものである。



40 214号土壤出土遺物 1



41 360号土壤出土遗物2 (1 / 3)

② 井戸

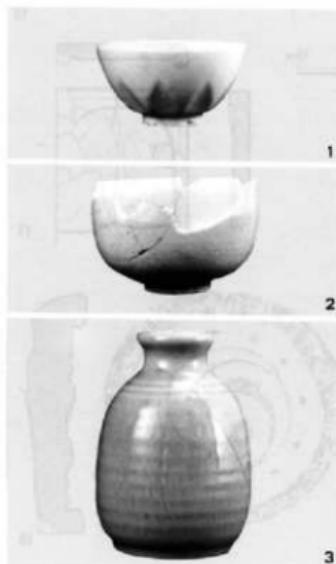
53号井戸

I面 F-03・04区で検出した瓦巻きの井戸である。井筒の直径80cm、井戸掘りかたの直径240cmをはかる。

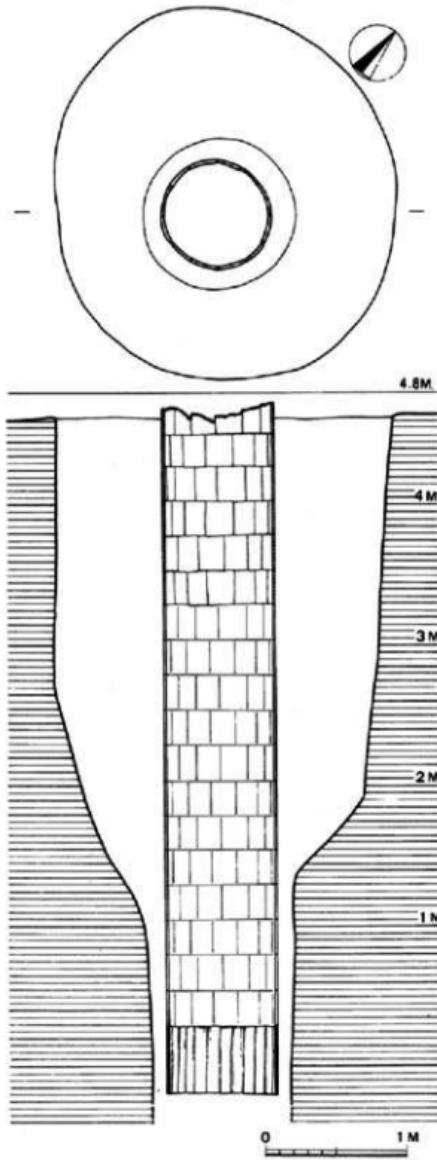
最下部には木桶を一段据え、その上に井戸瓦で井筒を組みあげていく。井筒はI面以下だけで18段積まれている。

出土遺物は、中世から近世のものまで多岐にわたる。

1～3は、肥前磁器である。1は青磁碗で、完形品である。体部下半を9ヶ所斜めに面取りする。2は白磁碗である。3は白磁の壺である。2・3は黄味をおびた透明度の高い釉が施される。



42 53号井戸出土遺物



43 53号井戸実測図 (1/40)

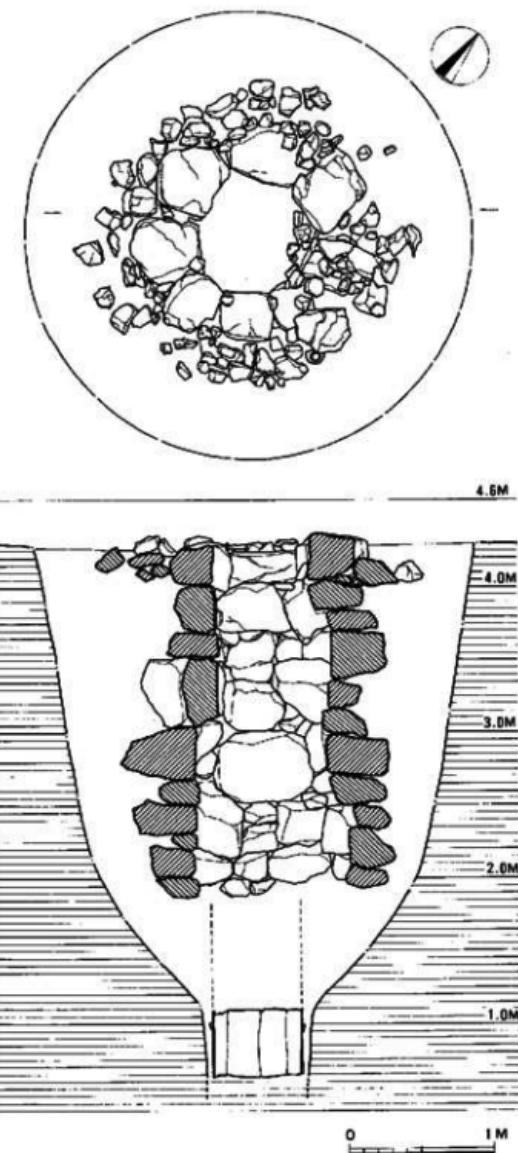
54号井戸

1面E-08区で検出した井戸である。築港線の5次にわたる調査を通じて唯一の、石組井戸である。

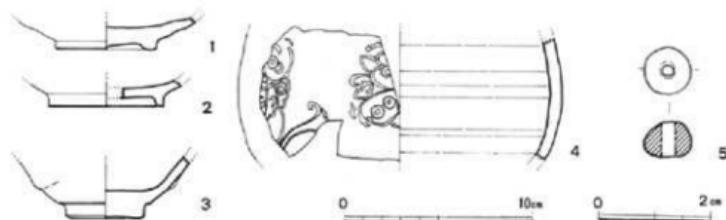
井戸のほりかたは、1面上で直径300cmのほぼ正円形を呈する。1面から225cmほど下までは、直線的に一定の傾斜で細くなり、以下ロート状にすぼまる。ほりかた最下部は、径75cm程度の筒形となり、ここに木枠（底を抜く）が据えられている。

井筒部分の石組は、不整八角形の平面形をとる。一边27cm～45cmの大きな砾で組み上げるが、上下で八角形の各面はそろっていない。残存していた石組は、1面下240cmに及ぶ。

Fig.45の1は李朝青磁の碗である。2は綠釉陶器である。灰色の土師質軟胎に、青緑色の釉が全面にかかる。器表はヘラミガキされる。付け高台である。3は中国製の天目茶碗である。黒茶色の釉がたっぷりとかかる。4は李朝象嵌青磁の壺。5はガラス小玉である。



44 54号井戸実測図 (1 / 40)



45 54号井戸出土遺物 (1/3, 5-1/1)



46 54号井戸 (北東より)



47 54号井戸 (最下部, 木棒)

55号井戸

I面E-07区で検出した、瓦巻きの井戸である。井筒は直径84cm、ほりかたは直径138cmをはかる。井戸の最下部までは、調査を行なっていない。確認しているのは、I面下420cmまでで、この範囲内では瓦積みが続いている。

55号井戸の井戸瓦は、縦30cm横25cmをはかるが、小口に刻印を持つものがみとめられた。刻印は「江辺松永菊」の陰刻である。江辺は、福岡市に東に隣接する粕屋郡粕屋町の地名である。

松永菊とは、松永菊次郎のこと、明治期に開窯、昭和31年頃廃業した瓦生産業者（瓦職人ではない）の商標である。

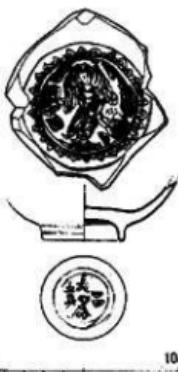
したがって、55号井戸の年代は明治以降、昭和31年以前ということができる。

出土した遺物には、近代以前の各時代のものが含まれている。図示したものは、明代の染付碗である。見込みに入物像を描く。高台内には、「長命富貴」銘をもつ。底部は鰐頭心を呈し、高台は垂直に立つ。

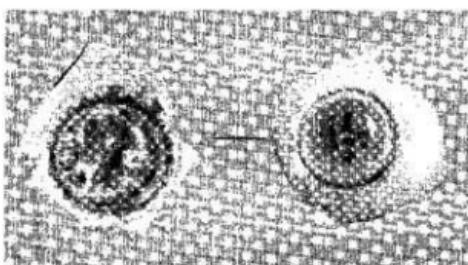
脛付が露胎となる他は、全面に施釉する。高台径4.2cmをはかる。胎土は白色で、きめは極めて細かい。釉は透明で光沢がある。15世紀後半～16世紀中頃の所産である。



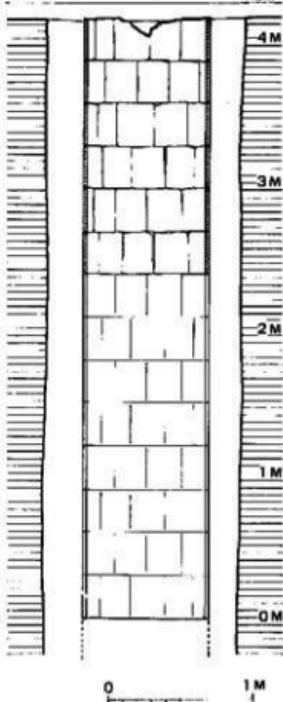
4.3M



0 10cm



49 55号井戸出土遺物（1／3）



48 55号井戸実測図（1／40）

56号井戸

I面E-09区より検出した瓦巻きの井戸である。井筒は直徑64cm、掘りかたは直徑124cmのそれぞれ円形を呈する。

井戸掘りかたより、井筒の上部を固めていたと思われるコンクリート片が出土しており、56号井戸も近現代の井戸であると考えられる。

図示したのは、明代染付の皿である。外底部は、いわゆる葵筒底となる。見込みには「寿」字が、体部外面には宝相華文が描かれる。底部は露胎であるが、施釉後かき取ったものではない。

62号井戸

I面E-07区で検出した瓦巻きの井戸である。井筒の一部と掘りかたの半分程度は、調査区外に出ている。確認した部分で、井筒径60cm、掘りかた径165cmをはかる。

図示したのは、李朝の象嵌青磁である。いわゆる花三島と呼ばれるもので、内外とも全面に文様を施す。口径は14.3cmをはかる。

63号井戸、8号配石造構

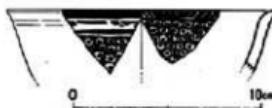
I面E-05区で検出した。調査にとりかかる前の表土すきとりの際に、瓦井戸と石組を見たので掘り残してあり、周囲のI面の造構検出面と比べて25cm前後高位で検出している。

63号井戸は瓦巻きの井戸で、井筒径72cm、掘りかた径130cmをはかる。土層観察から、63号井戸は明らかに8号配石造構を切っている。

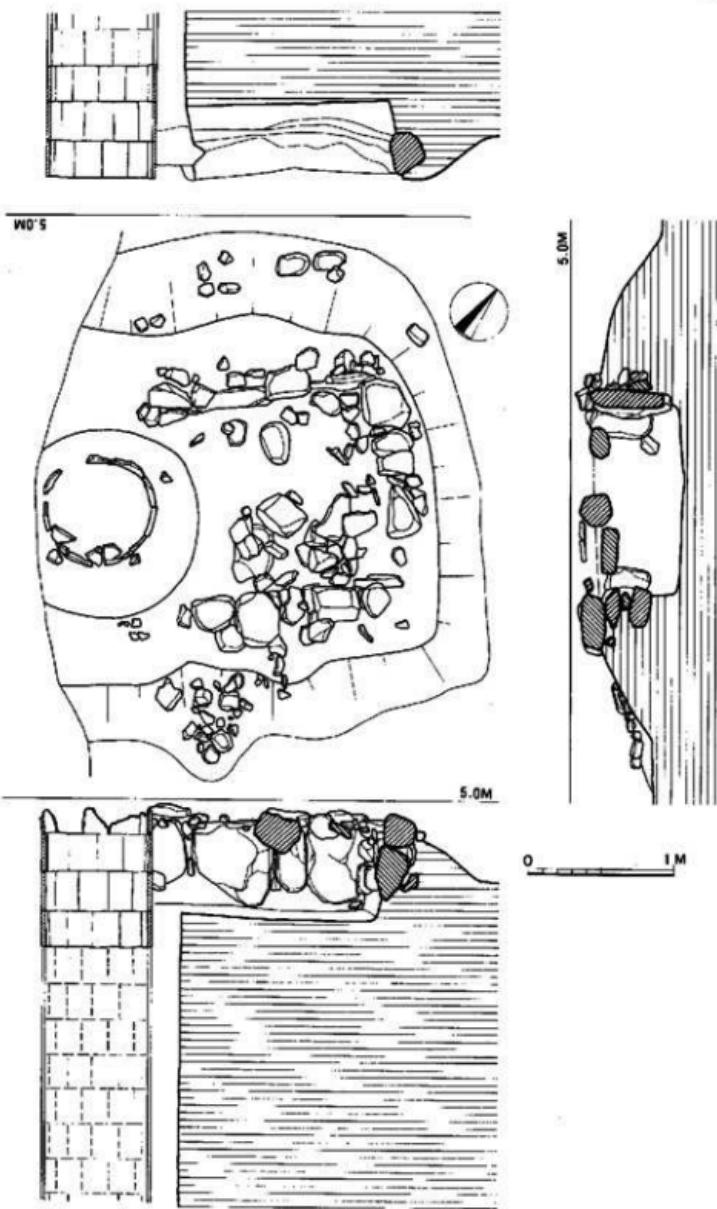
8号配石造構は、土壤壁に石を配した配石土壤である。西北壁と東南壁の2辺には板石を立て並べ、東北壁は疊を若干配しているだけである。西北壁で長さ150cm以上、東北壁132cmをはかる。土壤の深さは、74cm前後で、全体として升形を呈する。



50 56号井戸出土遺物 (1 / 3)



51 62号井戸出土遺物 (1 / 3)



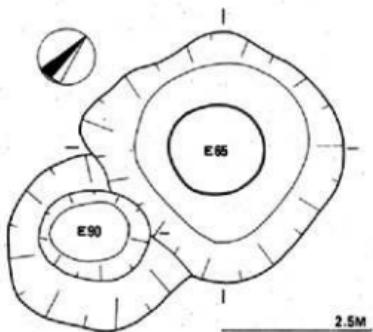
52 63号井戸、8号配石遭撲実測図 (1 / 40)



53 63号井戸・8号配石遺構（西南より）



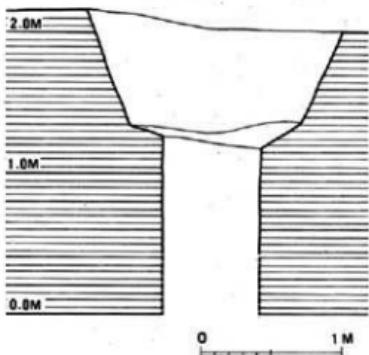
54 8号配石遺構（南より）



65号井戸

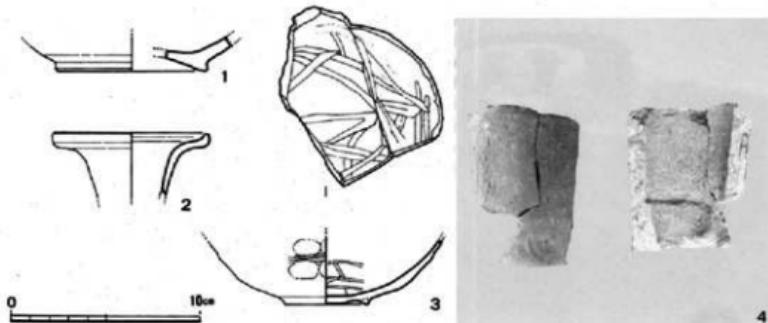
II面E-06区で検出した井戸である。II面で検出しているが、I面の該当する場所には他の造構がみとめられず、I面以上から掘りこまれていたと思われる。II面で66号井戸に切られ、V面で90号井戸を切る。Fig. 55に示したのは、V面での状況である。

井筒は残っていないが、おそらく木桶等であろう。井筒径70cm、掘りかた径215cm。(II面上)をはかる。



55 65号井戸実測図 (1/40)

Fig.56の1は、越州窯青磁の碗である。外底部は露胎となる。胎土は、精良とは言えない。2は白磁壺の口縁である。3は瓦器碗片である。内面はナデの上に、比較的まだらにヘラミガキを施す。外面は、指押えの上にあらくヘラミガキが入る。高台は断面三角形で付け高台。4は「堺湊伊織」スタンプがおされた焼塙壺の破片である。「堺湊伊織」銘の焼塙壺は、江戸時代に流行していたものであり、博多にもその当時たらされていったのである。



56 65号井戸出土遺物 (1/3)

66号井戸

II面E-06区で検出した井戸である。前述した様に、65号井戸を切っており、本来は1面以上から掘りこまれていたものと思われる。また西側では、68号井戸を切る。

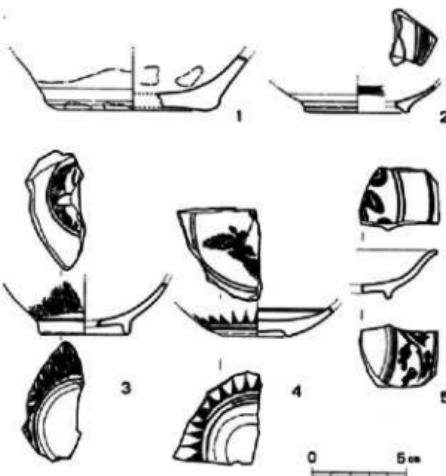
1は越州窯系青磁碗である。平底で見込みに目痕がのこる。体部外面の下位から底部は露胎となる。2は瓦器碗の破片である。見込みにはラセン状の暗文の一部がみとめられる。椭葉型と思われる。3~5は明の染付である。3は碗。4・5は皿で、3・4は芭蕉文を施す。

68号井戸

II面E-05・06区、F-05・06区で検出した遺構である。整理段階で、I面の215号土壙と68号井戸の井筒（調査の都合上、一時的に板に353号土壙としている）と同一であること、I面の245号土壙が68号井戸のはりかたに含まれること、II面上で68号井戸掘りかたとした遺構の南半分が、V面の調査時に80号井戸として認識され、これが68号井戸を切っている、すなわち80号井戸が68号井戸よりも新しい井戸であることが判明した。これに基いて68号井戸をみると、井筒径110cm（I面上）、掘りかたは最大部で480cmをはかる。



58 68号井戸（南より）

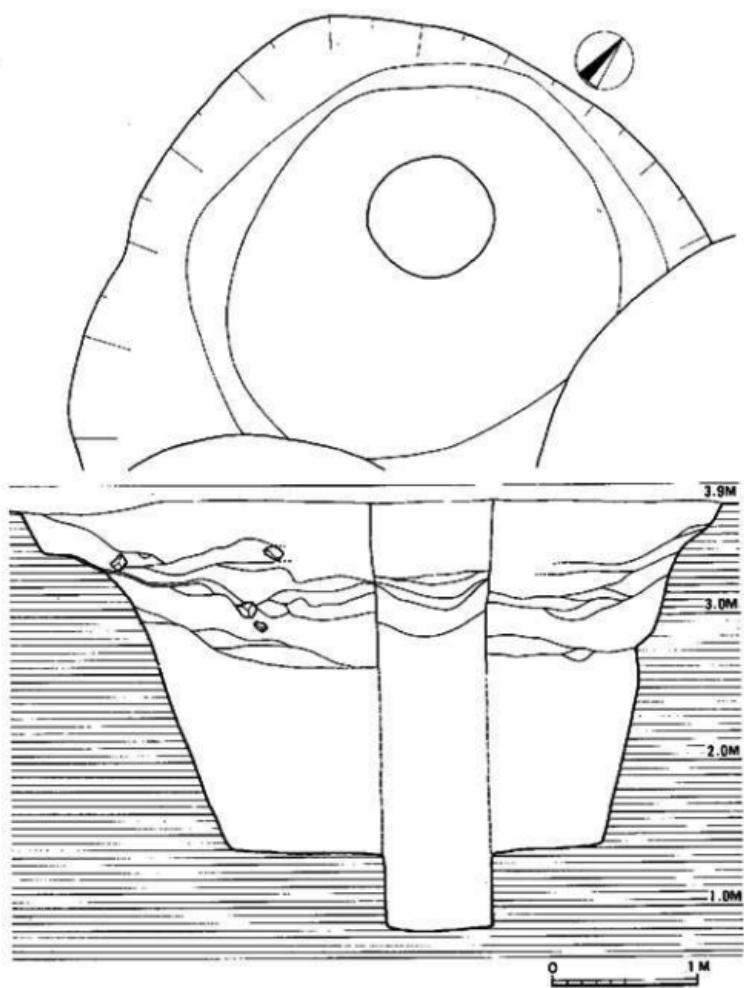


57 66号井戸出土遺物（1/3）

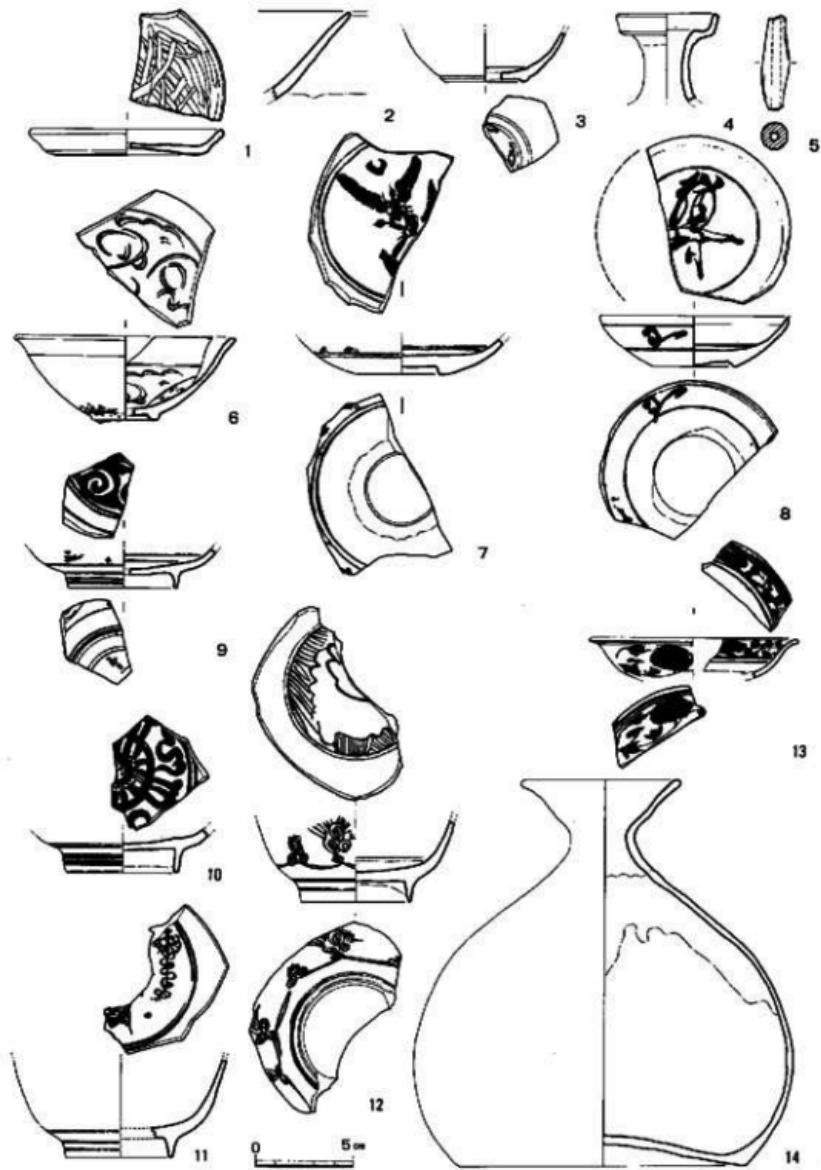
出土遺物には、肥前磁器、染付が含まれ68号井戸が近世以降に下るものであることを示しているが、井筒が瓦巻きでない点、掘りかたが大きい点からみて、明治時代以降に下ることはないと思われる。

図示した遺物は、出土遺物の一部であり68号井戸の年代を示してはいない。

1は瓦器皿である。内底部は密にヘラミガキを施す。体部はヨコナデ、外底部はハラオコシである。炭素の吸着状態は良く、堅緻で銀化している。口径9.8cm底径7.2



59 68号井戸実測図 (1 / 40)



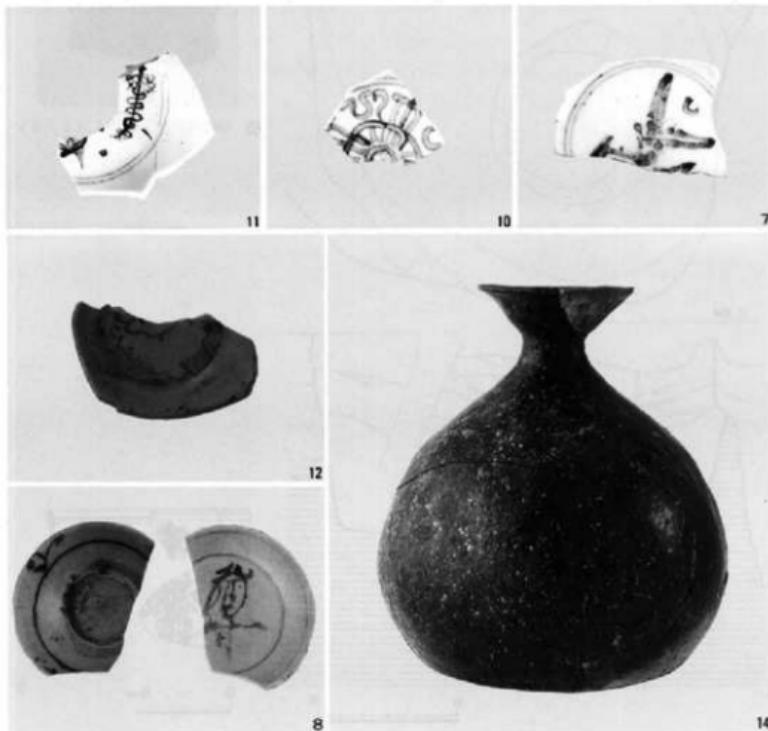
60 68号井戸出土物1 (1/3)

cm器高1.35cmをはかる。在地産である。12世紀頃の所産と思われる。2は天目碗の破片である。体部は、やや外反しつつ直線的に開く。中国産である。3は高麗青磁である。削り出しで小さな高台をつくる。内外面ともまんべんなく施釉される。4は白磁の盤口壺の口縁部及び頸部である。頸部内側まで釉がかかっている。5は土鍾である。

6は、瀬州窯系の青磁碗である。断面台形の削り出し高台を持つ。高台から外底部にかけては露胎となる。外体部の高台際と疊付部に砂が付着する。重ね焼きの痕跡か。

7~13は、明代の染付である。7・8・13は皿で、7・8は葵筋底。13は底部を欠くがおそらく高台がつくものであろう。8で、口径9.75cm底径4.05cm器高2.6cmをはかる。9~12は、碗である。9の底部には銘の一部がみとめられ、おそらく「宣徳年造」銘と思われる。

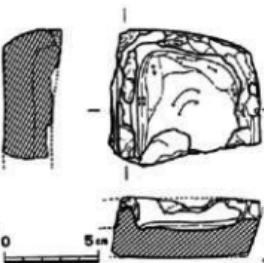
14は、朝鮮の綠褐釉陶器の舟徳利である。完形品である。口径8.25cm底径4.7cm器高19.8cm体部最大幅19.4cmをはかる。



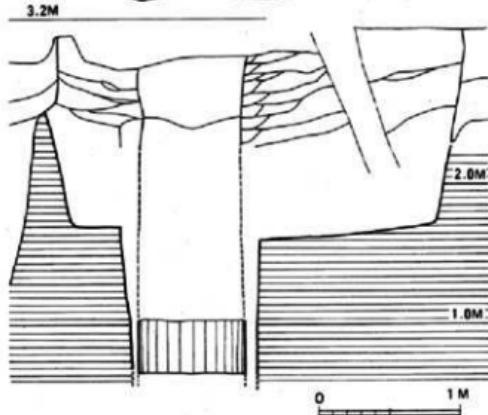
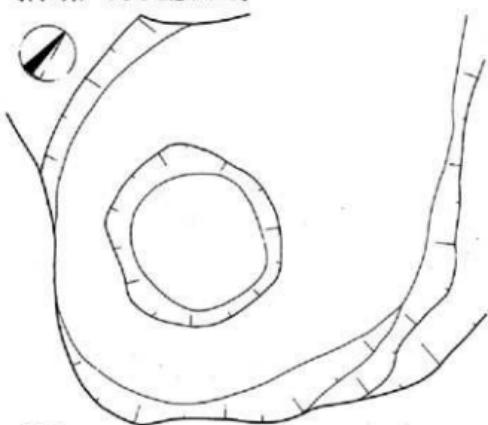
79号井戸

V面 F-01区で検出した井戸である。整理の結果、I面で検出した201号土壤、II面で検出した375号土壤が79号井戸の井筒にあたり、III B面で検出した484号土壤が掘りかたにあたりることが明らかとなった。Fig. 62には、V面で検出した状況を示している。

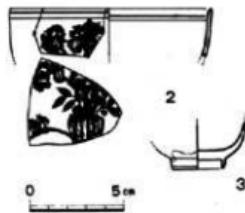
79号井戸からは、近世の国産陶器類が出土しており、江戸時代の井戸であると思われる。



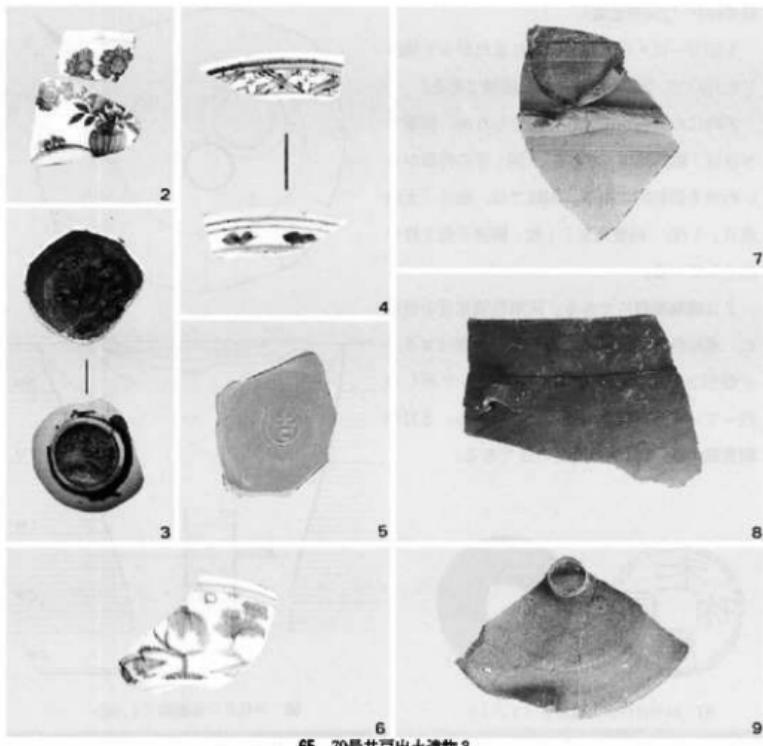
63 79号井戸出土遺物1 (1 / 3)



62 79号井戸実測図 (1 / 40)



64 79号井戸出土遺物2 (1 / 3)



65 79号井戸出土遺物 3

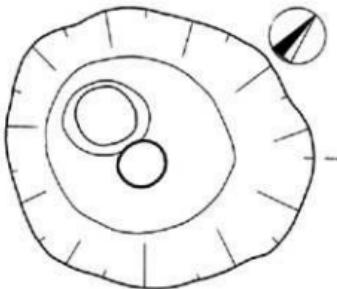
Fig. 63に示したのは、須恵器の風字二面鏡である。左側と陸部の半ばを欠く。陸部の中央は磨滅して凹んでおり、使用が頻繁であったことをうかがわせる。現存幅7.95cm、現存長7.2cm、高さ3.1cm、陸部の厚さは1.65cmをはかる。遺物としては、平安時代の前半に属するものであろう。2は明代の染付碗である。鉢植えの花が描かれているが、破片は接合できない。3は、白色の磁胎に青藍色の釉がかかった盃である。外面の釉はほとんど剥離し、内面には灰をかぶつてあれた釉がたまる。4・6は染付である。6は肥前染付の碗であろうか。5は青磁碗の底部である。見込みに「吉」字のスタンプをおす。7・8は無釉の焼き締め陶器である。7は粘土紐を貼り付けた大壺の胸部、8は、壺の口縁である。9は須恵器の坏蓋である。端部の形状から、8世紀後半の遺物であると考えられる。

94号井戸（256号土壙）

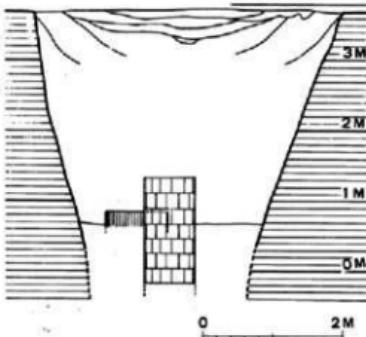
I面 D-11・12・13・14区にまたがって検出された井戸で、256号土壙とした造構である。

名時代の遺物がまざって出土したが、特筆すべきは「和同開珎」である。「開」字の特徴からいわゆる新和同である。銅鏡では、他に「天禧通寶」1枚、「紹聖元寶」1枚、解読不能2枚が出土している。

2は縦軸陶器片である。灰黒色須恵質の硬胎に、濃緑色の釉が厚めにかかる。体部はヨコナデ整形される。小片の為、輪花は1ヶ所しか残っていない。復原口径12cmをはかる。3は李朝青磁の碗、4は明の染付の皿である。



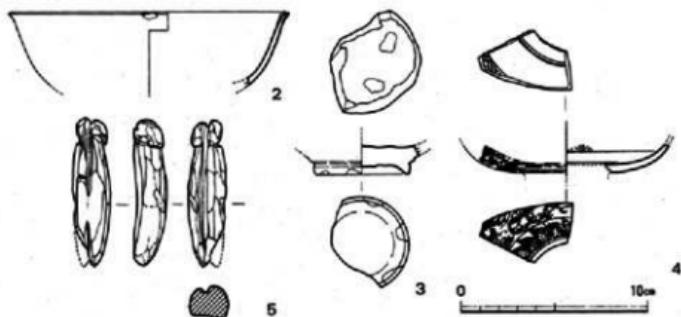
67 94号井戸出土遺物1 (1/1)



66 94号井戸実測図 (1/80)

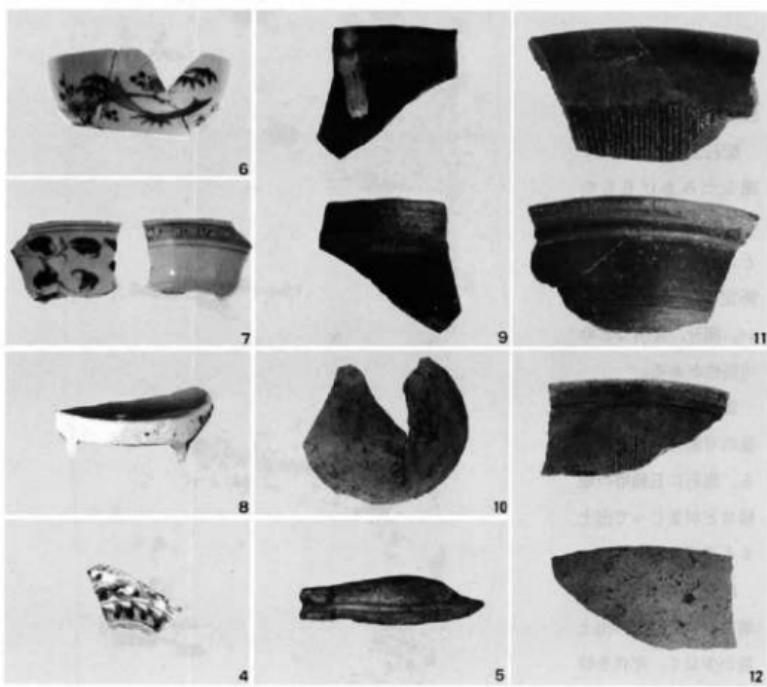


68 94号井戸 (北東より)



69 94号井戸出土遺物2 (1 / 3)

5は、滑石製の石縄である。現状が当初の形状をとどめているかわからないが、一端は削りこんで亀頭状につくり、もう一端は丸くおさめている。長さ7.8cmをはかる。



70 94号井戸出土遺物

③ 配石遺構

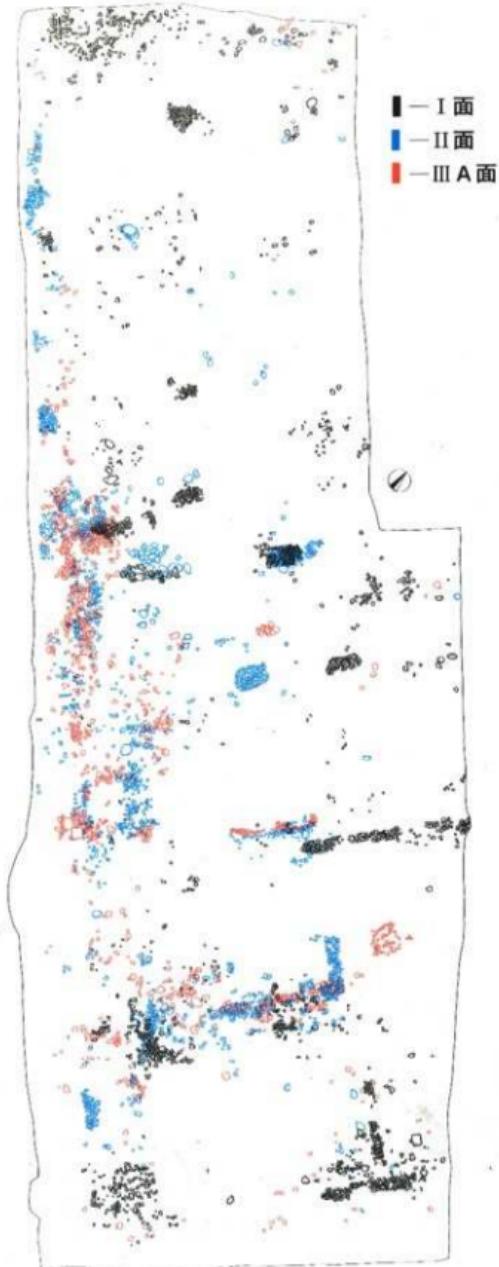
I面からⅢA面にかけては、配石遺構が多くみられる。配石遺構には、大別して浅く溝状の土壤を掘り蹠をつめて列石状を呈するもの（列石）、土壤の壁および周囲に蹠を配したもの（配石土壤）、一定の範囲に蹠を集中させたもの（集石）がある。

列石は、その形状から建物の基礎部分を構成するものと思われる。

配石土壤には、壁に蹠をつみあげるものと、境外に並べるものとがあり、その性格を断定できる資料はない。溜升、便所などの可能性がある。

集石は、道路、敷石、墓の可能性が考えられる。集石に五輪塔の地輪などがまじって出土する遺構もある。

配石遺構は、配石土壤を除いて遺物の出土量が少なく、年代を特定するのが難しい。大



71 I～ⅢA面、配石遺構配置図 (1/200)



72 II面 32号配石遺構（北東より）



73 IIIA面 35号配石遺構（北東より）

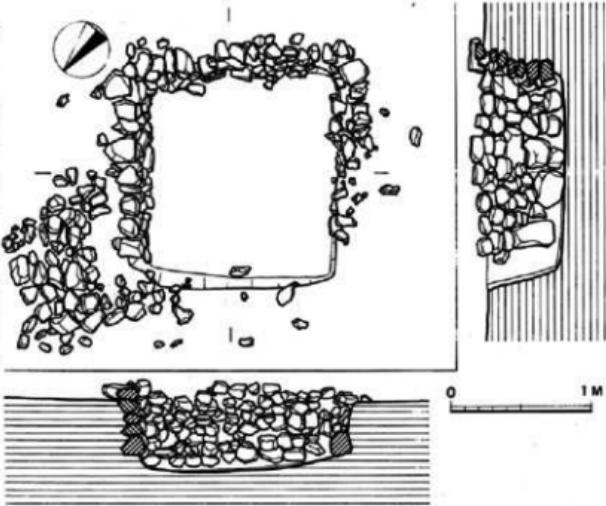
まかば時代觀として、列石は室町時代後半以降おそらく戦国時代から近世初頭。配石土壙は戦国時代～近世、集石は室町時代と考えて大過ないと思われる。

12号配石遺構

I面 F-07区で検出した配石土壙である。土壤壁の三面に石を積み、北隅の土壤外に石敷部分を張り出す。土壤は、132cm×148cm、深さ48～52cmの升形を呈す。石積は北西壁を除いて三面になされるが、

北東壁において特に密である。

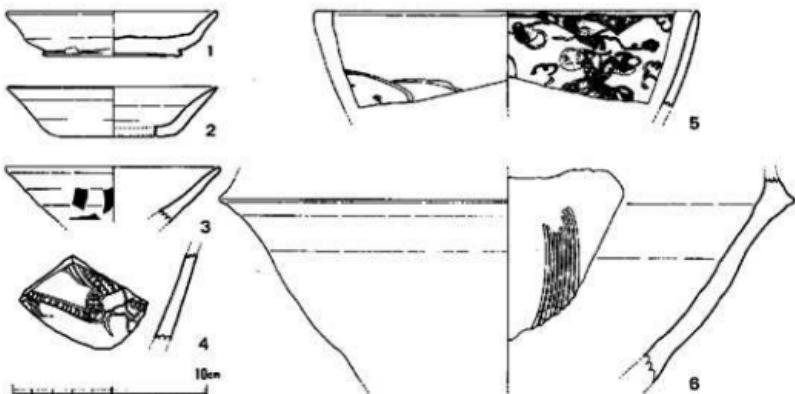
張り出し部分は、約48cm×44cmの方形で、疊は重ならず敷きつめただけである。土壤部分際は、むしろ敷石が稀薄であり、切り合いの状況を示さないので、単一の遺構と考えられる。溜升と、それに伴なう作業スペースと考えたい。



74 12号配石土壙実測図 (1/40)



75 12号配石遺構 (1)-南東より (2)-北より)



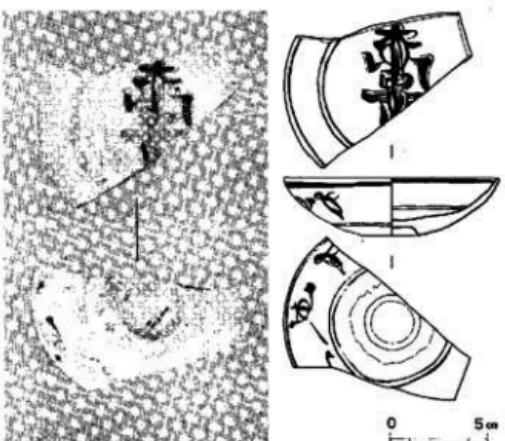
76 12号配石遺構出土遺物 (1 / 3)

Fig. 76. 1・2は土師皿である。口径10.8cm、器高2.35~2.5cmをはかる。3は、李朝の刷毛三島である。体部外面は横方向に白泥を塗るが、一部に白泥をはがした部分をつくる。内面は、薄く交差して白泥を刷く。口径11.0cmをはかる。4は、李朝の象嵌青磁である。壺の体部で、白土で龍を描く。5は、肥前磁器の染付と思われる。口径は、19.5cmと推定される。6は、備前陶器のすり鉢片である。口縁部を欠くが、備前焼編年III期の特徴を示している。

16号配石遺構

1面 E-09区で検出した列石遺構である。N-44°-E を指すが、延長としては1.2m分しか残っていなかった。

図示したのは、明代染付の皿である。目込みには「寿」字の文様がはいる。底部は基筒底で、全面に施釉した後、体部外面下半から底部端部にかけて釉をふきとっている。復原口径11.2cm、底径2.9cm、器高3.0cmをはかる。



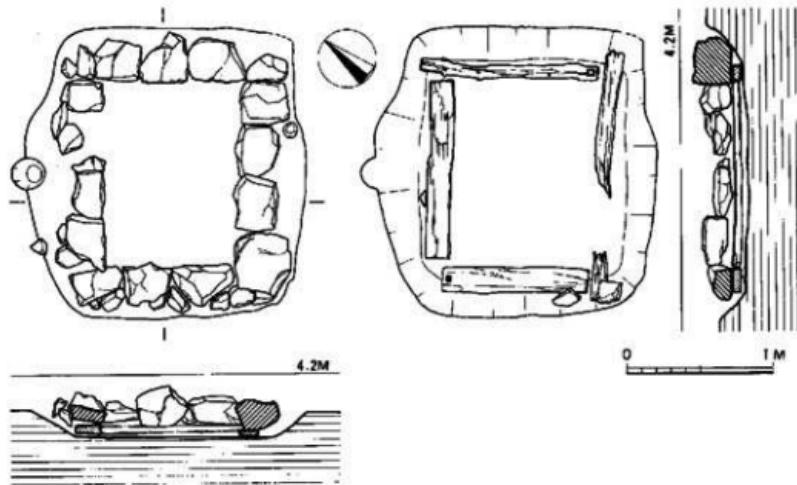
77 16号配石遺構出土遺物 (1 / 3)

17号配石遺構

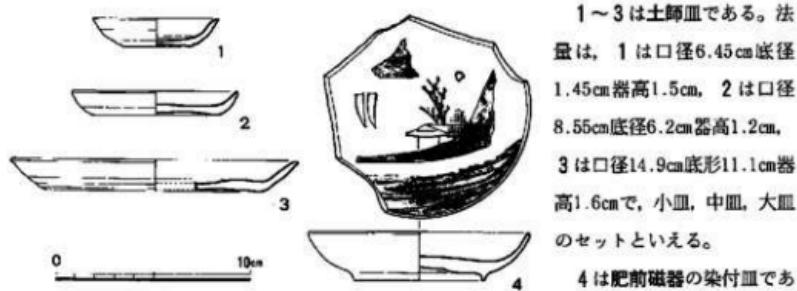
1面D-14区より検出した配石土壙である。約140cm×200cmのほぼ方形のほりかたの底に、100cm×130cmの内法で長方形に板材をおき、その上に礫をならべる。土壙の深さは、20cm前後をはかる。

板材は、端部に納穴を穿つものがあり、建築部材の転用と考えられる。板材の長さは、北東辺で120cm、北西辺で120cm、南西辺100cm、南東辺172cm（折れた部材を2本用いる）をはかる。両端部に納穴を持つものではなく。建築材の一端を切断して用いたものと思われる。

石は、92cm×128cmに内側の面をそろえて配置されている。石の形状、高さは様々で、特に上面をととのえる等の意識はされていない。



78 17号配石遺構実測図 (1/40)



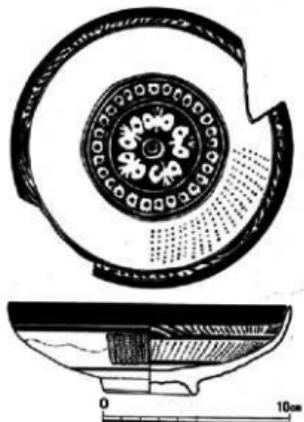
79 17号配石遺構出土遺物 (1/3)

1～3は土師皿である。法量は、1は口径6.45cm底径1.45cm器高1.5cm、2は口径8.55cm底径6.2cm器高1.2cm、3は口径14.9cm底径11.1cm器高1.6cmで、小皿、中皿、大皿のセットといえる。

4は肥前磁器の染付皿である。

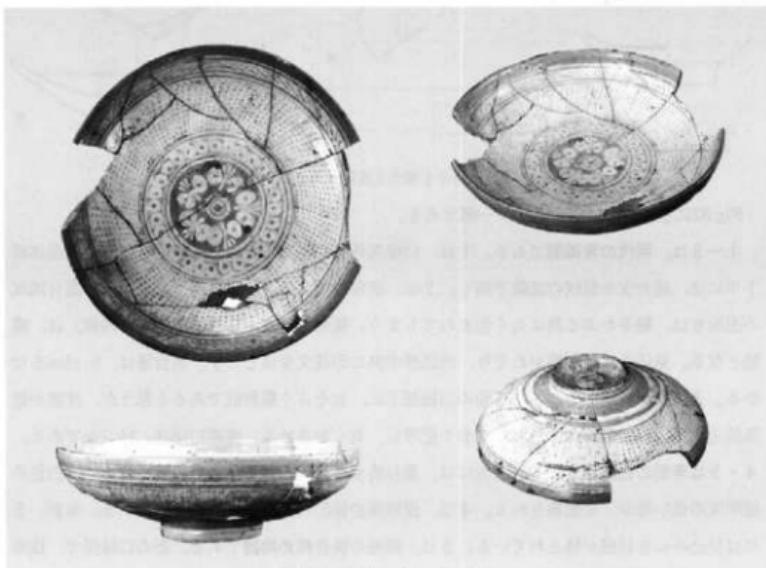
20号配石造構

I面E-10区で検出した列石造構である。主軸方位は、 $N-49^{\circ}-E$ をさす。延長としては、約2m分を検出しているにすぎない。



列石の掘りかたより、李朝の象嵌青磁碗が出土した。いわゆる花三島である。文様は、見込みに蝶を五羽配し、体部の内外面に花文を散りばめている。いずれも型押しによるもので、白色土で象嵌されている。胎土は灰石色を呈し、砂粒をほとんど含まずきめ細かく精良である。釉は、うすく青白色をおびた灰白色の透明釉である。口径14.25cm、高台径4.8cm、器高4.8cmをはかる。

80 20号配石造構出土遺物1 (1 / 3)



81 20号配石造構出土遺物2

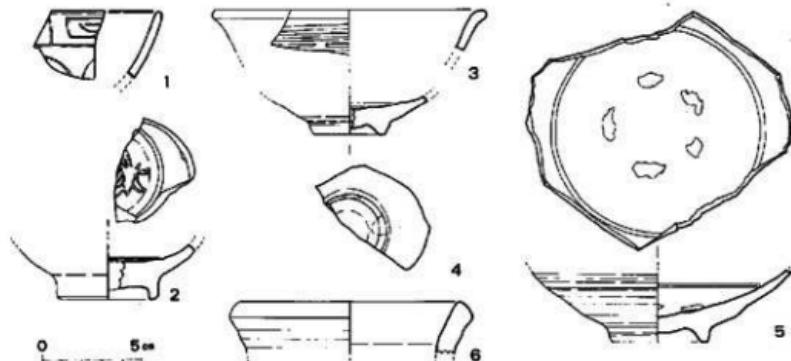
(3) 中世Ⅲ期の遺構

① 土壇

253号土壇

I面E-10区で検出した土壇である。120cm×130cmのややひずんだ方形を呈する土壇で、底に縁がみとめられる。縁の状況は、疎密を持って壇底一面にひろがるが、敷石を意識した状況とはみられない。可能性としては、壇底に縁をならべたこともありうるが、むしろ廃棄したものと考えたい。土壇の深さは、10cm内外をはかる。

埋土は、焼土まじりの暗褐色土である。炭化物や赤色粒土を多く含む。全くしまっていず、柔かい。



82 253号土壇出土遺物（1／3）

Fig.82に示したのは出土遺物の一部である。

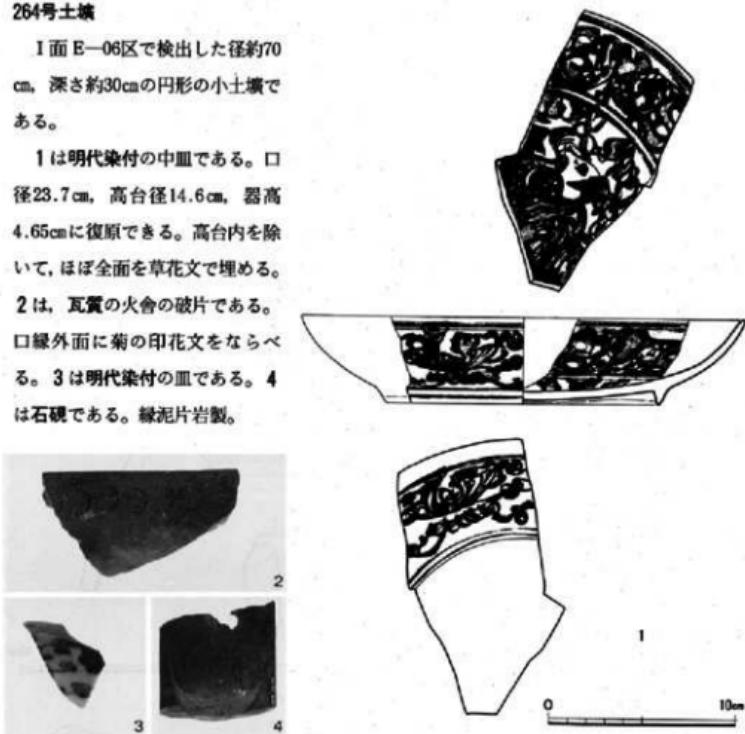
1～3は、明代の青磁碗である。1は、口縁部外面に雷文帯をめぐらせるもので、外面体部下半には、蓮弁文を弧状の沈線で描く。2は、底部片である。高台は高く直立する。高台端部の面取りは、釉をかぶる為に丸く包まれてしまう。高台脛付きから外底部（高台内側）は、露胎となる。見込みには圓線がめぐり、内底部中央に印花文をほどこす。高台径は、5.15cmをはかる。3は、口縁部片である。外面の口縁部下に、おそらく整形痕であると思うが、沈線が數条横走する。口縁端部は、外反してやや肥厚し、丸くおさめる。復原口径は、14.1cmである。4・5は李朝の白磁碗である。高台には、重ね焼きの目痕が残る。きめの粗い胎土に、白色の透明度の低い釉が、全面施される。4は、復原高台径3.75cm、5は4.95cmをはかる。なお、5には見込みにも目痕が残されている。6は、無釉の焼き締め陶器である。壺の口縁部で、復原口径11.1cmをはかる。

264号土壤

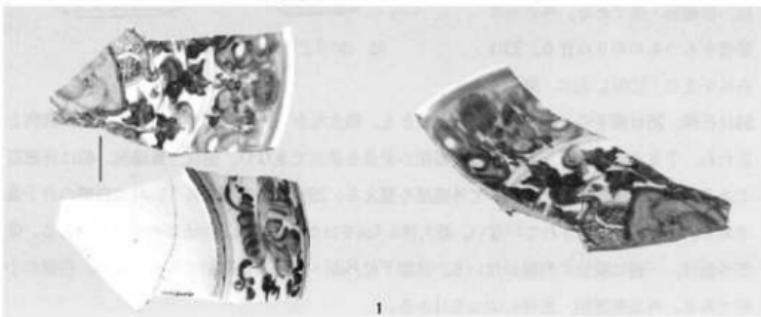
1面E-06区で検出した径約70cm、深さ約30cmの円形の小土壤である。

1は明代染付の中皿である。口径23.7cm、高台径14.6cm、器高4.65cmに復原できる。高台内を除いて、ほぼ全面を草花文で埋める。

2は、瓦質の火舎の破片である。口縁外面に菊の印花文をならべる。3は明代染付の皿である。4は石硬である。緑泥片岩製。



83 264号土壤出土遺物 1 (1/3)



84 264号土壤出土遺物 2

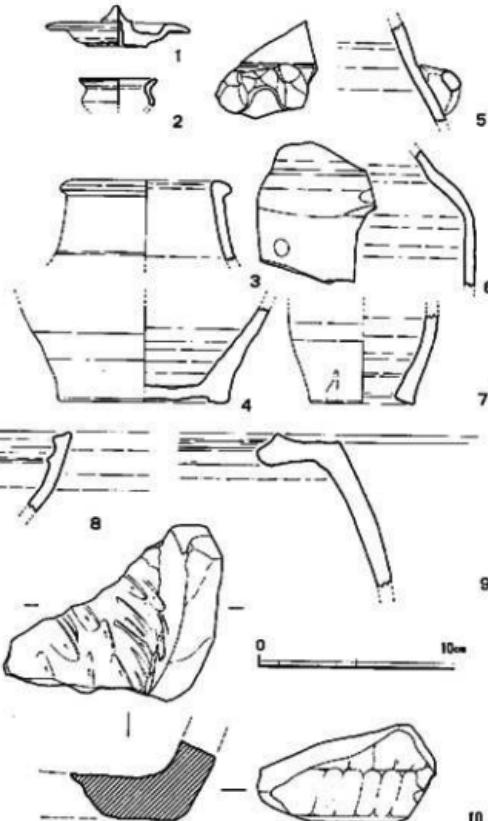
292号土壤

II面D-13区より検出した不整形の土壤である。差し渡しの最大の部分で280cm、深さ65cmをはかる。

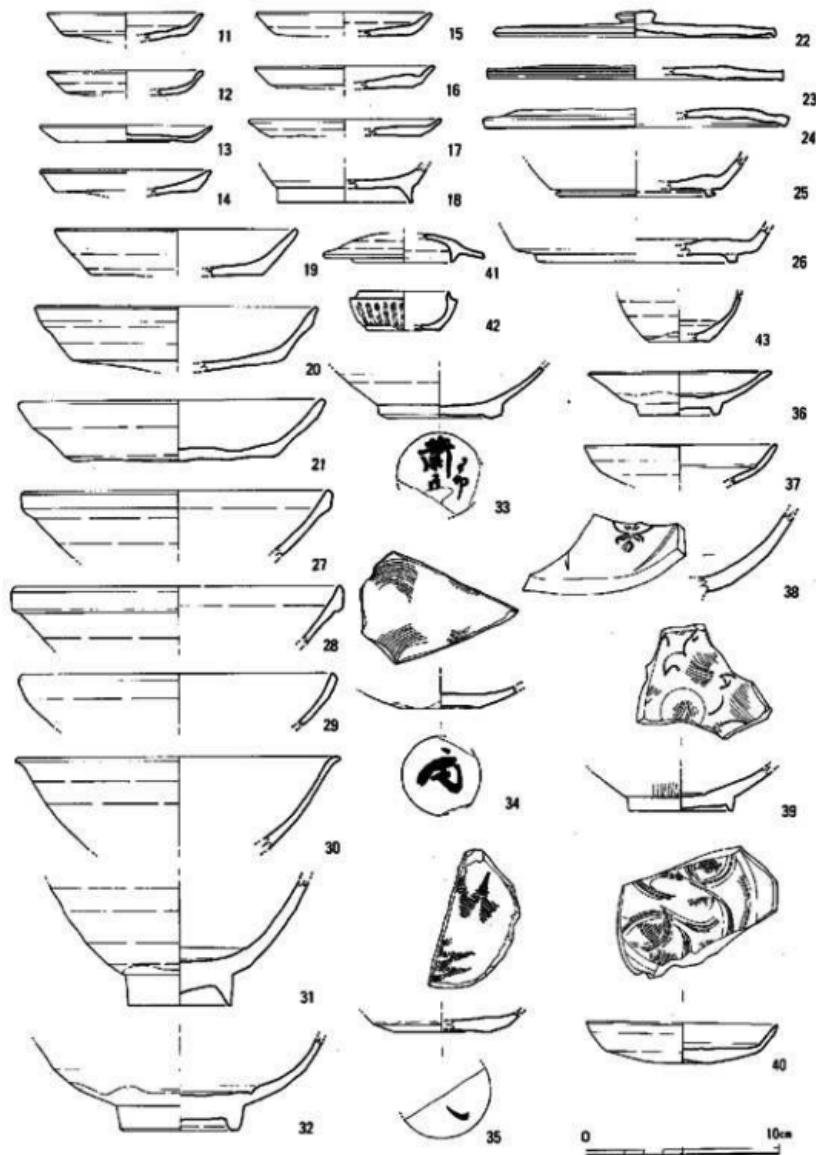
遺物量は多く、ごく一部を実測したにとどまった。

1・4・5・9は、褐釉陶器である。1は蓋で、内面は露胎となる。4・5は壺である。9は口縁内折の壺である。2・3・6・7は、緑灰色の釉を施した陶器である。7は、底部をもたない。8は無釉陶器の鉢である。茶褐色を呈し、粗い。10は滑石製の石鏡である。外面にススが付着する。11～17は土師皿である。口径6.15～10.05cm、器高0.9～1.35cmをはかる。18は高台付の土師境である。19～21は上師坏である。口径12.5～15.9cm、器高2.55～3.45cm。22～26は須恵器である。おおむね8世紀頃の所産であろう。27～37は、白磁碗・皿である。外底部に墨書きをもつものが3点ある。33は右に干支の「己卯」、左に「蘭口」。
花押か

34は花押、35は漢字の一部を見ることができる。残念ながら、いずれも平安時代末頃の遺物と思われ、干支の年代とセットになる土器類の要素を確定できない。38は、青磁碗。40は青磁皿である。40は、施釉後底部を削って外底部を整える。39は青白磁碗である。41は白磁の合子蓋である。特に文様は施されていない。最大径8.4cmをはかる。42は、白磁の合子の身である。体部外面は、一面に縦位の刻線がはいる。体部下位外面・外底部は露胎である。43は、白磁の小壺である。外底部露胎、底径4.03cmをはかる。



85 292号土壤出土遺物Ⅰ (1 / 3)



86 292号出土物 2 (1 / 3)

305号土壙

II面 D-13区で検出した土壙である。一部調査区外に出ている。長軸170cm、深さ35~55cmをはかる。

1は土師皿である。口径13.5cm底形7.65cm器高2.7cmをはかる。内面一面に墨書きがある。内底部には2行書きで文が、体部には卦線と文字がみとめられる。内底部の文字は、「□□二日
七日内」「來□□之丸」とある。体部は上から「甲申」

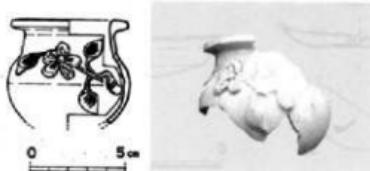
「甲□」「甲辰」とある。干支

支では、甲のつく年は甲申、甲午、甲辰の順にめぐってくる。おそらく「甲□」の欠字部分には「午」がはいるのであろう。年の配列を示す実用具と思うが、甲の年は10年に1度めぐってくるのに対し、干支の間の卦線は6分している。内底部にかかれられた文字の内容が鍵となろうか。判読できないので、墨書きの性格、使用方法等は知るよしもない。体部はヨコナデ、外底部は回転糸切りする。2は明代染付の小片である。

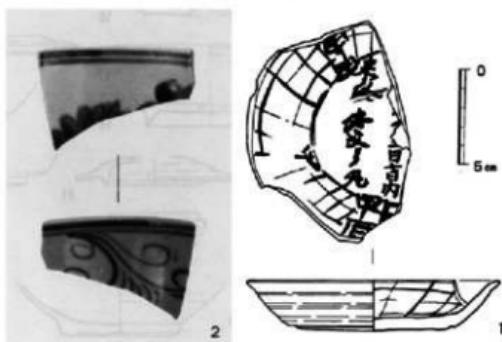
322号土壙

II面 D-12区で検出した土壙である。長軸84cm、短軸58cmの長楕円形を呈する。深さは、24cmをはかる。壙中には、平坦な面を上に向けた躰がおかれている。

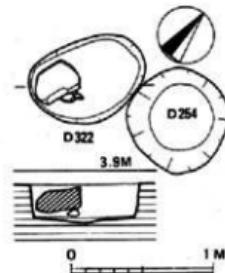
Fig.89に図示したのは、青白磁の小臺である。体部には、花文が貼付けられている。器形は、底部を欠くか、ほぼ球形の体部からやや口すぼまりの頸部が立ち上り、約90°外方に折り返して口縁を作る。頸部内面から体部外面にかけて施釉されてい



89 322号土壙出土遺物 (1/3)



87 305号土壙出土遺物 (1/3)



る。復原口径は、6.1cmをはかる。火災にあったものと思われ、釉表面は発泡して、透明度なく色合いもくすんでいる。

88 322号土壙実測図 (1/40)

347号土壤

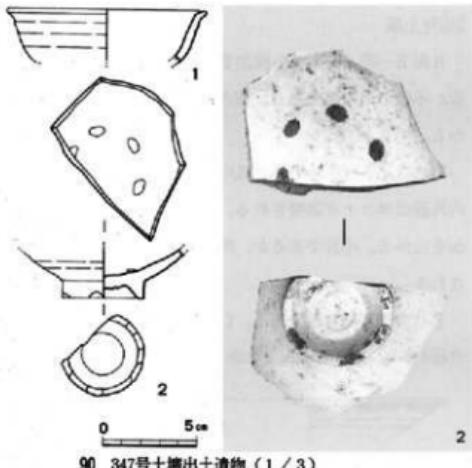
II面 E-07・08区で検出した土壤である。井戸の掘りかた状を呈するが、井筒は検出されていない。

Fig. 90に図示した1は、李朝象嵌青磁である。いわゆる刷毛三島で、体部内外面に白色土の刷毛びきをする。復原口径10.6cmをはかる。2は李朝の白磁である。内底部及び高台型付きに、重ね焼きの目痕がのこる。

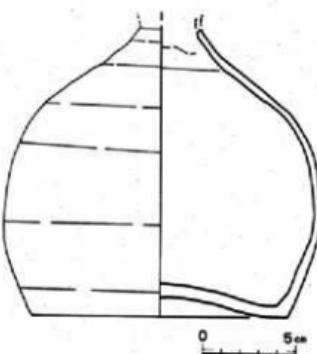
348号土壤

II面 E-05区で検出した、平面が長方形を呈する土壤である。142cm×115cm、深さ26~32cmをはかる。

図示したのは、李朝の緑褐釉陶器である。いわゆる舟徳利である。頸部から上を欠く。頸部はしまり、ゆるくひろがって下ぶくれの体部をつくる。底部は、上げ底の平底である。口縁部を欠くが、348号土壤出土舟徳利(P44, Fig. 60-14)と同様に、ラッパ状に開く口縁をつくり、口唇部は小さく肥厚させて丸くおさめる。胸部最大径16.8cm、底径13.65cmをはかる。



90 347号土壤出土遺物 (1 / 3)



91 348号土壤出土遺物 (1 / 3)



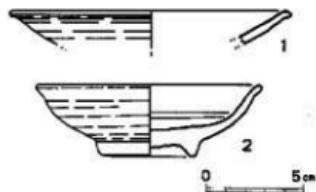
62 348号土壤

349号土壤

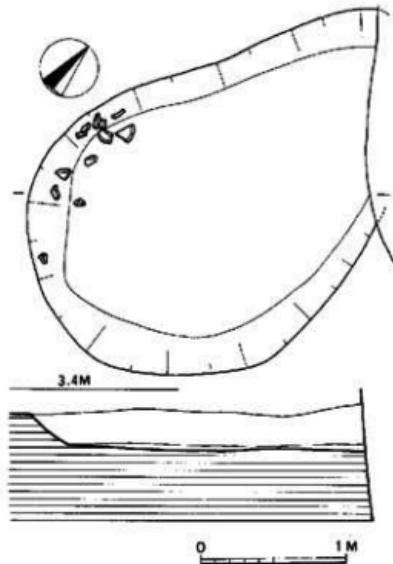
II面E-05・07区より検出された土壤である。不整形の土壤である。深さ20~30cmをはかる。

Fig.93、1は灰釉陶器の皿片である。体部内外面はヨコナデ調整される。復原口径14.5cmをはかる。小片であるが、内外面とも施釉される。

2は李朝青磁の皿である。口径11.6cm、高台径4.5cm、器高3.66cmをはかる。



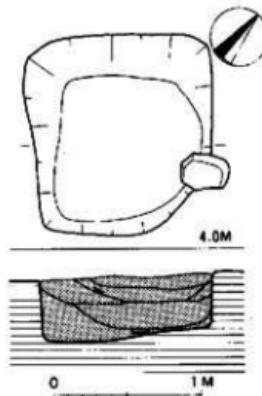
93 349号土壤出土遺物 (1 / 3)



94 349号土壤実測図 (1 / 40)

350号土壤

II面E-05区で検出した土壤である。一隅を欠いた方形を呈する。125cm×132cm、深さ35~41cmをはかる。



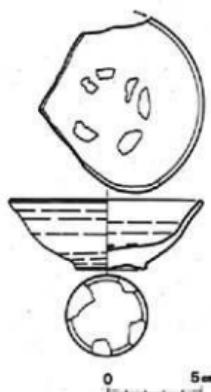
95 350号土壤実測図 (1 / 40)

Fig.96に示したのは、土師環である。体部は、底部から外反しつつひらく。体部内外ともヨコナデ調整、底部は回転糸切り技法で切りはなす。1は、口径11.8cm底径6.6cm器高2.4cm、2は、口径11.6cm底径6.45cm器高2.7cmをはかる。



96 350号土壤出土遺物 (1 / 3)

359号土壤



II面 F-04区で、36号配石遺構(列石)に切られて検出された土壤である。不整橢円形を呈し、長軸145cm、短軸115cm、深さ17cmをはかる。

図示したのは、李朝青磁の碗である。高台は低く、高台内側の削り込みは浅い。見込みと疊付きに目痕が残る。口径10.2cm、高台径3.9cm、器高3.65cmをはかる。

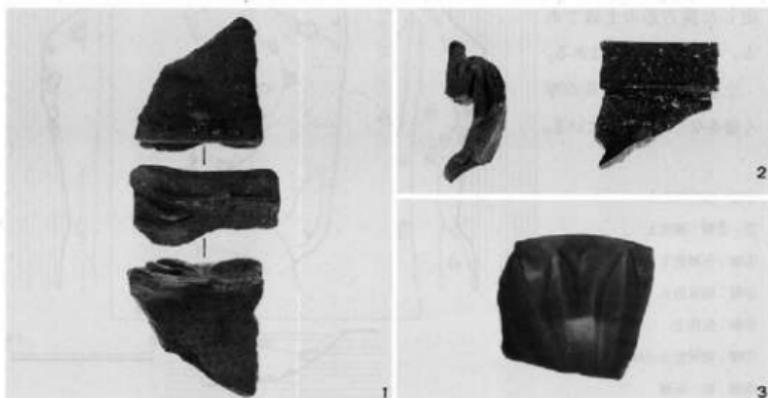


97 359号土壤出土遺物 (1/3)

362号土壤

II面 E-08区で検出した、小判型の平面を持つ小土壤である。長軸95cm、短軸60cm、深さ11~15cmをはかる。

Fig. 98, 1は、軒平瓦の瓦当である。いわゆる北方系瓦であり、中国東北地方で生産されたものである。2は、常滑焼の甕口縁である。頸部からN字状に粘土を折りまして、幅のある帯状の二重口縁をつくる。4は、青磁で、中国龍泉窯系の鏡蓮弁文碗の破片である。

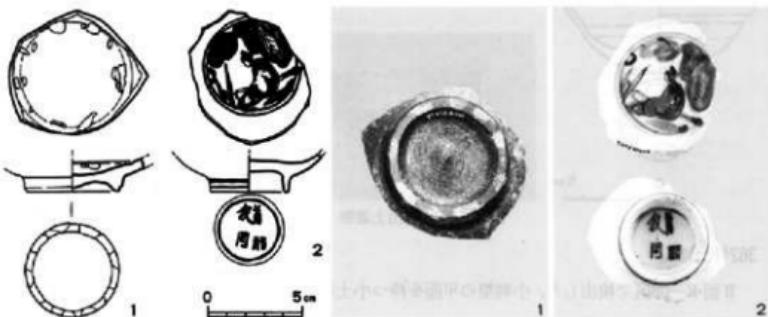


98 362号土壤出土遺物 (1/3)

409号土壤

III A面 E-10区より検出した、不整形の大型土壤である。大半は調査区域外となっており、土壤の性格はつかめなかった。

Fig. 99. 1は、李朝青磁である。見込みと高台壘付きに、重ね焼きの目痕がつく。壘付部を除いて、全面施釉されている。2は、明代染付の碗である。体部上半、口縁部の破片は、見出しえない。見込みには、書見する人物像が描かれている。



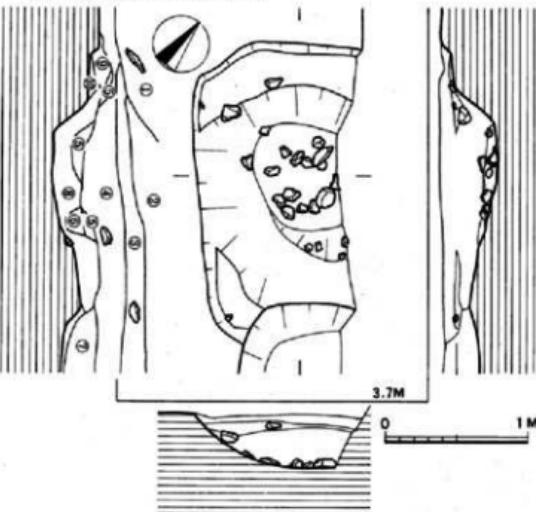
99 409号土壤出土遺物 (1 / 3)

446号土壤

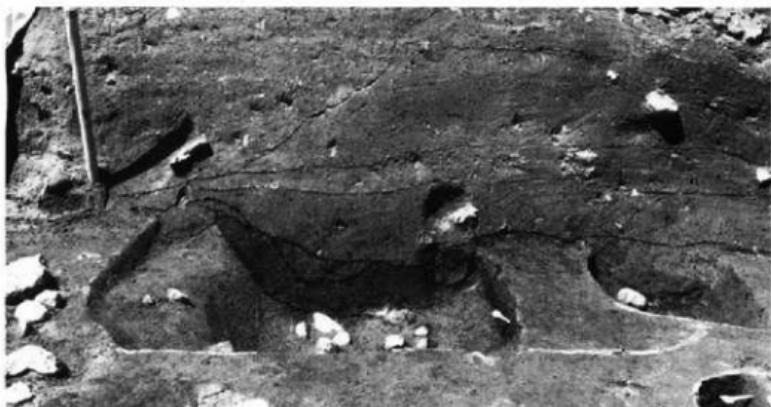
III A面 E-05・07区で検出した長方形の土壤である。一边200cm強をはかる。

土壤底には、炭・灰が厚く層をなして堆積している。

- ①層：暗茶褐色土
- ②・③層：褐色土
- ④層：灰褐色土
- ⑤層：暗灰色土
- ⑥層：灰色土
- ⑦層：暗褐色土 (445号土壤)
- ⑧層：炭・灰層
- ⑨層：暗灰色土。炭まじり
- ⑩層：褐色土



100 446号土壤実測図 (1 / 40)



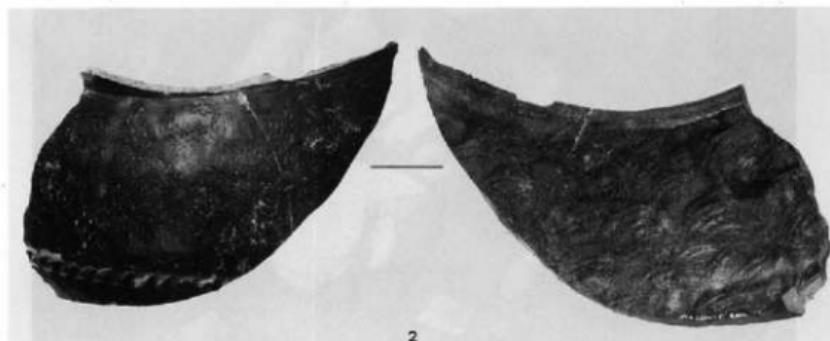
101 446号土壤（北東より）

この中には、土師器の土鍋片が多く含まれている。形態をうかがえるまでに復原できたものはないが、口縁片から見て、5個体は下らないと思われる。



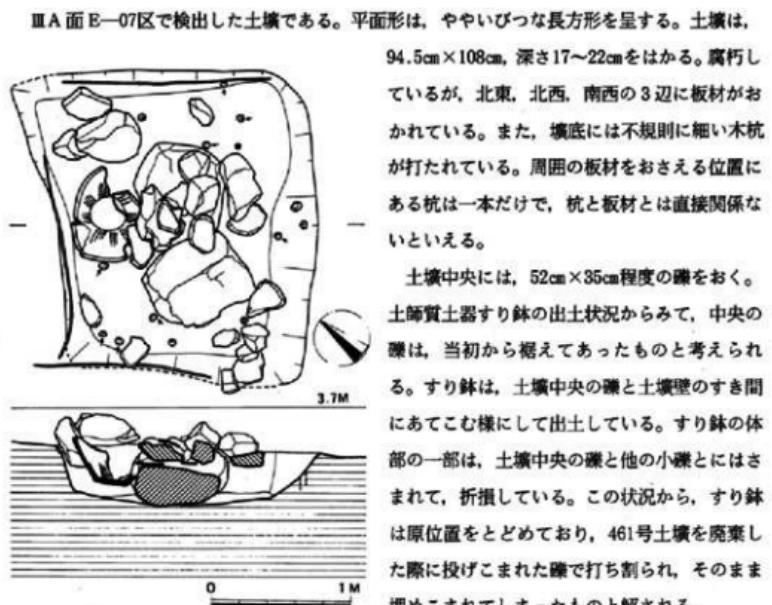
102 446号土壤遺物1 1は、青磁碗の底部片である。高台を欠く。外底部は露胎であり、墨書がみとめられる。「余元印」と判読できる。余は姓であろうか。おそらくは、博多に居を構えた宋商の名であろう。青磁碗の年代からみると、12世紀～13世紀頃の遺物と思われる。2は褐釉陶器の壺の体部片である。

外面上に茶褐色の釉がかかる。内面は露胎であるが、よく焼き締まる。外の陶器であろう。



103 446号土壤出土遺物2

461号土壙



104 461号土壙実測図 (1/20)

III A面 E-07区で検出した土壤である。平面形は、ややいびつな長方形を呈する。土壤は、 $94.5\text{cm} \times 108\text{cm}$ 、深さ17~22cmをはかる。腐朽しているが、北東、北西、南西の3辺に板材がおかれている。また、土壤には不規則に細い木杭が打たれている。周囲の板材をおさえる位置にある杭は一本だけで、杭と板材とは直接関係ないといえる。

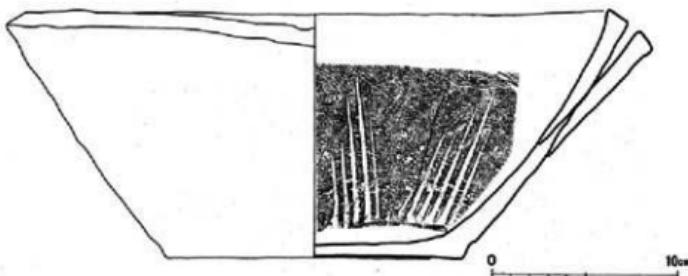
土壤中央には、 $52\text{cm} \times 35\text{cm}$ 程度の礫をおく。土師質土器すり鉢の出土状況からみて、中央の礫は、当初から据えてあったものと考えられる。すり鉢は、土壤中央の礫と土壤壁のすき間にあてこむ様にして出土している。すり鉢の体部の一部は、土壤中央の礫と他の小礫とにはさまれて、折損している。この状況から、すり鉢は原位置をとどめており、461号土壤を廃棄した際に投げこまれた礫で打ち割られ、そのまま埋めこまれてしまったものと解される。

Fig.106, 1 は、土師質土器のすり鉢である。

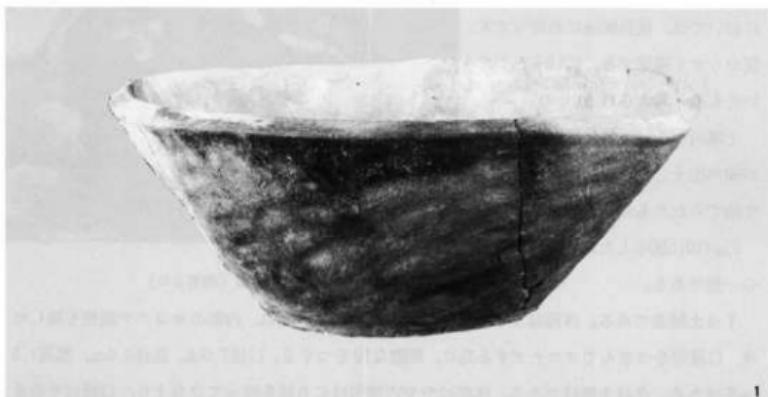


105 461号土壙 (南東より)

いわゆる片口のすり鉢で、口径33.15cm、底径15.6cm、器高12.9cmをかる。内面は、右下のナナメハケ調整の上に、スリ目が5本単位で刻まれている。実際に使用されたと考えられ。



106 461号土壤出土遺物1 (1 / 3)



107 461号土壤出土遺物2 (1 / 3)



108 461号土壤出土遺物3 (1 / 3)

磨耗している。外面は、あらいナデ調整で整形している。2は、明代の青磁碗である。体部外面には、劍頭文化した細蓮弁文を沈線で描く。灰白色の磁胎に、濃緑色の闊った釉がたっぷりとかかる。3は、備前陶器のすり鉢片である。口縁は片口につくる。口縁部は外方に傾斜し、端部がやや張った形状を示すが、口縁下端は下方向に垂れてはいない。備前焼編年(間壁編年)IV期の後半期にあたり、室町時代後半期の特徴を示している。

487号土壇

III B面E-09区より検出した土壇である。平面形としては、ほぼ長方形を呈する。長辺152cm、短辺112cm、深さ24~35cmをはかる。北西側の辺においては、延長66cmにわたって木質がうすく確認でき、板材をたててしたものと考えられる。

土壇内からは、特に規則性はないが礫が出土した。何個かがまとまって捨てられたものと思われる。

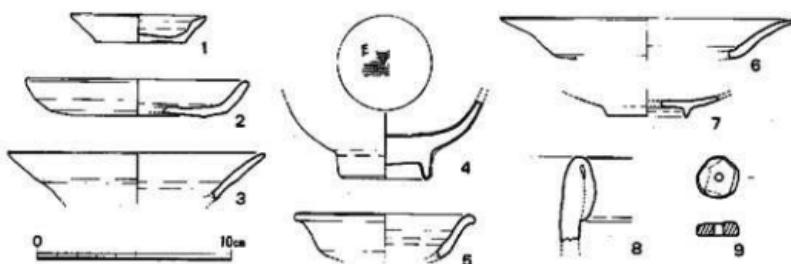
Fig110に図示したのは、出土遺物の一部である。



109 487号土壇(南東より)

1は土師皿である。体部はラッパ状に外反する。特に内面は、内部のヨコナデ調整壁を施した後、口縁部をつまんでヨコナデする為に、明瞭な段をつくる。口径7.0cm、底径4.6cm、器高1.5cmをはかる。2は土師壺である。体部はやや内湾気味に丸味を持って立ち上り、口縁はそのまま丸くおさめる。内外面ともにヨコナデ調整を施す。口径11.5cm、底径6.8cm、器高1.9cmをはかる。1・2の底部は、いずれも回転糸切り技法によって切り離される。3は須恵器である。壺の体部と考えられる。復原口径は13.2cmをはかる。4は、明代の青磁碗である。見込みに文字文様と思われるスタンプ文がみとめられる。高台内側は露胎であり、疊付から内面にかけては、濃緑色の釉がたっぷりとかかる。高台径4.8cmである。5は、綠褐釉陶器の皿である。口縁部はゆるく外反する。内外とも施釉される。復原口径は8.6cmをはかる。6・7は白磁皿である。6は口縁部で、体部は腰折れ状に立ちあがり、ラッパ状に外反してひらく。見込みには圓線がめぐる。口径15.2cm。7は、高台付近の破片である。全面に施釉されるが、疊付部は釉を削りとる。高台径4.0cmをはかる。8は備前陶器の壺口縁である。扁平に下方に垂れた玉縁を呈する。口縁部の断面には、明瞭に折り返しの痕跡がみとめられる。9は滑石製紡錘車である。径

1.1cm前後、厚さ0.7cmをはかる。

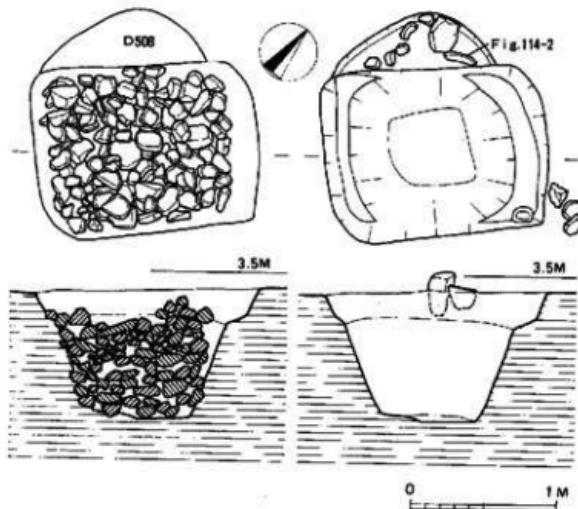


110 487号土壤出土遺物 (1 / 3)

504号土壤

III B面 F-03区より
検出した土壤である。
長辺145cm、短辺120cm
の平面長方形を呈す
る。ほりかたは二段掘
り状で、検出面から20
～22cmで112cm×100cm
のほぼ長方形に幅を狭
める。深さは、検出面
から約90cmをはかる。

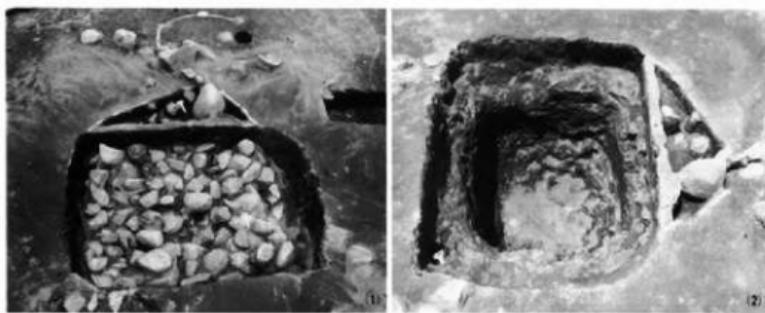
504号土壤は、二段
掘りの下段の土壤中に
びっしりと礫をつめら
れていた。礫は、整然
とではないが、土壤底



111 504号土壤実測図 (1 / 40)

部から間隔を全くはさまず、一時に落しこまれている。つめられている礫の大小は様々である。

土壤中からは、細片化した土師器、白磁などの遺物がまばらに出土しただけであり、時期判
断の根拠になるものは、出土していない。北西辺で、508号土壤と切り合い関係にあり、次に



112 504号土壤 (1)—南東より, (2)—北東より

のべる508号土壤よりも新しいとみられること、II面では検出されなかつことなどから、中世Ⅲ期であろうと推定した。

508号土壌

上述した様に、504号土壤に切られた状態で検出された土壤である。III B面 F-03区検出。ごく一部が残っているだけで、本来の形状は知るべくもない。深さは、12~14cmをはかる。

Fig.113に示した1は、墨書のある青磁碗である。底部から体部下半の破片で、口縁部を欠く。龍泉窯系青磁で、体部内面には、片切り彫と櫛目文で水波文を描く。高台置付きから高台内は、露胎となる。墨書はこの露胎部に書かれ「安永」と判読できる。2は、備前陶器のすり鉢である。内面に10本を単位としたスリ目を入れる。口縁部は、斜めに外方に傾斜した端部が、上下に張る備前焼間壁編年IV期の特徴をもつ。



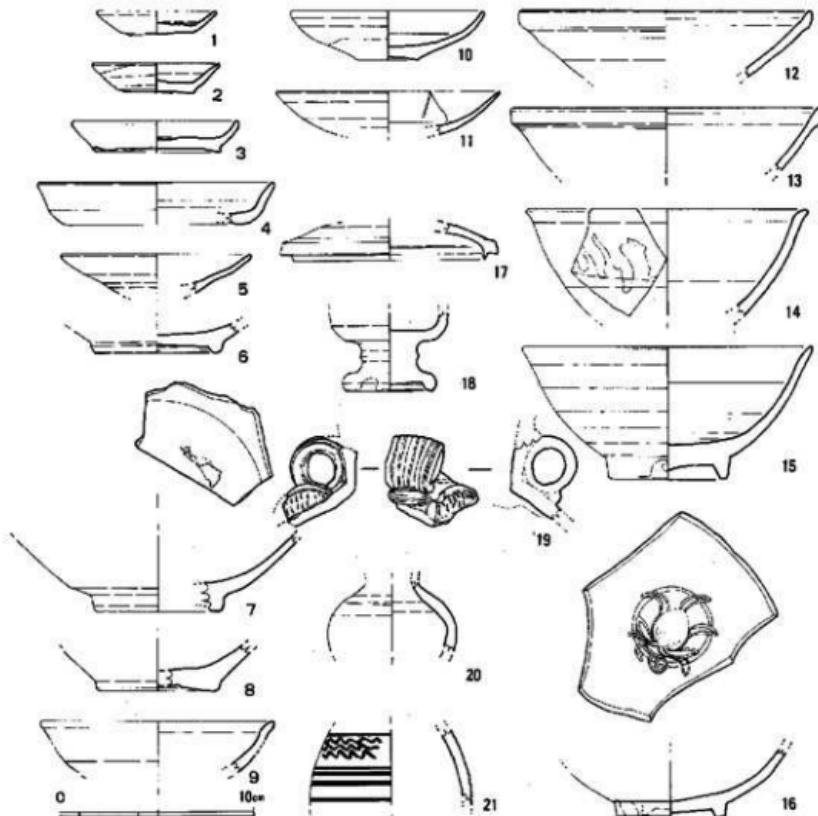
113 508号土壤出土遺物1 (1/3)



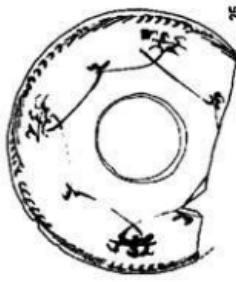
114 508号土壤出土遺物2 (1/3)

545号土塚

IV面 E-09区で検出された土塚である。明代の染付をはじめ、多量の遺物が出土している。1～5は土師皿・坏である。6は瓦器碗片で、内底部は平滑にヘラミガキする。7・8は、越州窯系青磁である。全面に施釉する。9は天目碗で、中国産である。10～19は白磁である。19は壺片で、頸部の付け根に粘土帯を丸めて貼付し、更に魚形の貼付文を斜めにつける。20は褐釉陶器小壺である。21は李朝象嵌青磁の壺片である。22～25は、明代染付の碗である。いずれも白磁部分は、黄白色で光沢に乏しく、青花もうすくすんだブルーを呈し鮮明ではない。26は黄褐釉陶器盤である。27・28は無釉の陶器鉢である。29は瓦質土器の湯釜で、鉢部上間に櫛齒状の文様が施される。30～32は備前陶器のすり鉢片である。30・31は、備前焼問壁編年



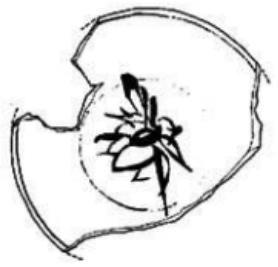
115 545号土塚出土物 1 (1 / 3)



10mm
0



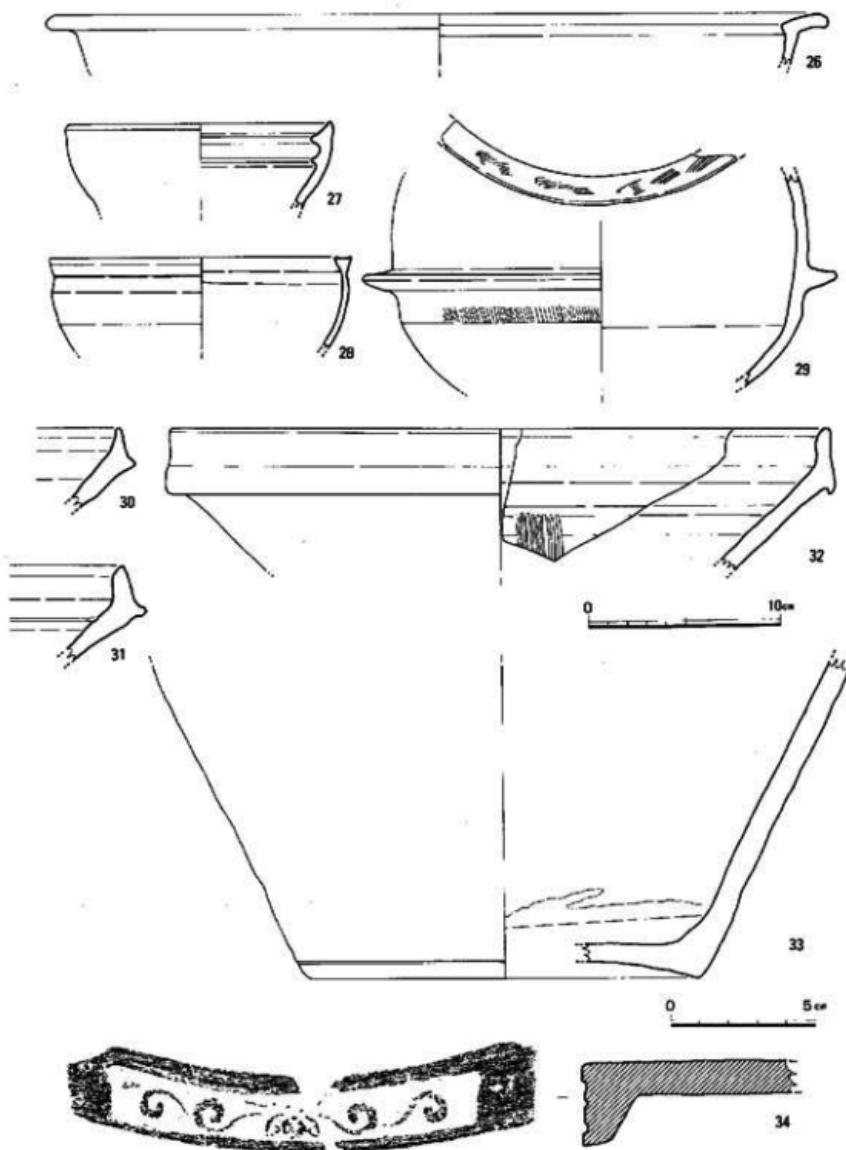
24



23



22



117 545号土壤出土遺物3 (1 / 3.33 … 1 / 4)

IV期。32はV期に属する。33は、輪軸陶器の底部である。体部上半以上を欠くが、おそらく壺の底部であろう。34は、平瓦の瓦当である。唐草文が印される。銀化はみとめられない。

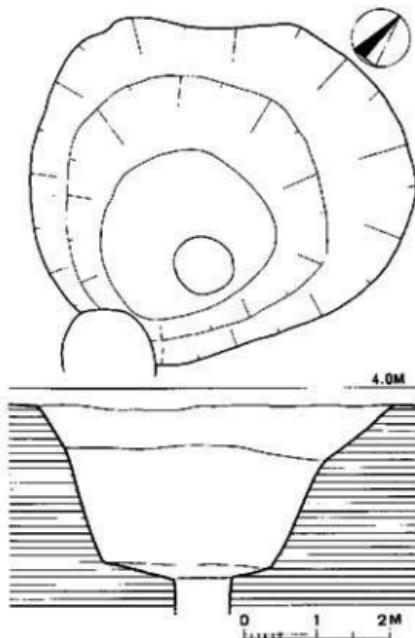
② 井戸

71号井戸

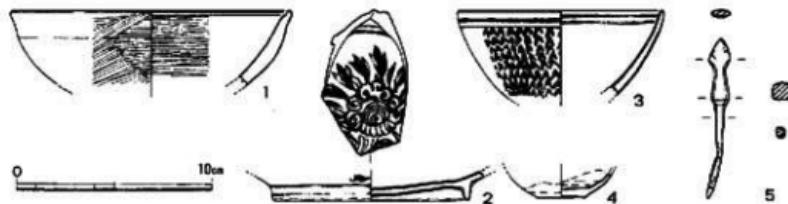
IV面E—09区で検出した井戸である。II面で検出した320号土壙と同一の遺構である。掘りかたは、長径260cm、短径235cmの不整円形を呈する。井筒は、径38cmをはかる円形で、木桶の木筒をとどめる。

1は楠葉型瓦器塊である。内外面は、密にヘラミガキを施す。口縁部内側には、沈線が一条めぐる。復原口径14.5cmをはかる。2・3・6は、明代の染付片である。

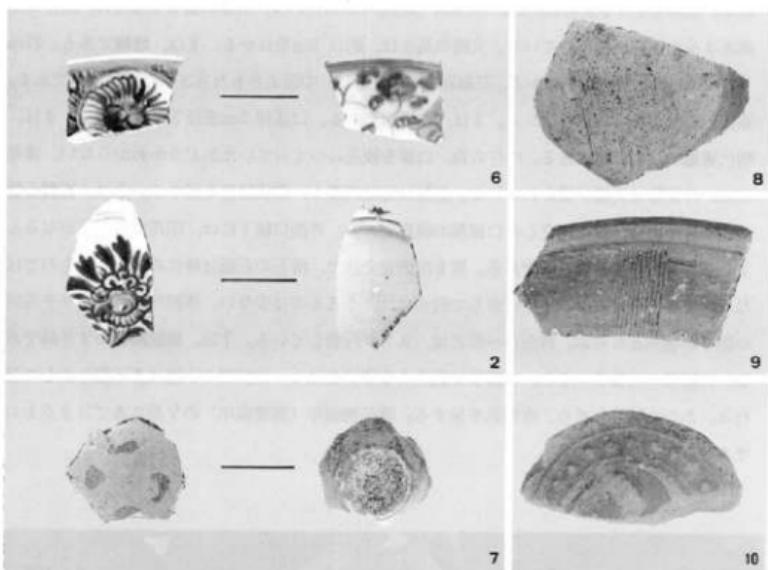
2は皿で高台径10cm、見込みには花を描く。疊付は釉をふきとり、露胎となる。3は、いわゆる連子碗である。破片の為、体部はもう少し外側に傾く可能性がある。復原口径10.6cmをはかる。4は白磁の小壺片である。5は、鉄鎌である。鍛造であり、鎌えは厚い。刃部は、レンズ状の断面を呈する。尖矢である。全長8.15cm、刃幅1.1cmをはかる。7は、李朝青磁の底部片である。見込みと高台疊付に日痕が残る。9は、備



118 71号井戸実測図 (1 / 40)



119 71号井戸出土遺物 1 (1 / 3)



120 71号井戸出土遺物 2

前陶器のすり鉢片である。口縁部は、衛前焼間壁縮年IV期の特徴を持つ。10は、軒丸瓦の瓦当片である。左三ツ巴で、巴の尾は接続しない。

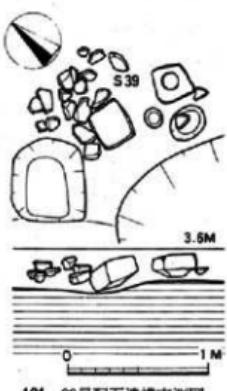
③ 配石造構

39号配石造構

III A面 E-07区より検出した配石造構である。III A面においては、列石状を呈する。III B面の調査時に、同一ヶ所で五輪塔の火輪と地輪を含む集石造構を検出し、これも39号配石造構とした。おそらく、本来は別の造構であると考えられるが、上の様な調査ミスから、出土遺物は混ってしまった。

Fig. 121に示した造構図は、III B面の集石造構の実測図である。集石の範囲は65cm×88cmにおよび、地輪と並んで火輪が、天地逆に転倒した状態で出土した。

Fig. 123の1は、火輪の実測図である。花崗岩を削って作っている。一辺の長さ26.4cmをはかる正方形で、上端部は12cm四方で

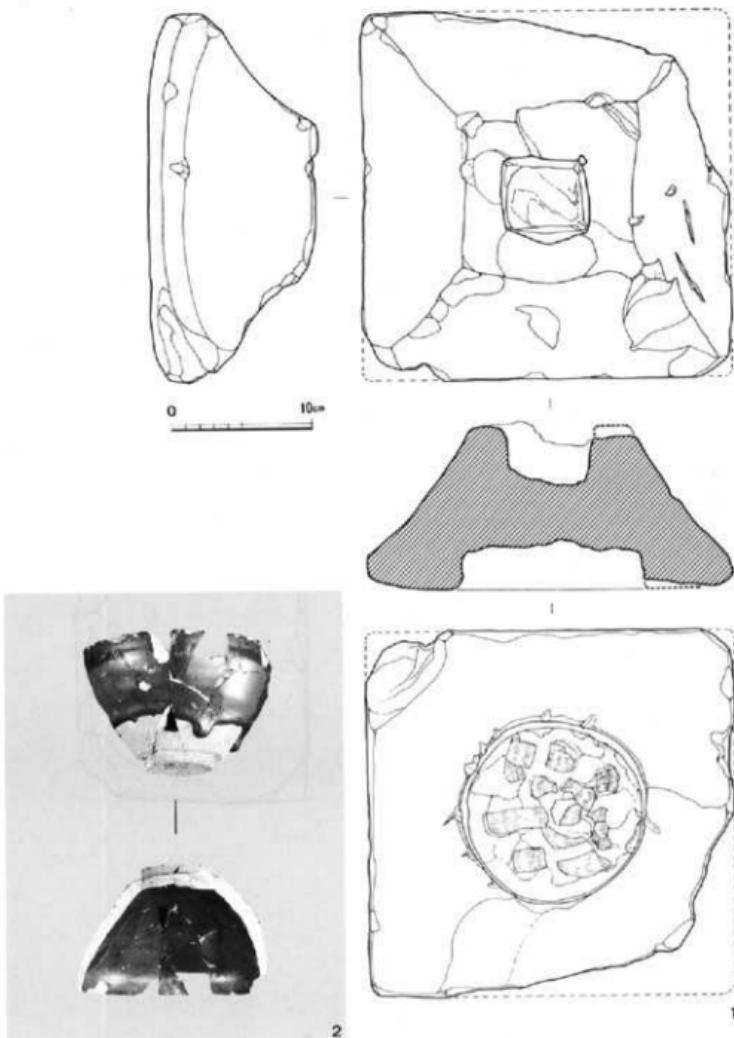


121 39号配石造構実測図

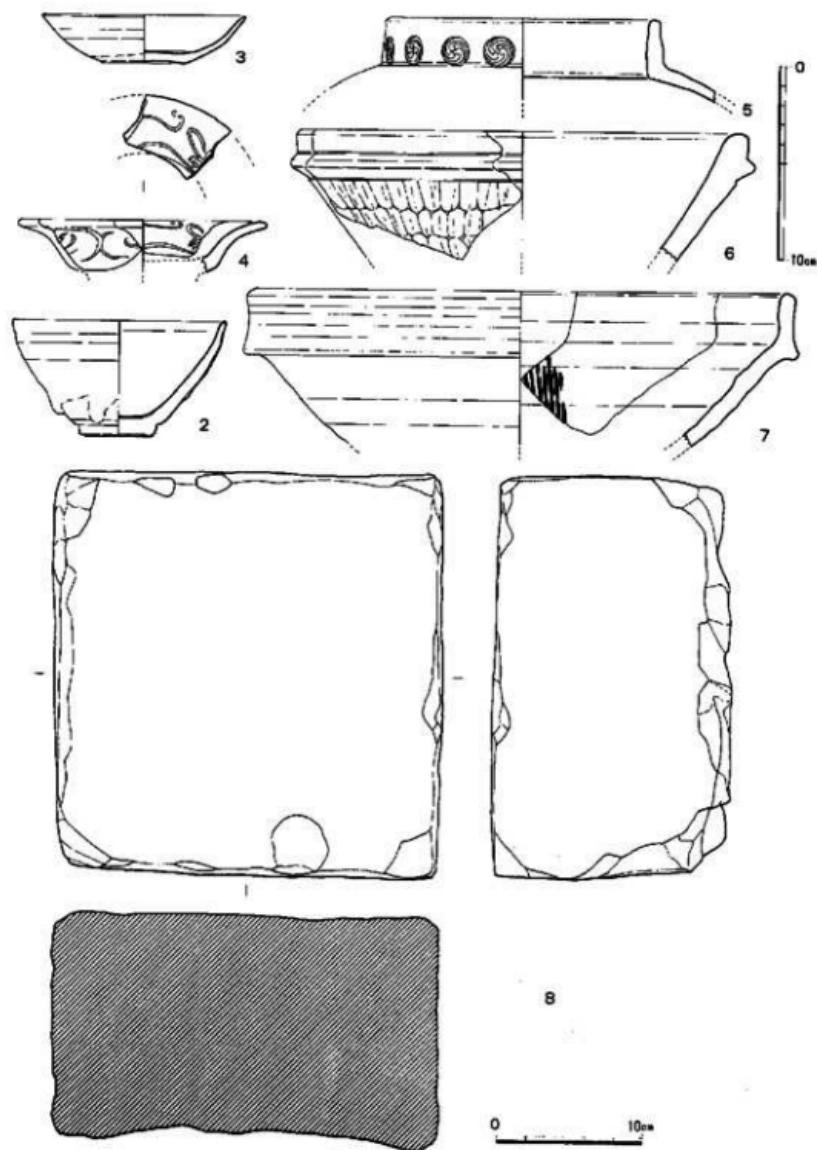
ある。風輪を受ける部分は5.2cm×5.4cm、深さ3.6cmの方形に、水輪に重なる部分は、直径13cm深さ3cmの円形に抉られている。火輪の高さは、約11.5cmをはかる。8は、地輪である。27cm×27.5cm、高さ約17cmをはかる。花崗岩である。2は、中国よりもたらされた天目茶碗である。茶褐色の袖がたっぷりとかかる。3は、白磁皿である。口径10.5cm底径5cmをはかる。4は、明代青磁の高台付皿である。小片の為、口縁を稜花につくっていたかどうかわからない。体部には、片切彫で文様が描かれている。施釉は比較的厚く、濃灰緑色を呈する。5は、瓦質土器の羽釜片である。短く直立した口縁部の破片である。外面口縁下には、印花で右三巴がならんでいる。6は、滑石製石鍋である。第2次調査全体で、滑石の石鍋は特にめずらしいものではなく、まま出土するが、小片ばかりで図示にたえうるものは少ない。体部外面には、タテ方向の削りが整然とならぶ。外面の一部には、スヌが付着している。7は、備前陶器のすり鉢である。口縁部の特徴をみると、口縁部は直立する帯状を呈し、口縁部の下端は若干張り出して垂れる。かたく焼きしまり、赤褐色を呈する。備前焼編年（間壁編年）のV期にあてはまるものである。



122 39号配石遺構（東より）



123 39号配石道桥出土遗物1 (1/4)

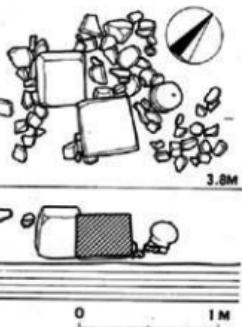


124 39号配石造構出土遺物2 (1/3, 8…1/4)

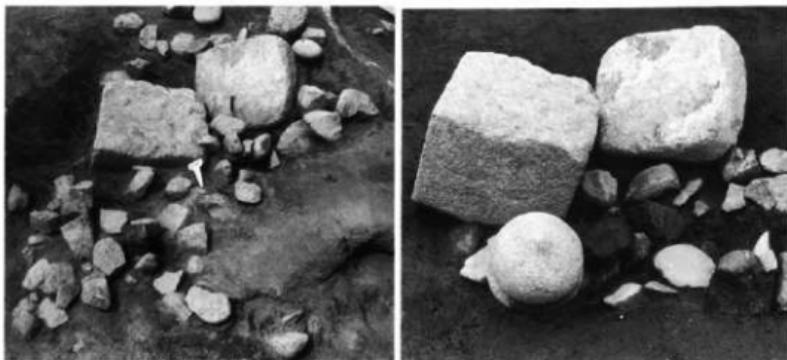
40号配石遺構

III A面 F-05区で検出した集石遺構であるが、集石の面的拡がりからみて、III B面にともなう遺構であると考えられる。石（特に五輪塔）の高さのため、より上の面であるIII A面調査時にその一部を検出したものであろう。

集石は、平面的には不整形を呈し、大まかな範囲としては120cm×120cmの中に集まっている。より仔細に見ると、集石の集中は、西側の56cm×56cmの範囲と、東側の48cm×56cmの2ヶ所にわかれれる様で、五輪塔の地輪が2基出土していることを考えあわせると、本来別個の2基の集石（五輪塔？）が並んでいた可能性もある。



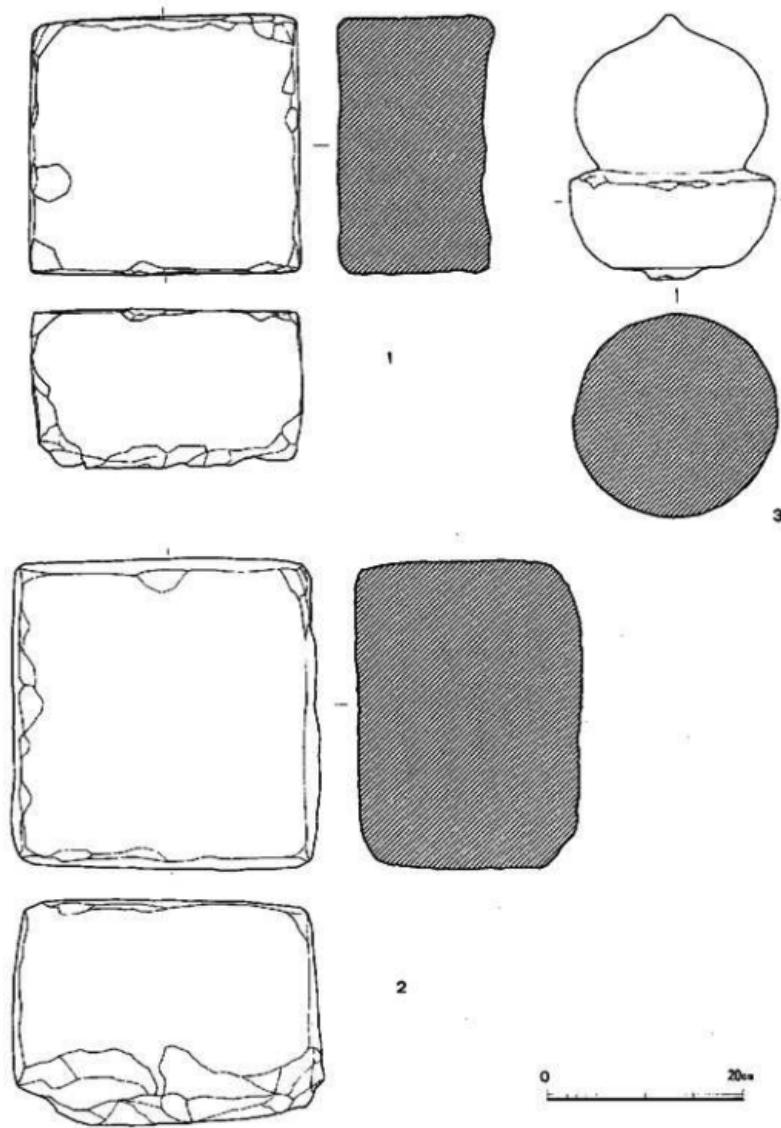
125 40号配石遺構実測図



126 40号配石遺構（北より）

集中石より出土した五輪塔は、地輪2個、空輪と風輪を一石で作ったもの1個の計3個である。いずれも、その基底面はほぼ同一レベルにあるが、地輪にともなうと思われる集石を検討すると、先後関係を想定することも可能である。（『第三章、小結』）

五輪塔は、Fig. 127に図示した。1・2は地輪、3は空一風輪である。いずれも、砂岩製である。1は、26.7cm×27.6cm、高さ16.2cm、2は、30.6cm×31.8cm、高さ23.1cmをはかる。いずれも、上面と周囲4面とを丁寧に平坦にととのえる。下面は削り出したままで、丸味をもっている。出土した際も、未整形面を下にしている。3は、空一風輪である。総高27.3cmをはかる。宝珠状の空輪と台盤状の風輪をひとつの石材から削り出したもので、空輪の高さ16.4cm、風輪の高さ9.8cmである。火輪に重なる部分は、径約6.5cm、高さ1.1cmの突起をなす。



127 40号配石造精出上造物 (1 / 6)

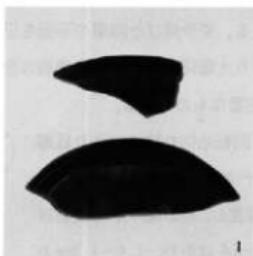
④柱穴状小土壤

柱穴状小土壤については、以下の記述に際して、ピットと仮称する。

339号ピット

II面 D-14区より検出したピットである。長径36cm、短径25cmの楕円形を呈し、深さ25cmをはかる。

図示した1は青磁である。明代のもので、小鉢になる。2は、明のものと思われる染付



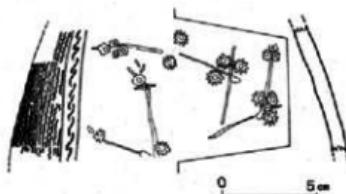
128 339号ピット出土遺物 (1/3)

である。おそらく香炉であろう。小片の為、意匠の内容まではわからない。3は白磁の注口である。小形の水注につくもので、注口の上面に獣頭を形取った貼付文を施す。胎土は白色で精良、釉は透明でガラス光沢が強い。

428号ピット

II面下-03区で検出したピットである。径56cm前後、深さ22cm前後をはかる。

図示したのは、李朝の象嵌青磁の壺である。小片であり全容を知りたいが、文様は波線文を継に配する文様部分と、草花文を配する文様部分とにわかれれる。胎土は濃灰色で、キメはやや粗いが、緻密である。釉は、暗灰青色を呈する。象嵌は、白土によってなされる。



129 428号ピット出土遺物 (1/3)

(4) 中世Ⅱ期の遺構

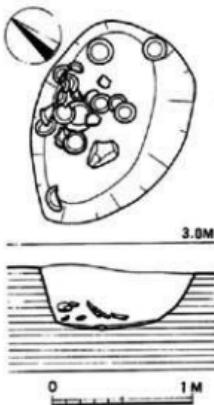
① 土壙

338号土壙

II面E-10区で検出した小土壙である。やや伸びた卵型の平面を呈し、長軸153cm、短軸108cm、深さ45cmをはかる。土壙埋土中より土師壺、皿を中心に遺物の出土をみた。

Fig.132に示したのは、それらの内主要なものである。

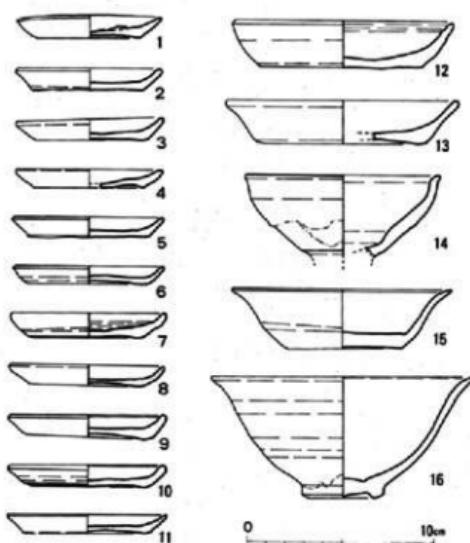
1~11は、土師皿である。いずれも回転糸切り技法により底部を切りはなす。体部及び内面は、ヨコナデ整形する。口径は7.6~8.5cmで、この範囲内でまんべんなく存在し、特に集中する数値はみとめられない。器高は0.95cm~1.35cmをはかり、1.1~1.3cmのものが大半である。器形の特徴としては、器高が比較的浅いことがあげられる。12・13は土師壺である。12は丸味を持って内滴する体部をもち、口径11.8cm、底径8.7cm、器高2.55cmをはかる。底部は回転糸切りであるが、板目圧痕がつく。13は外反して開く体部を持つ。口径12.5cm、底径8.2cm、器高2.35cmをはかる。底部は、回転糸切りである。12・13とも、体部外面および内面は、ヨコナデ調整によって整形される。



130 338号土壙実測図



131 338号土壙(南東より)



132 338号土壤出土遺物 (1 / 3)

14は、中国産の天目茶碗である。いわゆる、スッポン口を呈する。暗灰色の胎土に黒色の鉄軸をかける。釉には黄褐色～茶色の禾目がまじる。15は、口ハゲの白磁皿である。うすく青味をおびた透明釉がかかる。16は、口ハゲの白磁碗である。体部はゆるくカーブしつつ、大きく開く。高台以下は露胎となる。15・16は、338号土壤の床面を再確認する為にダメ押しで設けた小トレンチよりの出土で、338号土壤よりも年代的には遅る所産である。

411号土壤

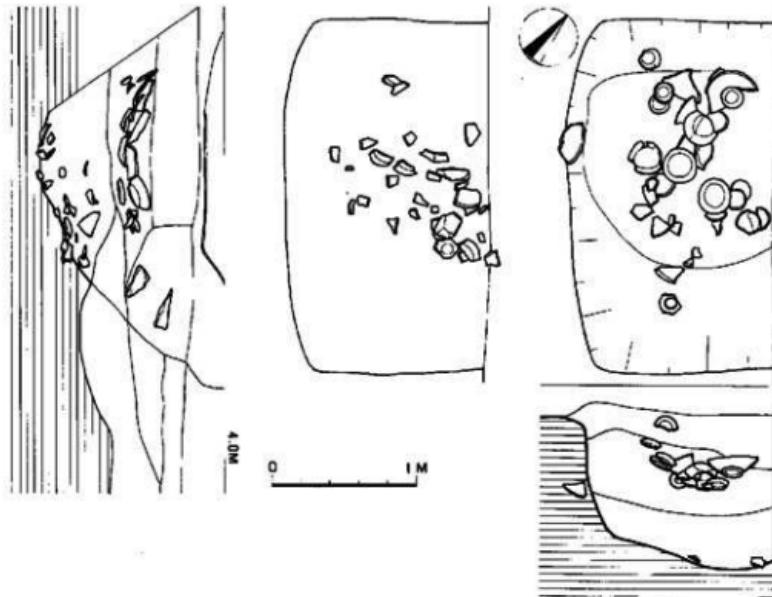
III A面 E-10区より検出した土器窓の土壤である。ちょうど調査区の角にあたり、一部は調査できていない。土壤の埋土は、Fig. 134に示した様に、大きく3層にわかれれるが、土質的には大差なく、ほぼ同時に埋ったものと考えられる。遺物は、主として中層より出土している。

Fig.135の1～27は
国産の遺物、28～34は
中国産の遺物である。

1～18は、土師皿である。口径7.35～9.0cm、
器高1.05～1.35cmを
かる。器形的には、丸
味をもって内湾気味の
体部をもつもの（1～
7, 11, 12）、直線的に
開く体部をもつもの

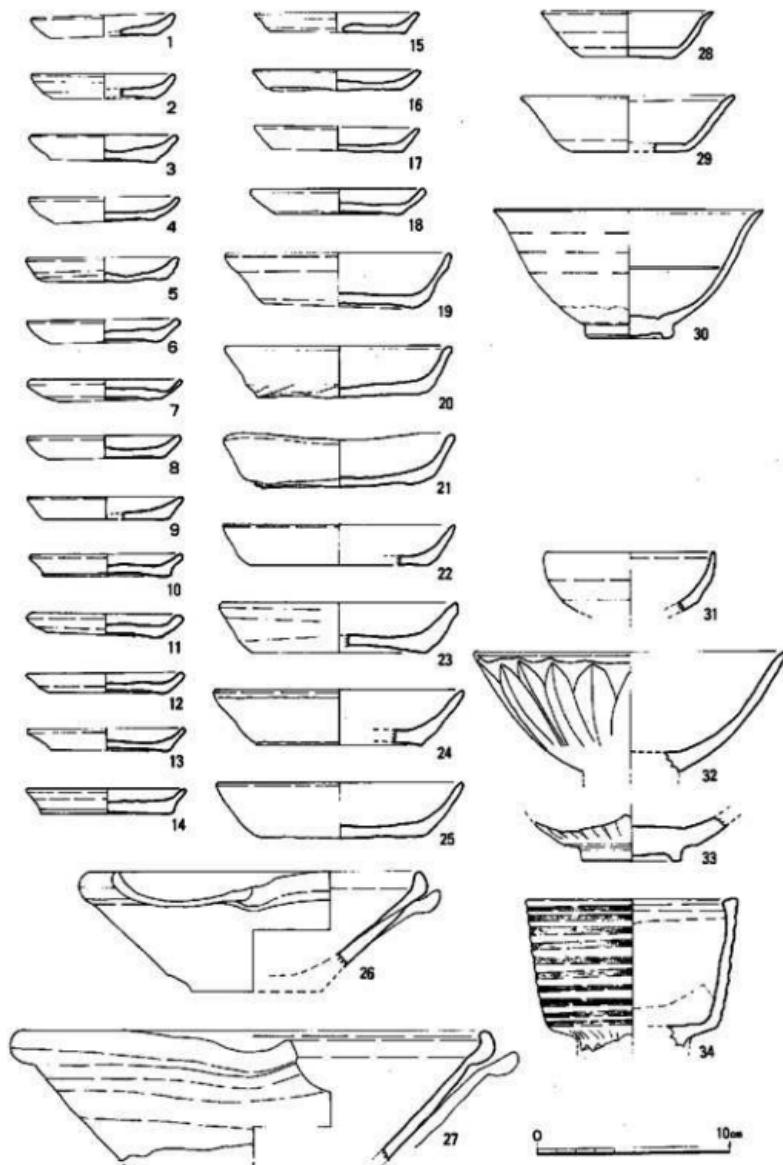


133 411号土壤 (南より)

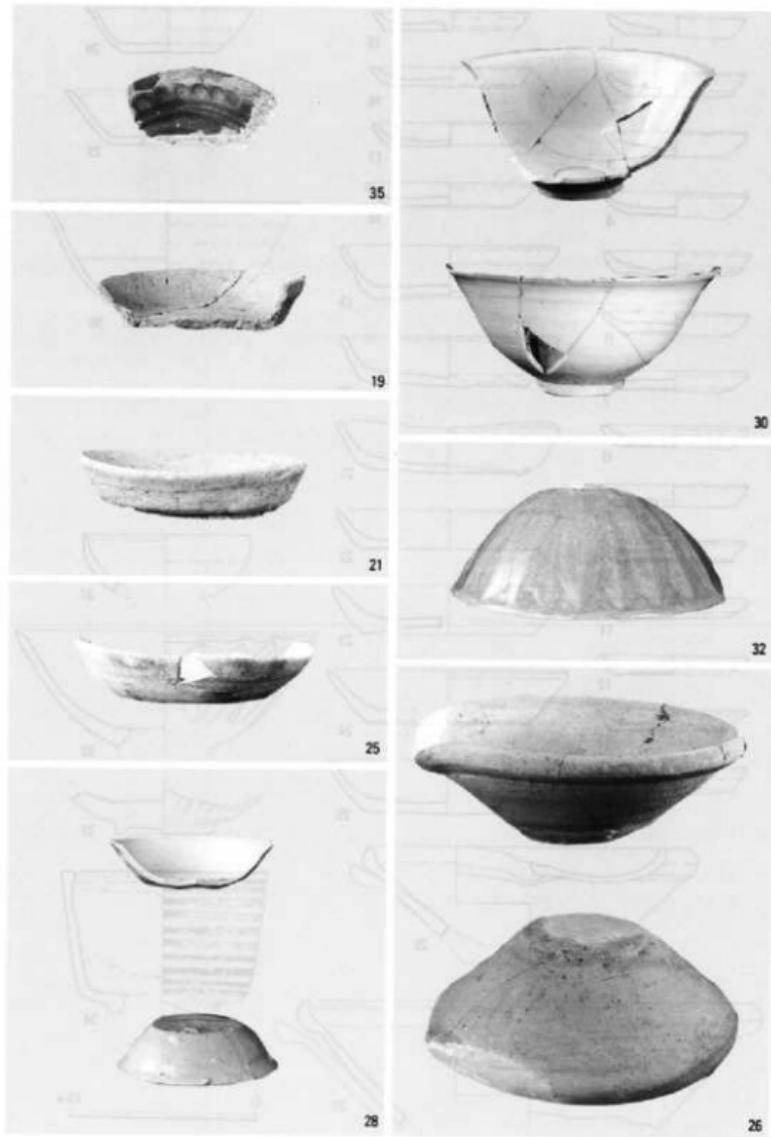


134 411号土壤実測図 (1 / 40)

(5・17) 外反気味の体部を持つもの (10・13・14・15) などがある。おおむね前者は口径が小さく、後二者が大きいと言える。19~25は、土師壺である。口径11.7cm~12.7cm、壺高2.1cm~2.85cmをはかる。皿、壺とも底部を回転糸切りする。26・27は、東播系須恵質土器の片口鉢である。灰色で、砂を含んで粗い胎土を持ち、焼成もあまり良くなく、瓦質に近い感を与える。口唇部は、外面に丸く肥厚する。魚住窯の産である。28・29は、口ハゲの白磁皿である。30は、口ハゲの白磁碗である。体部は、ゆるく内湾してからラッパ状に開く。体部中位には、圓線状の細沈線がめぐる。高台は露胎となる。31は、青磁の小碗である。口唇内面の軸は、口ハゲ状にかき取る。軸は濃深緑色の半透明軸である。復原口径8.7cmをはかる。32・33は、鎌蓮弁文の青磁碗である。32は口縁から体部の破片で、復原口径16.2cmをはかる。33は、底部片である。高台は低い削り出し高台で、疊付から内側は露胎となる。34は、青磁香炉である。体部は、わずかに開きながら直立する。体部外面には、ロクロ整形時に施された平行凹線が、ラセン状にみとめられる。高台の疊付は残っていないが、鼎状を呈していたと思われ、間を鋸歯状に削りこんでいる。釉色は、明るい空色である。



135 411号土坑出土遗物 (1 / 3)



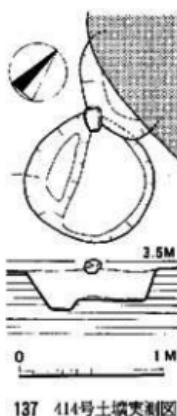
136 411号土填出土遗物 2

35は、軒丸瓦の瓦当である。小判であるが、おそらく左三ツ巴文であろう。外区の珠文は、密にうたれている。

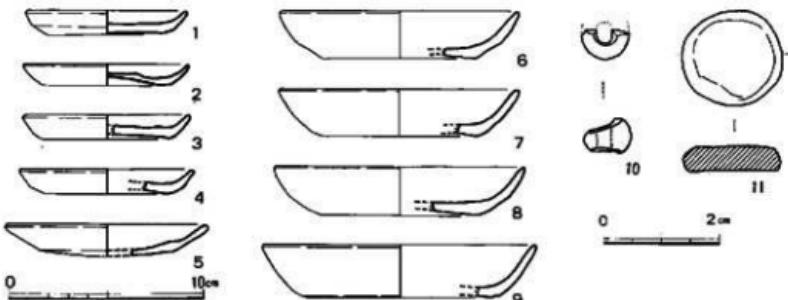
414号土壙

ⅢA面E-08区より検出された土壙である。径約88cm、深さ20~23cmの円形を呈する。土師皿・壺を中心に遺物の出土を見た。

1~5は、土師皿である。1~4は、底部を回転糸切りする。5は、底部をへら切りで切り離すもので、より下層の遺物が、414号土壙をうめた当時に混りこんだものであろう。1~4は、口径8.3~9.0cm器高1.2~1.35cmをはかる。体部、内面は、ヨコナデ調整を行なう。6~9は、土師壺である。口径12.3~14.3cm、器高2.55~2.8cmをはかる。10は、ガラス小玉である。緑青色を呈す。径0.8cm、高さ0.57cm。11は、ガラス内盤である。緑色で、表面は黒化する。径1.25cm。



137 414号土壙実測図
(1/40)



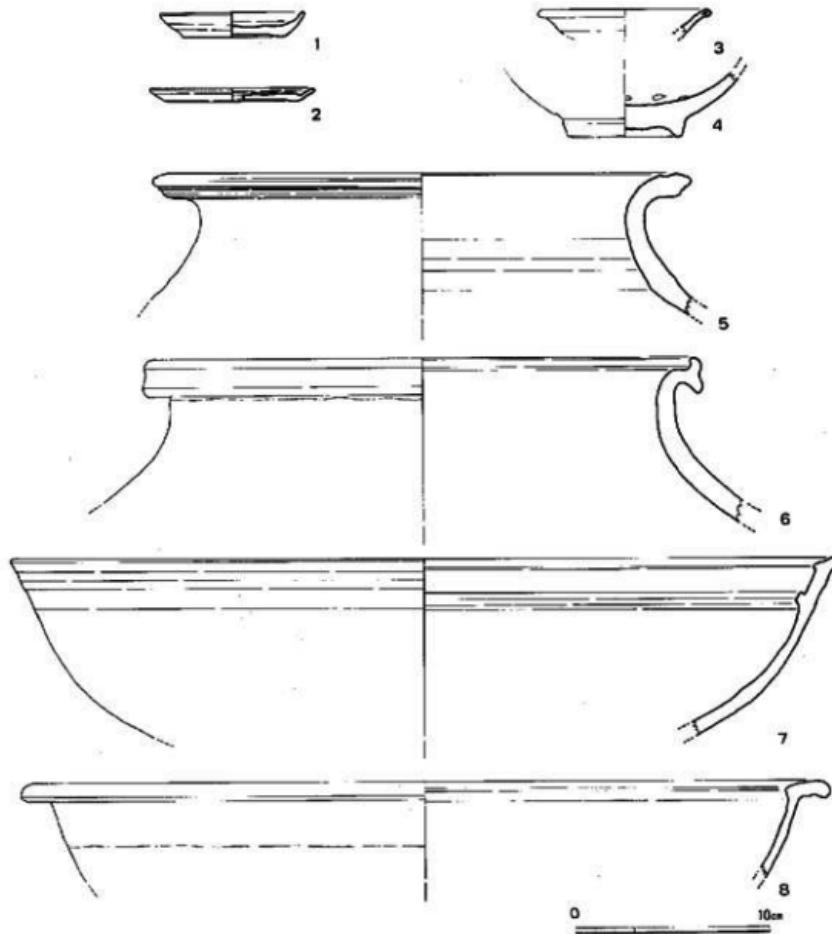
138 414号土壙出土遺物 (1/3, 10·11—1/1)

441号土壙

ⅢA面E-07区で検出した大型の土壙である。小判形を呈し、長軸280cm、短軸188cm、深さ35~45cmをはかる。

Fig.139の1・2は、土師皿である。いずれも、底部は回転糸切りする。体部はヨコナデ、内底部は一方のナデ調整を施す。1は口径7.3cm、底径5.25cm、器高1.3cmである。2の外底部には、板目圧痕が残る。口径8.5cm、底径6.5cm、器高0.75cmであり、極めて浅い。前代の遺物の混入と思われる。3は褐釉陶器の皿である。口縁部は折り返し、肥厚させる。4は、高麗青磁の碗底部である。内底部と高台疊付に、重ね焼きの目痕が残る。5は、須恵質陶器である。口唇部上面に一条の沈線が巡る。ヨコナデ調整される。暗灰色で、焼成は須恵器に近く、焼き

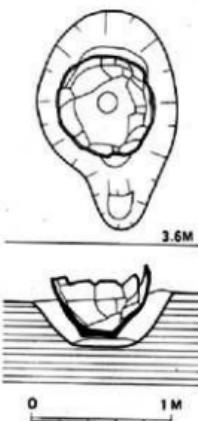
締めはなされない。6は焼き締め陶器である。常滑窯の製品か。口縁は折り返して、二重口縁につくる。口縁内側から外頸部まで、自然釉がかかる。7は無釉陶器の鉢である。赤褐色を呈し、胎土は粗いがかたく焼き締まる。8は、黄釉陶器の盤である。口縁部は、せまい錐状を呈する。体部上半から内面までを施釉する。くすんだ黄緑色の釉で、わずかに光沢を持つ。



139 441号土壙出土遺物 (1 / 3)

472号土壤

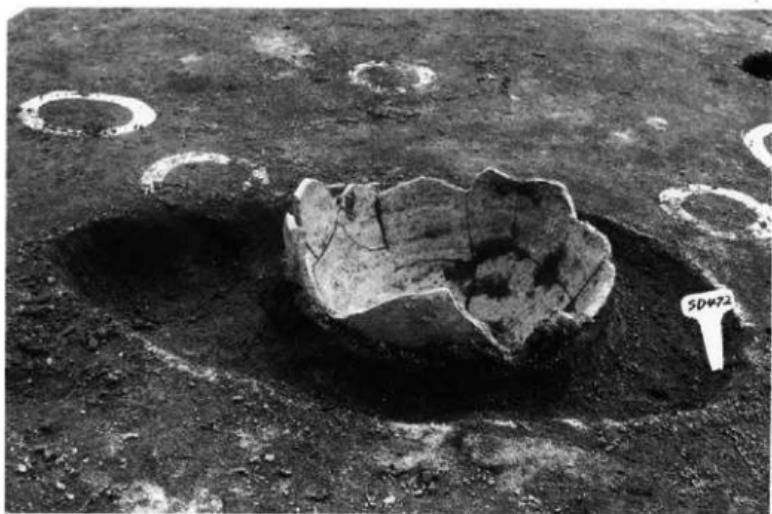
III B面 F-04区で検出した土壤である。土壤は、しゃもじ形を呈し、長軸79cm、短軸50cm、深さ約20cmである。



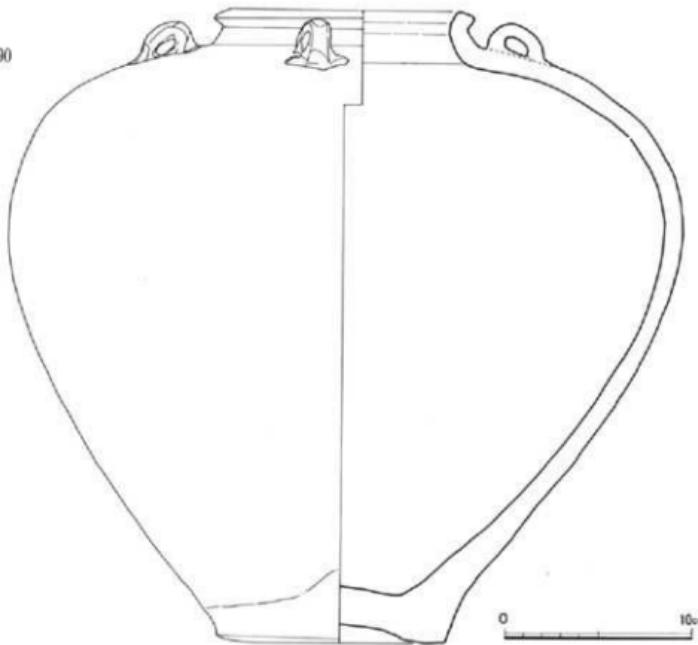
140 472号土壤実測図

土壤内には、褐釉四耳壺を立てて埋めこんでいた。四耳壺の胴体上半以上は、内底部に落ちこんだ形で検出された。おそらく、本来の土壤はもう少し深く、四耳壺の体部下半を埋めていたと思われる。

褐釉四耳壺は、ほぼ完成品に接合できた。上げ底の底部から、外反して立ち上り、ゆるく内湾しつつひろがり、急速にすぼまって頸部にいたる。頸部は、内傾して短く立ち上り、「く」の字状に折り返して口縁をつくる。耳は、この頸部の接合部付近にタテに貼付される。釉は濃茶褐色で、光沢が強い。口縁部内側から、胴部下位まで施釉されている。体部外面には、釉下に平行タタキ痕がうかがわれる。体部下位は、ナデ調整されている。胎土は、暗赤灰色を呈し粗い。口径12.1cm、底径12.3cm、器高33.7cm、胴部最大径36.2cmをはかる。



141 472号土壤（北東より）

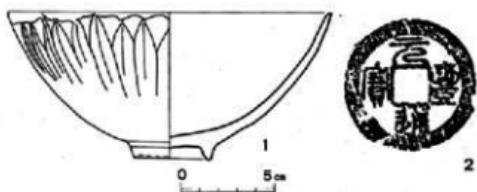


142 472号土壤出土遺物 (1 / 3)

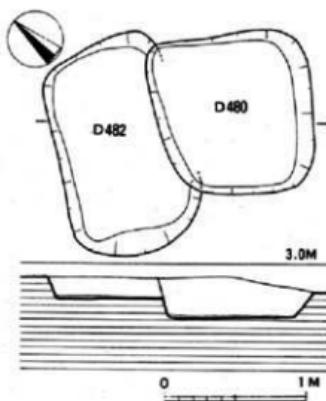
480号土壤

III B面 F-04区で検出した土壤である。ややいびつな方形を呈し、深さ22~30cmをはかる。482号土壤、486号土壤を切る。

1は、泉窯系青磁の鎮蓮弁文碗である。疊付を露胎とする他は、全面に施釉する。釉は灰緑色を呈す。

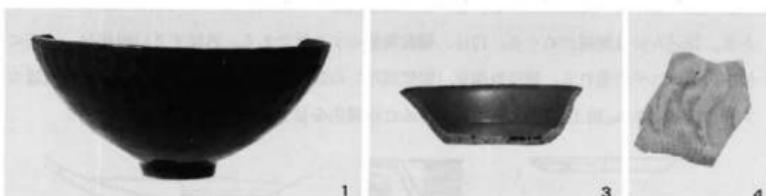


143 480号土壤出土遺物 (1 / 3, 1 / 1)



144 480号土壤実測図 (1 / 40)

2は、「元豊通寶」である。北宋の元豊元年(1078年)初鋤。3は、口ハゲの白磁皿である。4は、青白磁で、梅瓶の胴部片と思われる。

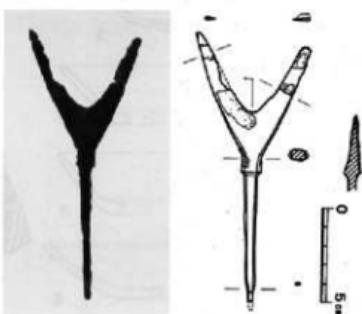


145 480号土壤出土遺物

486号土壤

III B面 F-04区で、480号土壤、482号土壤に切られて検出した、略円形大型の土壤である。半分程度は、調査区外に出るが、調査区内に200cm分を検出し、深さは13~20cmをはかる。

遺物は、土師皿、壺、口ハゲの白磁皿、青磁鎮蓮弁文碗。陶器類など多岐にわたるが、土壤床面より、鐵鏟を検出している。雁又矢で、茎部先端を欠く。鍛造である。現存長14.4cmをはかる。



146 486号土壤出土遺物 (1 / 3)

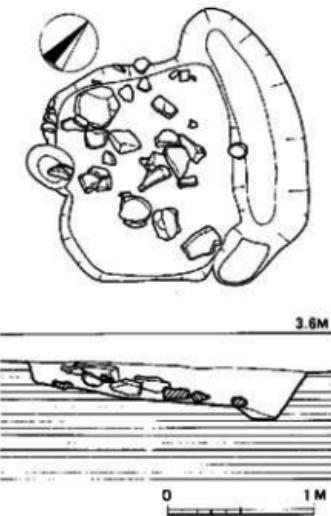
490号土壤

III B面 F-05区で検出した土壤である。148cm×128cm、深さ12~20cmの方形の部分と、その一辺にそった幅48cm、深さ21~30cmとなる。遺物及び埋土のはいり方から、単一の遺構と考えている。

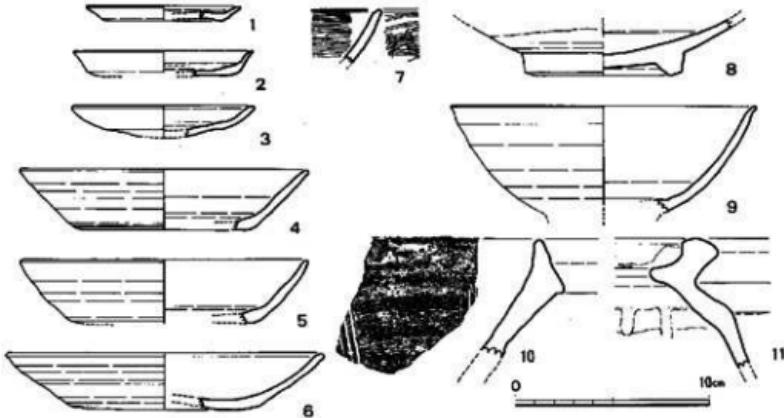
遺物は、土師皿・壺を主として、ほとんどが細片で出土し、土壤床面に置かれた疊をおおい隠していた。

遺物量が多いが、実測可能なものは少ない。1~3は土師皿である。口径7.95~9.45cm、器高0.62~1.5cmをはかる。4~6は土師壺である。4・5は、口径14.8cm、器高3.15cm(4)をはかる。体部はヨコナデ調整する。6は口径15.5cmで、口縁内面から体部外縁をヨコナデ、体部内面をコテで平滑に仕上げる。年代的には、4・5に先行するものであろう。7は、捕獲型瓦器碗の破片である。内外とも密にヘラミガキする。

口唇内面には、浅い沈線がめぐる。8~9は白磁碗である。見込みには圓線がめぐる。10は、備前陶器のすり鉢である。外傾する口縁部は、上方に伸び、下方にやや重れる。備前焼編年(間壁編年)のIV期前半にあてはまる。11は褐釉陶器の人寰口縁部である。胎土は粗い。釉色はくすんだ灰褐色を呈する。中国産である。



147 490号土壤実測図 (1 / 40)



148 490号土壤出土遺物 (1 / 3)



149 490号土壤（北東より）

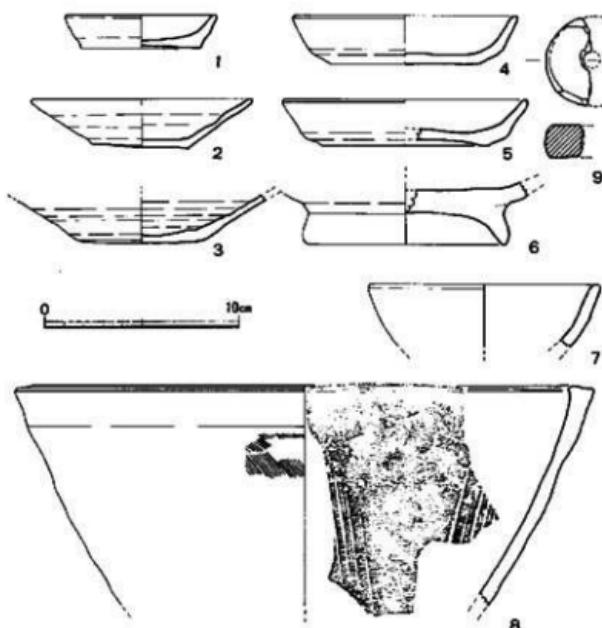


150 490号土壤（遺物取上、北より）

501号土壙

ⅢB面E-05区で検出した方形の土壙で、調査区外に出ている。

1・2は土師皿である。1は、口径7.8cm、底径6.1cm、器高1.75cmをはかる。2は口径11.4cm、底径5.0cm、器高3.5cmをはかる。3～5は土師壺である。2・3は、他地域からの搬入品と考えられる。器形的には、底部から直線的に大きく開く体部を持ち、器肉は全体に薄手である。



151 501号土壙出土遺物（1/3）

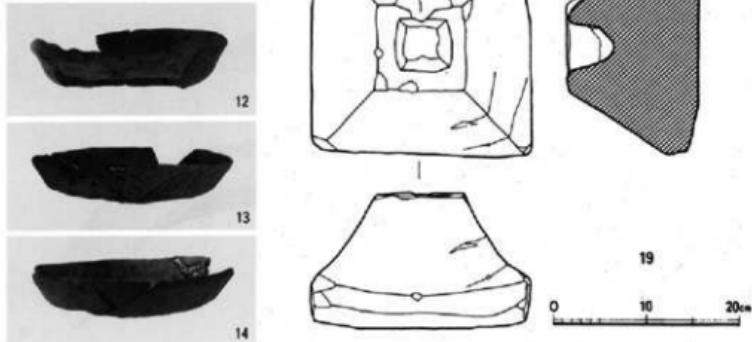
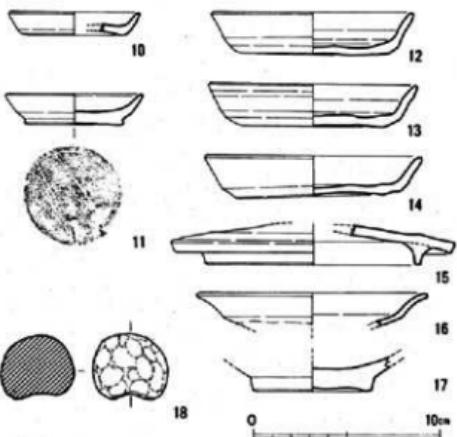
る。ヨコナデ調整痕は、かなり凹凸を持って明瞭に残る。胎土は、在地産の土師器・壺が微細なキンウンモを含むに対し、キンウンモを全く含まず精良で、色調も明るく、やや淡い。焼成は良好である。今のところ、どの地域の土師器にあたるのか検討中であるが、器形的には山口県の大内館跡で出土するものに類似している。4は、口径11.4cm、底径7.6cm、器高2.55cm、5は、口径12.6cm、底径8.6cm、器高2.35cmをはかる。土師皿・壺類は、いずれも底部を回転糸切りする。6は、土師器の高台付碗の底部である。高台は分厚い三日月高台で、高台内はヨコナデ調整でなだらかにしあげる。高台径約10cmである。胎土は砂粒を含み、精良とはいえない。7は、龍泉窯系の青磁小碗である。釉は深緑色を呈し、たっぷりとかけられる。復原口径11.9cmをはかる。8は、土師質土器のすり鉢である。小片の為確認できないが、おそらく片口であろう。口縁部の内外面はヨコナデ、体部内面はヨコハケの上にスリ日を入れる。体部外面は上位ではナナメハケをどめるが下半はナデ調整となる。復原口径19.8cm。9は土製の紡錘車である。復原径4.5cm前後、厚さ1.7cmをはかる。

IV面 F-05区で検出した大型の土壙を550号土壙としていたが、整理段階でこれが501号土壙の下部にあたることがわかった。そこで、501号土壙下層として出土遺物を図示する。

10~14は土舞器である。10・11は皿で、いずれも底部は回転糸切り技法で切り離す。体部の調整はヨコナデによってなされる。口径7.05~7.35cm、底径5.25cm、器高1.2~1.65cmをはかる。11の外底部には、細沈線による記号状の刻線がみられる。12~14は环である。すべて底部は回転糸切りする。体部・内面は、ヨコナデによって調整されている。口径10.9~11.7cm、底径7.5~8.0cm、器高2.3cmを

はかる。15は瓦質土器の蓋である。径15.2cmをはかる。

16・17は白磁である。16は皿、17は碗である。18は毬杖玉であろう。黄褐色の砂岩製の球で、径3.85~4.1cmである。19は、五輪塔の火輪である。一辺23.5cm前後、高さ14.1cmをはかる。砂岩製である。

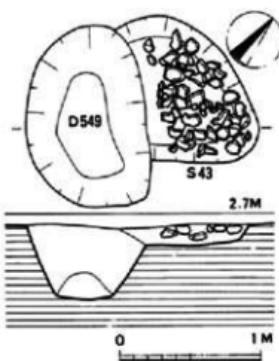


152 501号土壙下層出土遺物 (1 / 3)

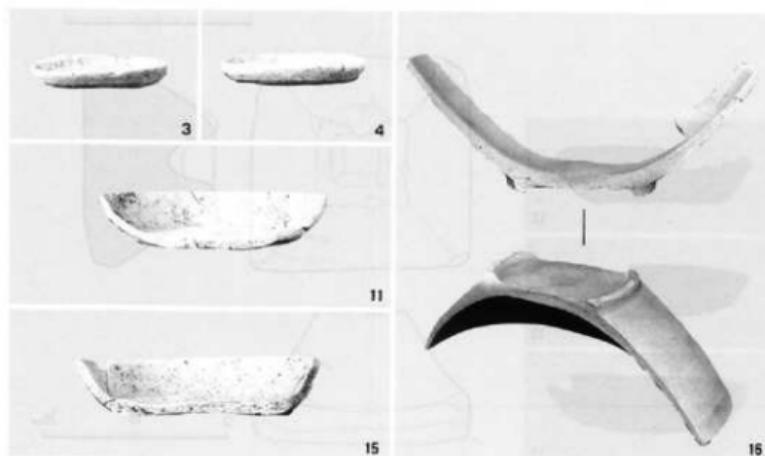
549号土壌

IV面 E-07区で検出した土壌である。長軸130cm、短軸86cm、深さ34~52cmをはかる。

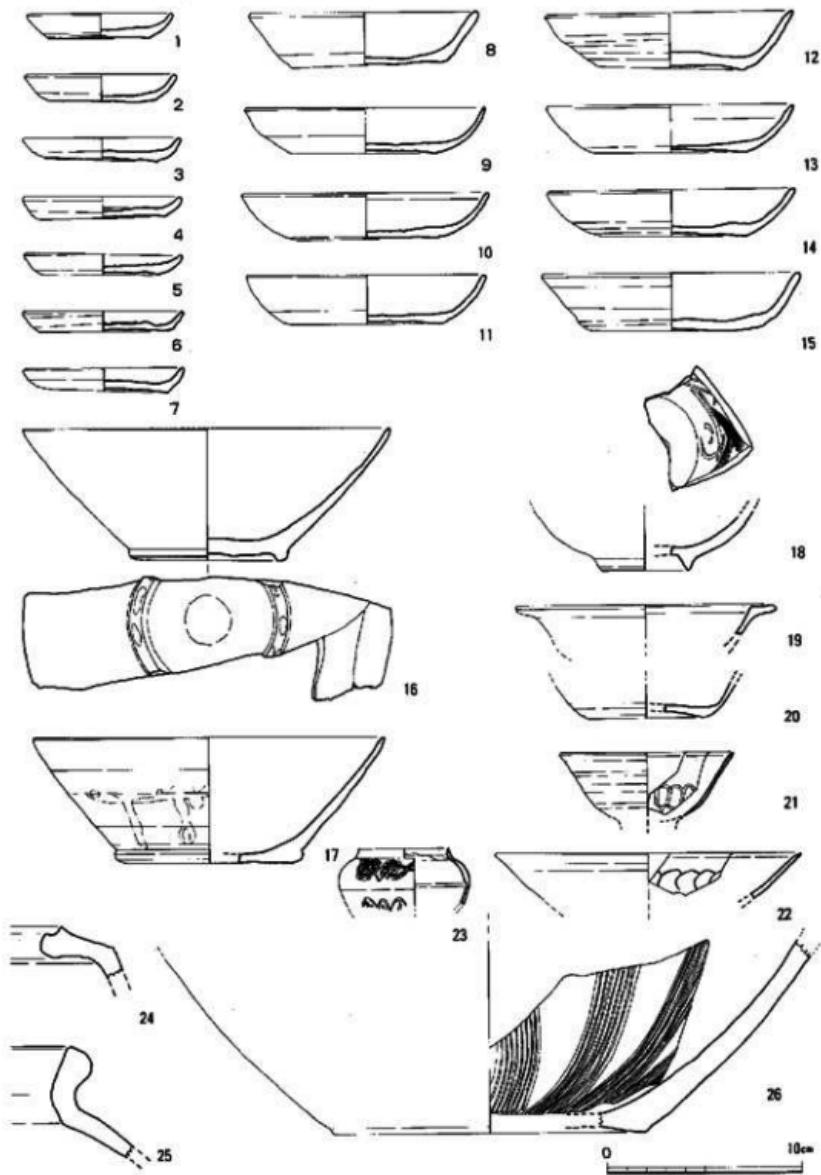
Fig. 155は、1~7は土師皿である。口径7.5~8.25cm、器高1.05~1.35cmである。8~15は土師壺である。口径11.9~13.4cm、器高2.4~1.0cmをはかる。土師皿・壺とも、体部は丸味をもって内湾する。全て回転糸切りである。16~17は、越州窯系青磁碗である。16は全面施釉で、見込みには目痕はない。胎土は淡褐色精良で、精製品といえる。17は、体部外縁の下半部は露胎となる。胎土は灰色でやや粗い。18~19は龍泉窯系青磁で、18は碗、19は鉢である。20~23は白磁である。21の小碗には、内体部下位に、スクンブで花弁が記される。22の碗は内面に沈線で弧文を描くが時期的には先行する遺物であろう。21~22は器壁がきわめて薄くひき出されており、口縁のつくりも鋭い。23は、小壺である。外面には、上半に花文、下半に芭蕉文のスタンプ文を施す。釉は、光沢が強く透明である。薄くむらなく施釉される。口唇上面から口縁部内面は露胎となる。胎土は白色で生目が細かい。24は、大壺の口縁部である。釉はくすんだ灰褐色で、粗い。25は褐釉陶器の壺である。26は、備前窯器のすり鉢である。内面に9本単位のスリ目が施される。



153 549号土壌実測図 (1/40)



154 549号土壌出土遺物



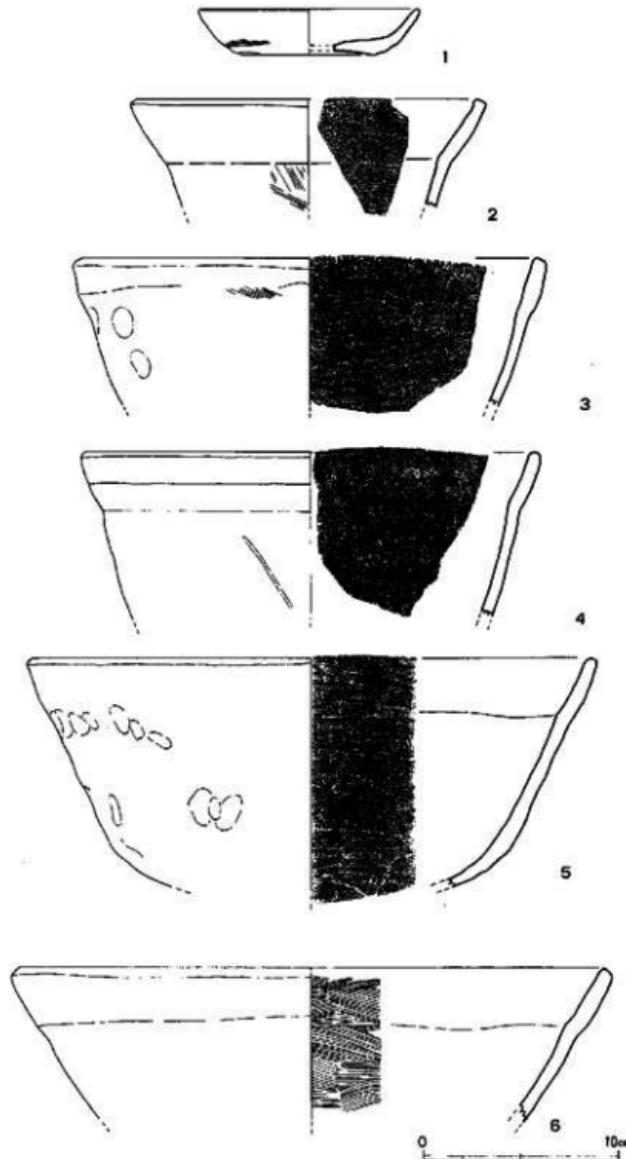
155 549号土墩出土遺物 2 (1 / 3)

568号土壤

IV面F-04区で検出した不整形の土壤である。

出土した遺物は、上師皿・坏類をはじめ白磁・青磁など多岐にわたるが、特筆すべきは、土鍋が数個体分出土した点である。

1は土師皿である。口径11.4cm、底径7.0cm、器高2.46cmをはかる。2~6は土鍋である。いずれも口縁部内面は段(稜)をなして屈曲する。口縁部が肥厚するもの(3・6)と、厚さがかわらないものの(2・4・5)がある。口径はそれぞれ2~17.4cm、3~23.2cm、4~23.1cm、5~28.3cm、6~29.8cmをはかる。内面はヨコハケ調整、外面は指頭押圧とタテハケ(ナナメハケ)により整形されている。



156 568号土壤出土遺物 (1 / 3)

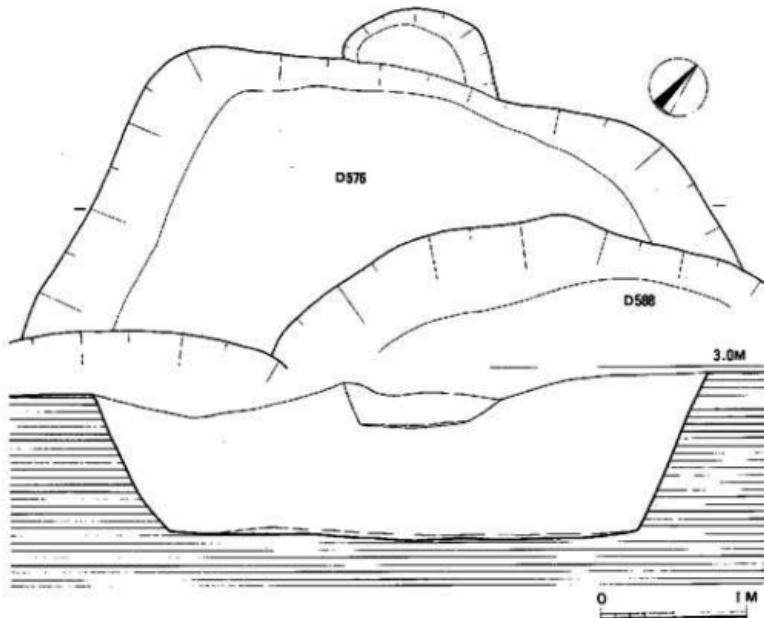
576号土壙

V面D-14区で検出した。大型の土壙である。切り合い関係のため、一部しか残っていないかった。深さ90~120cmをはかる。

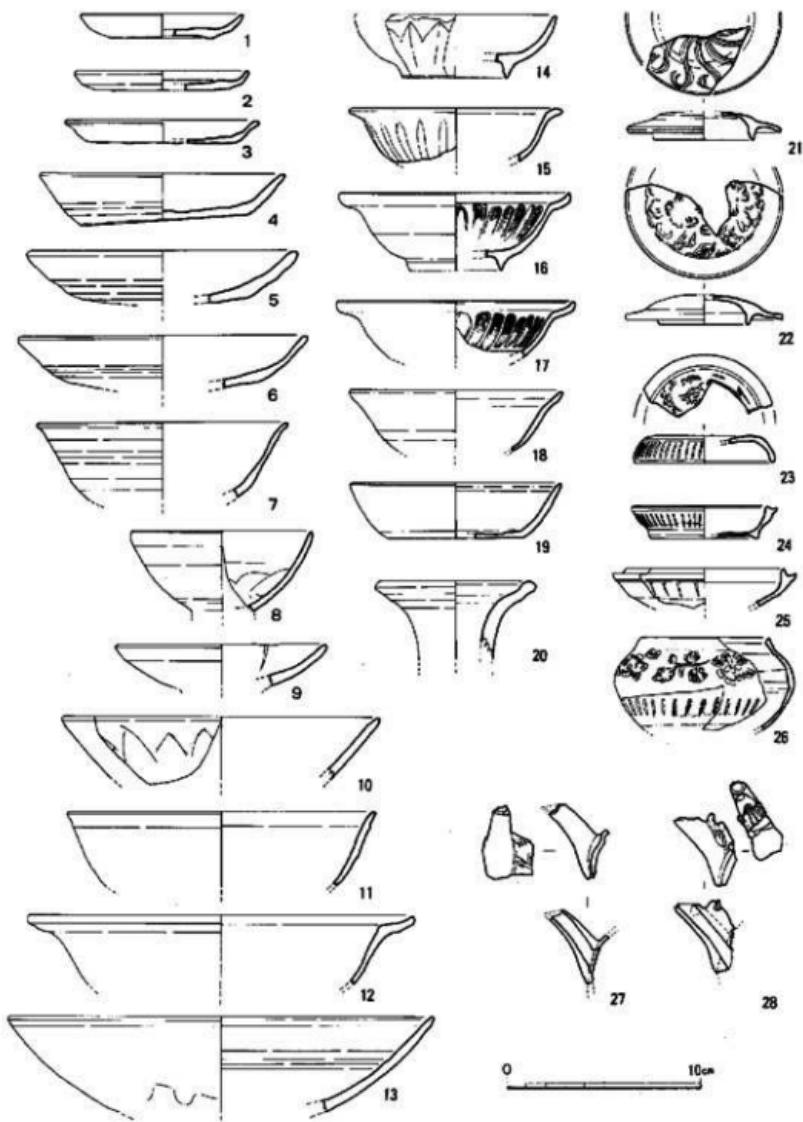
多数の遺物が出土したが、その一部をFig. 158に示した。

1~3は土師皿である。底部は回転糸切りである。口径8.25~10.0cm、器高1.05~1.26cm。4~6は土師杯である。4は底部を回転糸切りするが、5・6はヘラ切りである。調整も、4は内面をヨコナデするのに対し、5・6はコテで平滑に削っている。5・6が年代的に先行するとみられる。4は口径12.6cm、器高2.5cmである。7は土師器の輪形土器である。ヨコナデ整形される。5・6同様に、時期的に先行する遺物が混っていたと思われる。

9~17は、青磁である。10は鎌蓮弁文の碗、14は、鎌蓮弁文の皿である。15の鉢も蓮弁を陽刻するが、丸味がつよく鎌は通らない。16・17は、内面に菊弁を陰刻する。15~17は、口縁を外方に折り返す鉢であるが、16・17は口縁端部が上方へはね上がるという特徴をもつ。8・18~21・26は白磁、22~25・27・28は青白磁である。8は小碗、見込みに沈線で輪花文がある。18・19はいわゆる口ハゲである。18は、体部から口縁にかけて、若干外方に折れる。

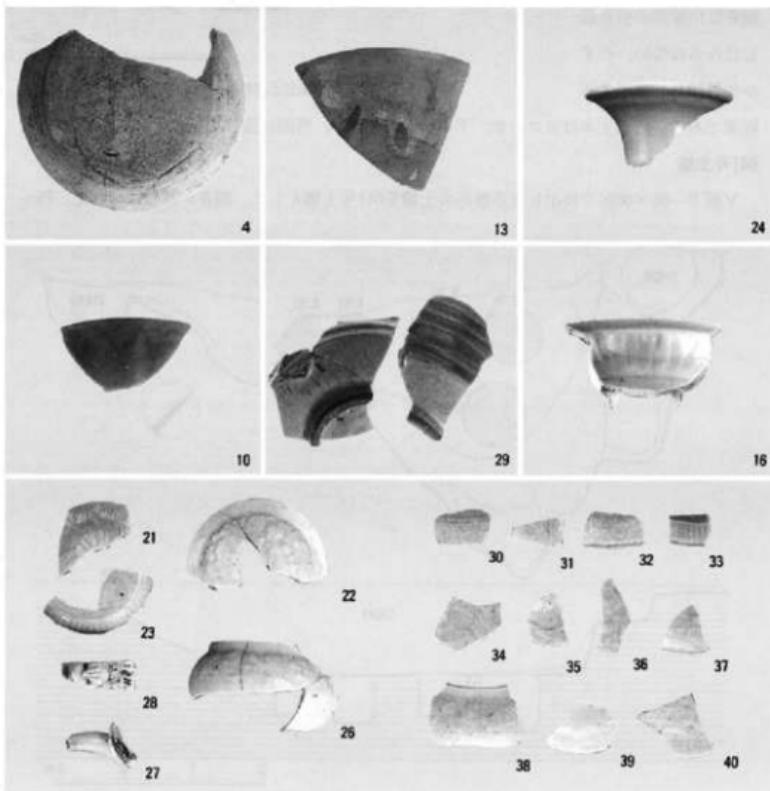


157 576号土壙実測図 (1 / 40)



158 576号土壤出土遺物 1 (1 / 3)

20は壺の口縁である。口径8.1cmをはかる。21・22は小壺の蓋である。21は、蜻足状の文様をスタンプで陽刻する。22は花文をスタンプする。鈕状部分まで施釉され、内面は露胎となる。23は合子の蓋、24・25は合子の身である。23の上面には、鳳凰文のスタンプが印されている。口唇外面の縁は、施釉後に削りとられている。24・25は、合子の蓋受け部分のみ露胎となる。26は小壺である。体部上半には花文がスタンプされ、下半部には継の刻線がならぶ、口唇上面から口縁内側まで露胎となる。ただし、内面の釉は垂れ落ちたものであろう。27・28は、小型水注の注口部である。いずれも、これにつづく体部は出土していない。27の注口の付け根部分両側には、印花文と思われる陽刻がみとめられる。28の注口は、上面に獸面を貼り付ける。獸面は粘土片を貼り付けたもので、型押しではない。突出した眼球の先は、鉄斑で褐色に彩色する。

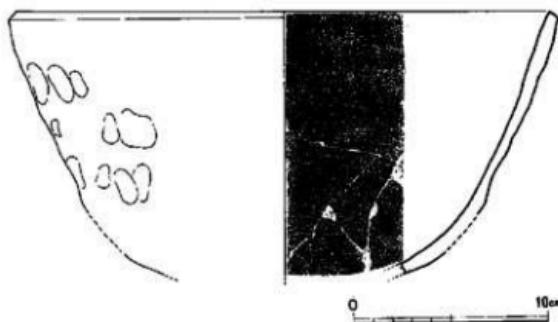


159 576号土壤出土遺物

586号土壤

V面D-14区で検出した小土壤である。585号土壤に切られ、約半分程度しか残っていない。検出した部分で、土壟幅52cm、深さ28~34cmをはかる。

Fig. 160に示したのは、土壙である。口縁部内面には、わずかに稜がみとめられるが、顕著な口縁部の折り返しはみられない。わずかに外傾し、肥厚する

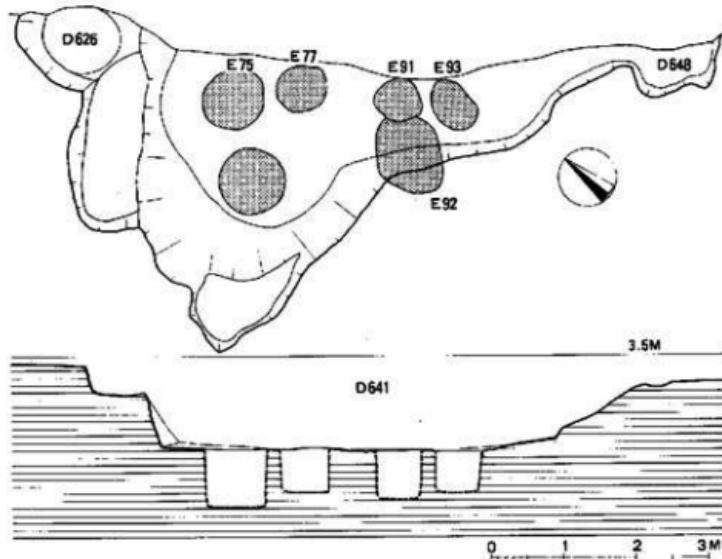


160 586号土壤出土遺物 (1/3)

程度である。内面上半はヨコハケ、下半はナナメハケ、外面は指頭押圧とナデで整形される。

641号土壤

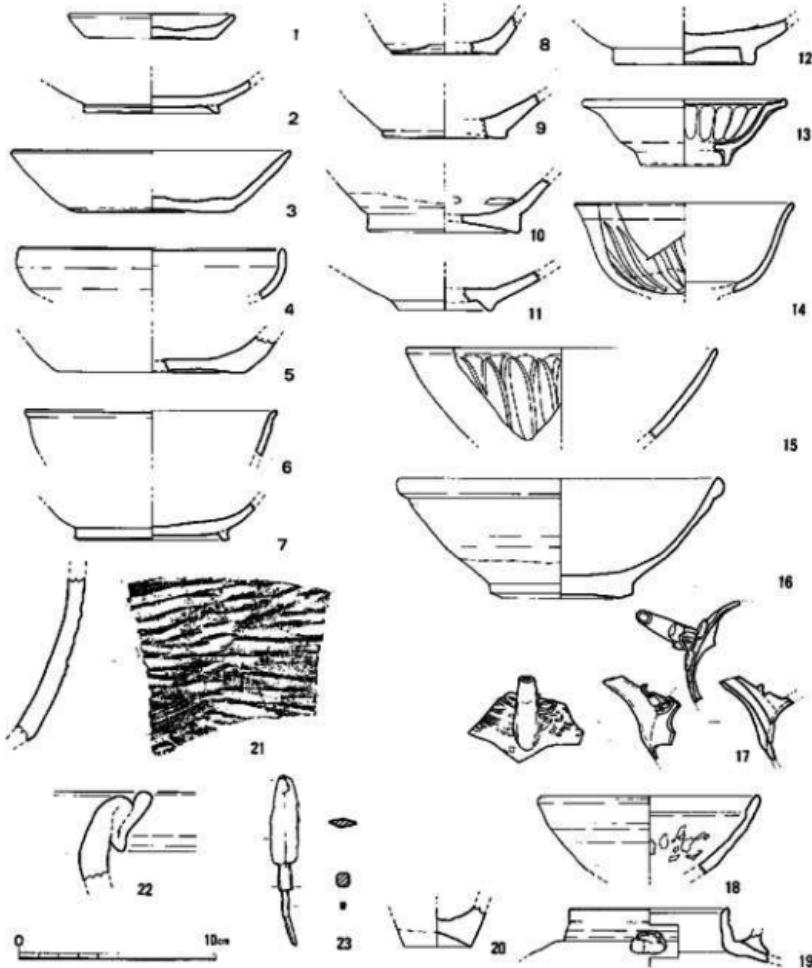
V面E-06・08区で検出した不整形の土壤を641号土壤とした。調査が進むにつれて、75~



161 641号土壤実測図 (1/80)

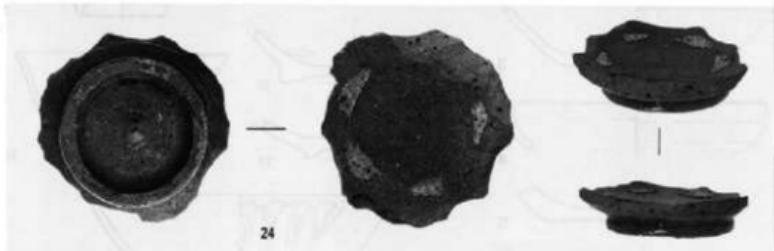
77・91～93号井戸が検出され、641号土壙はそれらすべてを包括している。

1は土師皿である。口径8.4cm、底径6.1cm、器高1.3cm。回転糸切りである。2は、瓦器碗である。内面をコテで仕上る。3・4は、須恵器である。5は、東播系須恵質土器である。鉢の底部であろう。回転糸切り痕をとどめる。6は緑釉陶器である。暗灰褐色。須恵質の硬胎にやや磨りむらのある濃緑色の釉が厚めにかかる。生地は、ヘラミガキしていると思われる。7



162 641号土壙出土遺物1 (1 / 3)

は、灰釉陶器である。572号土壤出土の破片と接合している。灰色でキメのややあらい胎土に淡灰緑色の半透明釉がかけられている。体部下位以下の破片で、遺存する体部外面は、強くテリを持つが、施釉されていない。体部外面下位は、ヨコナデ調整、高台内も丁寧にヨコナデを施している。高台は断面コの字形の、付け高台である。8~11は越州窯系青磁碗である。11は全面施釉される。12は高麗青磁である。13~15は青磁である。16は玉緑の白磁碗である。17は獸面付注口。体部にもスタンプで文様を描く。18は天目碗である。暗茶褐色の釉がかかる。19は無釉陶器の耳壺である。破片の為、耳の個数は不明である。20は貴軸壺の底部。21は、須恵器壺である。外面に平行タタキ痕、内面は丁寧にナデて當て具痕を消している。22はN字状に折り返した常滑陶器の甕口縁である。23は尖矢の鎌。鉄製で鍛造である。



163 641号土壤出土遺物 2

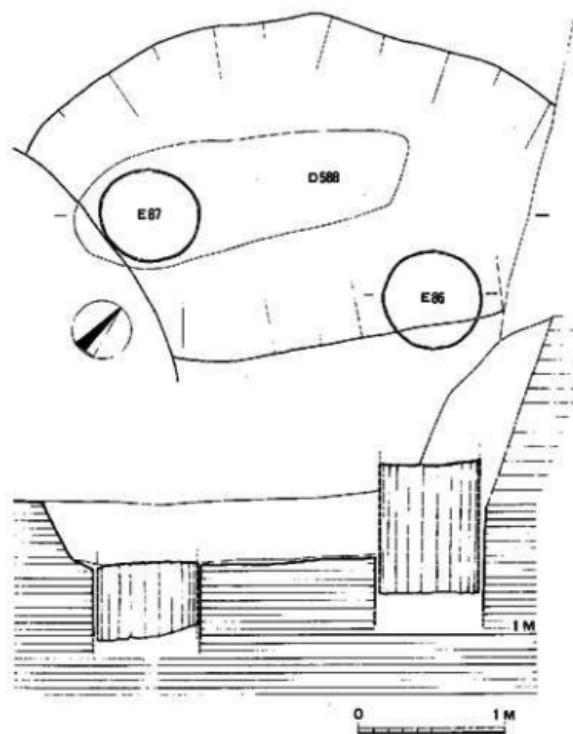
② 井戸

87号井戸（588号土壤）

V面D-14区で検出した井戸である。同じくV面で検出した588号土壤の底から検出したもので、588号土壤の一部は、87号井戸の掘りかたであろうと思われる。

井筒は木桶で、径70cmをはかる。木質はすでに朽ちていた。井戸最下部までは、確認していない。

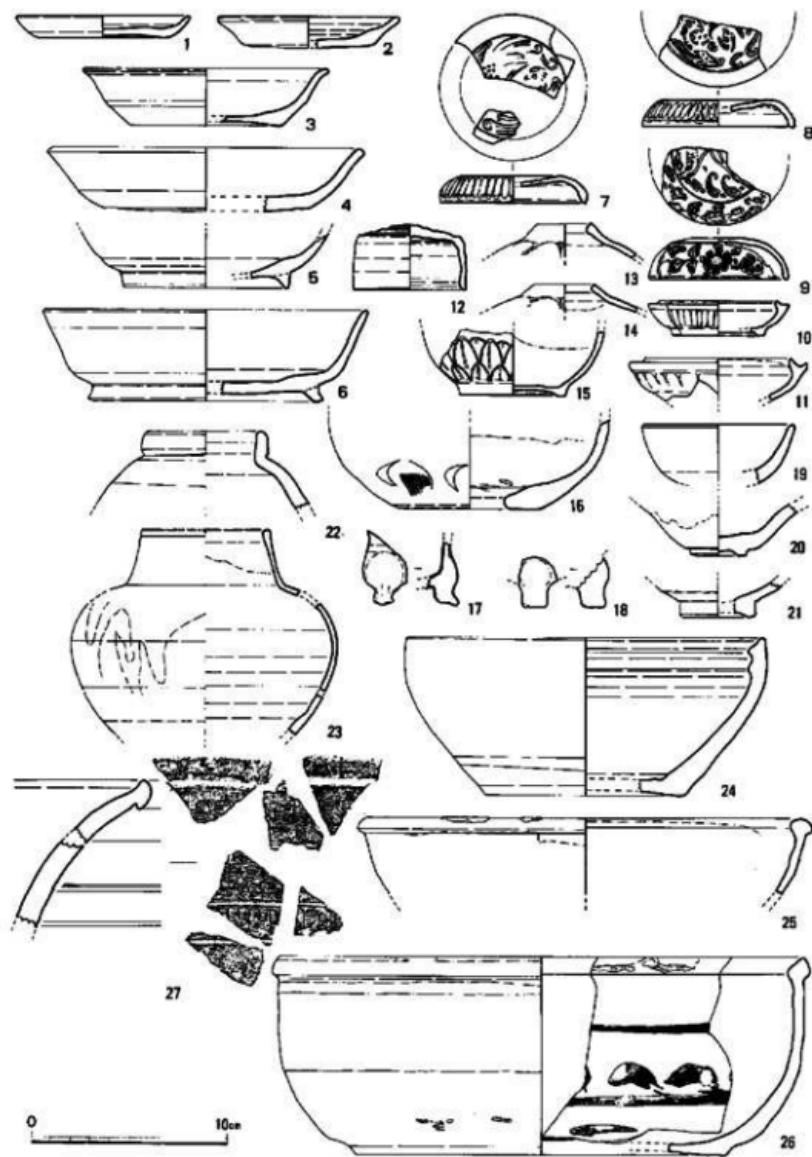
Fig.165、1・2は土師皿である。1は口径9cm、器高1.14cm、2は口径9.45cm、器高1.65cmをはかる。底部は回転糸切りする。3・4は土師壺である。3は直に開く体部下半から稜を作つて内傾し、大きく外反して口縁をつくる。復原口径12.6cm、器高2.95cm、回転糸切りである。4は、全体に大振りで、器肉も厚い。復原口径16.3cm、器高3.24cm、回転糸切りである。5は土師器の高台付碗である。6は須恵器の高台付壺である。埋土の中に粉れこんだものであろう。7・8は、青白磁の合子蓋である。頂部に鳳凰文を印す。体部内面と口唇部は露胎となるが、頂部内側には釉がおちる。9は、白磁の合子蓋である。頂部には鳳凰文を、外体部には花文を印す。釉はやや青味をおびた光沢の強い透明釉で、胎土は白色緻密で精良である。優品である。



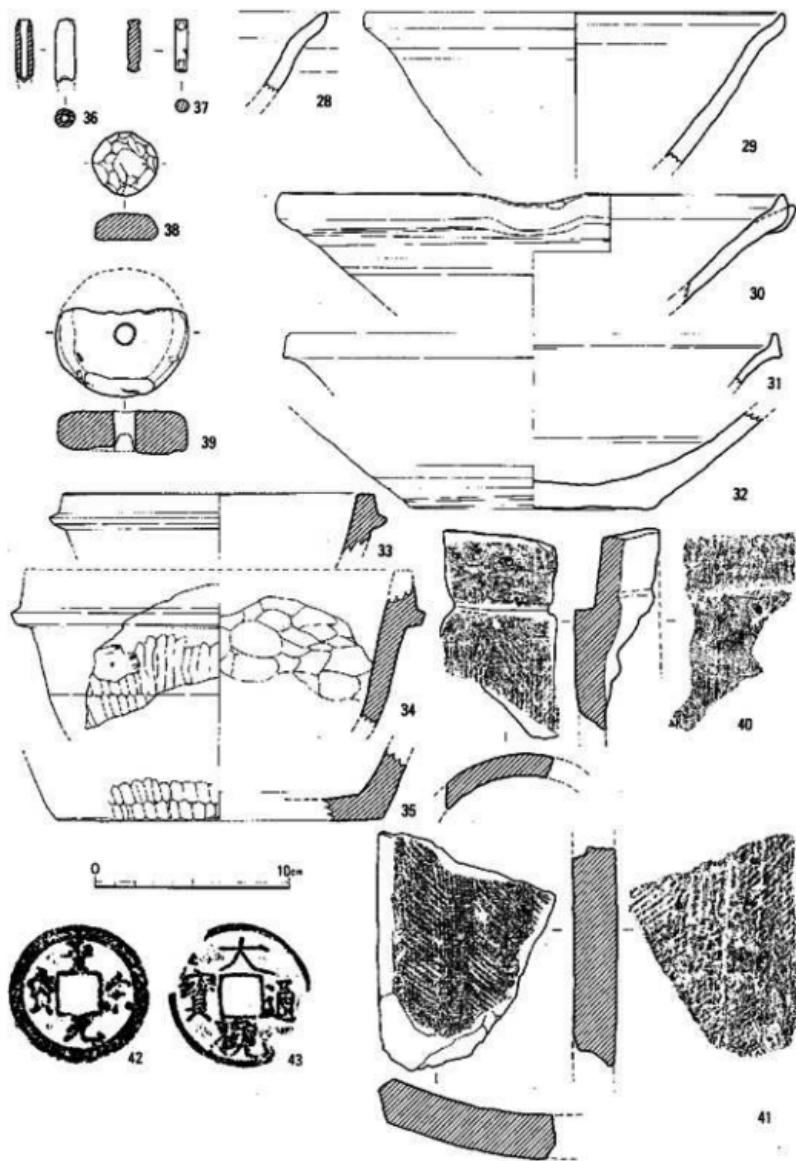
164 87号井戸実測図 (1/40)

目碗である。22は、褐色陶器の壺である。火災にあって焼けている。23は鉄軸陶器の壺である。黒褐色の釉がむらなくかかる。24は無釉陶器の体である。胎土には長石粒を多く含み、粗い。赤褐色を呈する。25・26は黄釉陶器の鉢である。26は鉄絵を描く。27は須恵器系陶器の壺口線である。色調は濃灰色を呈し、緻密である。表面はテリがかかり光沢を持つ。外面には櫛歯による刺突文が3段以上みられる。28~31は、須恵質の鉢である。30・31は東播系須恵質土器であろう。32は、無釉陶器のこね鉢の底部で、内底部は使用により磨滅している。中国産である。33~35は、滑石製の石鍋片である。33・35には、一部にススの付着がみとめられる。36・37は土鍤である。36は管状を呈するもので、37は円柱状の両端に削り込みを入れたものである。いずれも胎土は緻密で、焼成も良い。40は、丸瓦片・平瓦片である。42・43は銅鏡である。42は「聖宋元寶」(北宋徽宗、建中靖国元年1101年初鑄)、43は「大觀通寶」(北宋徽宗、大觀元年1107年初鑄)である。

10は青白磁。11は白磁の合子の身である。12は白磁の蓋である。口唇部外側から内面は露胎となる。頂部は同心円の凹線が3条めぐる。頂部内面には、回転ケズリ痕が、正円をなして残る。13・14は白磁壺である。体部はおそらく瓜形をなす。15は青白磁小壺である。体部下位から底部は、露胎となる。16は、龍泉窯系青磁である。底部には孔を設け、外底部は施釉後削り取っている。256号土壤出土片と接合している。17・18は青磁香炉の足である。軸調が異なり、別個体であることが知られる。19~21は、天



165 588号土壤出土物1 (1 / 3)



166 588号土填出土物 2 (1 / 3 42 + 43---1 / 1)

95号井戸 (565号土壌)

V面 E-09・10区で検出した井戸である。整理の結果、ⅢA面の406号土壌が井筒に、410号土壌がほりかたの一部にあたる可能性がある。井筒は木桶である。木質は朽ちて紙状になっていた。

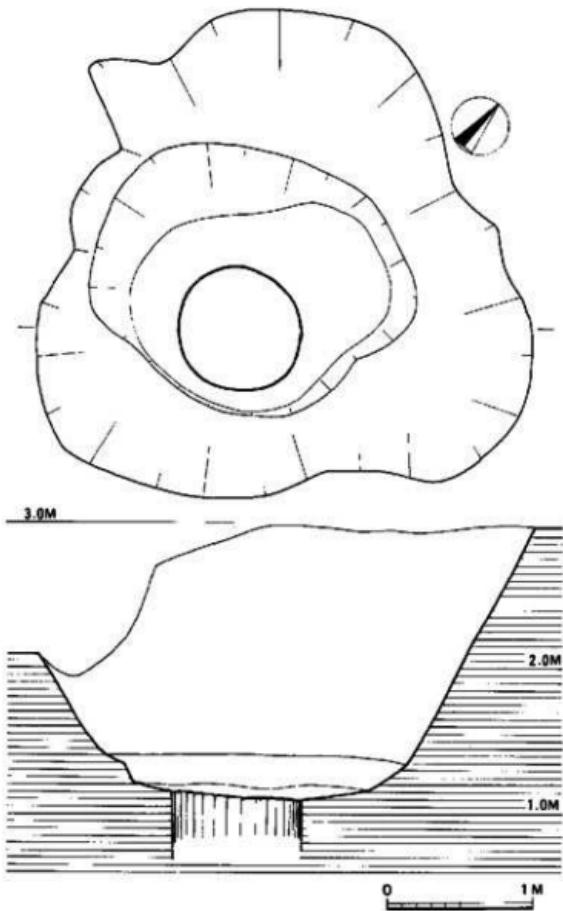
出土遺物は多く、一部を図示したにとどまる。

1~3は土師皿である。

1・2は口径8.4cm、器高1.6~1.65cmをかる。

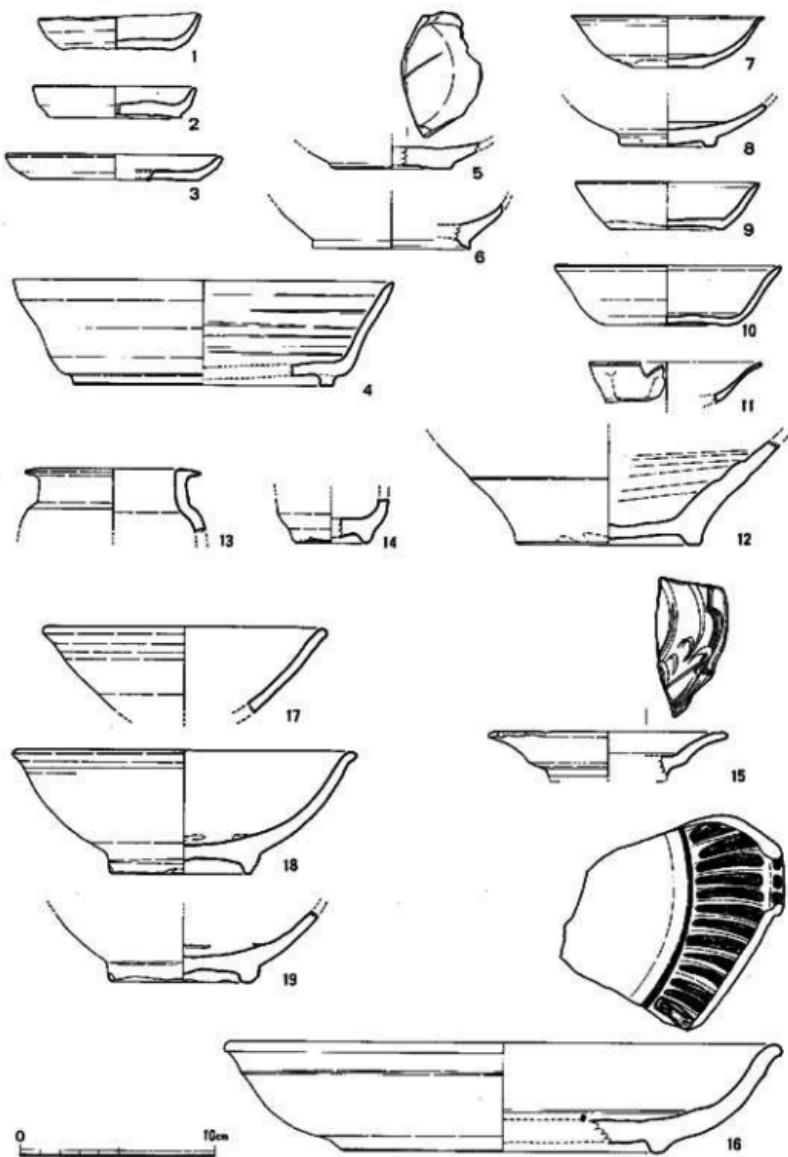
3は口径11.2cm、器高1.3cm。いずれも回転糸切りである。4は須恵器の高台環である。5・6は、縄輪陶器である。5

は淡灰褐色土師質の硬胎に、淡緑色の釉を全面施釉する。底部は浅い蛇目高台で、回転糸切りの後ヘラ状工具で輪状に溝を削って蛇目高台とし、疊付中程から内側を回転ナデ調整する。体部下位は内外ともヨコナデ。見込みにヘラ先による沈線が一本みとめられる。6は、内側に段を有



167 95号井戸実測図 (1 / 40)

する輪高台を付けたもので、鼠色の土師質硬胎にゴマだれ状のむらのある鮮緑色の釉を施す。高台疊付内側には、うすく釉がちるが、本来露胎であろう。体部外面の調整は、ヨコナデである。7~12は白磁である。7は皿である。8は碗底部で、高台疊付以外は施釉される。9・10は口ハゲの皿である。9の体部下位から外底部は露胎となる。11は皿の体部を多角形に



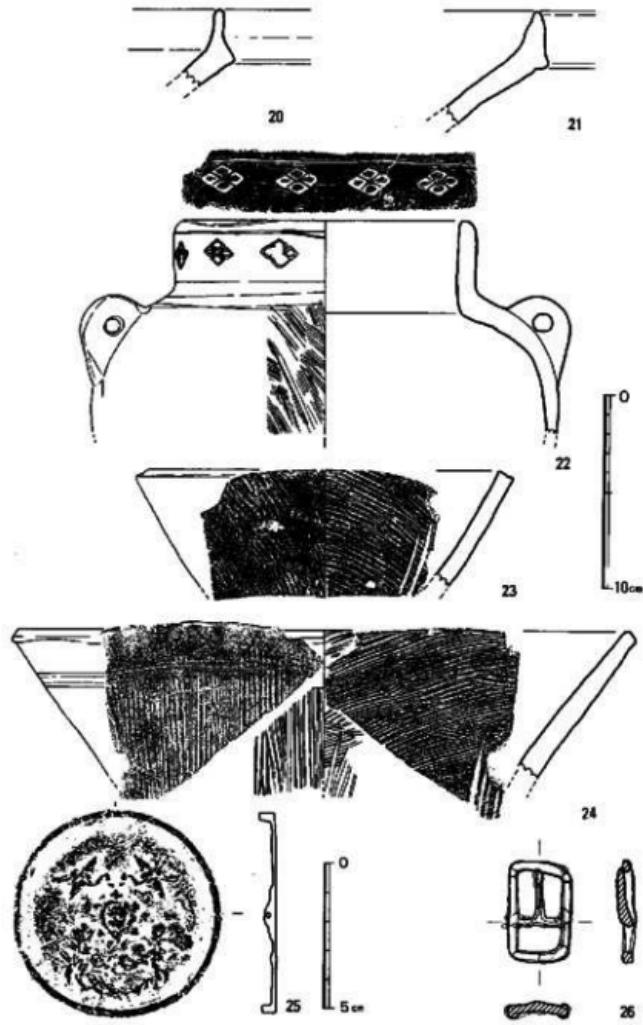
168 95号井戸出土遺物1 (1 / 3)

面取りする。12は盃底部である。高台置付から内側は、露胎となる。13~16は、龍泉窯系青磁である。13は香炉口縁部破片である。青味をおびた灰緑色を呈する。全体に施釉する。14は、直形磁器である。置付は露胎である。15は腰折れ皿である。口縁部は稜花をなし、体部内面には片切り彫りで文様を描く。16は盤である。体部内面に、菊花の陰刻を施す。

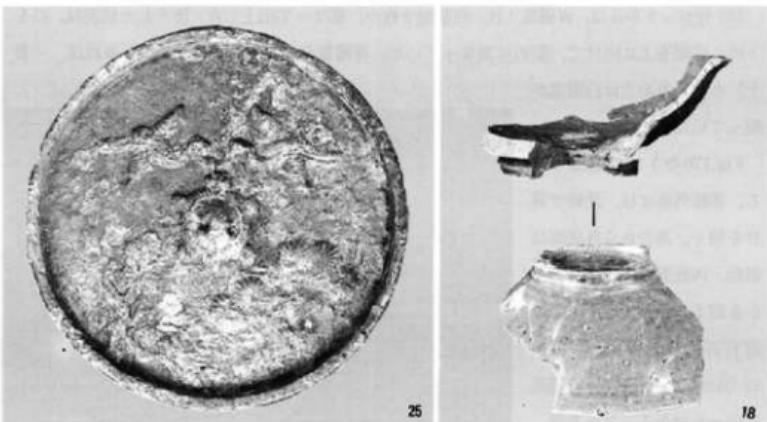
骨付は露胎である。17~19は、高麗青磁である。18・19は、見込みと置付きを露胎とする。

20~21は、備前陶器のすり鉢である。備前焼編年(間壁編年)IV期前半の特徴を示している。22~

24は、土師質土器である。25は、銅鏡である。龟鈕で鶴が二羽嘴を合わせている。下半には松枝が描かれている。鏡面はわずかに凸面をなす。26は鉄製の鉸具である。長さ5.3cm、幅3.3cm。



169 95号井戸出土遺物2 (1 / 3, 25-1 / 2)



170 95号井戸出土遺物3

③ 柱穴状小土壤

528号ピット

ⅢA面D-14区で検出した小土壤である。径24cm前後、深さ28cm前後をはかる。

埋土中から、土師皿、壺の小片の他、Fig. 171に図示した遺物が出土した。1は、青磁碗である。龍泉窯系と考えられる。灰白色で緻密な胎土に、淡灰緑色の半透明釉がたっぷりと施される。高台は、半ばが露胎となる。底部は下方に尖り気味である。体部外面には、鎌蓮弁文が陽刻される。約2分の1強の破片である。復原口径9.7cm、高台径2.73cm、器高4.9cmをはかる。

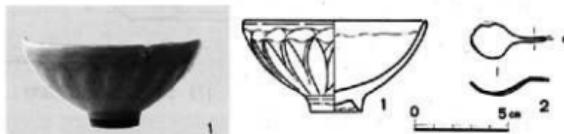
2は、青銅製の匙である。

鉄化がすすみ、

遺存状態はよくない。

匙部分は杏葉形を呈し

わずかに凹む。軸部は



171 528号土壤出土遺物(1/3)

大きく湾曲する。厚さ1mm弱で、非常に薄い。現存長4.2cm、匙部幅1.9cmである。

567号ピット

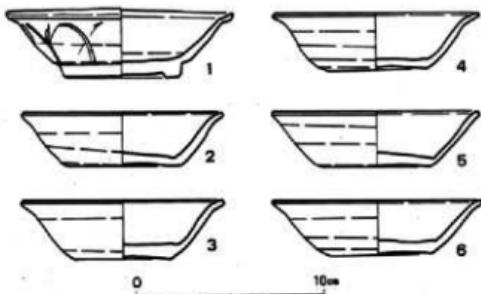
ⅢA面D-13区で検出した小土壤である。I面検出の60号井戸に切られて、一部が検出された。残っていた部分から、径20cm程度、深さ14cm前後の規模が推定できる。埋土は、褐色土のブロックを含む暗褐色土がつまっていた。

567号ピットからは、青磁皿1枚、白磁皿5枚が、重なって出土した。出土した状況は、口を下に、底部を上に向けて、斜めに重なっていた。青磁皿を一番下（重ねた順からみれば、一番上）とし、その上に白磁皿が乗っていた。

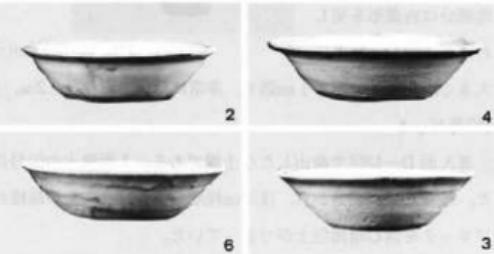
Fig.170の1は青磁皿である。体部外面には、沈線で蓮弁を描く。高台から外底部は露胎。内底部は施釉後、釉をかき取る。色調は青灰色で福建省あたりの製品か。口径12.05cm、高外径6.3cm、器高3.65cmをはかる。2~6は、口ハゲの白磁皿である。白色の半透明釉が厚めにかかり、施釉後口縁部を削って角を持たせる。口ハゲ部分以外は全面に施釉されるが、外底部の釉はうすく、擦痕もみとめられる。外底部は、露胎ではないが、施釉する意図もない様である。口径10.8~11.25cm、底径5.1~5.85cm、器高2.85~3.3cmをはかる。青磁・白磁とも完形品である。



172 567号ピット



173 567号ピット出土遺物1 (1/3)



174 567号ピット出土遺物2

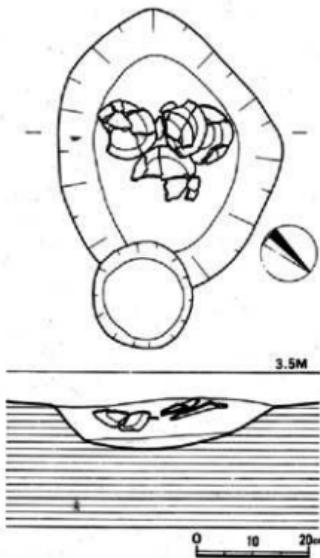
701号ビット

III B面 E-10区より検出した小土壤である。楕円形を呈し、長軸約50cm、短軸約40cm、深さ6~11cmをはかる。埋土は暗褐色土である。

701号ビットからは、土師皿のみが11枚重なって出土した。おおむね完形品であり、小土壤の深さが浅いことから単に柱穴とは考えがたく、何らかの祭



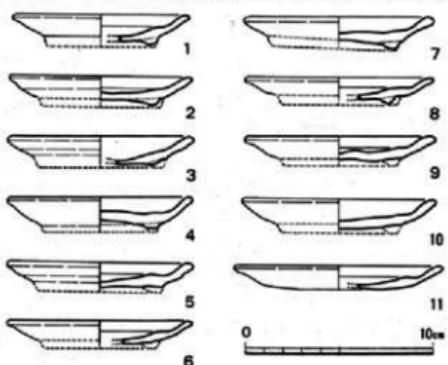
175 701号土壤



176 701号土壤実測図 (1 / 10)

祀行為（地鎮祭等）を考えることもできそうである。

701号ビットから出土した土師皿は、全て同一の型式である。器形的には、高台を持つ皿である。高台は付け高台で、その整形は純く、一見すると器肉がひすんで盛り上った様な感を与える。体部の立ち上りも、明瞭な角をなさず、ダラダラと立ち上り、浅い皿状をなす。整形は、内面及び体部外面はヨコナデ、外底部は高台を貼り付けた後ヨコナデを施し、底部切り離しの痕跡はナデ消される。口径9.54~11.25cm、高台径5.55~6.6cm、器高1.65~1.86cmをはかる。



177 701号土壤出土遺物 (1 / 3)

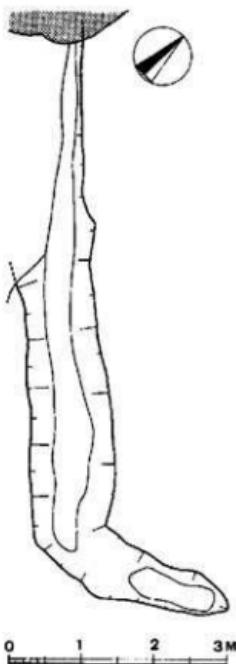
(5) 中世Ⅰ期の遺構

① 溝状遺構

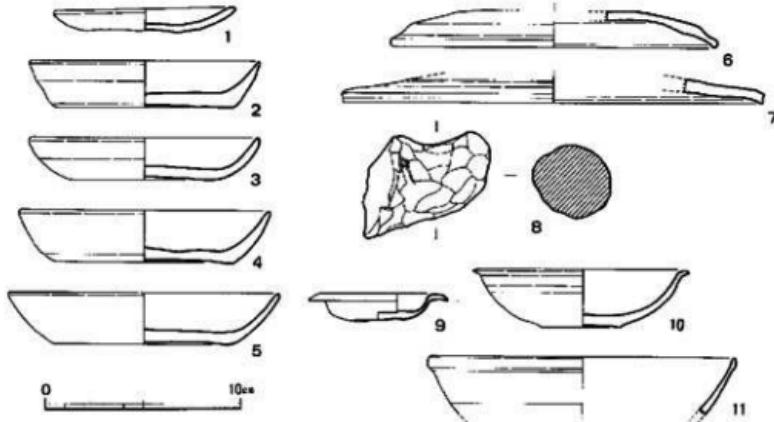
6号溝

V面E-05・07区にまたがって検出した溝である。延長7.3mを検出している。端部は110°の角度で折れ曲り、2mほどのがる。埋土は同質であったが、別の溝の可能性もある。深さは、40~60cmで、溝底は北西から南東に向って傾斜する。折れ曲った部分の深さは35~66cmで東に傾く。

1は土師皿である。底部へラ切り。口径9.4cm、器高1.1~1.4cmをはかる。2~5は土師壺である。全て底部は回転糸切りによる。2の底部には、板目压痕が残る。口径12~14cm、器高2.2~2.7cm。6・7は須恵器の壺蓋である。6号溝からは、須恵器も多く出土し、周囲に奈良時代の遺構があったことを窺わせる。8は土師器の把手である。9は、褐釉陶器蓋である。双孔が穿たれるが、一ヶ所だけである。釉は灰褐色の緻密な胎上に、茶褐色の釉が施される。10・11は白磁で、10は皿、11は碗である。これらの他に、同安窯系・龍泉窯系の青磁、褐釉陶器(四耳壺他)、無釉陶器、備前陶器、石鍋等出土している。



178 6号溝実測図 (1 / 80)



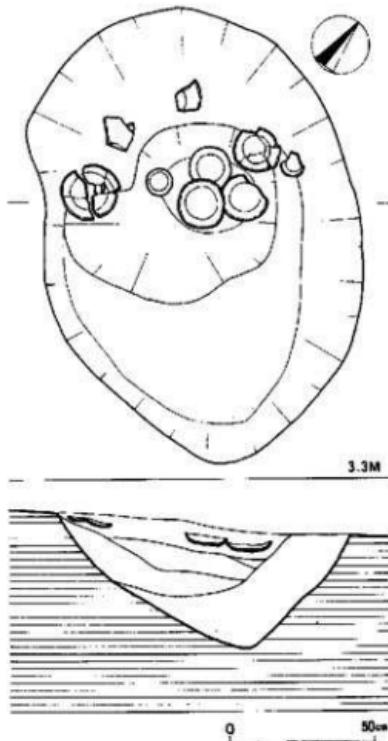
179 6号溝出土遺物 (1 / 3)

②土壤

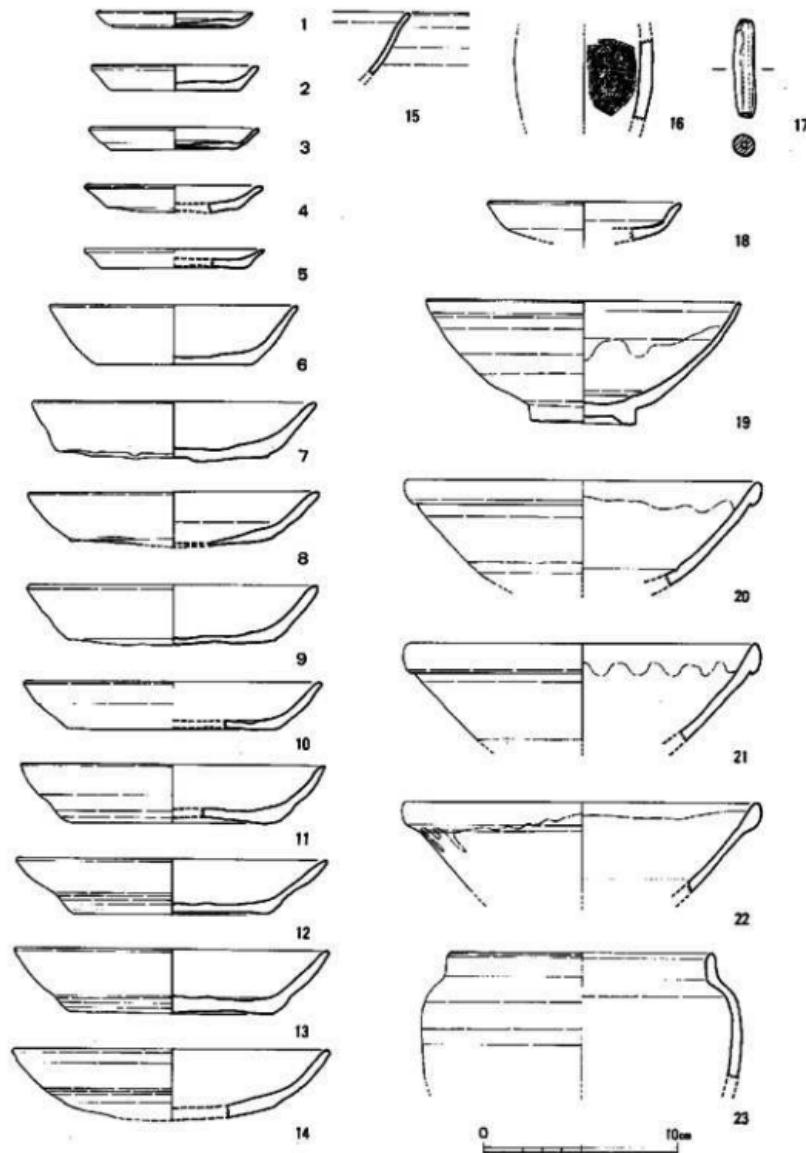
548号土壤

IV面 E-08区で検出した土壤である。長軸147cm、短軸111cmをはかる。壙底は一部2段掘り状を呈し、最深部で深さ46cmである。土師皿、环を主に、多数の遺物が出土した。

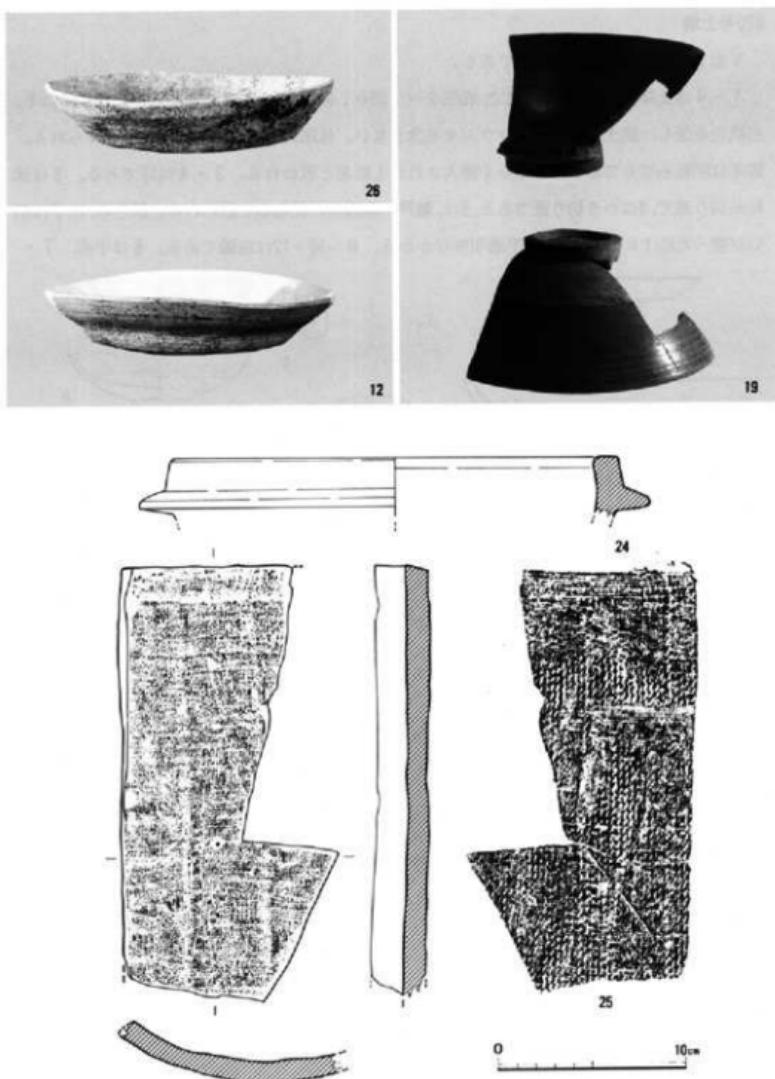
1～5は土師环である。底部は回転糸切りで、2～4には板目压痕がつく。口径は8.0～9.3cm、器高0.85～1.4cmである。1は、淡茶色を呈し、器肉内部は黒灰色である。胎土は、若干の砂粒を含むものの、キンウンモは全く交えず精良である。焼成も極めて良く、他の土師皿との差は一目である。器形的には大差はないが、他地域からの搬入品の可能性が考えられる。6～14は、土師环である。14のみヘラ切りで、他は回転糸切り、全て板目压痕をとどめる。6は他に比して口径に対し器高が高い。口径12.8cm、器高3.1cm。7～13はほぼ同一形態で、口径14.6～16.2cm、器高2.5～3.4cmをはかる。15は灰釉陶器片である。灰白色の胎土に、斑らに緑をおびた半透明釉がかかる。生地は、内外面ともヨコナデ調整を施す。16は、土師質の焼塩壺である。外面は指ナデ、内面には網目が残る。17は、土鍾である。18は青磁皿である。龍泉窯系。19～23は白磁である。19は、見込みが体部から段をなしていく。口線は直行したまま、おさめる。20～22は、いわゆる玉縁口線の碗である。23は、広口壺である。白色でキメのやや粗い胎土に、わずかに濁った透明釉が施される。口唇部は、施釉後に削って形を整える。したがって、口唇部は露胎となり、この破片で見る限りは、全面に施釉される。24は、滑石製の石鍾である。外面には、一面にススが付着している。25は、平瓦である。内面（作成時、内型に接する面）には布目、外面には繩目がつく。内型は桶に布をまいたものと思われるが、桶の木の継ぎ目と布をしめた紐の痕跡が、はっきりとうかがわれる。外面は、繩をまいた縦3.3cm程の板で叩き締めた後、ヨコナデを施している。



180 548号土壤実測図（1／20）



181 548号上塙出土遺物 1 (1 / 3)

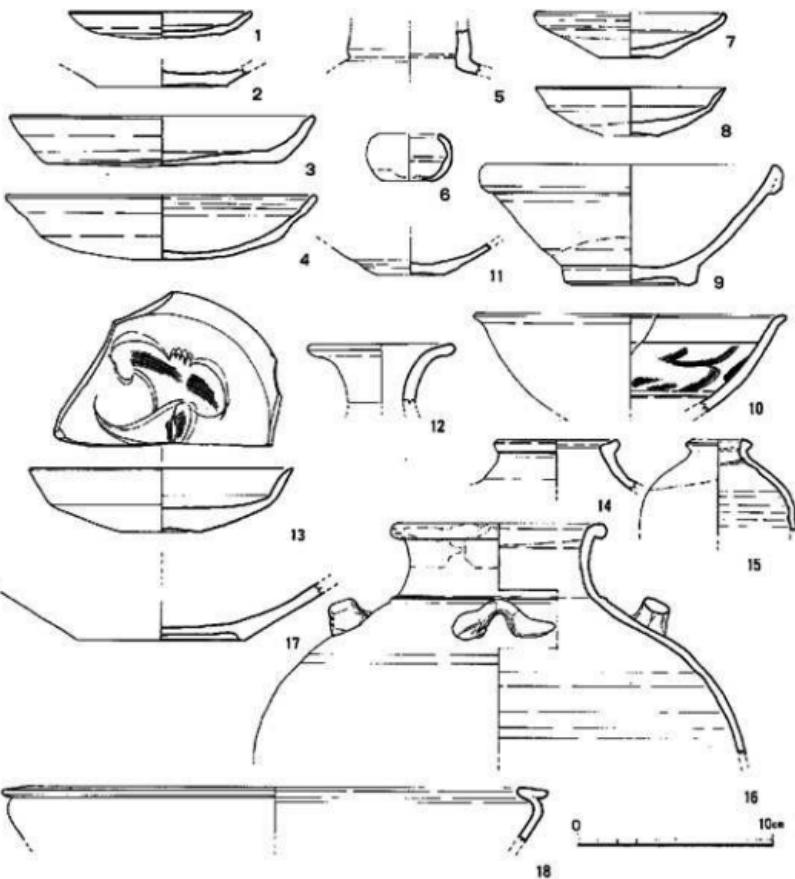


183 548号土壤出土遗物3 (1 / 3)

620号土壌

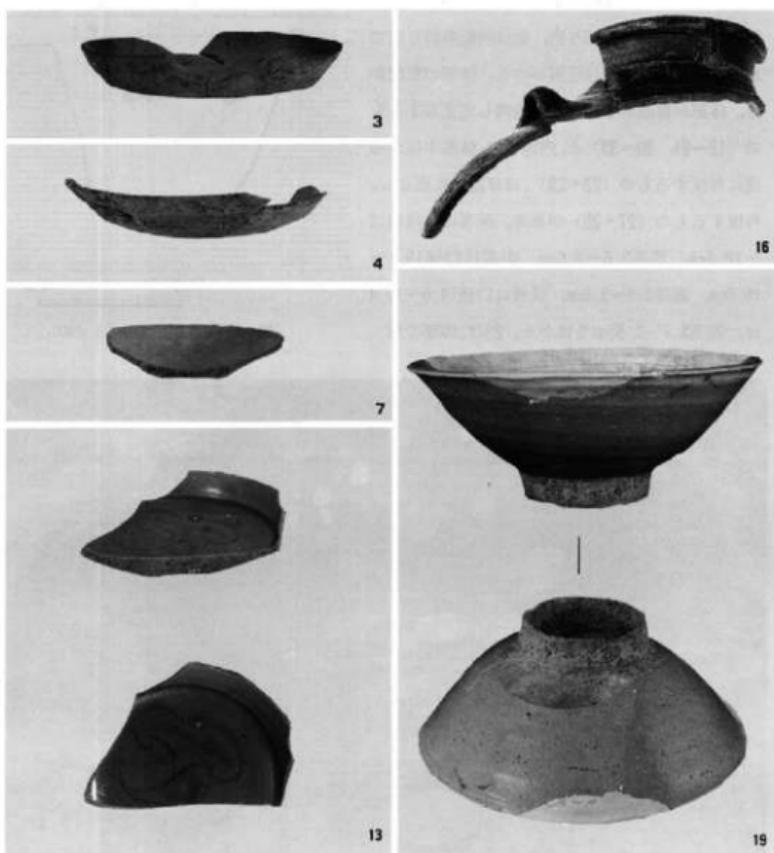
V面E-07区で検出した土壌である。

1～4は土師器である。1は皿で、底部をへラ切りし板目がつく。2は皿の底部と考えられる。白肌色を呈し、胎土は精良でキンウンモを含まない。体部外面には、ヌク痕がみとめられる。底部は回転糸切りである。おそらく搬入された土師皿と思われる。3・4は坏である。3は回転糸切り底で、4はへラ切り底である。5は、瀬戸・美濃窯の灰釉壺と思われる。灰色の、粒子は粗いが整った胎土に、鮮灰緑色の半透明釉がかかる。6～10・12は白磁である。6は小盤、7・



184 620号土壌川土造物1 (1 / 3)

8は平底皿、9・10は碗、12は壺（花瓶？）口縁である。11は青白磁の皿である。底部は、施釉後釉を削り取り露胎となる。13・14は青磁である。13は見込みに片切彫と櫛目で花文を描く平底皿で、龍泉窯系と考えられる。14は壺の口縁部である。灰茶色の生目がそろった胎土に、灰緑色の釉がうすくかかる。15・16は捲軸陶器の壺である。灰色で径0.1mm程度の砂粒を多く含む粗器質の胎土に、濃茶褐色の釉がかかる。16は四耳壺である。白肌色で、少砂粒を多く含む粗い胎土に、明黄茶褐色の釉がかかる。施釉は頭部以下になされるが、口縁部は化粧掛け状にテリを持つ。17・18は、綠捲軸陶器の鉢である。接合できないが、同一個体の可能性も考えられる。

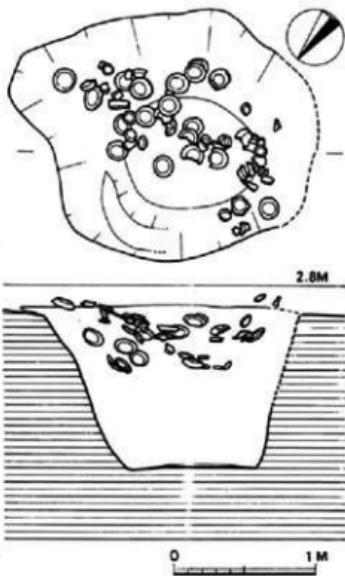


185 620号土壤出土遺物 2

635号土壤

V面E-05区より検出した土壤である。一部調査区外に出る。径140cmの不整円形を呈し、深さは114~116cmをはかる。埋土の中程より上から、土師皿・壺を中心に、多量の遺物が出土した。

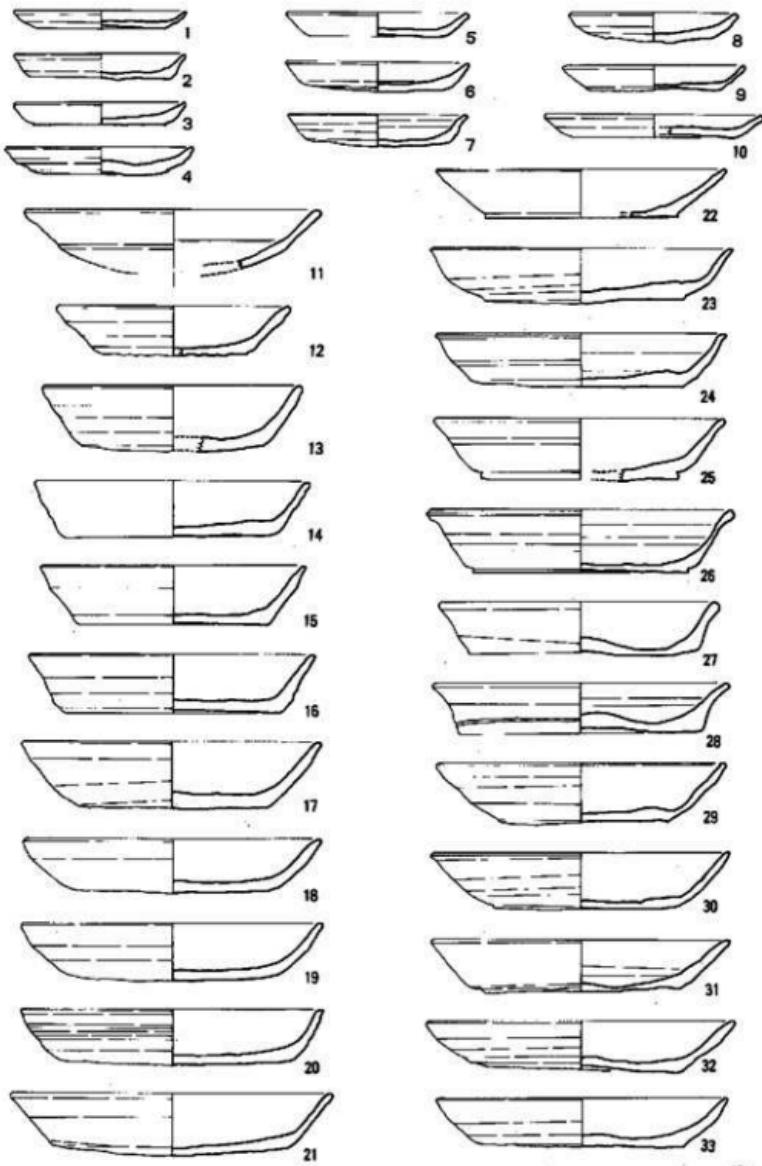
1~33は土師器である。1~10は皿で、4以外は回転糸切り底で、すべてに板目压痕が残る。口径8.9~11.4cm、器高0.95~1.7cmをはかる。11~33は壺で、11はヘラ切り底、他は回転糸切り底である。17を除いて板目压痕がつく。体部の形状から、体部が直立あるいはやや内湾して立ち上るもの(12~21、30~33)と、内湾して、体部中位から逆に外反するもの(23~26)、ほぼ直上に直立し、外反するもの(27~28)がある。前者は口径12.2~16.6cm、器高2.6~3.6cm、中者は口径15.1~16.0cm、器高2.8~3.3cm、後者は口径14.6~15.4cm、器高2.7~2.85cmをはかる。29は、体部の形



186 635号土壤実測図 (1 / 40)



187 635号土壤(東より)

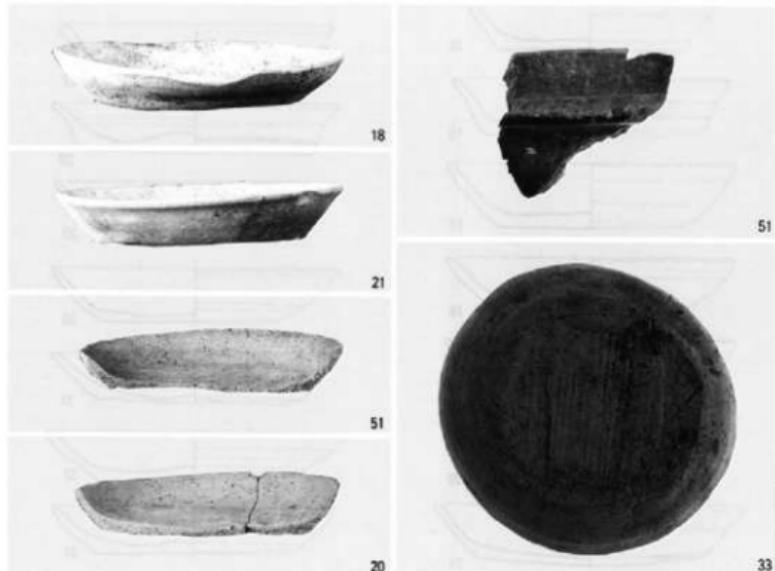


188 635号土壤出土遺物 I (1/3)

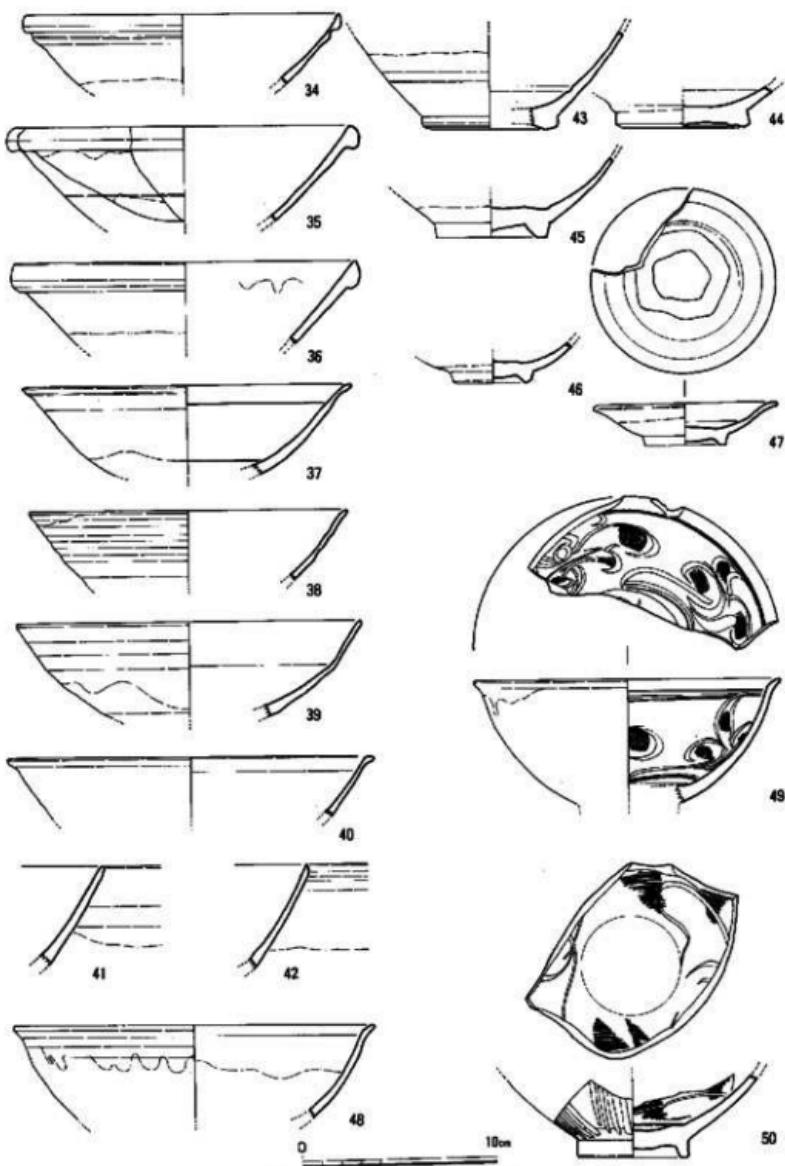
0 10cm

状、淡く赤味をおびた淡白茶色を呈しキンウンモを含まない胎土からみて、搬入土器の可能性がある。34~47は白磁である。34~45は碗である。34は、口縁直下を横に強くナデて凹ませ、口縁を玉縁状に作る。43・44の高台は、おそらく、玉縁口縁の碗の底部であろう。46・47は、皿である。いずれも、見込みの釉を輪状にかき取る。外面は体部中位まで施釉される。48~50は、青磁碗である。48は、濃灰緑色の透明釉を、暗灰色の胎土に施す。釉のガラス質の内部には、細かい気泡がみとめられる。釉の真下の胎土は白色を呈すが、化粧土ではなかろう。49は、見込みに片切彫りと櫛目で花文を描く。釉は、やや濁った暗灰緑色の半透明釉で、細かい氷裂がみられる。現存する部分では、全面に施釉されている。胎土は灰色で、やや粗い。底部を欠く。50は、同安窯系の青磁碗である。灰白色の胎土に、うすく灰緑色をおびた透明釉がかけられている。体部内面に、片切彫りと櫛描文で花文と思われる意匠を描いている。体部外面には、片切彫りで猫搔き手と呼ばれる、放射状の縦線を刻む。高台以下は露胎となる。外面高台内には、ケズリ痕が明瞭に残る。51は滑石製石鍋の口縁部の破片である。鍔から下には、ススが付着する。

この他、瓦片が多数出土している。内面（上面）に布目を残すものと、布目をナデ消すものとがある。外面（下面）は、繩目叩きのものと、板状のものでナデるものとがある。



189 635号土壤出土遺物 2

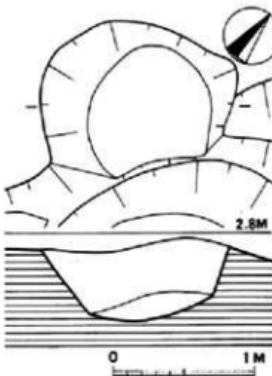


190 635号土棺出土遗物3 (1 / 3)

649号土壙

V面E-04区より検出した土壙である。平面的には、ほぼ円形を呈する。径約140cm、深さ35~51cmをはかる。663号土壙に切られる。

埋土中より、多様な遺物が出土した。1~3は、土師器である。1は皿で、底部はヘラ切りで切り離され、板目圧痕もついている。体部はヨコナデ、内底部はナデ調整する。口径8.7cm、底径6.45cm、器高1.75cmをはかる。2・3は壺である。底部は、回転糸切り痕をとどめる。内面は、コテで平滑に整えたと思われるが、底部はやや丸味をもって下るので、底部切り離し後になされたものであろう。口縁部から体部外面は、ヨコナデを施す。口径14.2~14.6cm、底径9.6~10.1cm、器高2.6~3.4cmである。4は、内黒土器の高台付壺である。内面は、密にヘラミガキを施し、炭素吸着のため漆黒色を呈する。外底部はナデ、高台をヨコナデ調整で付ける。高台は高く、外方に踏ん張る。高台径は8.6cmと推定

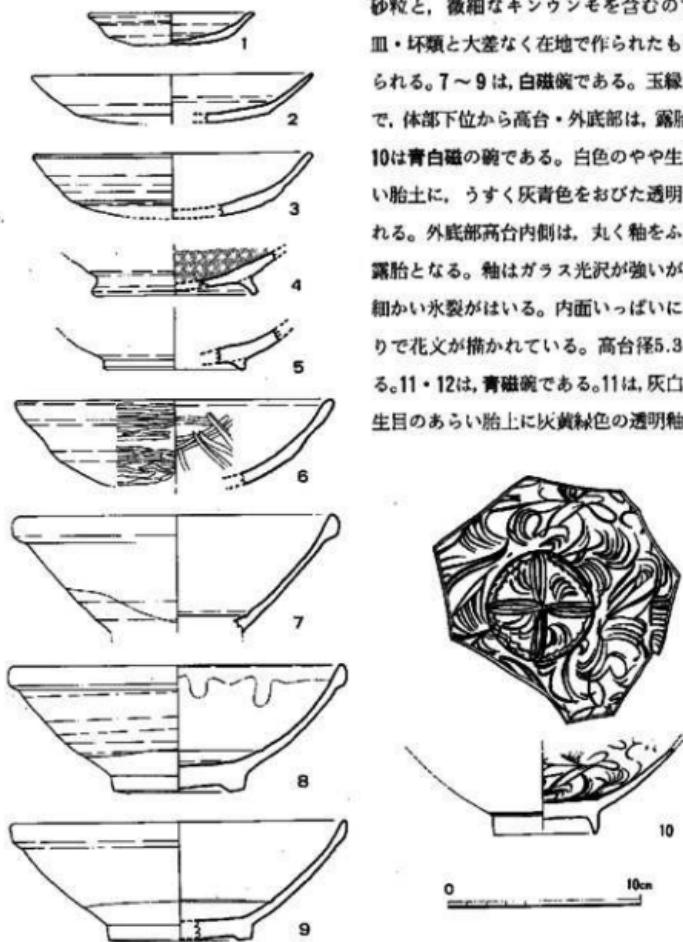


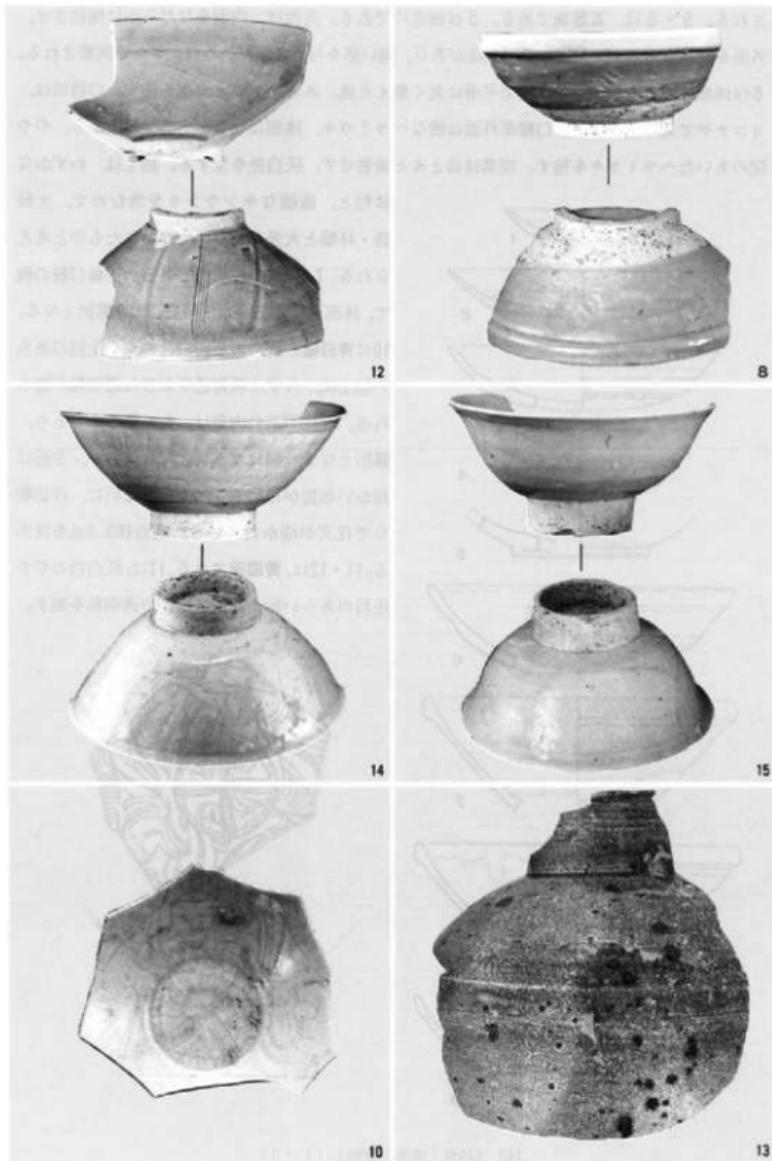
191 649号土壙実測図 (1 / 40)



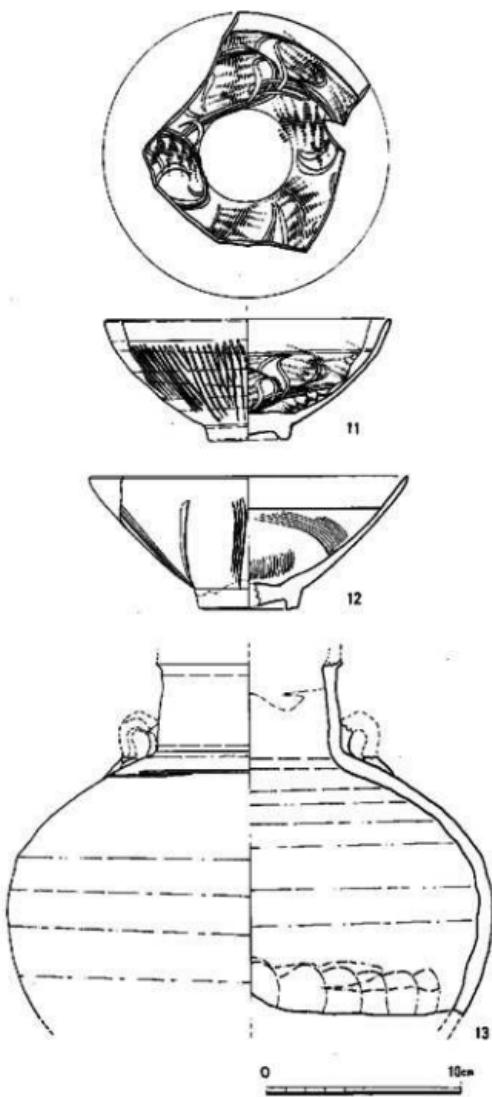
192 649号土壙 (南東より)

される。5・6は、瓦器碗である。5は底部片である。高台は、内面をなだらかに傾斜させ、外面を直に立てるが、全体に低く丸味があり、鈍い感を与える。見込みは、コチで調整される。6は体部片である。内面はコテで平滑に丸く整えた後、あらいヘラミガキを施す。口唇部は、ヨコナデで丸く仕上げる。口縁部外面は密なヘラミガキ。体部はヨコナデ調整の上から、やや間のあいたヘラミガキを施す。炭素はほとんど吸着せず、灰白色を呈する。胎土は、わずかな砂粒と、微細なキンウンモを含むので、土師皿・坏頬と大差なく在地で作られたものと考えられる。7～9は、白磁碗である。玉縁口縁の碗で、体部下位から高台・外底部は、露胎となる。10は青白磁の碗である。白色のやや生日のあらい胎土に、うすく灰青色をおびた透明釉が施される。外底部高台内側は、丸く釉をふきとり、露胎となる。釉はガラス光沢が強いが、全面に細かい氷裂がはいる。内面いっぱいに、片切彫りで花文が描かれている。高台径5.3cmをはかる。11・12は、青磁碗である。11は、灰白色のやや生日のあらい胎土に灰黄緑色の透明釉を施す。





194 649号土壤出土遺物2



195 649号土壙出土遺物3 (1/3)

軸はガラス質で光沢強い。高台置付から内側は露胎となるが、高台内には、窯道具の一部が付着している。体部内面には、片切彫りで花文を描きすき間を櫛目文でうめる。体部外面は、9本単位の櫛歯で縦線を描く。同安窯系青磁である。口径14.8cm、高台径4.2cm、器高6.3cmをはかる。12は、灰色でややあらい胎土に、緑黄色をおびた透明釉を施す。釉は光沢が強く、ガラス質の内部に気泡がみられ、細かい冰裂が全面に入る。高台外側から外底部は、露胎となる。体部内面には櫛描文が、外面には4本単位の櫛歯と片切彫りの縦線が交互に施される。口径16.4cm、高台径4cm、器高6.9cmと復原される。13は、褐釉陶器の蓋である。明灰色砂質の胎土に、淡黄緑灰色の釉がうすく施される。頸部の継ぎ目付近に、縦に耳がつく。全周の1/3弱片であり、双耳と判断される。また、注口部あるいは把手の痕跡はないので、水注とは考えられない。双耳蓋と考えてよかろう。胸部最大径25.0cmをはかる。

683号土壤

V面F-03区において、検出した木棺墓である。V面調査時には、調査区西側の壁から、わずかに40cm程度がのぞいていた。この段階で、青磁碗・皿・土師皿が完形で出土したので、V面調査・壁面土層実測後、重機で壁を掘り取り、プランを確認・調査した。

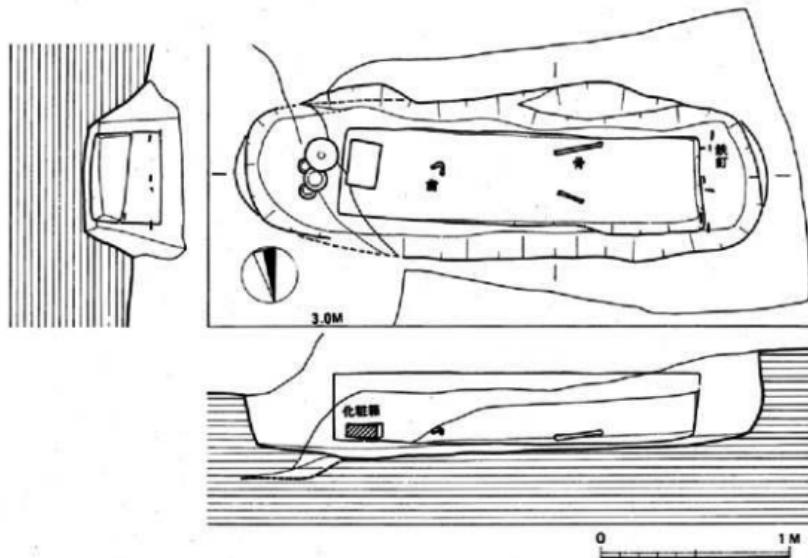
木棺墓は、長さ276cm前後、幅90cm前後、深さ45cm前後の長方形の土壤に、長辺192cm、短辺40~48cm、高さ約33cmの木棺を置いたものである。棺材は朽ちて全く残っていなかったが、鉄釘が原位置を留めており、その規模及び構造が確認できた。構造は、底板の上に側板、小口板を立てたもので、小口板を側板がはさんで、上下2ヶ所を釘でとめていた。

棺内には、下顎骨（ほとんど歯のみ）と大腿骨がわずかに残っていた。

副葬品は、棺内の被葬者の頭と小口板との間に漆塗りの化粧箱、棺外のほりかた内に、青磁碗1、青磁皿4、土師皿6、土師壺1がおかれていた。



196 683号土壤検出状況（北東より）



197 683号土壤実測図 (1 / 30)



198 683号土壤（東より）



199 683号土壤（北東より）

棺内に副葬されていた化粧箱は、木地に黒漆を塗ったものである。土圧で若干変形していたが、長辺約23.5cm、短辺約16.5cm、深さ（ただし、蓋の高さは不明）約6.0cmの長方形である。蓋、四周に金で葉を銀で花を描いた桜花文を散らす。蓋は土圧で箱内に垂れて、変形していた。蓋と身の合わせ方は、確認できなかった。金属性の置口を用いていないことは間違いない。内部は、懸子によって二段に仕切られていた。

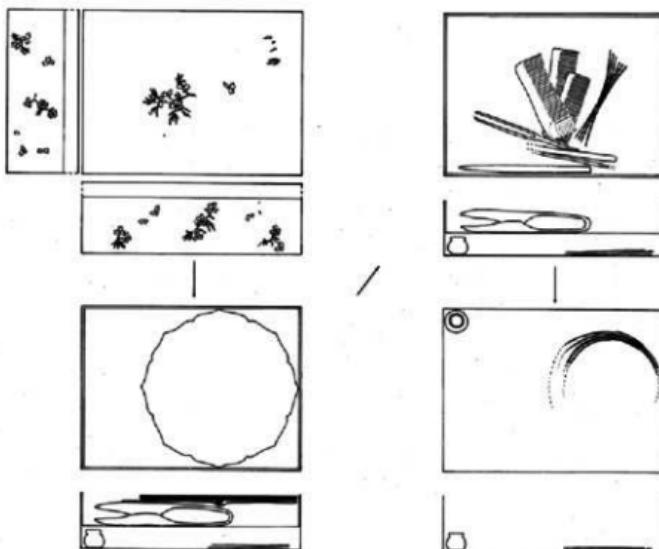
木棺墓の埋土は砂質土で、特に湿気を含んだ土ではない。したがって、遺存状態は決してよくなく、箱の内部を確認する為、箱を分解しながら遺物の確認、取り上げを行なった。



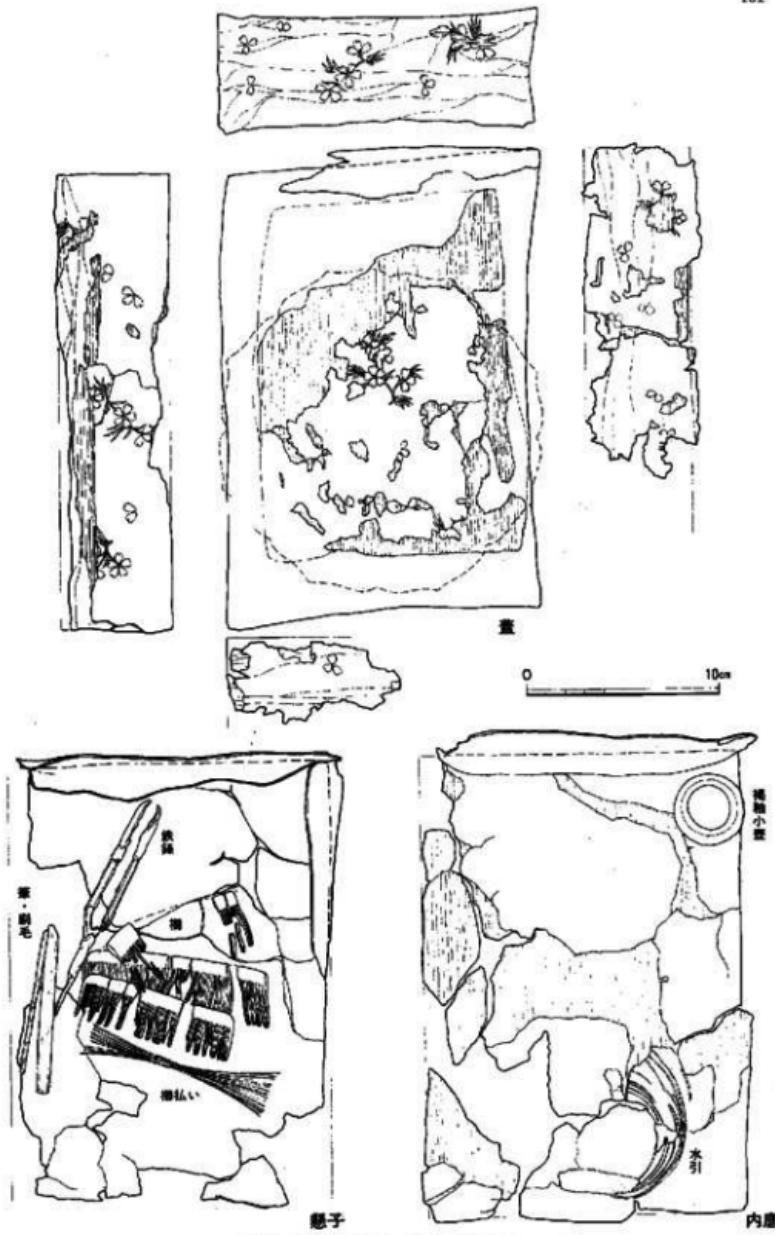
200 化粧箱

蓋は、すぐ内側の銅鏡に付着していた。鏡(4)は湖州八絞鏡で、径17.2cmをはかる。紐を下に、鏡面を上に向けておかれていった。素文鏡である。鏡背側（下側）には紙をしいており、鏡背に銹着していた。

懸子には、鏡の下に櫛・鉄・繩・櫛払い・刷毛がおかれている。櫛は、とき櫛1枚、すき櫛2枚で、懸子の中央にとき櫛を一番上にして重なって

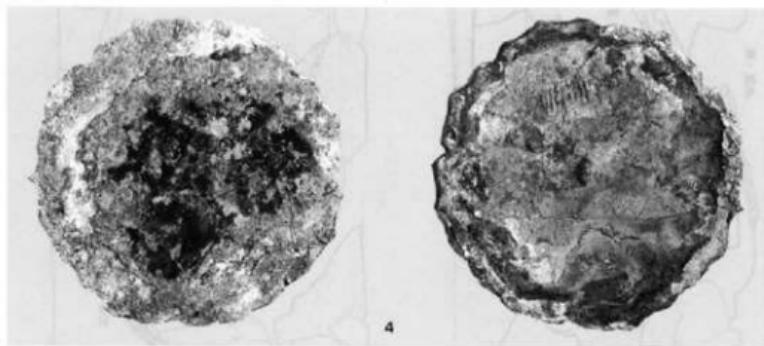
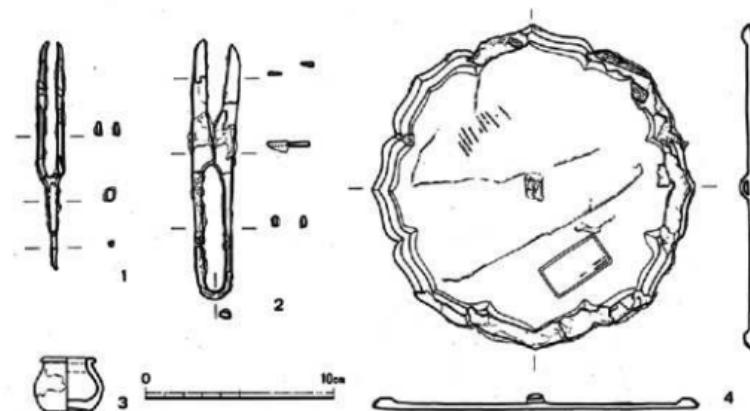


201 化粧箱内遺物配置模式図（約1／6）



202 683号土壤出土 化粧箱実測図 (1 / 3)

いた。とき櫛は長さ7.2cm以上、幅3.3cm。すき櫛は、長さ9.3cm、幅3cmのものと長さ8.1cm、幅2.55cmのものである。鉄鍔(2)は握り鉄である。懸子の横に立てかけられていた。長さ13.8cm、刃部長6.6cmをはかる。鉄鍔(1)は、長さ12cmをはかる。櫛払いは、長さ10.8cmの繊維を束にして中央をくくったもので、完全に朽ちて、痕跡しか残っていなかった。刷毛は2本で、遺存部分長8.7cm、幅0.6cmのものと長さ7.5cm、幅0.18cmのものである。いずれも骨製である。懸子をはずすと、褐釉小壺と、水引が納められていた。褐釉小壺(3)は、口径2.9cm、底径2.3cm、器高2.88cmをはかる。褐色の胎土に、濃褐色の釉がうすくかかる。口縁部内縁には赤色顔料の付着があり、内底には黒色顔料が溜っている。お齒黒壺であろう。赤色顔料は、指についた紅をぬぐったものか。水引は、径9cm程の輪にしてある。朽ちて痕跡のみであった。



203 化粧箱内遺物 (1 / 3)

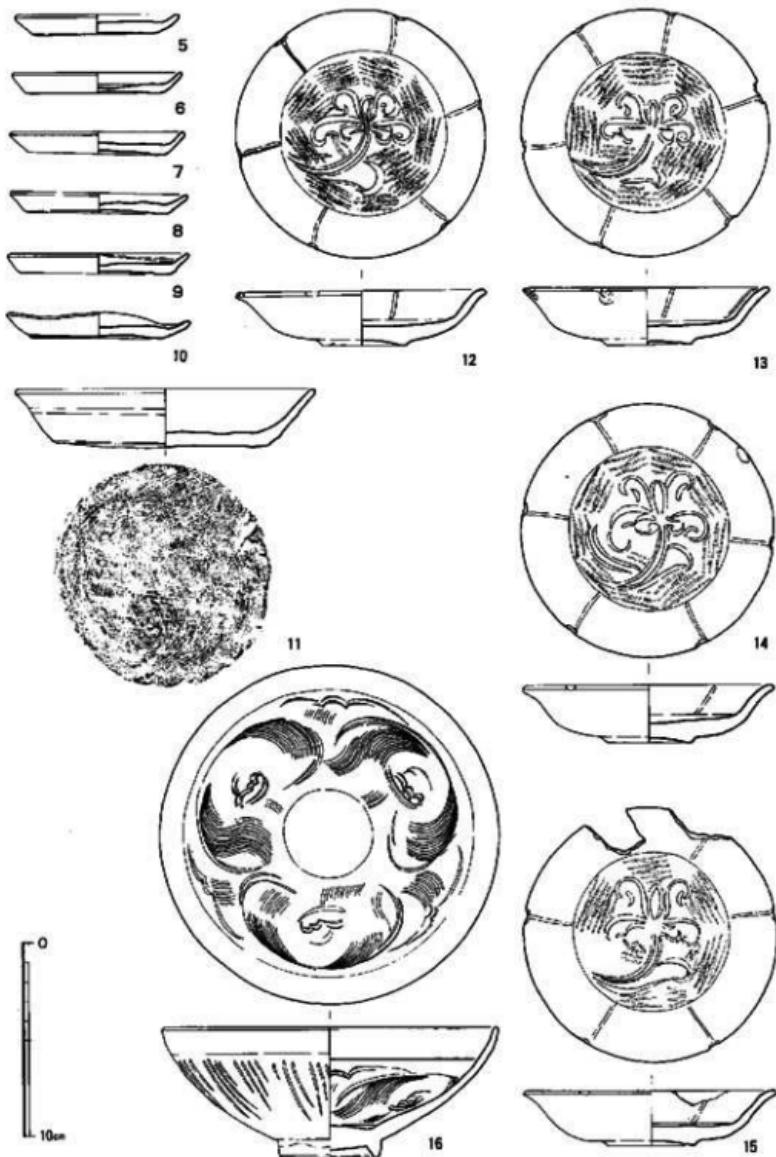
棺外副葬品は、V面調査時にすでに取り上げていた。Fig. 204は、木棺墓調査時に模擬的に遺物を配して撮影したものである。

土師皿(5~9)はすべて回転糸切り底に板目压痕がついている。内底部はナデ、体部内外はヨコナデ調整する。口径は8.5~9.5cm、底径6.1~8.0cm、器高1.05~1.2cmをはかる。杯(10)は、回転糸切りで底部を切り離した後、一部を静止糸切りしている。板目压痕も残っている。内底部はナデ、体部はヨコナデ調整する。口径15.4cm、底径10.8cm、器高3.0cmをはかる。**青磁皿**(12~15)は、すべて同一型式である。底部は平底でやや突出し、上げ底となる。体部は、水平方向に開いてから内渦気味に立ち上り、ゆるやかに外反して口縁部を作る。口縁部は六輪花を呈す。見込みには、片切彫りで花文を描き、すき間を櫛目文でうめる。灰白色で緻密な胎土に、くすんだ灰緑色の半透明釉をかける。外底部は露胎となる。口径12.8~13.1cm、底径4.15~4.5cm、器高2.85~3.0cmをはかる。龍泉窯系であろう。**青磁碗**(16)は、見込みに櫛目で水波文をいれる。体部外面には、片切彫りの沈線を4本ずつ手描きで全面に配する。いわゆる描書き手である。灰白色で、やや生目の粗い胎土に、くすんだ淡灰緑色の半透明釉がかけられる。高台から外底部は露胎である。口径17.4cm、高台径4.75cm、器高6.8cmをはかる。龍泉窯系。

以上の外に、土壤埋土内(木棺内埋土を含む)から、白磁碗片、青磁壺片、越州窯青磁碗片・土鍾などが出土している。一括資料ではないので、今回はふれなかった。



204 683号土壤棺外副葬遺物模擬配置



205 683号土壤山土遺物 I (1/3)



12



13



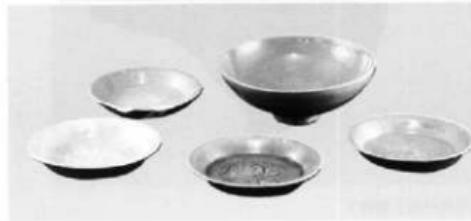
14



15



16



206 683号土壤出土遺物 2



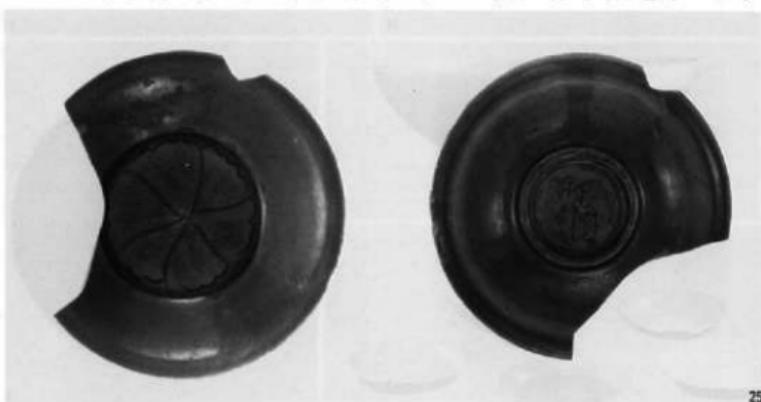
16

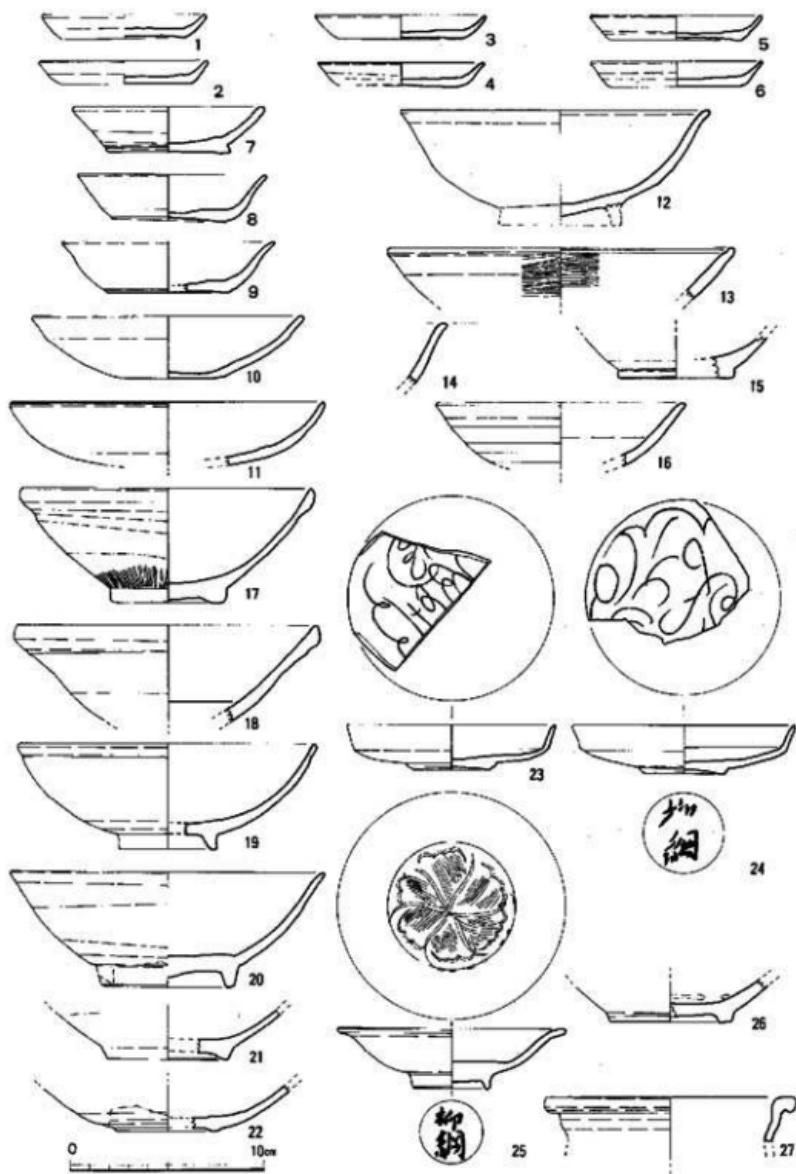
③ 井戸

70号井戸

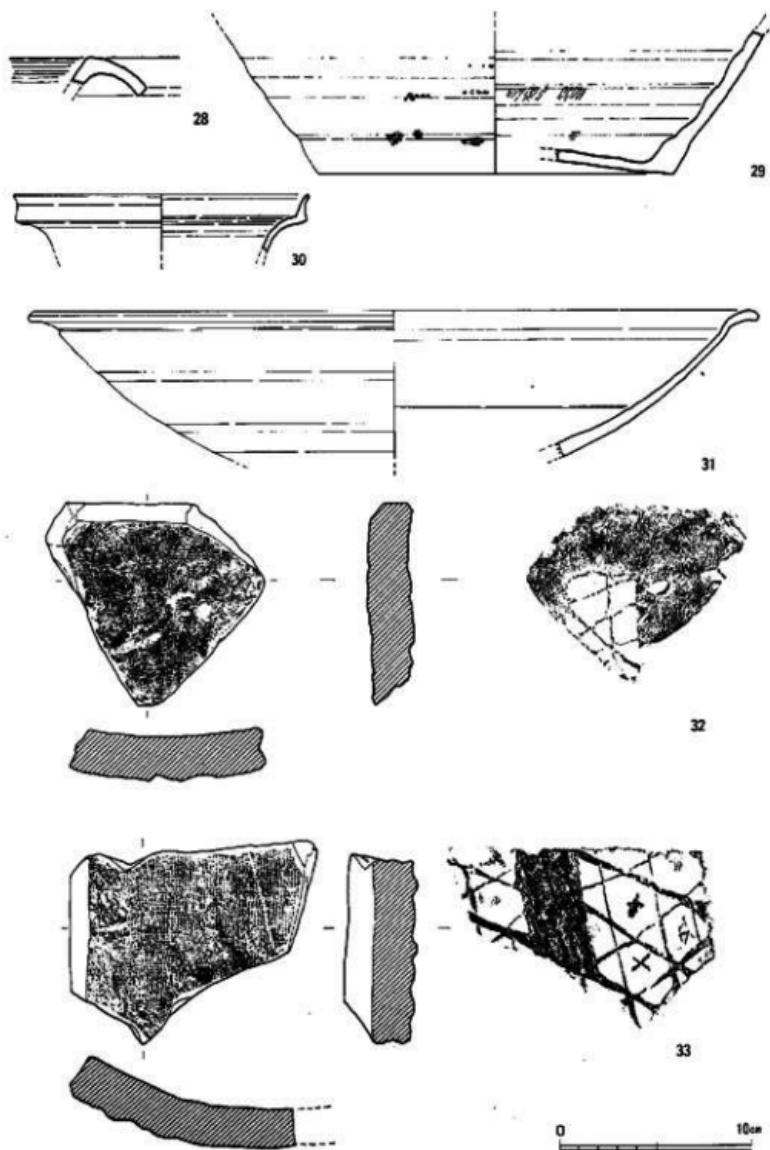
Ⅲ面 D—11区で検出した井戸である。素掘りの井戸で、井筒等確認できなかった。掘りかたは、径125cmをはかる円形である。

1～11は土師器である。1～6は皿で、底部はすべて回転糸切り。口径8.4～9cm、器高1.2～1.26cmをはかる。7～11は、回転糸切り底の坏である。7～9は口径10.05～11.01cm、器高2.28～2.64cm。10・11は丸底気味を呈し、口径も14.01cm、16.2cmと大きい。11は高台付焼で、いわゆる研磨土器である。13は、楠葉型瓦器焼である。密にヘラミガキする。14～16は綠釉陶器である。14は淡茶色の土師質軟胎（脆くはない）に黄緑色の釉をかける。調整はヨコナデで、その上からまばらにヘラミガキを施す。15は平高台で、高台は露胎である。暗青灰色～茶褐色の須恵質硬胎に緑黄色の釉をかける。体部高台際はケズリ、他はヨコナデである。16は、淡褐色の土師質軟胎（脆くはない）に緑黄色の釉をかける。体部外面の中位以下はケズリ、口縁部外面から体部内面上半まで、ヘラミガキ、下半はヨコナデ調整する。17～24は白磁である。17～21は碗、22～24は皿である。24の皿は外底部に「繩綱」銘の墨書きを持つ。25は、青磁皿である。見込みに、片切り彫りと櫛目で花弁を描く。濃灰緑色の釉がむらなくかかる。高台まで施釉し、高台内の底部を露胎とする。「繩綱」銘の墨書きを持つ。26は越州窯系青磁碗である。27は褐釉陶器の壺である。淡灰緑黄色の釉がうすく施釉される。28は瓦質土器である。おそらく鉢の口縁であろう。29は須恵器の底部である。粘土紐巻き上げにより作られるが、体部外面の粘土紐ぎ目に小さい格子目の叩き痕跡が残る。30は須恵器の盤口壺の破片である。31は黄釉陶器の鉢である。白黄褐色の釉がかかる。32～33は平瓦片である。34・35は、須恵器片である。



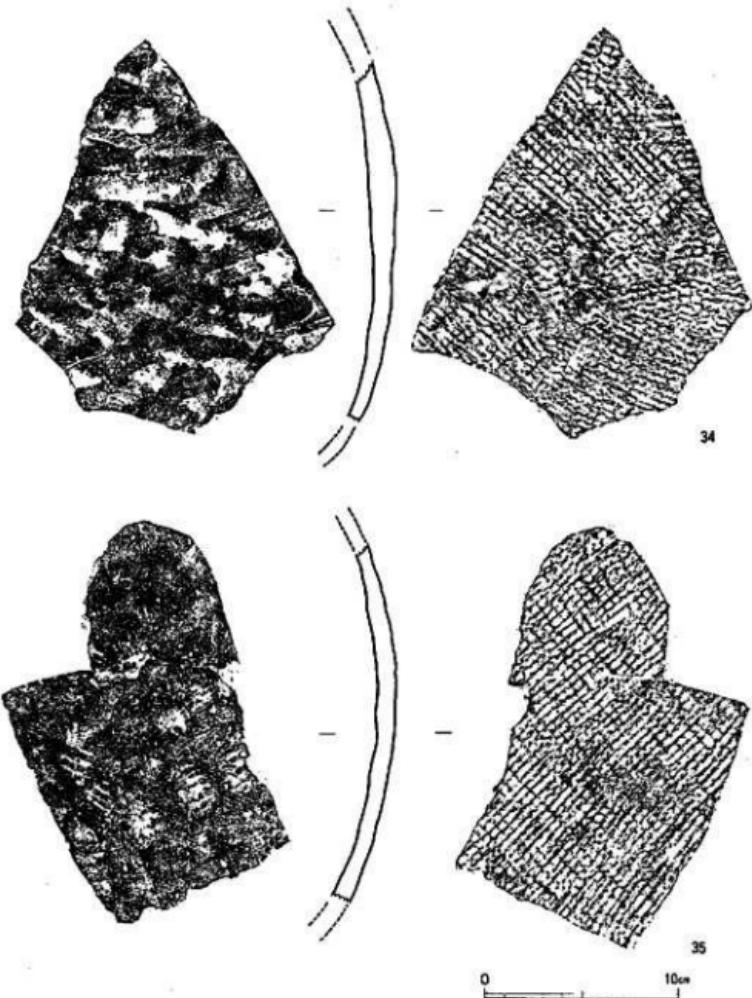


208 70号井戸出土遺物 2 (1/3)



209 70号井戸出土遺物 3 (1/3)

いずれも、人甕の洞部片で、同一個体になる可能性もあるが、接合はできない。34は、外面を目の細かい格子目叩き、内面はあて具を使わず指でおさえていた様で、全面に指頭大の凹みがみとめられる。内面はその後で、かなり強くナデて、凸凹をつぶしている。35も、外面に細かい格子目叩きがみられる。内面の凹凸は34ほどはげしくないが、ナデ消している。



210 70号井戸出土遺物4 (1 / 3)

④ 配石造構

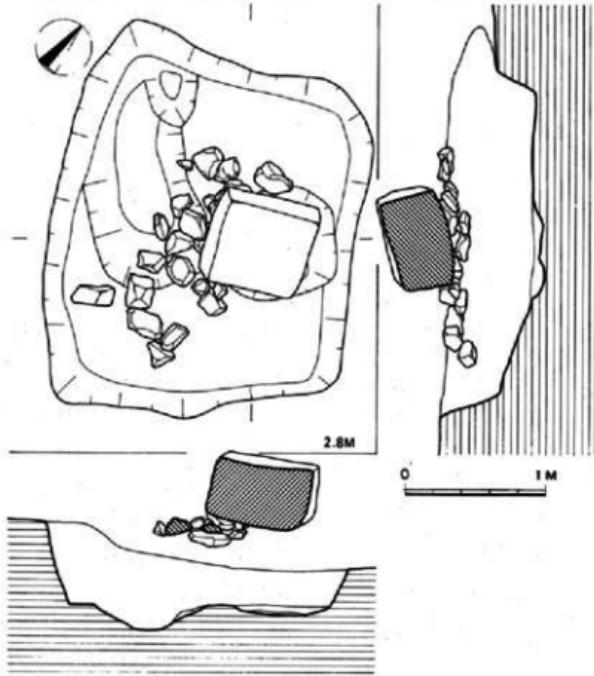
44号配石造構

V面E-05区で検出した五輪供養塔である。地輪のみが出土したが、出土状況から、ほぼ原位置を保っていると思われる。推定すると、まず長辺126cm、短辺105cm、深さ30cm程度の土壌を掘る。それを埋め、長さ70cm、幅40cmの範囲に礫をしく。その上に地輪を掘えたものであろう。

地輪は第2次調査出土五輪塔の中で最大のものであった。33cm×31



211 44号配石造構（西より）



212 44号配石造構実測図（1/20）

cm、高さ21cmをはかる。花崗岩である。上面と四隅とは平滑に整えるが、下面是荒削りのままで凸レンズ状を呈する。

集石部分及び、下の土壤の埋土中から骨粉等の出土はなかった。とは言え、構造的には、墓標の可能性も考えられる。

出土遺物は細片が多く図示するにいたらなかった。

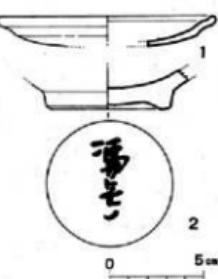
(6) 古代II期の遺構 (一部中世I期に下りうる遺構を含む)

① 土壙

313号土壙

II面D-11・13区より検出した土壙である。ややいびつな円形を呈し、さしわたり90~95cm、深さ30~35cmをはかる。II面上においての検出という点で、古代II期の遺構と考えるには疑問が残るが、出土遺物には中世以降の要素ではなく、土師皿・壺もすべてヘラ切り底であった。よって、一応古代II期の土壙として記述する。

1は、土師皿である。口縁部を、一旦外に折りまげて更に上方に折り返す、いわゆる「て」の字状口縁皿と呼ばれるものである。色調は淡褐色を呈し、比較的精良な胎土でキンウンモを含まない。搬入土器と考えられる。「て」の字状口縁の土師皿は、京都を中



213 313号土壙出土遺物 (1/3)



2

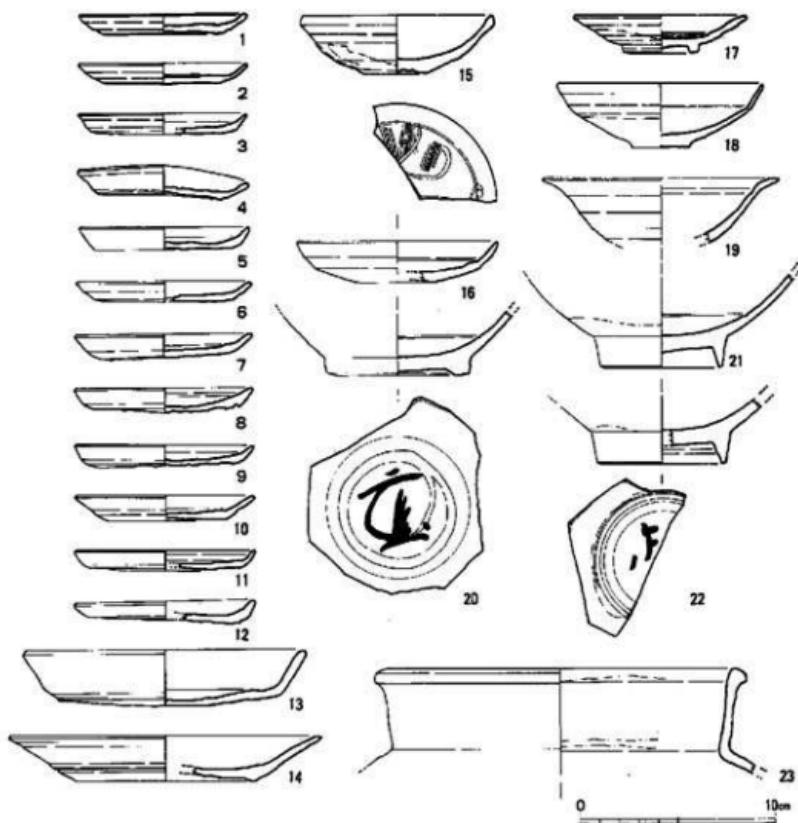
心とした地域に見られるものである。口径が11.3cmとやや大きめのきらいはあるが、小片からの推定復原なので割り引いて考えると、畿内から持ちこまれた可能性もある。2は、白磁碗の底部である。乳灰褐色のあらい胎土に、同様の不透明釉を施したもので、釉表面は気泡を持ってあれどおり、火災にあったものと考えられる。底部付近のみの破片のため、外面はすべて露胎である。外底部に「馮号」の墨書銘を持つ。高台径は、6.6cmをはかる。

434号土壙

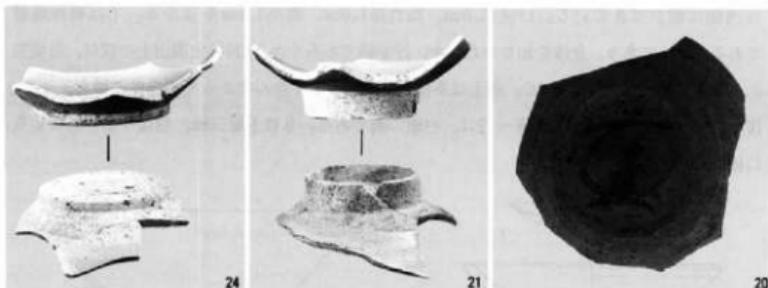
III面D-13区において検出した土壙である。不整形の土壙で、さしわたり80~96cm、深さ19~32cmをはかる。

1~14は土師器である。1~12は皿で、すべて回底糸切り底で、板目压痕を持つ。10のみが直線的に開く体部を持ち、形態的に異なるが、他はすべて同一型式と言える。12は、口縁の一帯にススが付着し、灯明皿として使われていたことを示している。また、底部は糸切りを施した際に切りそなって体部のみ輪状になってしまった為、糸切りした粘土板をあらためて貼付けた様子がみとめられる。口径8.6~9.0cm、底径6.0~8.0cm、器高1.05~1.35cmをはかる。13・14は壺である。13は、やや下り気味の回転糸切り底から直線的に立上る体部をもつ。口径14.6cm、底径11.3cm、器高2.9cm。14は、上げ底気味の回転糸切り底から、外反気味に大きく開く

体部をもつ。色調は、部分的に赤味を持つ白肌色を呈し、胎土は比較的精良で微細なキンウンモをわずかに含む。焼成は良好である。在地産でない可能性が高い。口径16.1cm、底径9.2cm、器高2.4cmである。15は褐釉陶器の皿である。濃い暗褐色の胎土に、暗茶褐色の釉がうすくかかる。16~22は白磁である。16は平底の皿で、灰白色の胎土に鼠色をおびた透明釉がたっぷりとかかる。ガラス光沢が強く、冰裂がみとめられる。見込みには、片切彫りと櫛描文で、おそらくは花文が描かれている。17は高台付の皿で、見込みの釉を輪状にかきとる。20~22は、碗の底部片である。20は、おそらく玉縁口縁碗の底部であろう。遺存している部分で、外面はすべて露胎となる。高台内に墨書がみとめられる。花押であると思われる。22の高台内にも墨書が見られる。かなりすれて薄くなっている。漢字の一部と考えられるが、判読はできない。



214 434号土壤出土遺物 1 (1/3)



215 434号土壤出土遺物

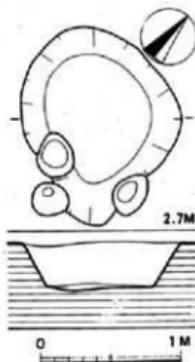
23は、黄緑釉陶器である。灰色で砂粒を含んで粗い胎土に、黄緑色の釉が施される。釉は透明で、光沢もない。壺口縁と思われ、口径17.9cmに復原できる。

434号土壤出土遺物は、土師皿・壺がすべて糸切りである点において中世Ⅰ期的であるが、青磁片を1片も含んでいないことから、古代Ⅱ期として述べた。この造構及び出土遺物の時代観については、中世Ⅰ期に下る要素もあることを一言断っておく。

515号土壤

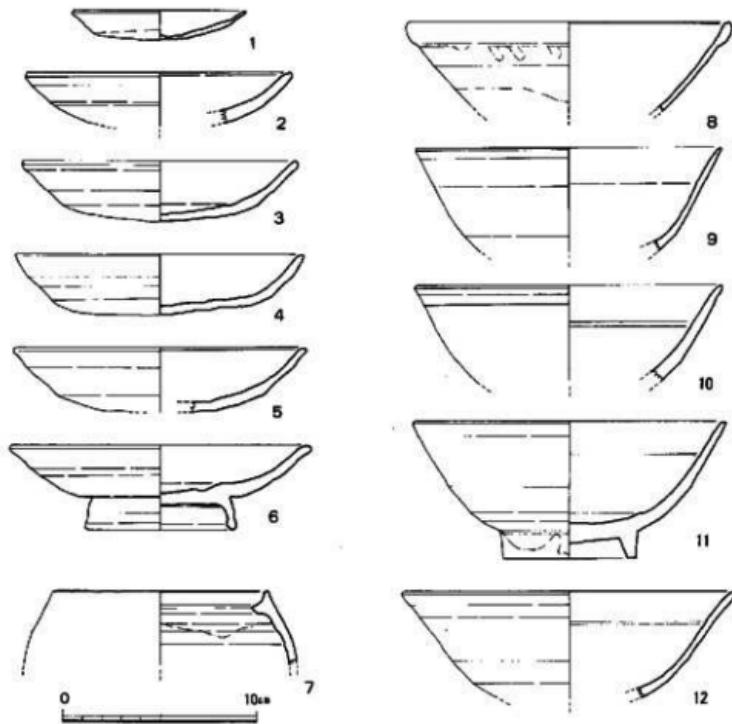
IV面D-14区より検出した。卵形の土壤である。長軸144cm、短軸114cm、深さ36cmをはかる。出土した土師器は、すべて粘土紐巻き上げで、糸切りのものは一片も含まれていない。

1~6は、土師器である。1は皿で、底部には板目圧痕を持つ。内底部はナデ、口縁内面から体部外面はヨコナデ調整を行なう。完形品であるが、若干ひずみがあり、口径9.0~9.5cm、底径6.2~6.8cm、器高1.6cmをはかる。2~5は、壺である。いずれも、粘土紐巻き上げで形を作ったあと、内面はヨコナデし、コテをあてて平滑に仕上げる。底部外面はナデで仕上げる。5の底部外面には、板目圧痕が残っている。体部外面は、ヨコナデを行なう。口径13.8~15.2cm、底径10~11cm、器高3.2~3.5cmである。6は、高台付皿である。円盤に体部をはりつけ、内面側からこの部分に粘土をはってナデ付ける。高台は付け高台で、最後に付けられたものであろう。内底部はナデ、体部内面と外面はヨコナデを行なう。高台はヨコナデ整形する。高台内側は、ロクロ回転でヨコナデを施したものと思われ、ヨコナデ痕跡が円を描いていている。高台内側面のヨコナデ調整は、このロクロナデの後に行なわれ、ロクロナデの周辺部は高台整形時のヨコナデにナデ消されている。高台内側面のヨコナデはかなり強く行なわれ、高台端



216 515号土壤実測図

部内側に稜ができる。口径15.6cm、高台径7.9cm、器高4.4cmをはかる。7は褐釉陶器である。小片であり、全体を知りたいが、行平鍋であろうか。626号土壙出土の様な、急須型になる可能性もある(P. 184)。胎土は茶褐色で砂粒を多く含んであらく、褐色の釉をかける。復原口径は、11cmをはかる。8~12は、白磁の碗である。8は玉縁口縁、他はゆるく外反する口縁を持つ。



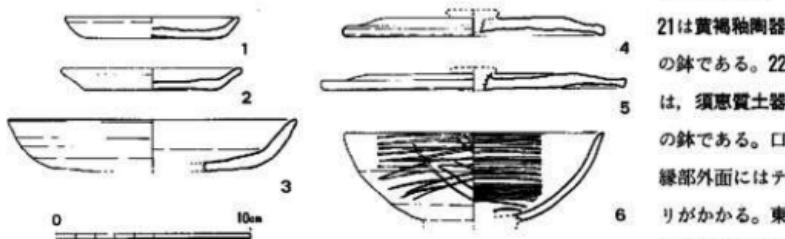
217 515号出土遺物 (1 / 3)

519号土壙

IV面D—13区で検出した上壙である。平面的には、ほぼ円形を示す。径132cm前後、深さ84~87cmをはかる。

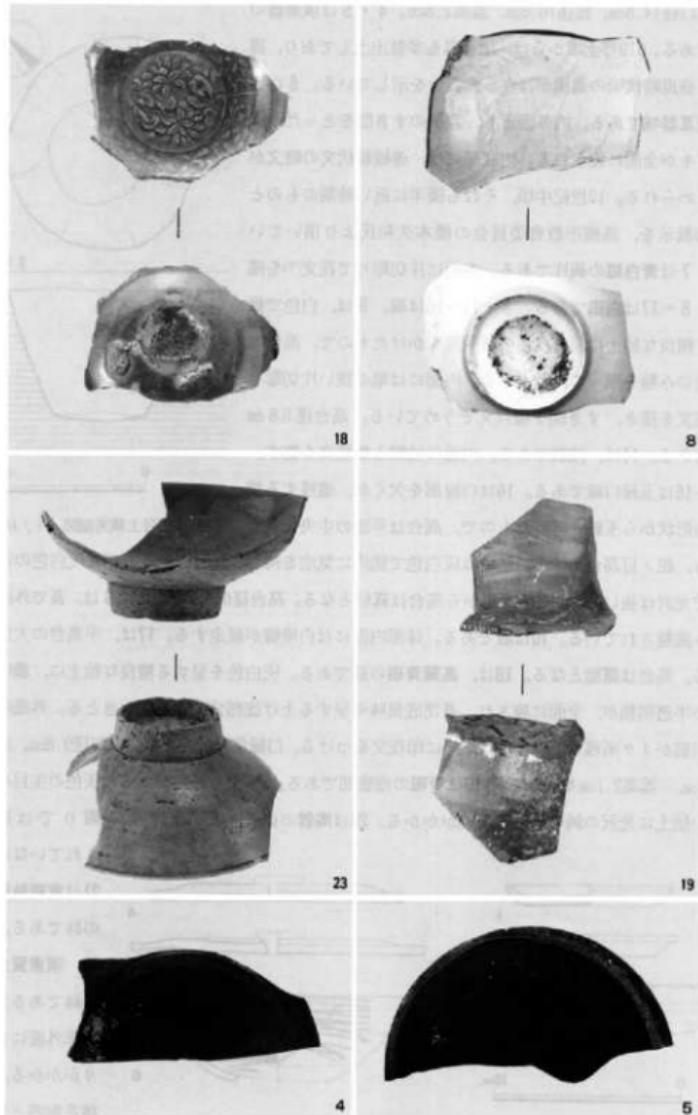
高麗青磁をはじめ、多彩な遺物が出土している。1~3は、土師器である。1・2は回底糸切り底の皿で、体部をヨコナデ、内底部をナデ調整する。口径9.0~9.3cm、底径6.9~7.0cm、器高1.1cmである。3は、底部回転糸切りの坏である。内底部はナデ、体部はヨコナデ調整する。

復原口径14.8cm、底径10.6cm、器高2.8cm。4・5は須恵器の蓋である。519号土壙からは、須恵器も多数出土しており、周辺に奈良時代頃の遺構が存在したことを示している。6は楠葉型瓦器壙である。内外面とも、若干のすき間をとったヘラミガキが全面に施される。内底部には、連続輪状文の暗文がみとめられる。12世紀中頃、それも後年に近い時期のものとの御教示を、高槻市教育委員会の橋本久和氏より頒いている。7は青白磁の碗片である。内面に片切彫りで花文(?)を描く。8~17は白磁である。8・11~16は碗。8は、白色で緻密、精良な胎土に淡青白色の透明釉をかけたもので、高台内中央のみ釉を削って露胎とする。内面には幅の狭い片切彫りで花文を描き、すき間を櫛目文でうめている。高台径5.6cmをはかる。11は、浅碗である。内面に沈線と櫛描文を施す。14~16は玉縁口縁である。16は口縁部を欠くが、遺残する端部の形状から玉縁と考えたもので、高台は平底の中央を浅く削り、蛇目高台とする。胎土は灰白色で胎内に気泡を持つ。釉は緑色をおびた灰白色の透明釉で光沢は強い。体部外下半から高台は露胎となる。高台径6.6cmである。9は、蓋で外面にのみ施釉されている。10は皿である。体部内面には白堆線が縦走する。17は、平高台の大皿である。高台は露胎となる。18は、高麗青磁の皿である。灰白色を呈する精良な胎土に、濃灰緑色の半透明釉が、全面に施され、基部底気味を呈する上げ底部分のみ釉をふきとる。外底部には目痕が4ヶ所残る。内面には全面に印花文をつける。口縁部は輪花となる。口径9.8cm、底径3.2cm、器高2.1cmをはかる。19は青磁の壺底部である。うすく茶色がかった灰色の生日の細かい胎土に光沢の鈍い灰緑色の釉がかかる。20は陶器の壺底部で、遺存する限りでは施釉されていない。

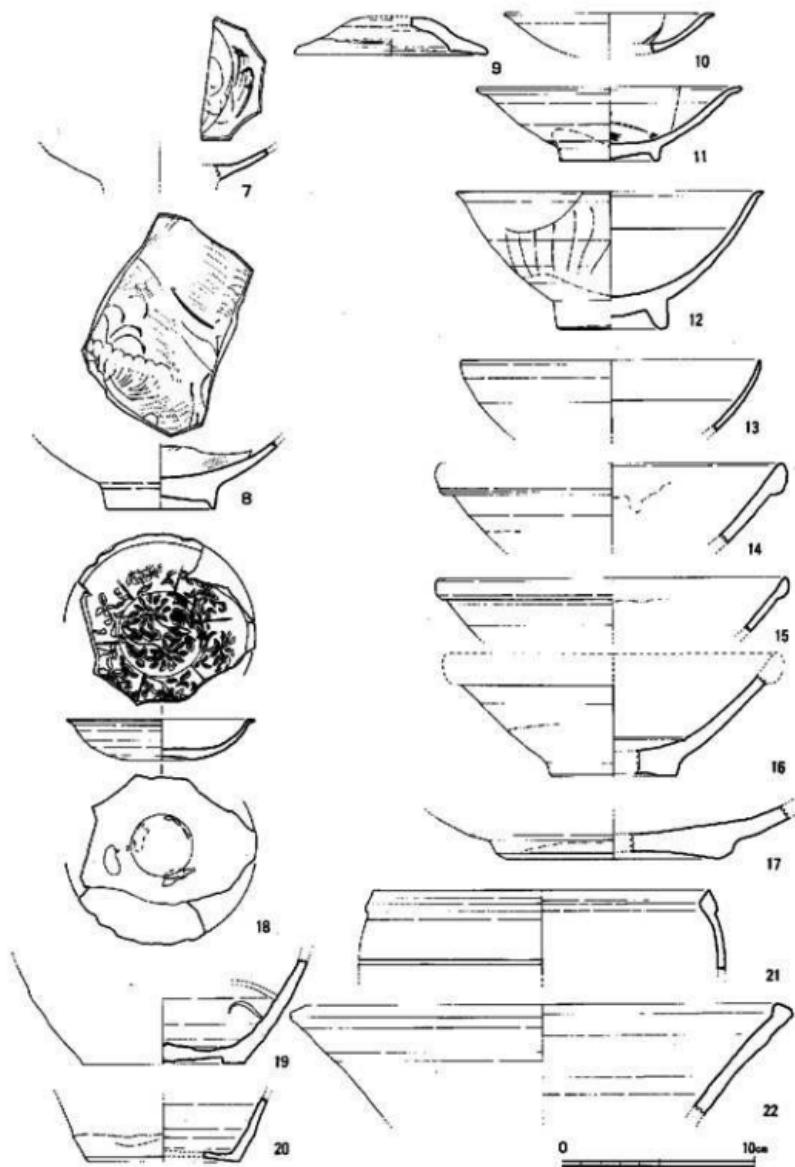


219 519号土壙出土物1 (1 / 3)

21は黄褐釉陶器の鉢である。22は、須恵質土器の鉢である。口縁部外面にはテリがかかる。東播系陶器と思われる。



220 519号土壤出土遺物 2



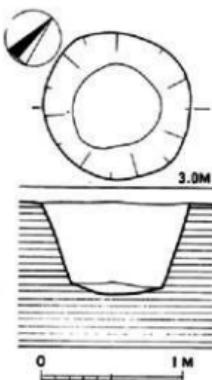
221 519号土器出上文物 3 (1/3)

523号土壤

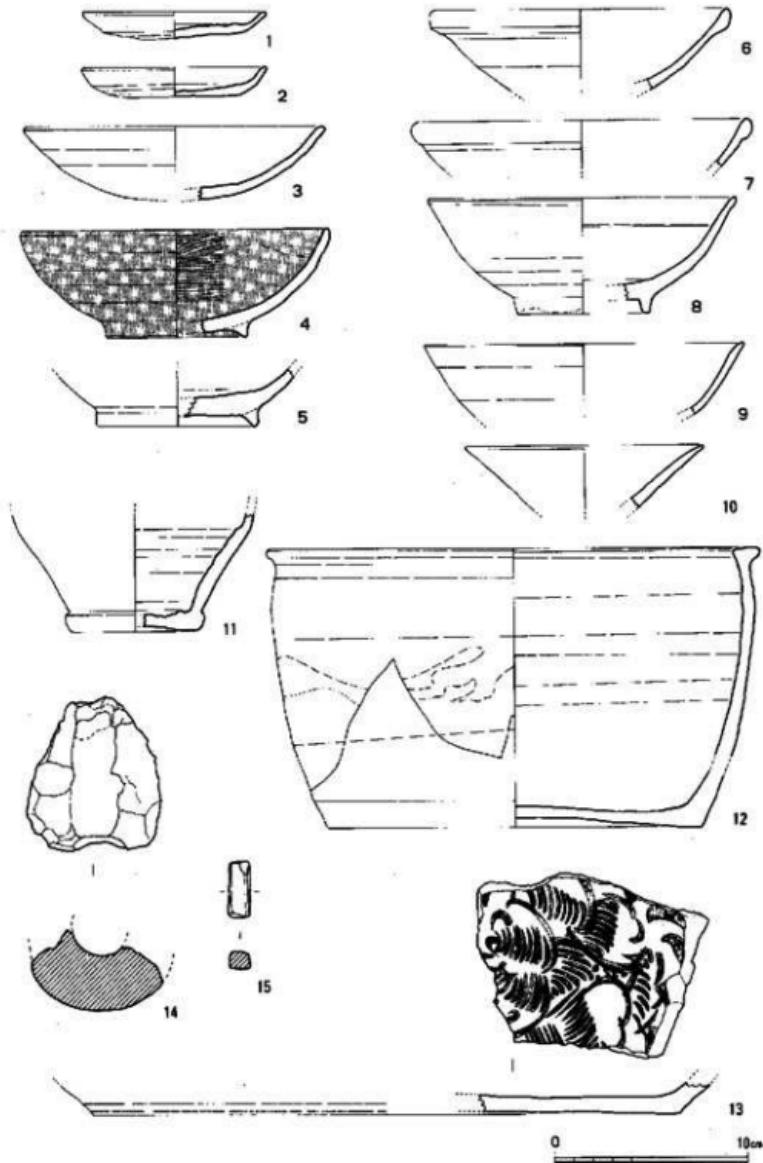
IV面 E—10区より検出した土壤である。平面形は、ほぼ円形を呈する。径105cm前後、深さ56~62cmをはかる。

1~3は土師器である。1・2は皿で、粘土紐巻き上げである。底部には板目圧痕がつく。体部はヨコナデ、内底部はナデ調整する。口径は9.4~9.6cm、底径7.05~7.35cm、器高1.45~1.55cmをはかる。3は壺である。粘土紐巻き上げ整形により、内面はコテをあてて平滑に仕上げる。口唇部から体部外面はヨコナデ、外底部はナデ調整する。口径15.5cm、器高3.8cm。4は黒色土器の壺である。内外面とも炭素が吸着し、黒褐色~黒色を呈する。内底部にはコテの痕跡がみられる。体部内面は密なヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデ、体部は指頭押圧ののちヨコナデ、底部は高台をヨコナデでナデ付ける。口径15.5cm、高台径7.15cm、器高5.55cm。222 523号土壤実測図(1/40)

5は、山茶壺である。高台は断面三角形を呈し、肥厚して底部の外周につけられる。底部は回転糸切りで、高台接合時のヨコナデで半ばナデ消されるが中央付近には残っている。内面は内底部を丸く残して自然釉がかかる。重ね焼きによると思われる。胎土は灰白色で粗い。高台径8.1cmをはかる。6~9は白磁である。7の玉緑口縁は、その破断面に口縁部折り返しに際する孔が、はっきりとみとめられる。10は天目茶碗である。暗褐色のザラついてやや粗めの胎土に内面で黒褐色。外面では茶褐色を呈する釉がかかる。口径は12.3cmと復原される。11は無釉陶器である。茶色~紫褐色を呈し、胎土は砂を含んで粗い。12は黄褐釉陶器の盤である。体部上半から内面に施釉する。13は黄釉鉄絵盤である。14は輪の羽口片である。土師質で、スサを混える。実測図上側にはうすく鉄分が付着し、下側は熱を受けて赤化している。15は滑石の石棒である。長さ2.9cm幅0.9~1.05cmの直方体に面取りする。これらの他に、銅錢が一枚出土している。「皇宋通寶」で、北宋の仁宗の寛元二年(1039年)に初めて鋳られたものである。



223 523号土壤出土遺物



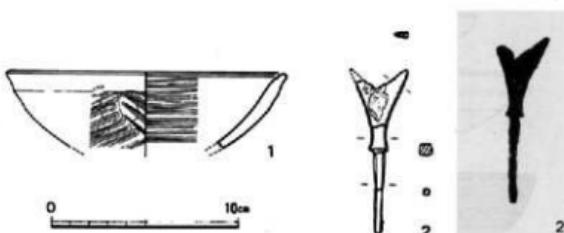
224 523号土壤出土遺物 2 (1/3)

537号土壙

IV面 F-04区で検出
した不整形の土壙であ
る。

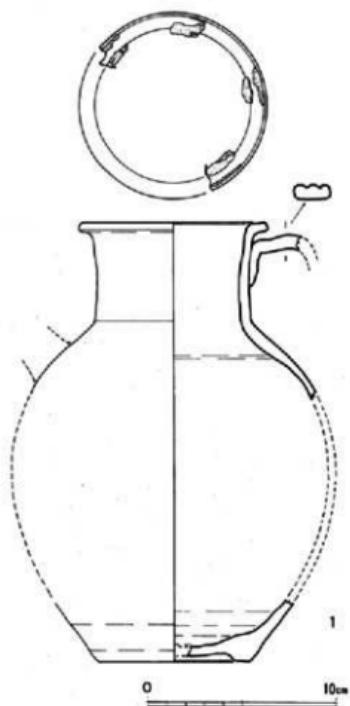
出土した土師壙・皿
には、底部を糸切りす
るもの是一片もない。

1は楠葉型瓦器であ
る。2は雁又式の鐵鑓
である。完形品で、長さ8.73cmをはかる。



225 537号土壙出土遺物（1／3）

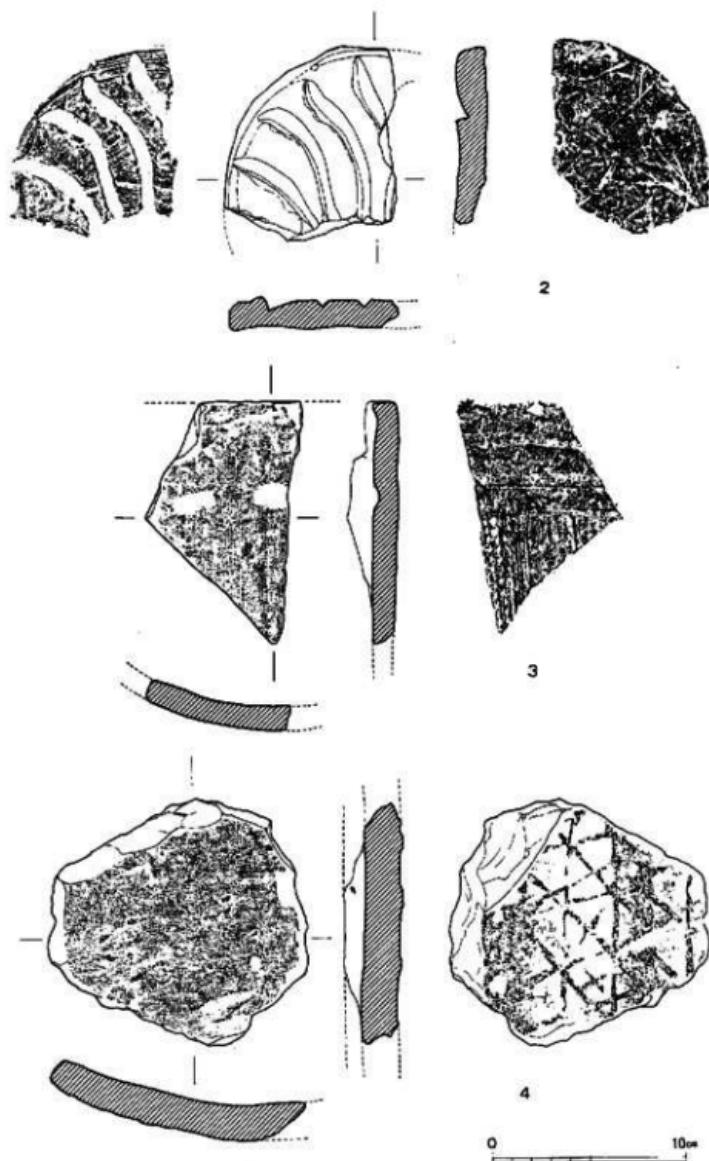
540号土壙



226 540号土壙出土遺物（1／3）

IV面 F-01区・03区で検出した橢円形の土壙
である。79号井戸に切られる。長軸約75cm、深
さ22~35cmをはかる。

出土した土師皿・壙は、回転糸切り底のもの
である。1は、青磁水注である。口縁部から、
肩部にかけてと、底部の破片のみで胴部片を欠
く。灰褐色で緻密な胎土に、緑灰色の半透明釉
をうすくかけている。口径9.7cm、底部8.1cmを
はかる。越州窯系と考えられる。2~4は瓦で
ある。2はおそらく鬼瓦の様な道具瓦であろ
う。太い沈線で放射状の孤線が描かれる。3は
平瓦である。内面（上面）は布目をとどめる。
外面は、網目タタキで仕上げた後、板状工具で
後にナデてタタキ痕を消し、端部は横方向にも
ナデ消しをする。4も平瓦である。内面（上面）
は布目をとどめる。上面（下側）には、大きな
方形の格子目タタキ痕が残る。古代（奈良時代
～平安時代）の瓦である可能性は高いと思われ
る。540号土壙出土の陶磁器は白磁がそのほと
んどを占めているが、1点だけ同安窯系青磁碗
の小片がまじっていた。



227 540号土填出土遗物 2 (1 / 3)

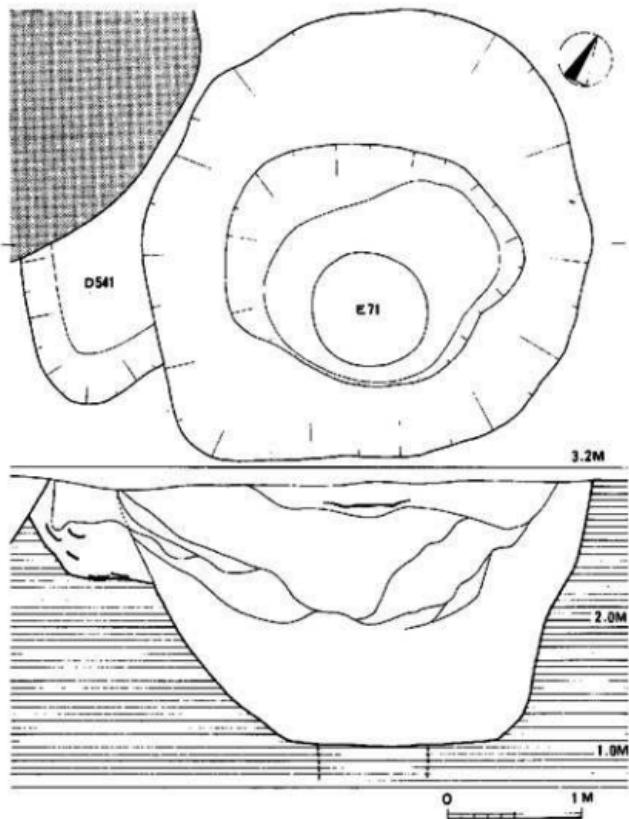
0 10cm

541号土壙

IV面E-09区より、9号井戸、71号井戸に切られて検出された土壙で、一部が残っていたにすぎない。炭・灰を含む黒褐色土層から、大量の遺物を出土している。

1~63は土師器である。1~36は皿で、5~8、18、36は回転糸切り底、2はヘラ切り底で、他は粘土紐巻き上げ技法によっている。5~8は口径8.6~8.7cm、底径6.3~7.0cm、器高1.1~1.45cmである。他は口径8.0~9.9cm、器高1.05~1.7cmをはかる。15は外底部・内底部に墨書きを持つ。外底部の墨書きは、中央に「匱」(カ)と大書する。その左上と内底部にも墨痕が認められるが、判読できない。(Fig. 233-1.) 37~62は壺である。44~58のみが底部糸切りで、その他は、粘土紐巻き上げ整形で作られる。44~48は、口径15.1~15.8cm、底径8.2~10.1cm、器高3.1~3.75cm。37~43・49~62は、口径14.0~16.6cm、器高3.0~4.0cmをはかる。

63は研磨土器の壺である。64は綠釉陶器である。灰色の上師質軟胎に、淡緑色の釉が全面施釉される。内底部・体部はヘラミガキ、高台はヨコナデを施す。高台の豊付き部は、若干内傾し、わずかに凹みを持つ。高台径6.2cm。65~75は、白磁で67・68は体部外面に、放射状の綫文を配している。

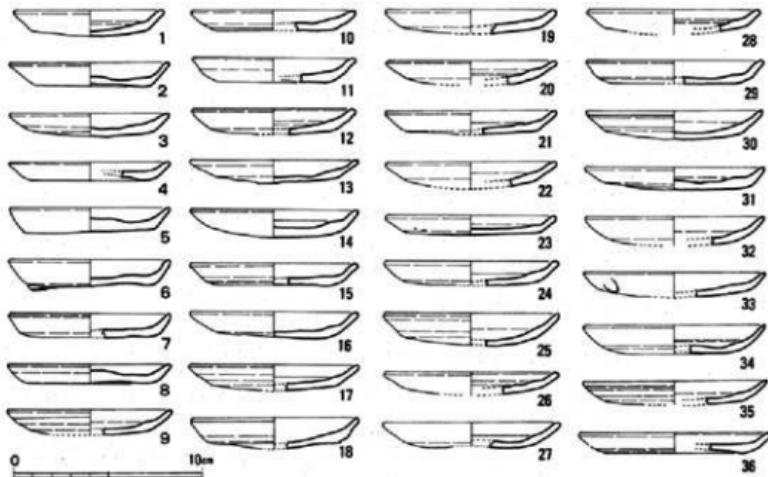


228 541号土壙実測図 (1 / 40)

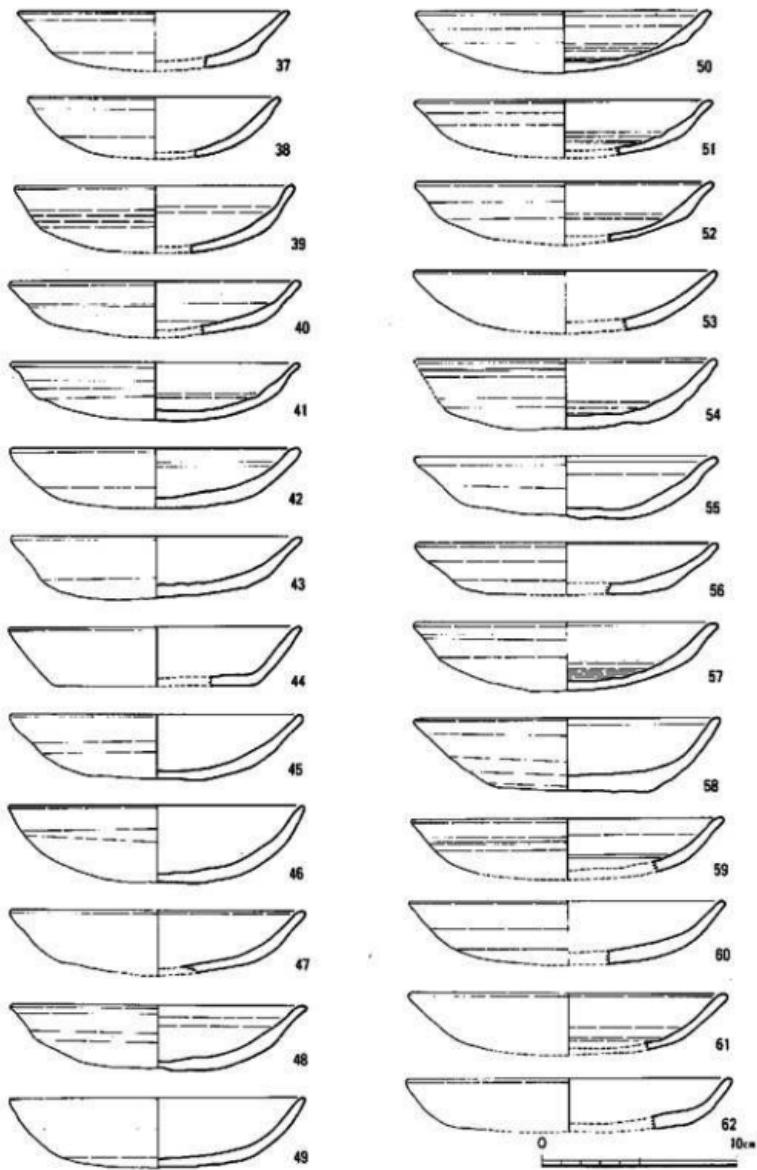


229 541号土壤土層断面（南東より）

76は、黄釉鉄絵の盤である。541号土壤の壌底に、破片が重なり合って出土した。割れたものを集めてすべてた状況を示している。釉色は、黄灰色を呈する。ガラス光沢は乏しく、透明感もない。体部上半から内面全体に施釉する。見込みと体部内面に鉄絵が描かれている。鉄絵は黄茶褐

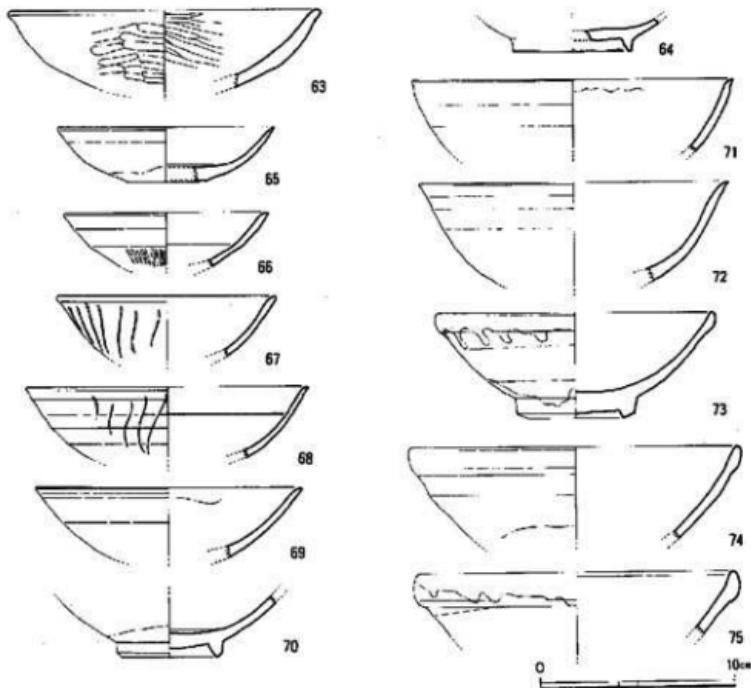


230 541号土壤出土遺物1 (1 / 3)

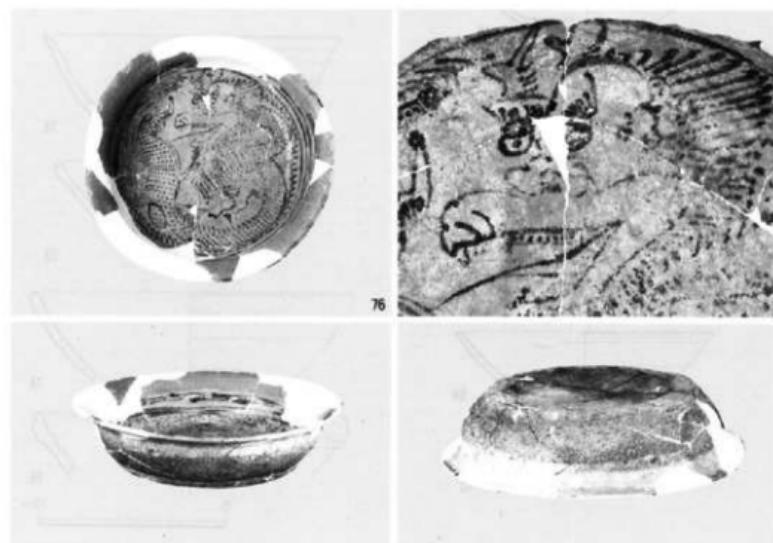
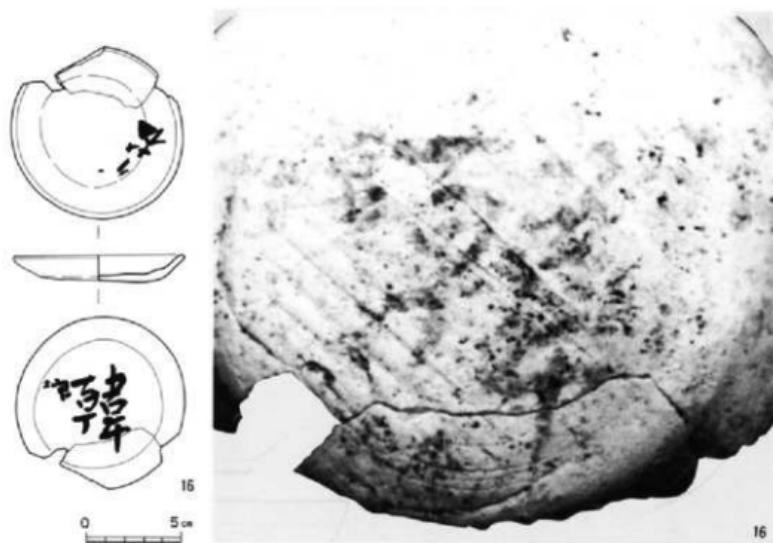


231 541号土壤出土遺物 2 (1 / 3)

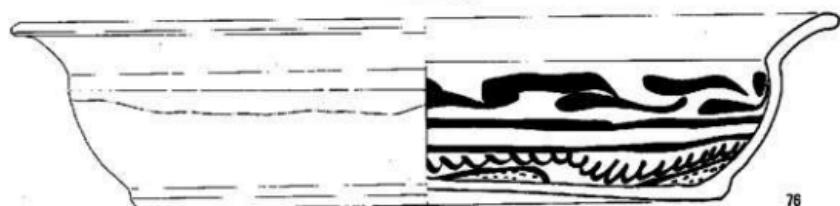
色を呈し、にじみが出てシャープさにかける。見込みには、龍が描かれている。龍は、右回りに体を大きくうねらせ、顔は左を向き、大きく口をあけて舌を見せている。表情はユーモラスで、見込みを一杯に使って描かれている。体部内面には、雲文があしらわれている。天空を飛翔する龍の姿を象徴しているのであろう。胎土は黄茶灰色で、特に目立つ程砂粒を含んではないが、全体的に粗い。体部外面の露胎部は、テリを持ち赤褐色を呈す。底部はほぼ完存、口縁部は全体の約2分の1を欠いている。口径42.8cm、底径30.2cm、器高9.8cmをはかる。



232 541号土壙出土物3 (1 / 3)



233 541号土壤出土遺物 3 (左上…1 / 3)



76

0 10cm

234 541号土塘出土遗物 4 (1/3)

542号土壤

IV面E-07区で検出した不整形の土壤である。長軸102cm、短軸64cm、深さ51~56cmをはかる。

1~3は土師器である。1・2は皿で底部糸切り。1の体部は直線的に開き、2の体部は内湾する。口径9.5~10.0cm、底径6.3~8.1cm、器高1.4~1.55cmである。3は壺である。底部は回転糸切りする。内底部はナデ調整し、体部をヨコナデする。口径14.4cm、底径10.7cm、器高2.55cmをはかる。4~15は白磁である。4は皿である。底部を欠くが、おそらくは平底皿になろう。小片の為、数はわからぬが、口縁に刻みを入れて輪花につくる。5も平底皿である。底部外面は露胎となる。6は、高台付皿である。高台脇まで施釉される。見込みは、輪状に釉をかきとっている。7~15は碗である。7~10は玉縁口縁を持つ。10の玉縁断面には、口縁部を折り返して、肥厚させ、玉縁に作った痕跡が、明瞭にみとめられる。11・12は、小さく外方にね出た口縁を持つ。12の内面には櫛描文が施されている。13~15は底部片である。13は平高台である。高台内は、回転ケズリによってわずかに凹む。下部下位、高台脇近くまで施釉し、高台は露胎である。16は青白磁である。白色で精良な胎土に、淡青灰色の透明釉をかける。外底部には、花押と思われる墨書きがかれている。17・18は青磁である。17は、うすく引き出された体部が直線的に大きく開いて、やや外方に張った尖り気味の口縁部をつくる。体部には、彫りの深い印花文を施す。灰白色の胎土に、濃灰緑色の半透明釉がかかる。耀州窯系のものであろう。18は、壺の底部である。淡黄灰白色の精良な胎土に、淡暗緑灰色の半透明釉がかけられる。越州窯系と思われる。19は、陶器の盤である。釉は淡暗緑灰色を呈し、釉表面には水裂がみとめられる。胎土は淡褐灰色で、砂粒を含んで粗い。復原口径34.8cmをはかる。

出土した土師器は、すべて回転糸切り底である。これは、前節(P. 18)の定義から言えば、中世Ⅰ期の要素であるが、青磁が龍泉窯系の小片1片のみである点から古代Ⅱ期とした。

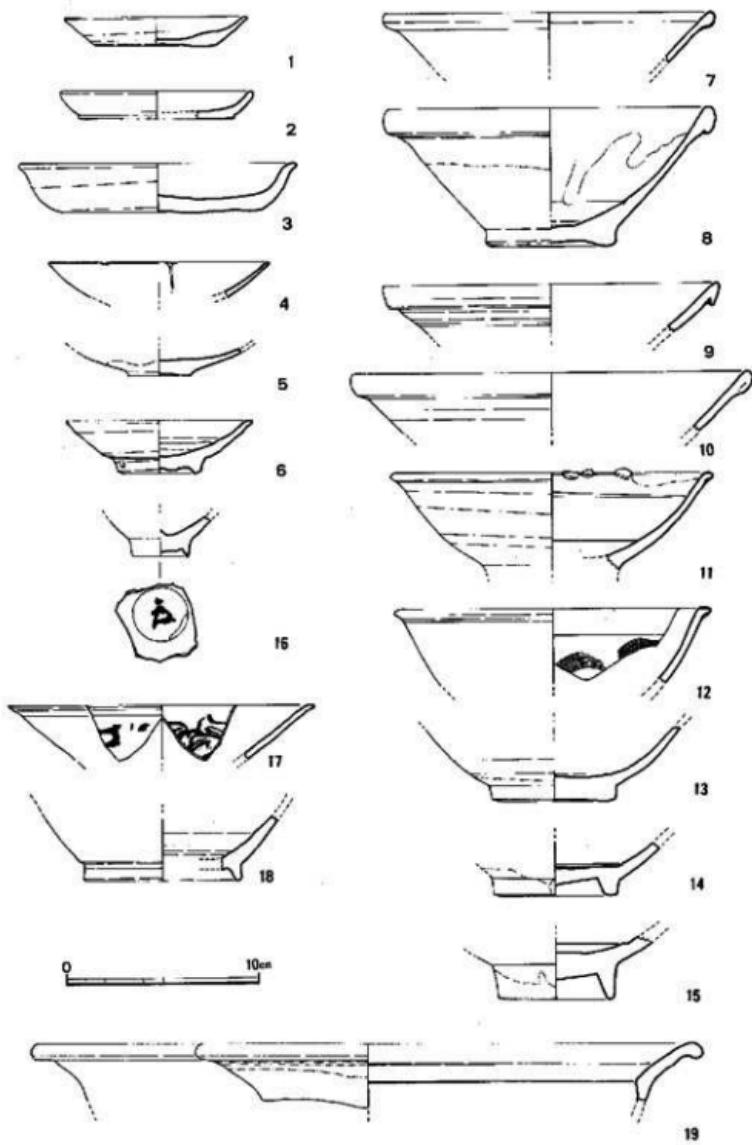
543号土壤

IV面E-08区より検出した土壤である。平面形はややいびつな楕円形を呈し、長軸136cm、短軸96cm、深さ36~47cmをはかる。

1~4は土師器である。1・2は、粘土紐巻き上げ整形による皿である。内底部・外底部はナデ調整、体部はヨコナデ調整を施す。口径9.4cm、底径6.6~6.95cm、器高1.6~1.75cmをはかる。3・4は、粘土紐巻き上げ整形による壺である。外底部はナデ調整、体部外面から口唇部内面はヨコナデ調整、内底部から体部内面には、コテをあてて平滑に整える。3の外底部には、板目圧痕が残る。口径15.5~15.6cm、底径9.4~10.9cm、器高3.25~3.6cmである。5・6は瓦器で

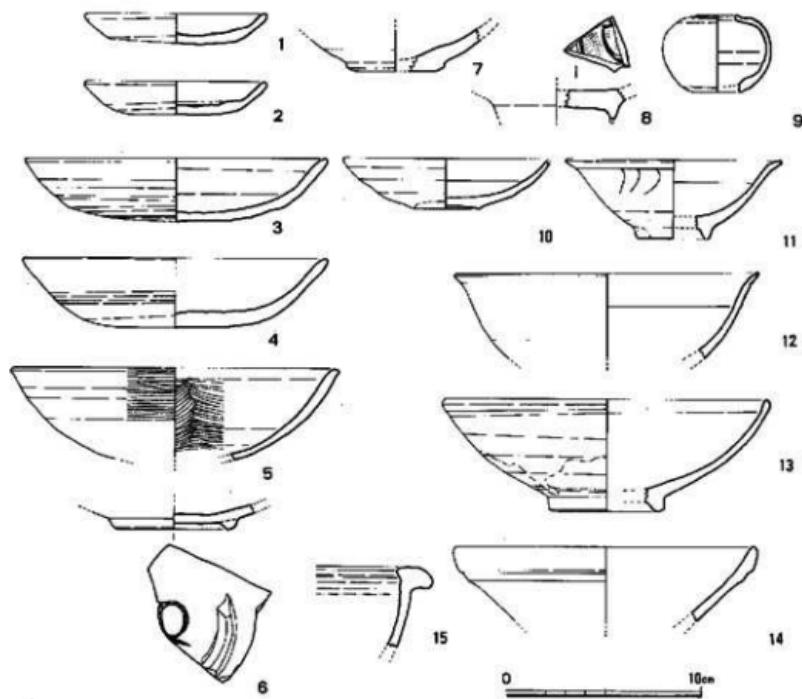


235 542号土壤実測図



236 542号土壤出土遺物 (1 / 3)

ある。5は、体部の約4分の1片である。内面は密にヘラミガキを施し、口唇部のみヨコナデで丸味をつける。外面は、口唇部から体部上半を密にヘラミガキ、体部下半をナデ調整し、高台脇をヨコナデする。暗灰色を呈し、体部上半から口縁にかけては、銀化する。復原口径16.9cm。6は、断面が丸味をおびた台形の低い高台を持つ。外底部に墨書きが残る。花押であろう。7は、須恵質土器の平底碗である。底部は、糸切り痕を残す。体部はヨコナデする。胎土には砂粒をまじえ粗く、明灰色を呈する。復原底径5.0cm。8は、青白磁の碗底部である。白色で精良な胎土に、青味をおびた透明釉がかかる。外底部の中央付近は、丸く釉をかきとり、露胎となる。見込みには、片切彫りと櫛目文がみられる。9～14は、白磁である。9は小壺である。灰白色で、微細な黒い粒子を混じえる粗い胎土に、白濁した透明釉を施す。内面および外底部は、露胎である。口径1.9cm、底径2.6cm、器高4.0cmをかる。15は、褐釉陶器の鉢である。体部外向および口縁部に、淡茶褐色の釉がかかる。胎土には、径1mm以下砂粒が多くまじり、暗灰白色を呈する。小片である。

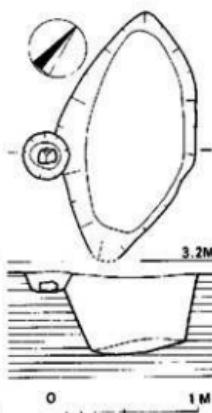


237 548号土壤出土遺物 (1 / 3)

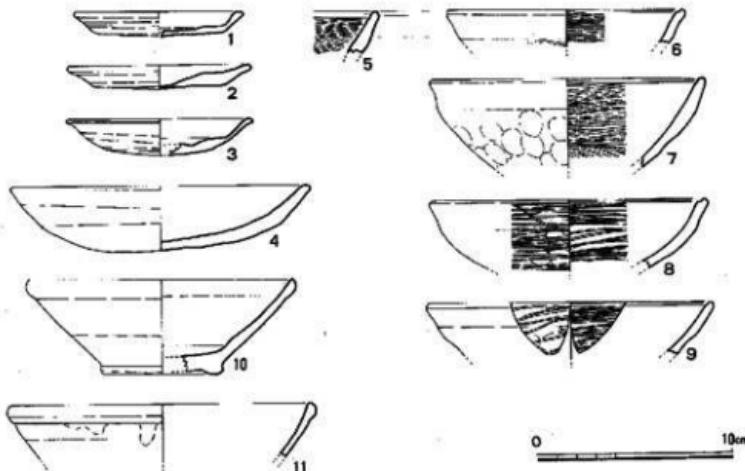
544号土壌

IV面 E-07区より検出した土壌である。長軸172cm、短軸98cm、深さ37~50cmをはかる。

1~4は土師器である。544号土壌出土の土師器には、底部を糸切りするものは一片も含まれていなかった。1~3は皿で、口径8.7~9.6cm、底径5.6~6.8cm、器高1.2~1.9cmである。4は環で、口径15.4cm、器高3.4cmをはかる。5~9は、瓦器である。いずれも縞葉型瓦器の端である。5は小片。内面を密にヘラミガキ、外面は口縁部をヨコナデ、体部はナデ調整する。6も同様な調整を行なうが、外体部にもまばらなヘラミガキがみとめられる。復原口径12cm。7も同様な調整であるが体部外面は指頭でおさえる。復原口径14.3cm。8は、内外面とともにやや間のあいたヘラミガキを施す。高槻市教育委員会の橋本久和氏には、11世紀中頃との御教示を頂いている。復原口径14.6cm。9も8と同様の調整を行なうが、8と比べると、体部外面のヘラミガキは更にまばらになっている。復原口径14.5cmをはかる。壁表は、いずれも黒灰褐色を呈している。10・11は白磁の碗である。10は口径13.9cm、高台径5.9cm、器高4.9cm、11は復原口径15.8cmをはかる。また、この造構からは一片の青磁も出土していない。

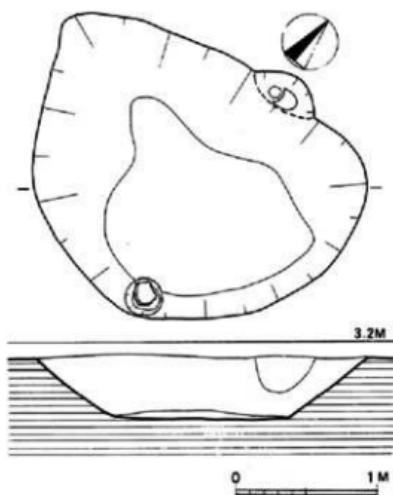


238 544号土壌実測図



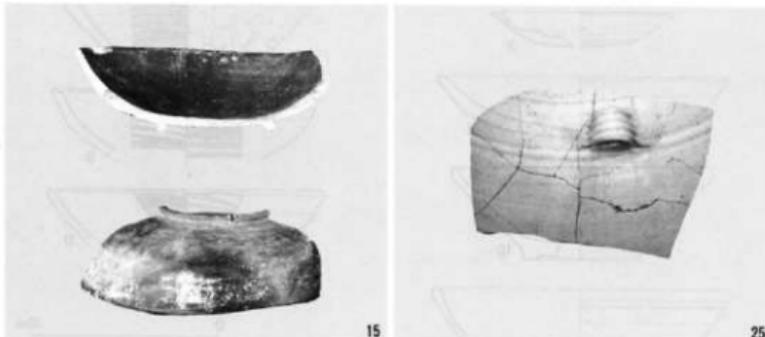
239 544号土壌出土遺物 (1 / 3)

562号土壇



240 562号土壇実測図 (1 / 40)

に比較的密なヘラミガキを施す。17は椭円型瓦器壺の小片である。18~23・25・26は、白磁である。18・19は小壺の蓋で、径3.0~3.1cmをはかる。鋸部から下は露胎となり、下面は静止糸切り痕ととどめている。20~23は確である。25は四耳壺である。胴部径20.1cmをはかる。把手のつく肩部の上下には、それぞれ一条の沈線がめぐる。26は、壺(?)の底部である。外底部は、

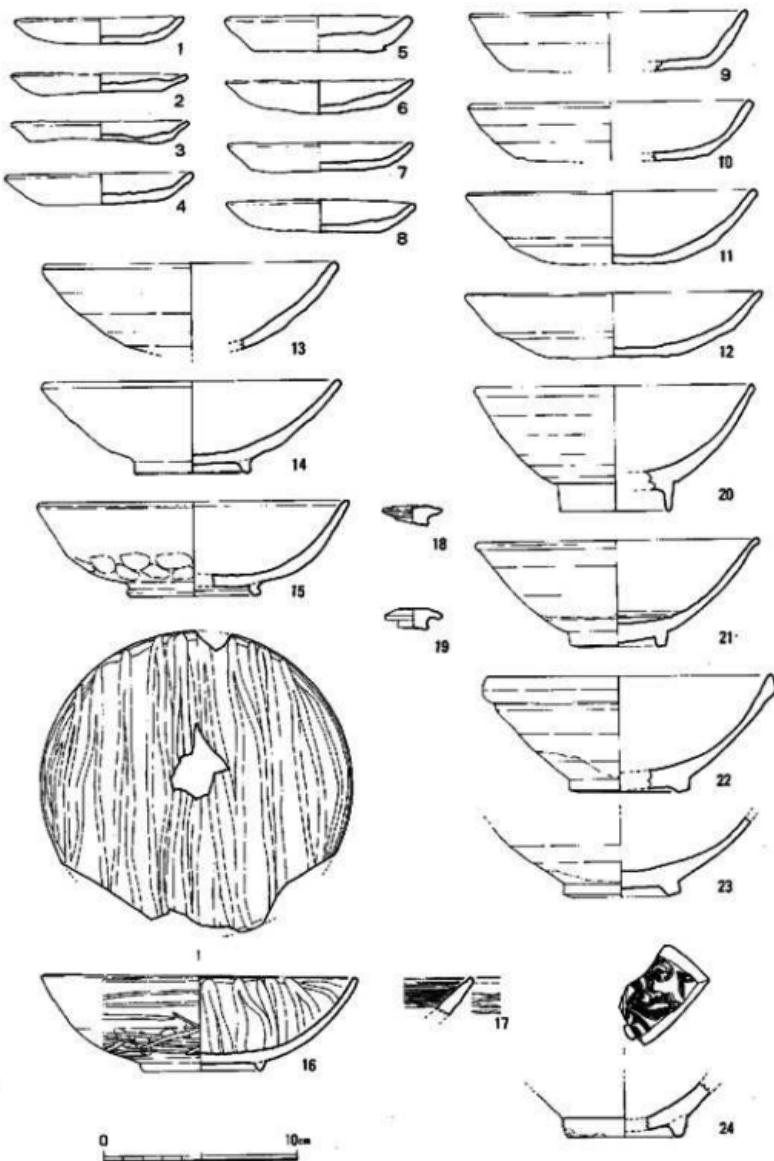


241 562号土壇出土遺物 (1 / 3)

IV面 E-03・05区で検出した不整形の大型土壤である。長軸256cm、短軸204cm、深さ36~47cmをはかる。

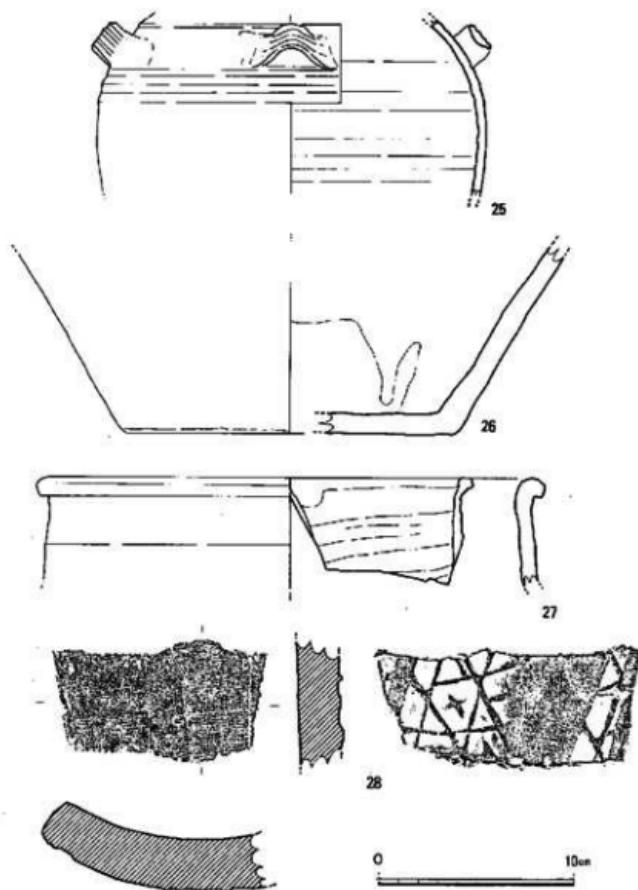
1~14は、土師器である。1~8は皿で、5は回転糸切り底である。口径8.7~9.8cm、器高1.2~1.65cmをはかる。9~12は壺である。10は、底部回転糸切り。口径15.45~17.4cm、器高3.15~3.9cmである。13・14は研磨土器の壺である。13は高台を欠くが、本来は付け高台を持つものと推定できる。口径15.3~15.5cmである。15~17は瓦器である。15は内面をヘラミガキ（単位が明瞭につかめない）、口唇部を横にヘラミガキ、体部外面上半はヨコナデ、下半は指頭でおさえ、高台をヨコナデする。16の内面のヘラミガキは、一方向のジグザグの暗文状を呈する。体部外面も横位

である。17は四耳壺である。胴部径20.1cmをはかる。把手のつく肩部の上下には、それぞれ一条の沈線がめぐる。26は、壺(?)の底部である。外底部は、



242 562号土壤出土遺物 2 (1 / 3)

露胎である。底径16.8cmをはかる。24は、青磁である。灰色の胎土に黄緑色の半透明の釉が施される。内面には、印花文がみとめられる。全面施釉し、脣付だけをふき取って、露胎としている。高麗青磁か。27は、黄褐釉陶器の壺(?)の口縁である。復原口径39.6cmをはかる。28は瓦片である。内面(上面)とは布目痕がつく。外面には、大きめの格子目叩きがなされる。ヘラで面取りした小口をとどめている。大きめの格子目叩きを持つ瓦片は、概して古代の前半の頃に属すると考えられる。

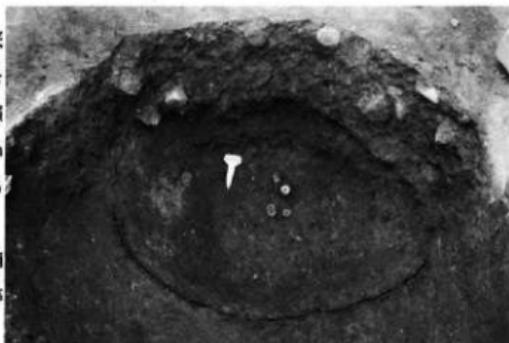


243 562号土壤出土遺物3 (1 / 3)

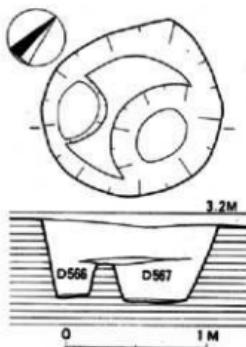
566号土壙

IV面 F-02区の561土壙の底部から検出された2つの土壙をそれぞれ566号土壙、567号土壙とした。566号土壙は径約40cmをはかる。柱穴状のものである。

出土遺物は、土師壺・皿・袖葉型瓦器小片、白磁片、銅錢等で量的には多くない。

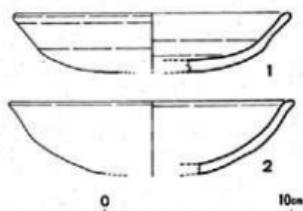


244 566号土壙（東より）

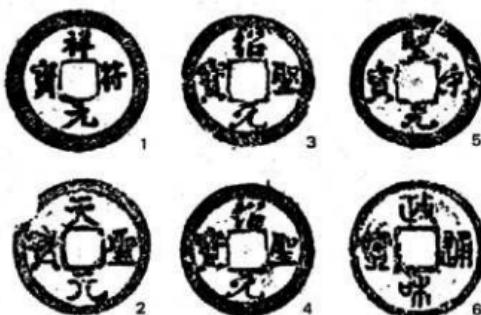


245 566号土壙実測図

1・2は土師器の壺である。口径14.85～15.3cm、器高3.15～4.05cmをはかる。銅錢は、「開元通寶」1（621年初鑄）「祥符元寶」1（1008年初鑄）、「天聖元寶」1（1023年初鑄）「治平元寶」1（1064年初鑄）、「聖宋元寶」3（1068年初鑄）、「元祐通寶」3（1086年）「紹聖元寶」4（1094年初鑄）、「元符通寶」1（1098年初鑄）、「聖宋元寶」1（1101年初鑄）、「政和通寶」1（1111年初鑄）、解読不能2の20枚が出土した。この内、「政和通寶」1、「紹聖元寶」3、「元祐通寶」1、「元祐通寶」1、「元符通寶」1、「開元通寶」1の9枚が、差し錢の状態で出土している。



246 566号土壙出土遺物（1／3）



247 566号土壙出土遺物（1／1）

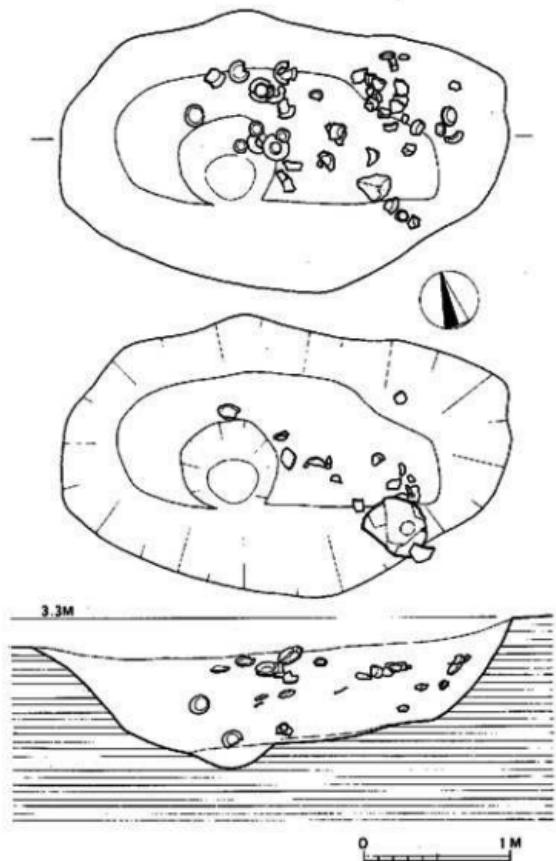
94年初鑄）、「元符通寶」1（1098年初鑄）、「聖宋元寶」1（1101年初鑄）、「政和通寶」1（1111年初鑄）、解讀不能2の20枚が出土した。この内、「政和通寶」1、「紹聖元寶」3、「元祐通寶」1、「元祐通寶」1、「元符通寶」1、「開元通寶」1の9枚が、差し錢の状態で出土している。

569号土塙

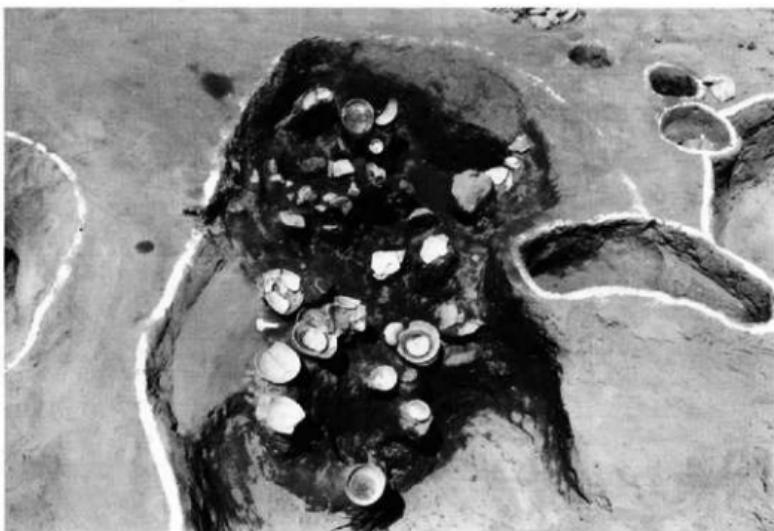
IV面 E—05・07区で検出した遺構である。長椭円形の平面を呈し、長軸310cm、短軸188cm、深さ64~80cmをはかる。

遺物は、土師壺を主に多量に出土しており、一部を図示するにとどまった。1~6は土師器の壺である。底部を糸切りするものは、一片もまじっていない。1・3~5の底部には、粘土紐を巻きあげた痕跡が明瞭にみとめられる。いずれも、内面はコテで整形、口唇部から体部外面向までヨコナデする。4の口縁部内面には、コテによる沈線状のキズが、外面にはヘラ状工具によるキズ(沈線?)がみられる。口径15.0~15.9cm、器高3.0~3.8cmをはかる。7~9は、瓦器である。

7は内面に密なヘラミガキを施し、外面はヨコナデの上にまばらにヘラミガキを行なう。外底部はヨコナデの上に板目圧痕。付高台の端部にも板目圧痕がつく。口唇部内面から体部外面、高台外面まで、炭素の吸着が良く銀化する。在地産である。口径16.0cm、高台径7.2cm、器高4.9cm。8は、楠葉型瓦器である。内面を密にヘラミガキ、外面はややあらいが比較的密なヘラミガキを行なう。色調は黒灰色を呈する。口径15.5cm。高槻市教育委員会の委本久和氏より11世紀中頃のものとの御教示をいただいている。9是在地産である。10~22・24~26は白磁である。10~17は碗であ

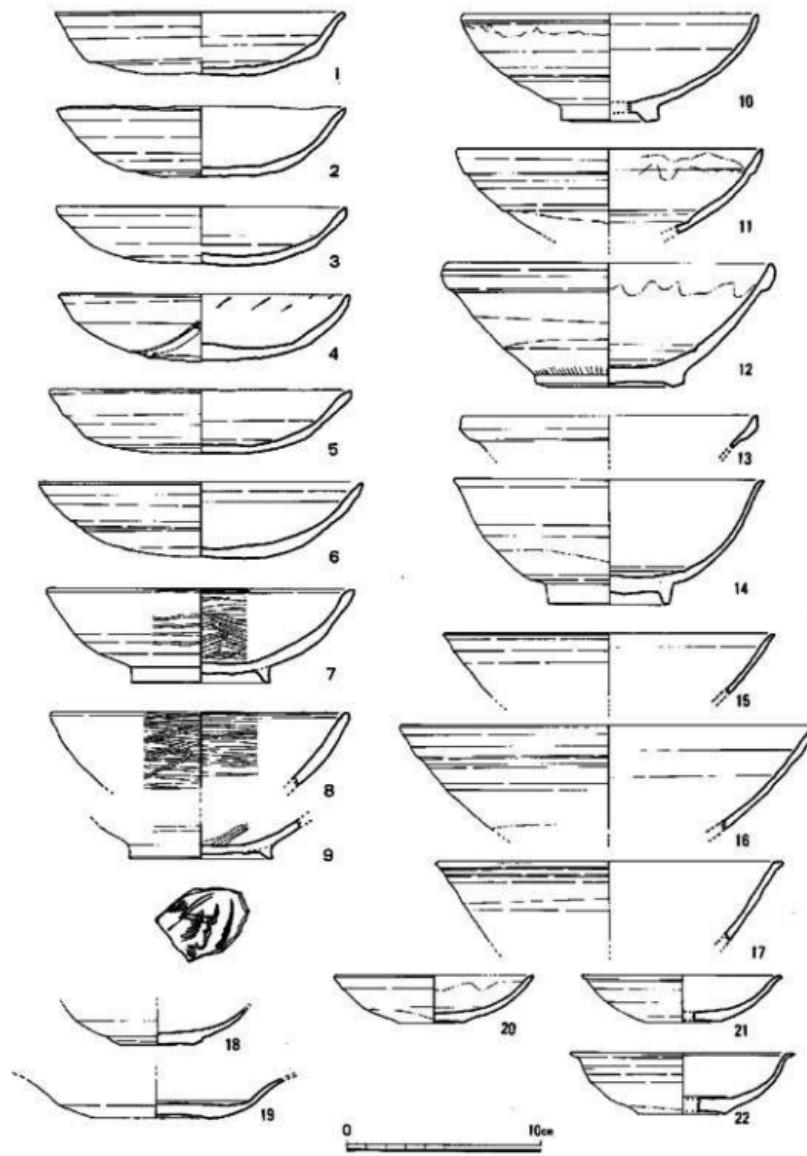


248 569号土塙実測図 (1 / 40)



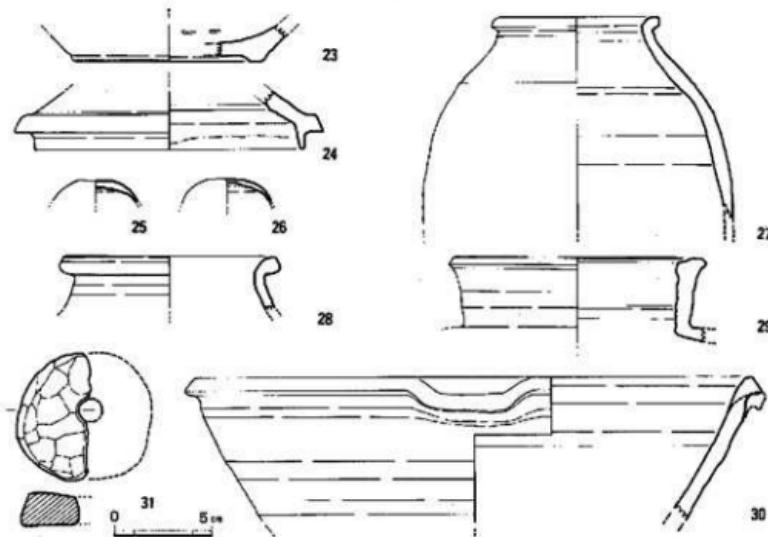
249 569号土壤（西より）

る。10～13は、玉縁状口縁をつくるもので、10は小さい玉縁、11はうすく引きのばした口縁を折り返して薄い玉縁状口縁としたものである。14は丸味を持った腰部から、ゆるく外反して口縁をつくるもの。15・16はゆるく弧を描いて広がったままうすくのばして口縁をつくるものである。17の口縁部は、直線的に開く体部の端部を、小さく外方に折って口縁とする。18～22は皿である。18は外底部を肥厚させて（削り出しによる）平高台状にみせたもので、内面には片切彫りと櫛描文がみられる。19は大振りの皿で、底部は、径約6.0cmをはかる。20は平底からゆるく内湾する体部を持ち、そのまま丸く口縁をおさめる。21・22は、内湾して立ち上った体部から、小さく外方にひねって口縁を作るものである。24は蓋である。白色の胎土にうすく緑灰色をおびた透明釉を施す。身とかみ合う部分は、露胎となる。小片であるが、径15.9cmと推定される。25・26も蓋であろう。外面は施釉され、内面には全く釉がみられない。頂部はやや平らもしくは凹み気味であるが、全体に丸味がありなめらかで、稜などはつかない。白色精良な胎土に透明釉がかかっている。23は、越州窯系青磁の碗である。見込みに、重ね焼きの目痕がみられる。27は、青磁の蓋である。胎土は灰色でキメにむらがなくととのう。釉は青灰色であるが光沢にかける。破片としてはあまり十分でなく、耳の有無等までは判断できない。肩部に一条の沈線がはいる。復原口径8.75cmをはかる。28は綠褐釉陶器である。口縁は折り返して玉縁状に丸くつくる。29は、褐釉陶器である。釉は緑黄褐色を呈す。頸部は肩部との繋ぎ

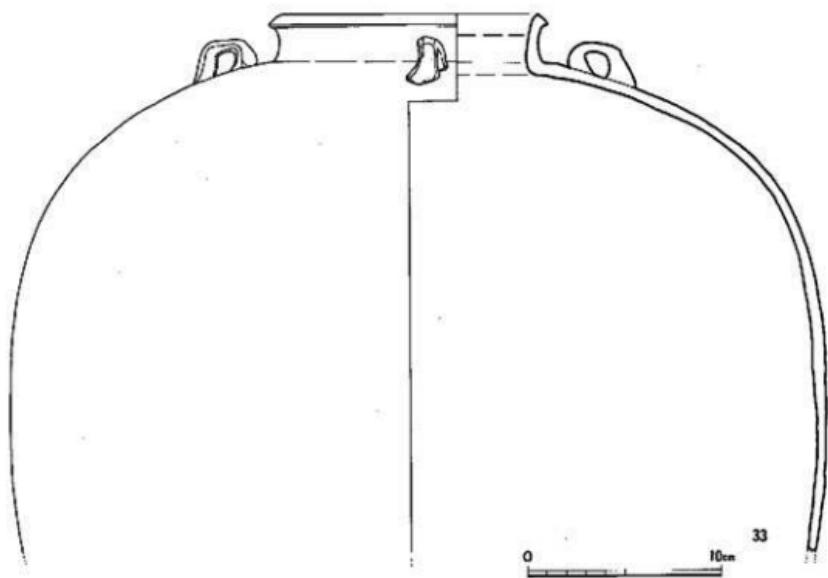
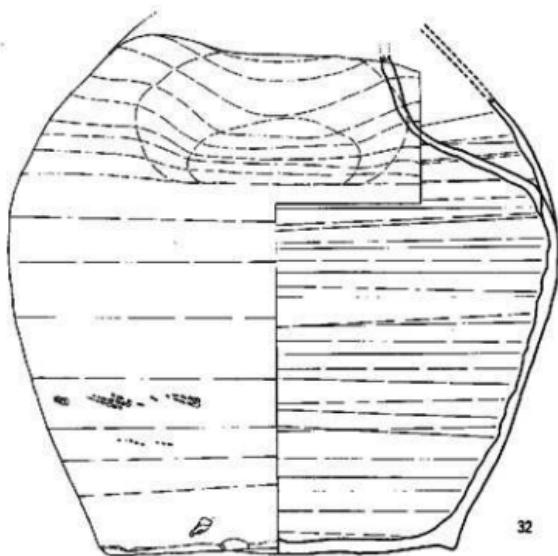


250 569号土壤出土遺物 1 (1/3)

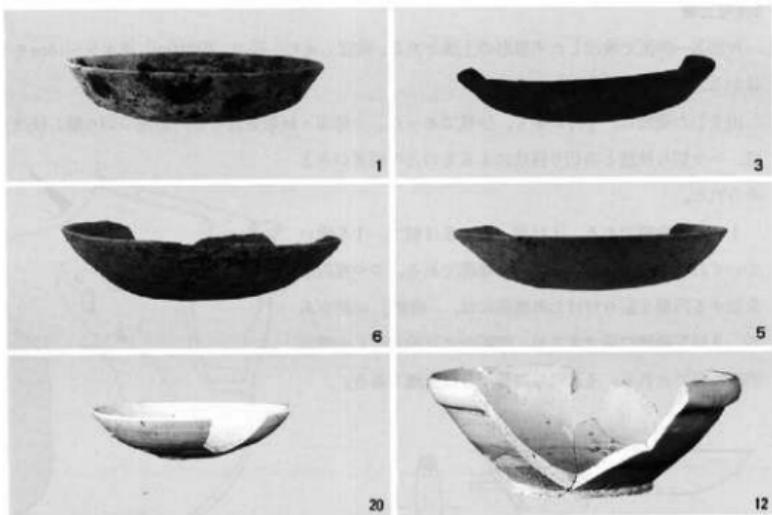
目から直線的に上に立ち上る。30は須恵質土器の鉢である。胎土は暗灰色を呈し、胎土中には大きめの砂粒はみられず、比較的精良で、焼成も良くかたく焼き上っている。いわゆる東播系ではない。あるいは在地産か。31は滑石製の紡錘車である。半折していて、2分の1弱しか残っていない。推定復原径7.0cm前後と思われる。32は須恵器である。胎土は黒斑を含むが精良な土で、暗灰色を呈す。焼成も良好で、かたく焼けている。調整は、ヨコナデ調整が目立つが、体部外側には、かすかに日の細かい格子目叩き痕跡が、ナデ消されずに残っている。内面には、叩きの痕跡は全くみあたらない。肩部のやや上がり、幅13.8cmにわたって大きく凹むが、焼成時のひずみと解しておく。底径18.4cm、胴部最大径約28.4cm、現存器高26.7cmである。33は無軸陶器の四耳壺である。胎土は灰色で黒斑を多く含み、器表は外面で淡茶白色から明灰色、内面は淡黄褐色に灰色がまじる。焼成は焼好である。口縁部は、端部を外傾させて、下端をやや垂らす。頸部は短く直行する。頸部の継ぎ目から肩部までは、大きく拡がる。耳は、頸部の継ぎ目近くに、縦に4ヶ所つけられている。復原口径14.4cm、胴部最大径約42cmをはかる。569号土壺の埋土には、上面から掘りこまれた造構の掘り残しが若干あったと思われ、わずかに新しい遺物がまじっていた。しかしそれは、絶体年代的な時間の開き(200~300年の開き有)から容易に摘出できる。したがって、図示した中には、時代の下る資料は含めてはいない。



251 569号土壺出土遺物2 (1 / 3)



252 569号土壤川土遺物 3 (1/3)



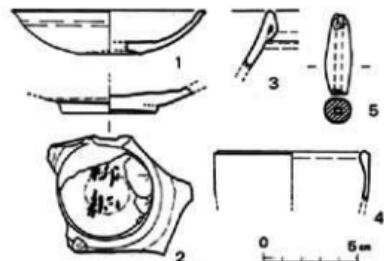
253 569号土壤出土遺物 4

570号土壙

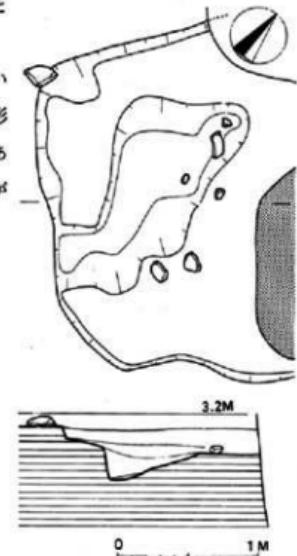
IV面 E-09区で検出した不整形の土壙である。確認した一辺で、約210cm、深さ8~18cmをはかる。

出土した遺物は、小片が多く、少量であった。土師皿・坏頬を見ると、底部の切り離し技法は、ヘラ切り技法と糸切り技法によるものとの両者がみとめられた。

1~3は白磁である。1は皿、2・3は碗で、1を除いていずれも小片である。2は碗の底部である。やや橢円形を呈する円盤を貼り付けた外底部には、「柳綱」の銘がある。3は玉縁状口縁であるが、破断面には折り返しの痕が明瞭に見てとれる。4は褐釉陶器、5は土鍾である。



255 570号土壙出土遺物 (1 / 3)



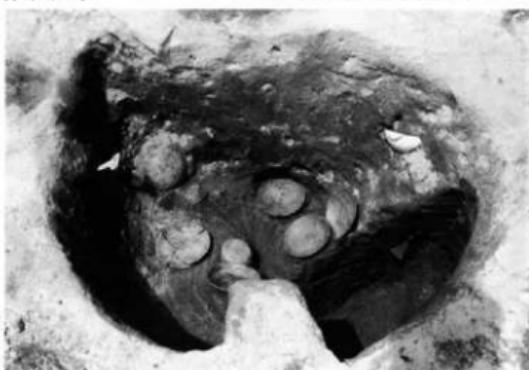
254 570号土壙実測図 (1 / 40)

579号土壙

V面 D-13区で検出した土壙である。長軸108cm、短軸84cm、深さ48~52cmをはかる。土壙床面付近より土師坏を主として遺物の出土を見た。

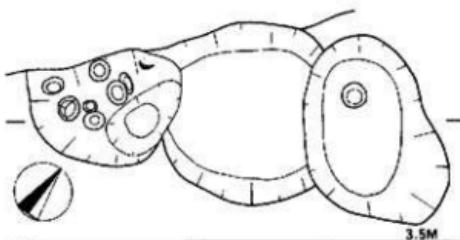
1~9は土師器である。

579号土壙の土師器には、底部を糸切りするものは一片もみられなかった。また、

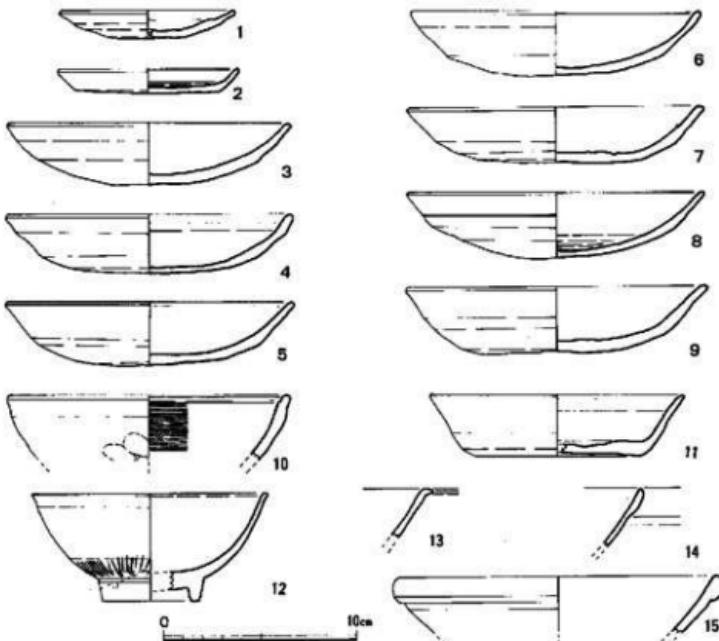


256 579号土壙 (東より)

すべて外底面には、板目圧痕が残っている。1・2は皿である。口径9.2cm、器高1.35cmである。3～9は壺である。14.4～15.4cm、器高3.0～3.5cmをはかる。10は瓦器である。楠葉型瓦器壺で、内面は密にヘラミガキ、外面は、上半をヨコナデ、下半を指頭で押圧する。色調は、外面黒灰褐色、内面灰褐色を呈する。復原口径は14.1cmをはかる。11は須恵器の壺である。底部をヘラケズリ、全体および内底部はヨコナデする。12～15は白磁の碗である。14は、幅広のうすい玉縁状口縁を呈する。



257 579号土壤実測図 (1 / 40)



258 579号土壤出土物 (1 / 3)

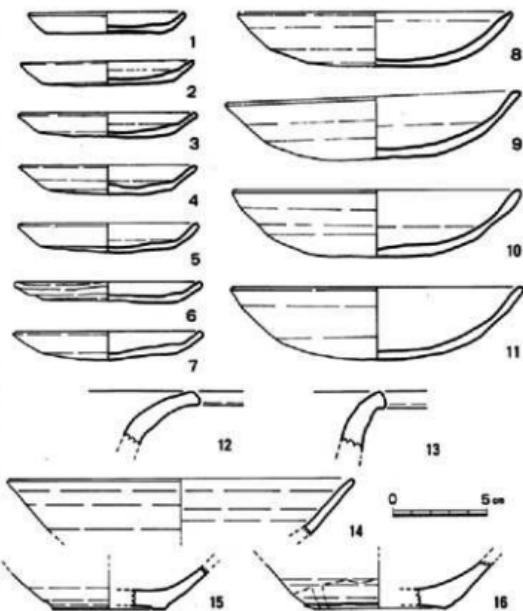
582号土壙

V面D—13区で検出した円形の土壙である。径195～215cm、深さ99～134cmをはかる。井戸になる可能性も考えられるが、井筒は確認しておらず、土壙として報告するものである。

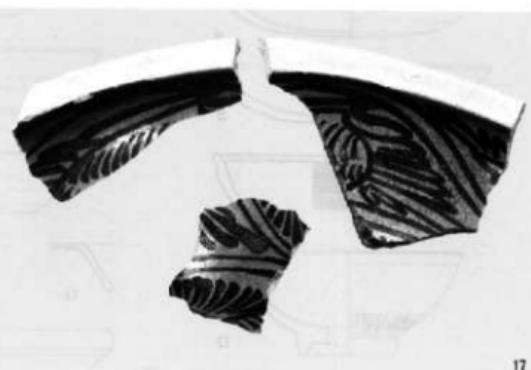
遺物は、土壙の大きさに比べると、比較的少ない。

1～11は、土師器である。582号土壙から出土した土師器は、大半がヘラ切り底（便宜的に粘土紐巻き上げによるものを含む）で、糸切り底はわずかに含まれるにすぎない。実測可能なものでは、1が回転糸切り底である。口径8.4cm、底径6.2cm、器高1.1cmである。

2～7は口径9.2～10.0cm、底径6.6～7.4cm、器高1.2～1.5cm、8～10は、口径14.6～15.8cm、器高2.9～3.9cmをはかる。12・13は灰釉陶器と思われるもので、灰白色のととのった胎土に、うすく灰緑色をおびたテリ状の釉がのる。あるいは自然釉か。14～16は越州窯系青磁碗である。17は黄釉褐彩陶器の盤である。



259 582号土壙出土遺物 1 (1 / 3)



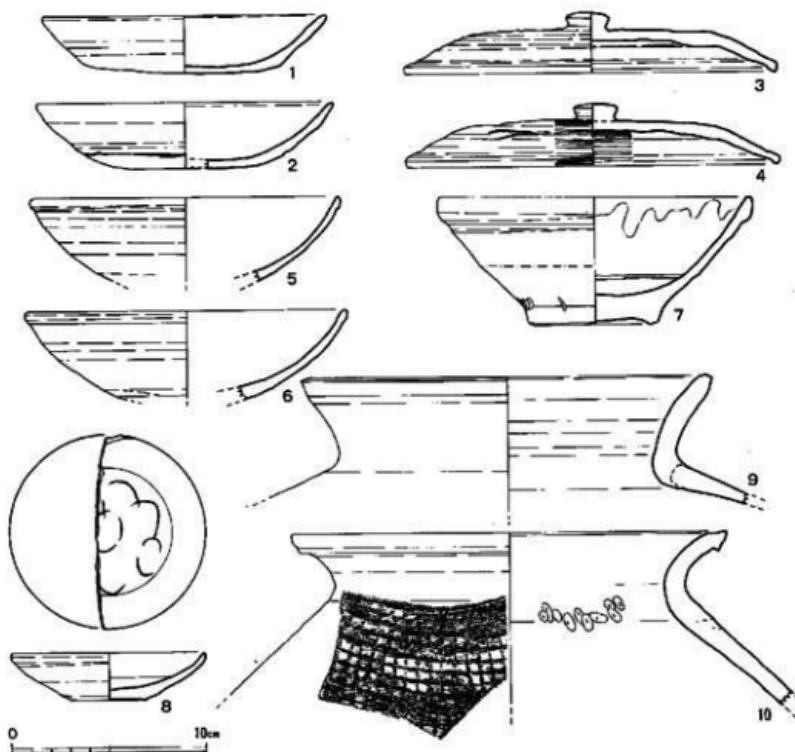
17

260 582号土壙出土遺物 2

587号土壤

V面D-13・14区で検出した略円形の土壤で、径110cm前後、深さ35~55cmをはかる。

1・2は土師器の坏である。いずれも底部を回転糸切りする。1の底部には、板目压痕もみとめられる。口径14.7~15.3cm、器高3.0~3.35cm。この他、小片の為図化していないが、底部をへラ切りするもの、粘土紐を巻き上げるものなどがある。3・4は、土師器の蓋である。明茶褐色を呈し胎土は精良で、外面には横位のヘラミガキを施す。年代的には8~9世纪まで遡りうる遺物で、埋土に混入したものであろう。5~8は、白磁である。9・10は須恵器である。9は外傾した頸部の端をヨコナデで平坦にととのえて口縁をつくるもので、体部内面には同心円文叩きをナデ消した痕がみとめられる。10は、口縁上面を凹線状にくぼませる。体部外面は格子目叩き、内面は同心円叩きをナデ消す。頸部内面にはヘラによる押しナデ痕跡が残る。

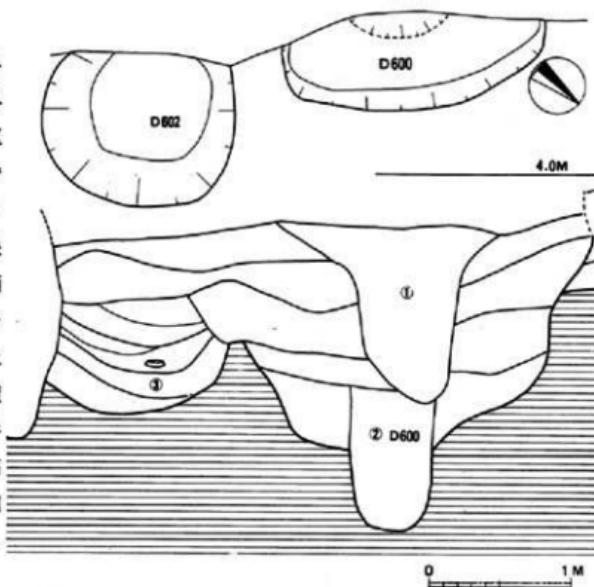


261 587号土壤出土遺物 (1 / 3)

600号土壤

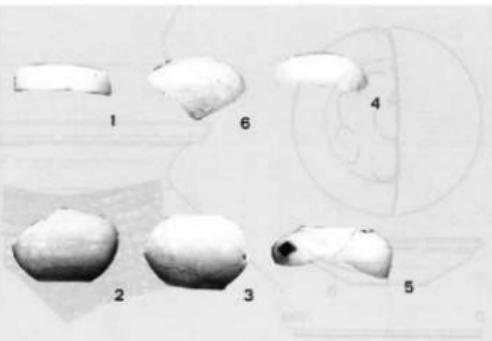
V面D-11区で検出した土壤である。一部を確認したのみで、大半は調査区外に出ている。調査区西壁の土層観察では、井筒状のおちこみが600号土壤中央にみとめられ（壁面は45°の安全勾配をとっているので、土層断面も斜めに堆積を切っている）、井戸である可能性が高いが、調査した範囲では井筒等は確認していらない。

600号土壤からは土師器（ヘラ切・糸切り）、白磁等が出たが、注目されるのは、白磁の小壺等である。図示した1～6は、白磁である。1は、蓋である。うすく土色をおびた白色の胎土に、乳色をおびた透明釉を施す。口唇から内面は露胎である。径5.5cmをはかる。2～6



① 302号土壤（中世Ⅱ期）
② 600号土壤（古代Ⅱ期）
③ 602号土壤（古代Ⅱ期）

262 600号土壤実測図（1/40）



263 600号土壤出土遺物 1

は小壺である。2は白色のやや粗い胎土にうすく白濁した透明釉をかける。口径2.4cm、底径2.45cm、器高3.65cm。3は、白色精良な胎土に、うすく緑色がかった透明釉を施す。口径2.85cm、底径2.8cm、器高3.7cm。4は、灰白色のややあらい胎土に、うすく灰緑色をおびた透明釉をかける。5は白色で黒斑を持つやや粗い胎土に、うすく緑色がかった透明釉を施す。体部に褐色の鉄斑がとぶ。6は、灰色でやや粗い胎土に、うすく灰緑色をおびた透明釉をかける。

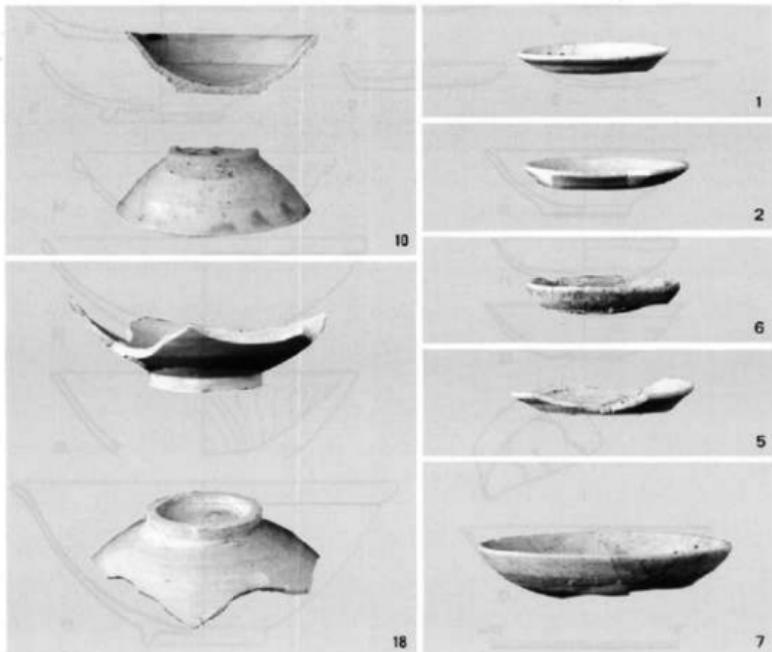
606号土壙

264 600号土壙出土遺物（1／3）

V面D-11区で検出した不整形の土壙である。

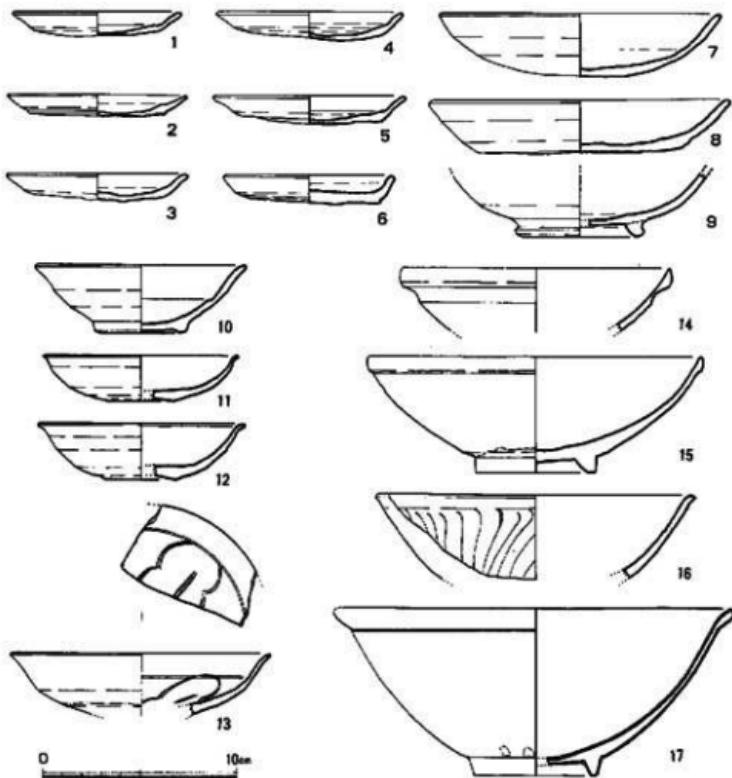
出土した土師皿・壺には、ヘラ切り底を持つもの（便宜的に粘土紐巻き上げのものも含む）と糸切り底のものとが混在している。

1～9は土師器である。1～6は皿。6のみ回転糸切りによって底部を切り離す。底部に板



265 606号土壙出土遺物1

目压痕を持つ。口径8.9cm、底径7.1cm、器高1.5cmをはかる。1～5は口径8.7～10.0cm、底径6.4～7.5cm、器高1.15～2.0cmである。5は底部にナデ調整を施すが、2～4は板目压痕がみられる。7・8は坏で、8は底部を回転糸切りする。7は口径14.6cm、器高3.3cm、8は口径15.2cm、底径10.4cm、器高2.75cmである。9は研磨土器で、内面・体部外面をヘラミガキ、体部下位から底部はヨコナデする。10～16は白磁である。10は小碗で、口径10.9cm、高台径4.0cm、器高3.6cmをはかる。11～13は皿である。13の見込みには、沈線で花弁が描かれている。14～16は碗である。17は青磁の碗である。紫灰色の胎土に、灰緑色の半透明釉が施される。釉はガラス光沢強く、気泡、水裂がみられる。釉下の胎土は、化粧土状に白色を呈する。釉は全面に施され、疊付だけ釉を削り取る。いわゆる北方青磁である。耀州窯系か。



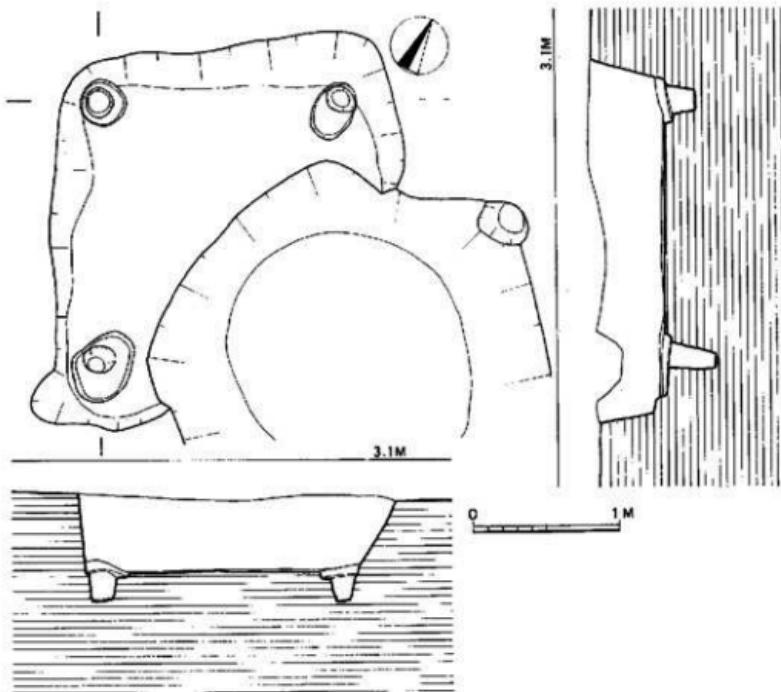
266 606号土壤出土造物 (1 / 3)

622号土壤

V面E-10区で検出した土壤である。長辺240cm前後、短辺220cm、深さ52cm前後をはかる。II面検出の337号土壤（井戸）に切られている為、約4分の1を失なう。土壤床面の4隅（東隅は欠）には、柱穴がほらされている。柱穴は、柱根部分（材は残っていない）で径16~18cm、深さ20~36cmをはかる。床面は、地山である黄白色砂で、ほぼ水平にそろえられている。規模こそ小さいが、堅穴式住居址とも言える形態をそなえている。

出土遺物は土師器、須恵器、白磁などであるが、土師器の壺にヘラミガキを施した赤茶色のものが多いなど、全体に古手の要素が目立つ。

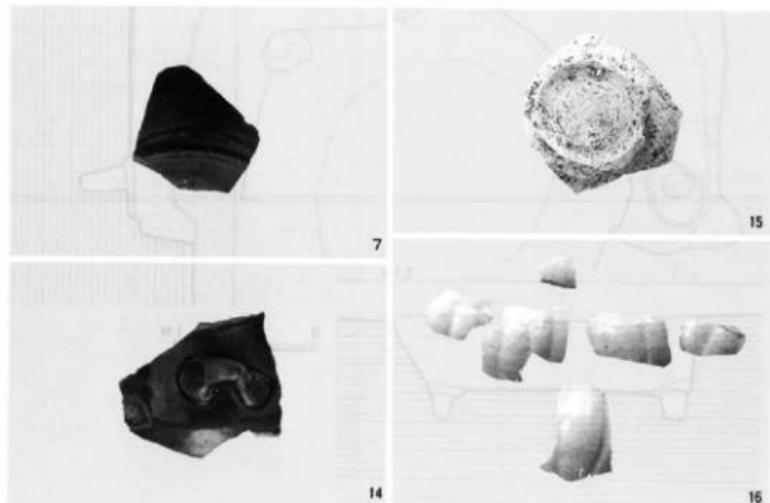
1~4・13は土師器である。1・2は皿である。1は粘土紐巻き上げで整形したのち外底部を平滑にナデて仕上げる。板目圧痕もみとめられる。2は、おそらくヘラおこしであろう。外底部は平滑にナデ調整されている。口径8.5~9.5cm、底径7.8cm、器高1.1~1.3cmをはかる。3は壺である。底部はヘラ切りで、内面はコテで整える。復原口径15.8cm、4は、おそらく壺であろ



267 622号土壤実測図（1/40）

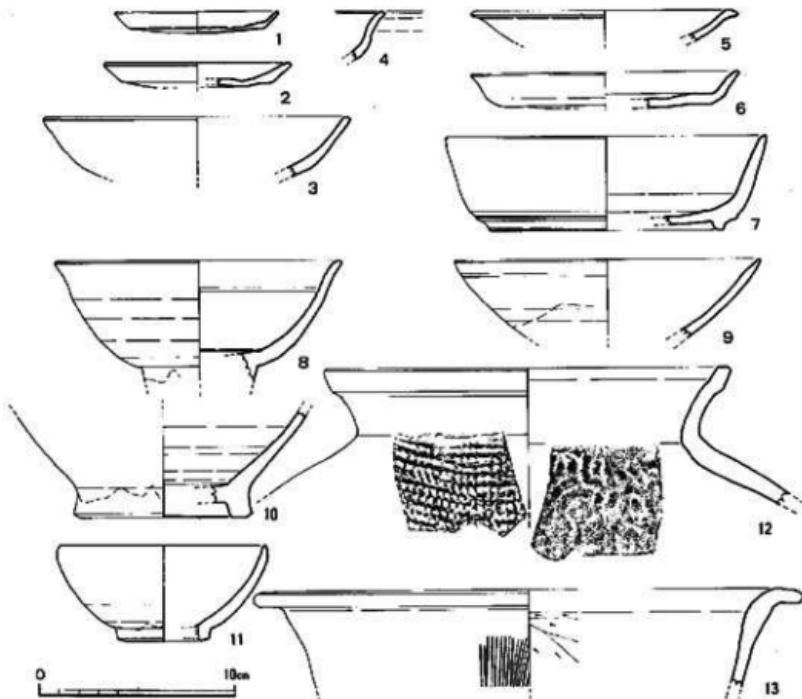


268 622号土壤(北より)



269 622号土壤出土遺物

う。口唇内側に一条の沈線をめぐらす。内外面ともヨコナデ。胎土は微砂質ながら粒子がよく整い、茶色を呈する。焼成も良好。胎土、形態をみると在地産とは思われない。搬入品か。13は、鉢である。体部内面はケズリ・口縁部はヨコナデ、体部外面はタチハケを行なう。5は縄輪陶器の皿である。灰白色で精良な土師質の軟胎に、光沢の強い淡黄緑色の釉を施す。内外面とも横位のヘラミガキを行なう。復原口径13.3cm。6・7・12は、須恵器である。6は皿、7は高台付坏、12は壺である。12は、体部外面を格子目叩き、内面を同心円叩き、頸部をヨコナデし、口縁部をヨコナデによって四角くおさめる。胎土は全体的に粗く、暗灰色を呈する。8～10は白磁である。8は碗で、灰白色の粗い胎土に白色の透明釉をかける。口縁部を輪花につくるが、全体の数はわからない。10は壺で、灰白色の粗い胎土に乳白色の釉を施す。11は天目の小碗である。灰白色の胎土に、黒色の釉がかかる。高台のみ露胎となる。口径10.5cm、高台径4.7cm、器高4.95cmをはかる。14は縄輪陶器の壺。16は白磁の瓜形小壺片である。数個体分と思われる。



270 622号土墳出土遺物2 (1/3)

626号土壙

V面E-08区で検出された土壙である。V面で遺構検出を行なった頭初は不整形の平面を呈していたが、ほり下げるに従がって円筒形の深い土壙となった。その形状から考えて、井戸であった可能性も考えられる。しかし、土壙の最下部の標高は、1.25mで、他の井戸が0.5~0.8mまで掘り下げていることを考えると、浅すぎると見える。少なくとも現段階では、標高1m前後で湧水はない。井戸として確認されている遺構が全て0.8~0.5m以下まで掘削している点を考えると、標高1mでは井戸として機能しなかったと思われる。

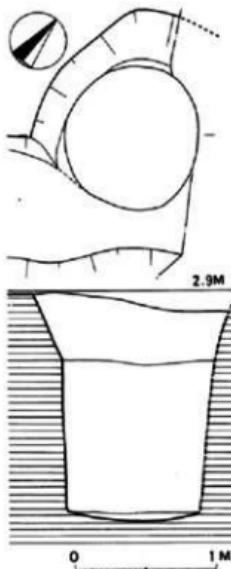
V面で検出した不整形土壙の部分では、半ば近くが調査区東に出てしまつておらず、その規模を知ることができない。円形土壙部分は、径96~100cm、深さ108~112cmをはかる。

出土した遺物の総量は多くはないが、完形品に近い様々な遺物が出土している。

1~3は、土器である。626号土壙出土の土器皿・壺類には、底部を糸切りするものは1片も含まれていなかった。1は皿である。底部に板目圧痕が残る。口径9.6cm、器高1.2cmを271 626号土壙実測図(1/40)はかる。2は壺である。粘土紐巻き上げで作られており、外底部に指頭圧痕がならぶ。外底部はナデて平滑に仕上げ、体部外面から口唇部はヨコナデする。内面はコテで削って、平滑にとのえる。ほぼ完形品であるが、ひずみが著しく椭円形を呈する。口径14.8~15.6cm、器高3.35cmである。3は高台付壺で、いわゆる研磨土器である。胎土は微砂質で精良、白褐色を呈する。

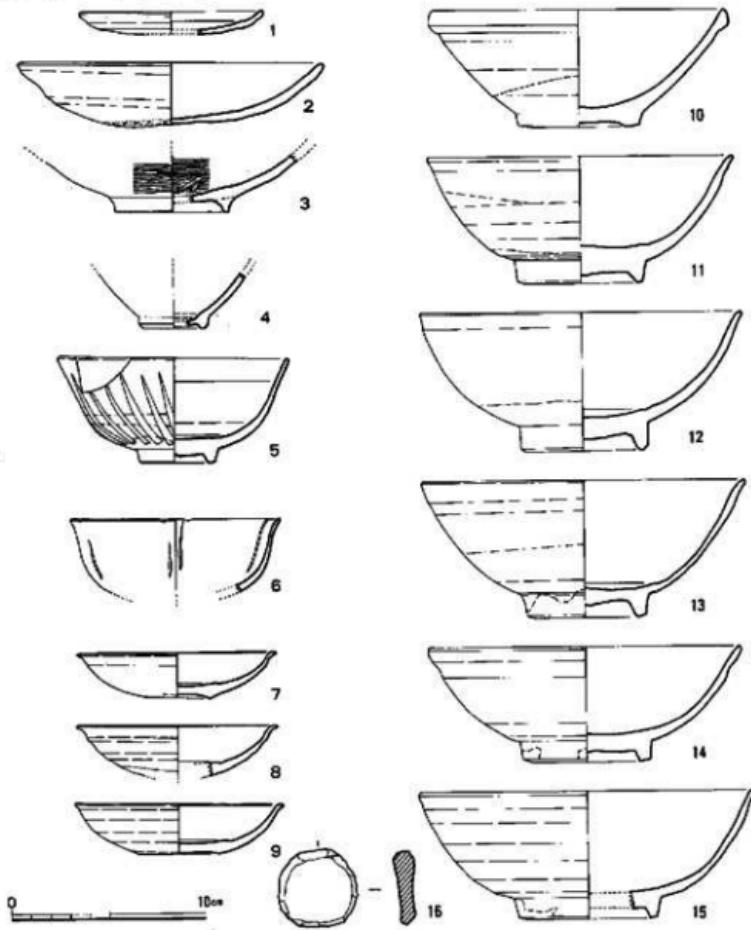


272 626号土壙(南から)



内面及び体部外面にヘラミガキ、高台付近にヨコナデ、外底部にナデ調整を施す。内面のヘラミガキは、密できわめて平滑に施され、単位すらみとめにくく。外面のヘラミガキも密に施されるが、単位ははっきりみとめられる。なお、外面のヘラミガキは、高台脇のヨコナデを切っており、高台貼付後にヘラミガキを行なったことがうかがわれる。4は

高麗青磁である。くすんだ明灰色を呈するやや砂っぽい胎土に、淡く青緑色をおびた暗灰色の半透明釉が、比較的厚めに全面に施される。釉には、全面に氷裂がみとめられる。高台径3.6cm。5は、青磁の碗である。明灰色できめの細かい胎土に、明緑灰色の半透明釉が施される。体部下位から高台は、露胎となる。体部外面には、片切彫りで縦線が刻まれる。口径12.0cm、高台径3.9cm、器高5.5cm。6は青白磁の碗である。白色で精良な胎土に、うすく青白色をおびた透明釉が施される。釉は全体にむらなくかかり、氷裂も貫入もなく、光沢は強い。口縁部には、



272 626号土壤出土遺物1 (1 / 3)

全周で 6ヶ所の刻みをつけ輪花につくり、輪花の下の体部は外面から強く縦線を入れて凹ませる。復原口径 10.9cm をはかる。7~15 は白磁である。7~9 は皿、10~15 は碗である。16 は露道具のハマである。胎土は砂まじりであらく、淡澄褐色を呈する。磁器質である。径 4.0cm 前後、厚さ 0.8~1.1cm をはかる。17 は、陶器の急須である。ほぼ完形品。胎上は、微細な砂粒を含むものの比較的精良で、淡茶褐色を呈する。施釉は体部内面および注口部先端に施される。釉は黒茶褐色を呈する。把

手部の上面には、目釘

穴風の径 4mm 程の孔が

穿たれている。口径

13.3cm、底径 5.4cm、器

高 10.6cm。18・19 は土

師器の壺である。体部

内面はケズリ、口縁部

はナデ、体部外面には

タテハケが施される。

20 は黄釉陶器の盤であ

る。体部内面に黄褐色

の釉がかかる。胎土は

暗灰色で粗く、露胎部

ではテリがついて茶色

を呈する。口縁部上面

には、目底がならぶ。

復原口径 29.2cm をはか

る。21 は、無釉陶器の

鉢である。胎土は灰色

で、径 1mm 程度の白色

砂粒を含み粗い。焼成

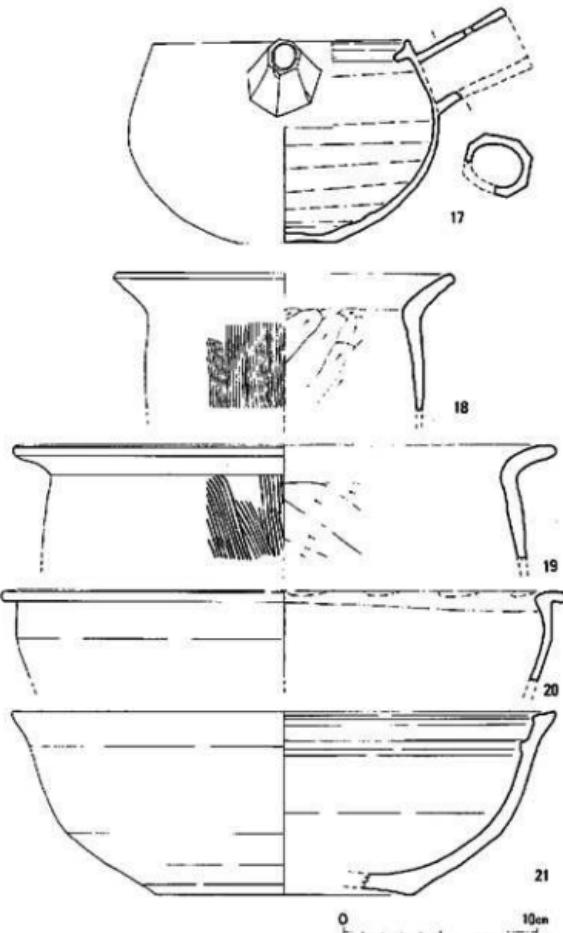
は良好で、茶色を呈す

る。内底部は磨滅し、

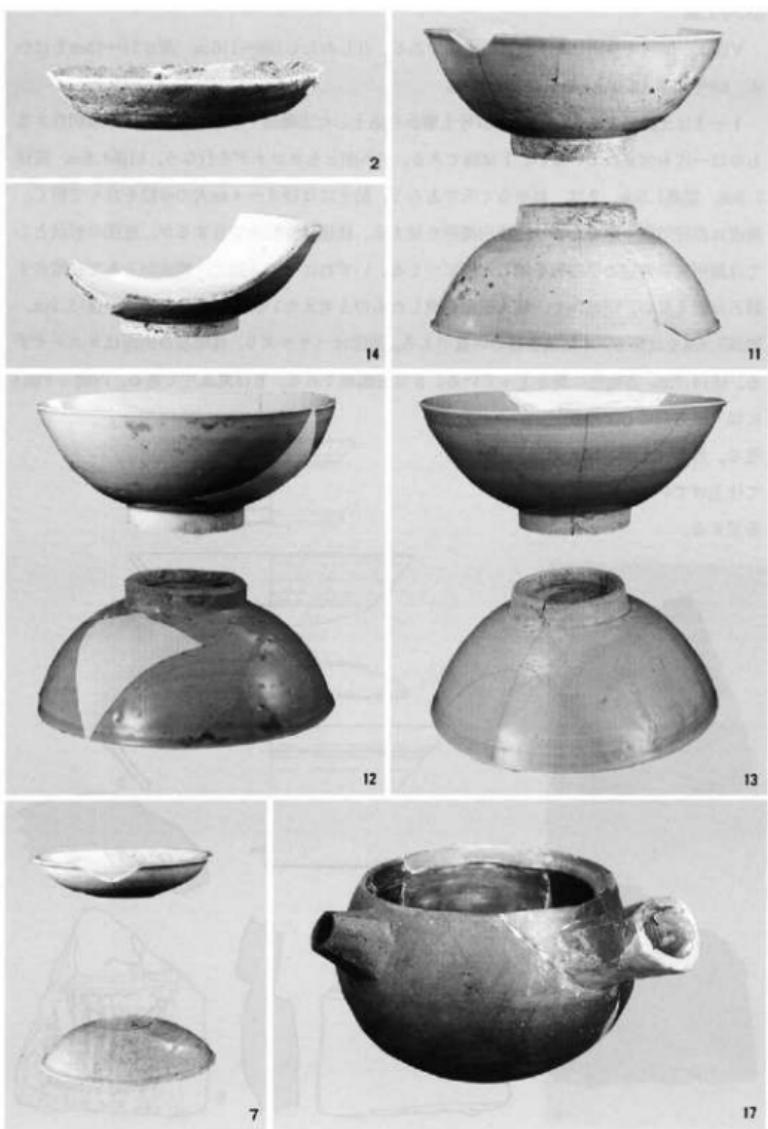
平滑になる。復原口径

28.0cm、底径 13.2cm、

器高 9.5cm。



274 626号土壙出土遺物 2 (1 / 3)

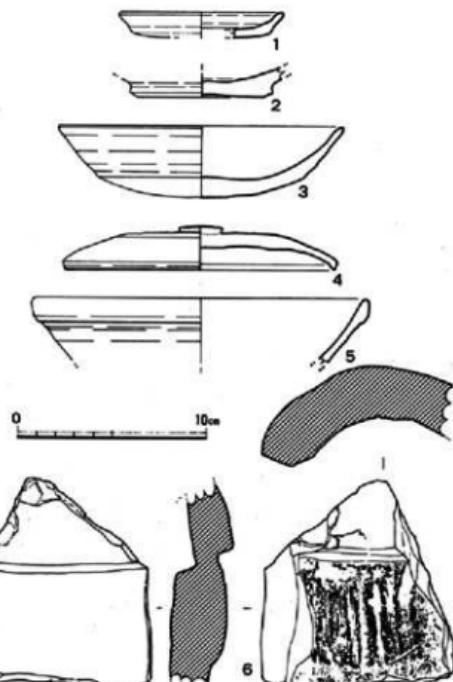


275 626号土壤出土遺物 3

637号土壤

V面E-06区で検出した不整形の土壤である。さわわたし108~116cm、深さ24~43cmをはかる。68号井戸(353号土壤)に切られる。

1~3は土師器である。なお、637号土壤から出土した土師皿・坏類には、底部を糸切りするものは一片も含まれていない。1は皿である。内外面ともヨコナデを行なう、口径8.8cm、底径7.3cm、器高1.5cm。2は、おそらく碗であろう。胎土には径3~4mm大の砂粒を含んで粗く、焼成は良好で軽く焼きしまり、淡白褐色を呈する。底径は回転糸切りするが、底部の形状としては越州窯系青磁の平底碗を模した形につくる。いずれにせよ、胎土、焼成からみて在地の土器とは思えない。何處かで、輸入磁器を模したものと考えたい。3は坏である。口径15.2cm、器高5.8cmをはかる。4は須恵器の坏蓋である。頂部はヘラケズリ、体部及び内面はヨコナデする。径14.7cm。赤褐色に焼き上っている。5は白磁碗である。6は丸瓦片である。内面(下面)には、縦方向にしづり痕が残る。外面(上面)はナデて仕上げている。暗青灰色を呈する。

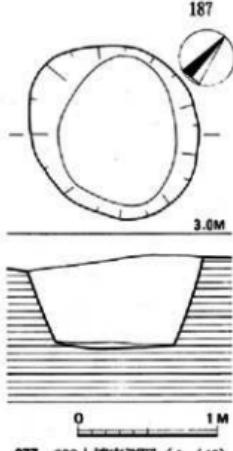


276 637号土壤出土遺物(1/3)

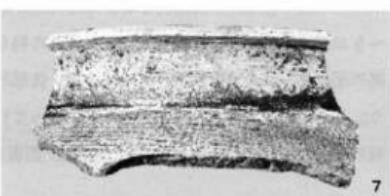
638号土壇

V面E-08区で検出した円形の土壇である。径120~123cm、深さ50~64cmをはかる。

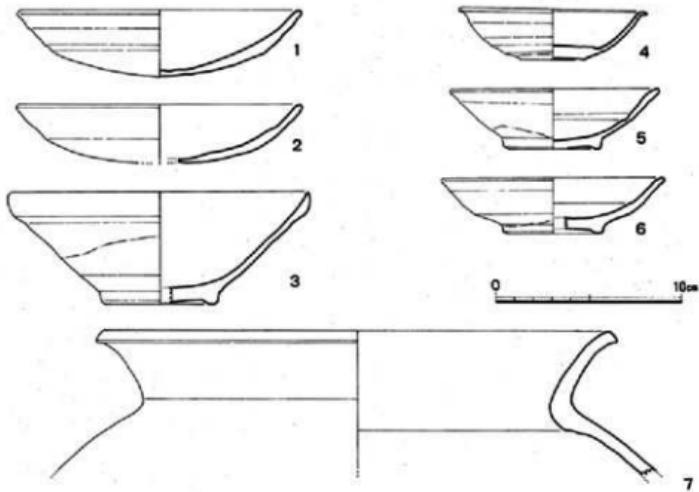
1・2は土師器である。638号土壇出土の土師皿・壺は、底部をへら切りするもの（粘土紐巻き上げを含む）と糸切りするものとが混在している。糸切りのものは小片の為、図化できなかった。1・2の底部は、おそらくは布で、丁寧にナデて整形痕を消して平滑に整えている。口径15.3cm、器高3.1~3.55cmである。3~6は白磁である。3は口縁部を折り返して幅の広い玉縁につくった碗である。4~6は皿である。4は平底、5・6は高台を削り出すものである。7は須恵器の壺である。胎土は灰色で、比較的良好、外面には緑灰色の自然釉がかかる。頸部から口縁部はヨコナデ、体部外面は格子目タタキ、体部内面は同心円文タタキが残っている。復原口径28cmをはかる。



277 638号土壇実測図 (1/40)



7



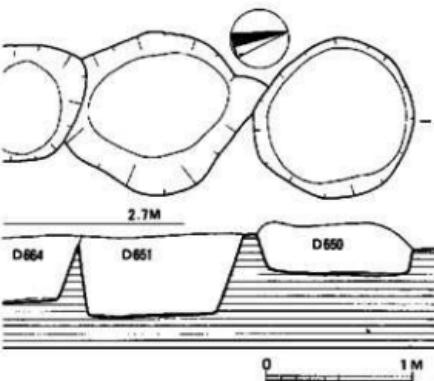
278 638号土壇出土遺物 (1/3)

651号土壌

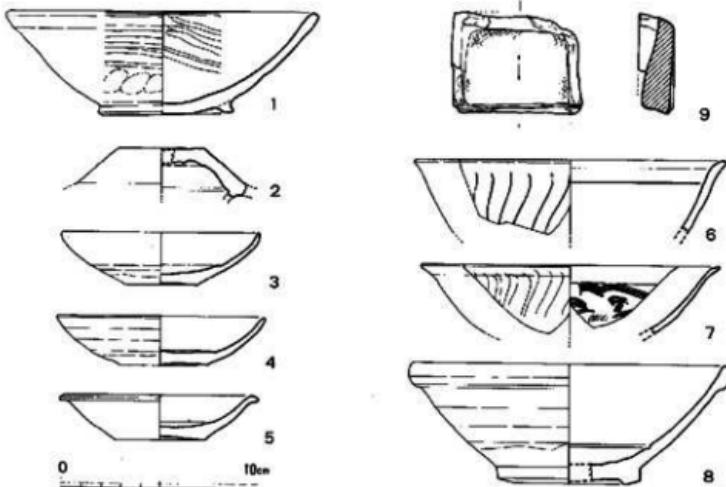
V面E-06区より検出した円形の土壌で、径112~128cm、深さ56cm前後である。

遺物の出土量は少ない。1は瓦器焼である。内面はコテで整えた後ヘラミガキ、外面は体部上半をヘラミガキ、下半は指頭押圧のままで、高台付近はヨコナデする。ヘラミガキは幅広く、単位がつかみにくい。高台を残して内外とも炭素が吸着し、銀化する。在地産である。口径16cm、高台径7.4cm、器高5.35cm。2~

8は白磁である。2は蓋で、灰白色のやや粒子の粗い胎上に、灰緑色をおびた透明釉が施される。内面は露胎である。頂部径4.4cm。3~5は皿である。5は、全面施釉後に底部の釉を削り取っている。6~8は碗である。6は体部外面に沈線による縦線文をもつ。7は、体部外面には縦線文を、内面には、櫛描文をあしらう。9は、石鏡である。縁部は一部しか残っていない。陸の部分には、細い擦痕が多く入り、海の部分には墨が部分的に付着している。表裏から磨り目を入れて、折り取った痕跡が残る。



279 651号土壌実測図 (1 / 40)

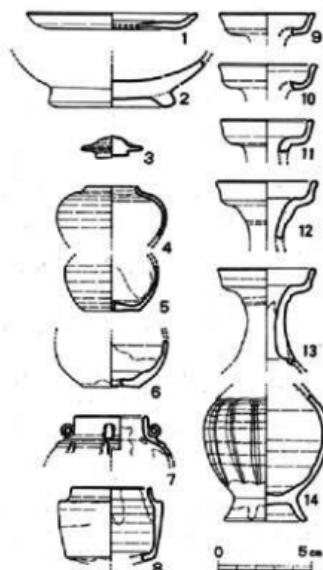


280 651号土壌出土遺物 (1 / 3)

662号土壤

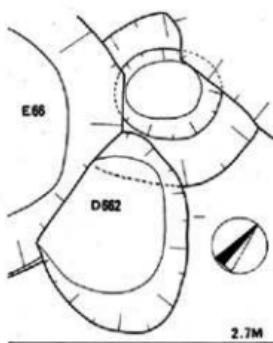
V面E-06区より検出した土壤である。長軸144cm、短軸108cm、深さ24cm前後をはかる。

1・2は土師器である。1は皿で、底部は回転糸切りで切り離す。板目圧痕もみられる。口径9.1cm、底径6.6cm、器高0.9cm。小片の為図化していないが、他にヘラ切り、粘土紐巻き上げ等による土師皿・壺も出土している。2は壺の底部であろう。幅のある高台を貼りつける。胎土は微砂質で、径2m台の砂粒をところどころにまじえる。白褐色を呈する。底部は回転糸切りで、高台をナデ付けるとき、高台脇については糸切り痕をナデ消している。高台は実見すると、玉縁の白磁碗の高台にみられる外底のくりの浅いものに酷似する。おそらくは、白磁碗を模倣したものと思われる。なお、内面はヘラミガキで平滑に仕上る。3・7は青白磁、4~6・8~14は白磁である。3は小壺の蓋である。



鉢部の下面（内面）は露胎となる。

4~6は、281 662号土壤実測図（1/40）
小壺である。内面と外底部は露胎である。7も小壺である。頸部は短く立ち、頸の巻ぎ目部に全周で4ヶ所窓をつける。肩部には2段の段をつける。体部は、継走する沈線で、瓜形に分割される。8は合子で

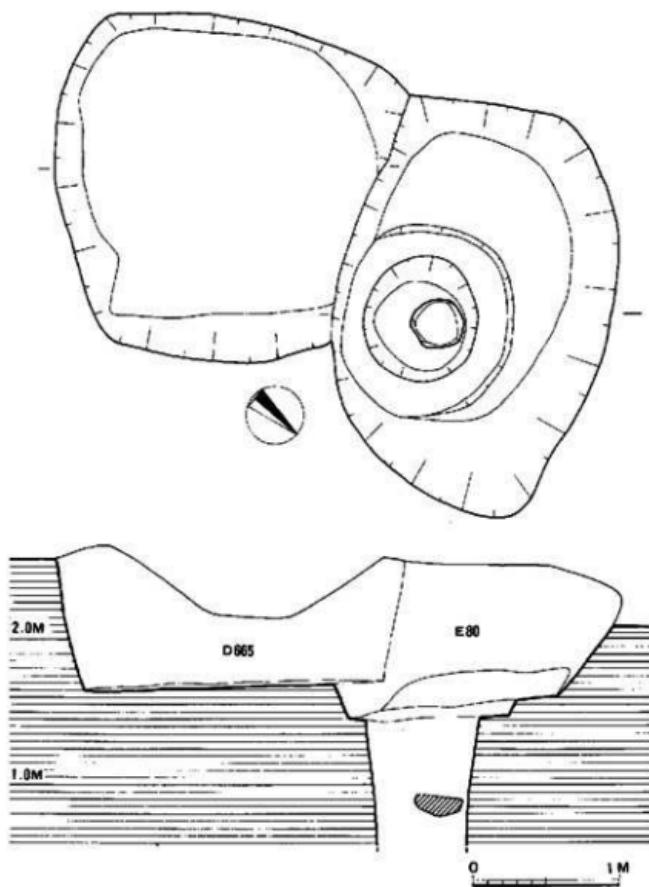


282 662号土壤出土遺物（1/3）

ある。口唇部は、凹線状をなす。9～13は、盤口壺の口縁部および頸部である。口径5.0～5.4cmをはかる。14は、瓜形の小壺である。602号土壙片と接合することができた。体部を緩線で分割し、瓜形につくる。高台径3.0cm、胴部最大径6.75cm、現存高6.9cmをはかる。

665号土壙

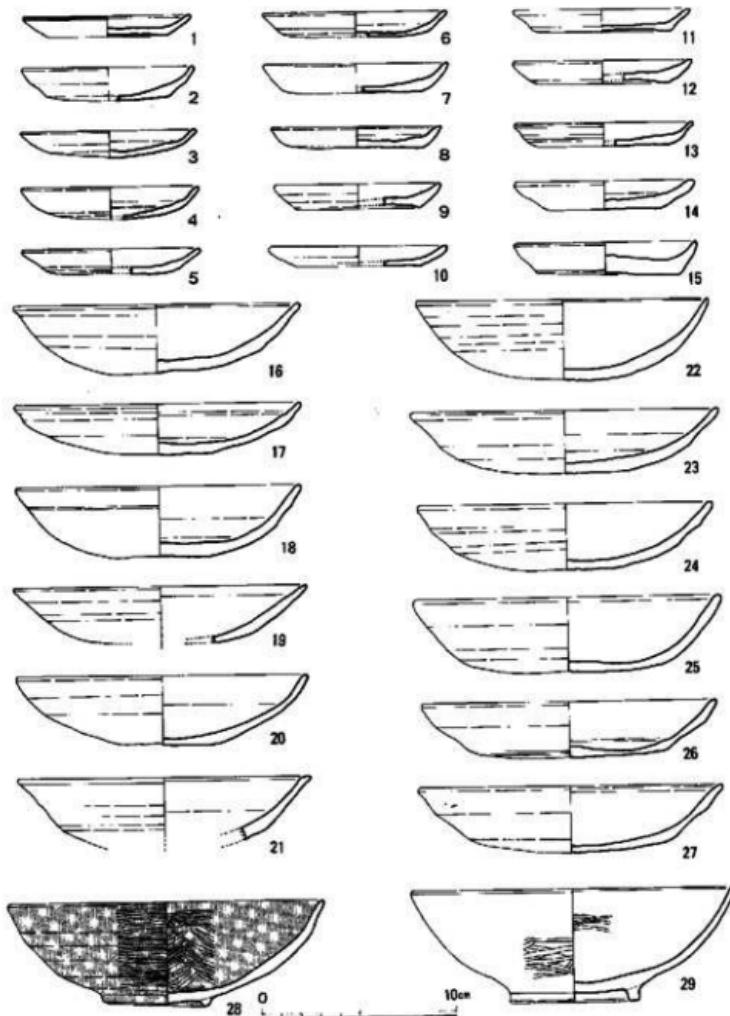
V面E-03区より検出した大型の土壙である。平面形としては、いびつな方形形状を呈す。220cm×200cm、深さ88～100cmをはかる。80号井戸に切られる。622号土壙の様な柱穴は存在しないが、壙底の標高は、157～168cmと、ほぼ平坦にそろっている。何らかの生活的な機能を考えて



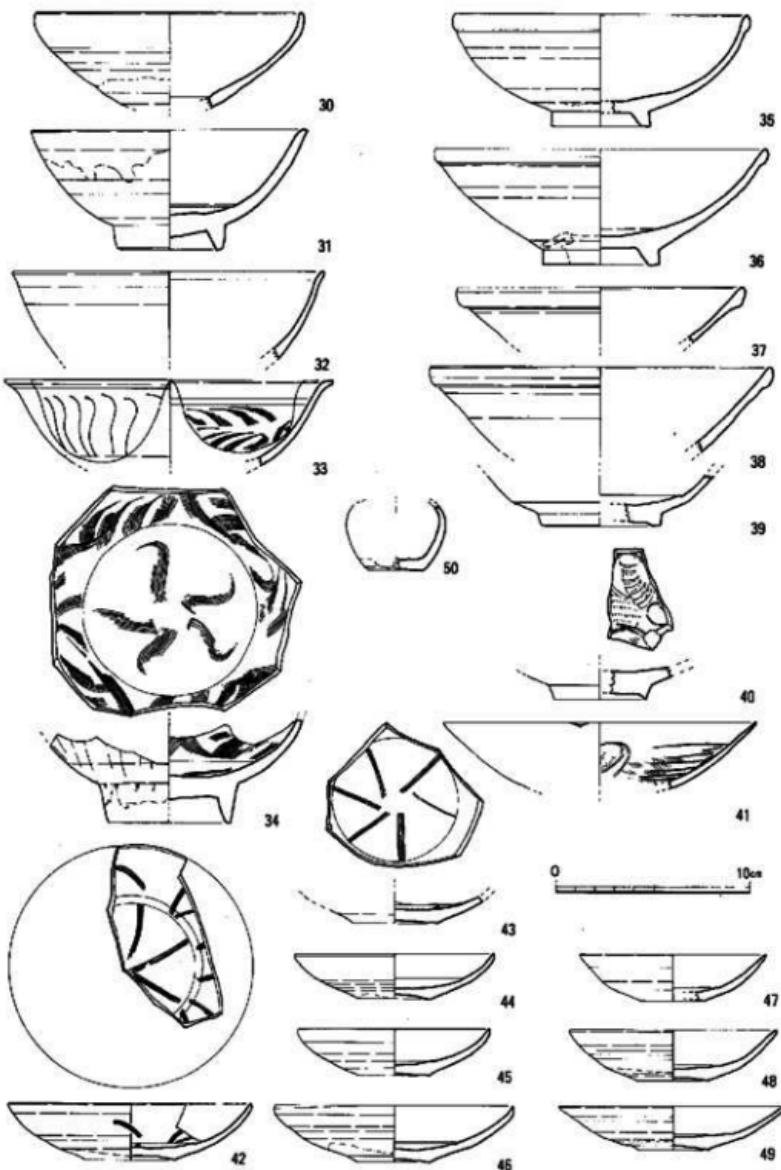
283 665号土壙実測図 (1 / 40)

もよからうと思う。

1~27は土師器である。1~15は皿で、8~15は底部を回転糸切りする。皿における回転糸切りとヘラ切り（粘土紐巻上げを含む）の比率は、ほぼ半々である。1~6・8・10~13には、



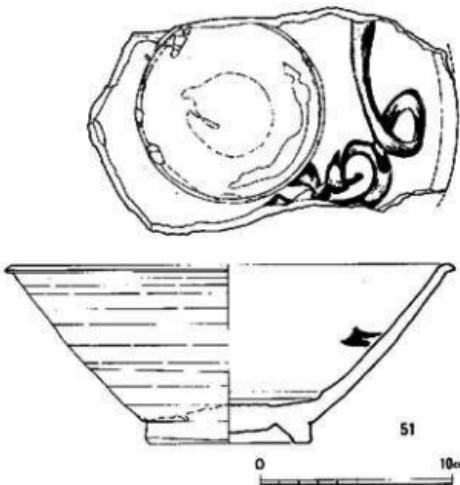
284 665号土壤出土遺物1 (1 / 3)



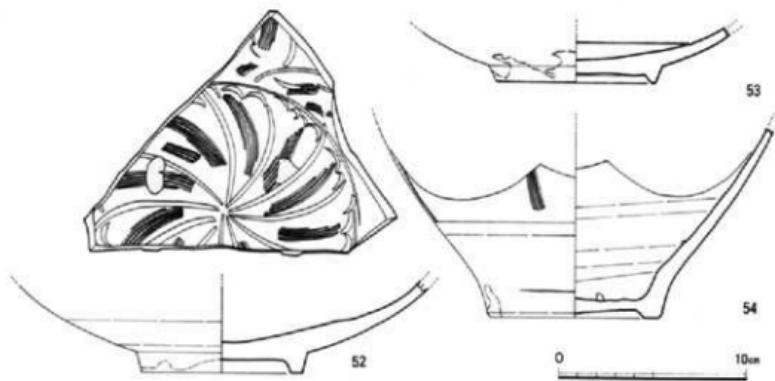
285 655号土层出土遗物 (1/3)

板目压痕がみとめられる。1~7は、口径8.8~9.6cm、底径5.55~7.5cm、器高1.1~1.7cmをはかる。8~15は、口径8.8~9.6cm、底径5.8~6.9cm、器高1.05~1.5cmで、口径から見れば、糸切り底とヘラ切り底との間に法量的な差はない。16~27は壺である。25・27は底部を回転糸切りする。壺においては、糸切り底は全体の20%程度にとどまる。16~20・23~25には、板目压痕がみられる。16~24・26は、口径14.8~16.0cm、器高2.65~4.2cmをはかる。25・27は、口径15.8~16.0cm、底径9.55~10.5cm、器高3.5~3.9cmである。28は黒色土器の壺である。内面のヘラミガキは、やや乱雑に施される。口縁部内面はヨコナデして丸味をもたせている。外面は横位のヘラミガキを密に施し、低平な高台を貼り付け、ヨコナデする。胎土は淡褐色を呈し、精良で、器壁は黒色~黒褐色である。596号上横出土片と接合できている。口径16.35cm、高台径5.55cm、器高5.5cm。29は瓦器壺である。体部内面は全面をヘラミガキするが、平滑で単位がつかめない。口縁部内面はヨコナデする。体部外面上位から口縁部にかけてはヨコナデ体部外面中位はヘラミガキ、体部下位から高台はヨコナデし、外底部はケズリを施す。胎土は精良で灰白色を呈す。内面には炭素が吸着し黒化して光沢を持つ。口径16.9cm、高台径6.8cm、器高5.9cm。30~40・42~54は白磁、41は青白磁である。30~41は碗である。33・34は、体部外面に沈線による縦線文を、内面には櫛描文を施す。39は、腰折れの碗である。白色で緻密な胎土に透明の釉を施す。高台は置付から内側を削り、露胎となる。高台径6.1cm。40は、見込みに片切彫りと櫛目文で意匠をあしらうが、小片の為図柄はわからない。高台の置付から内側は露胎となる。高台径4.7cm。41は青白磁の輪花碗である。白色精良な胎土に、青白色をおびた透明釉を施す。内面には片切彫りと櫛描文があしらわれる。42~49は皿である。50は小壺である。底部は露胎となる。

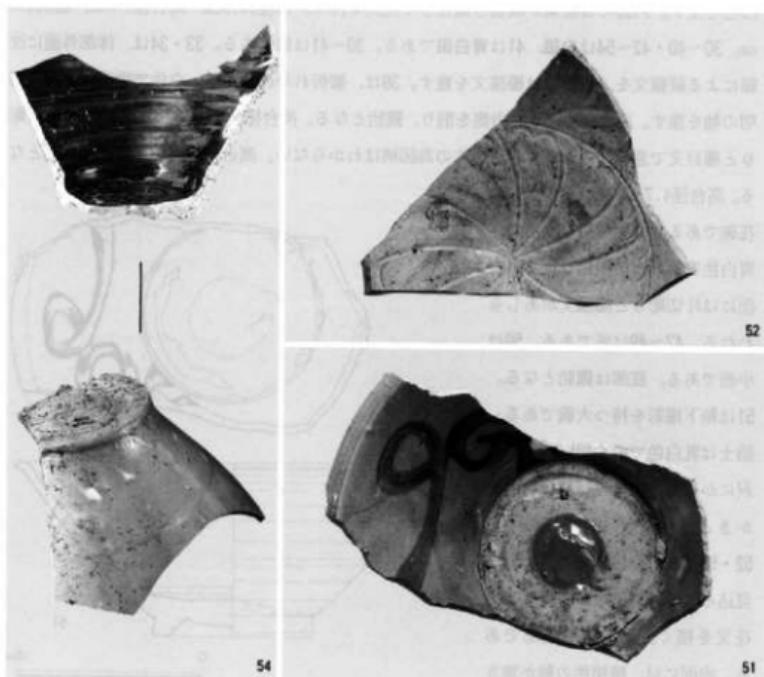
51は釉下褐彩を持つ大碗である。胎土は乳白色でやや粗い。釉は光沢にかける。見込みは輪状に釉をかきとり、高台は露胎となる。52・53は大形の浅鉢である。52の見込みには、片切彫りと櫛描文で花文を描く。54は壺の底部である。内面には、暗褐色の釉が施されている。



286 665号土壙出土遺物 3 (1 / 3)



287 655号土壤出土遺物4 (1/3)



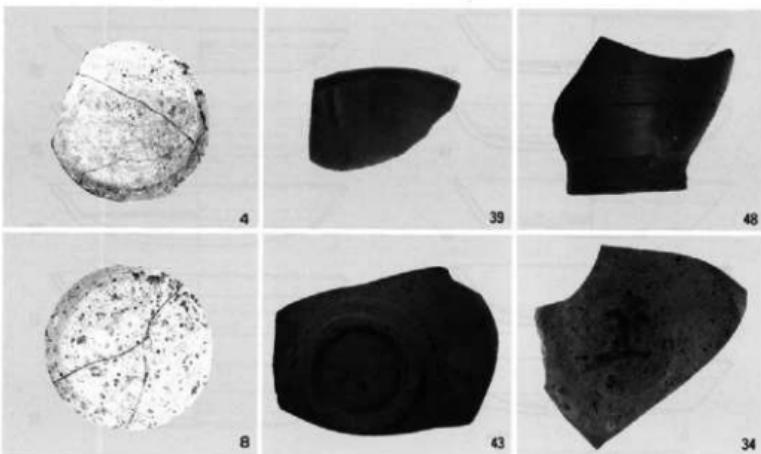
288 655号土壤出土遺物5

② 井戸

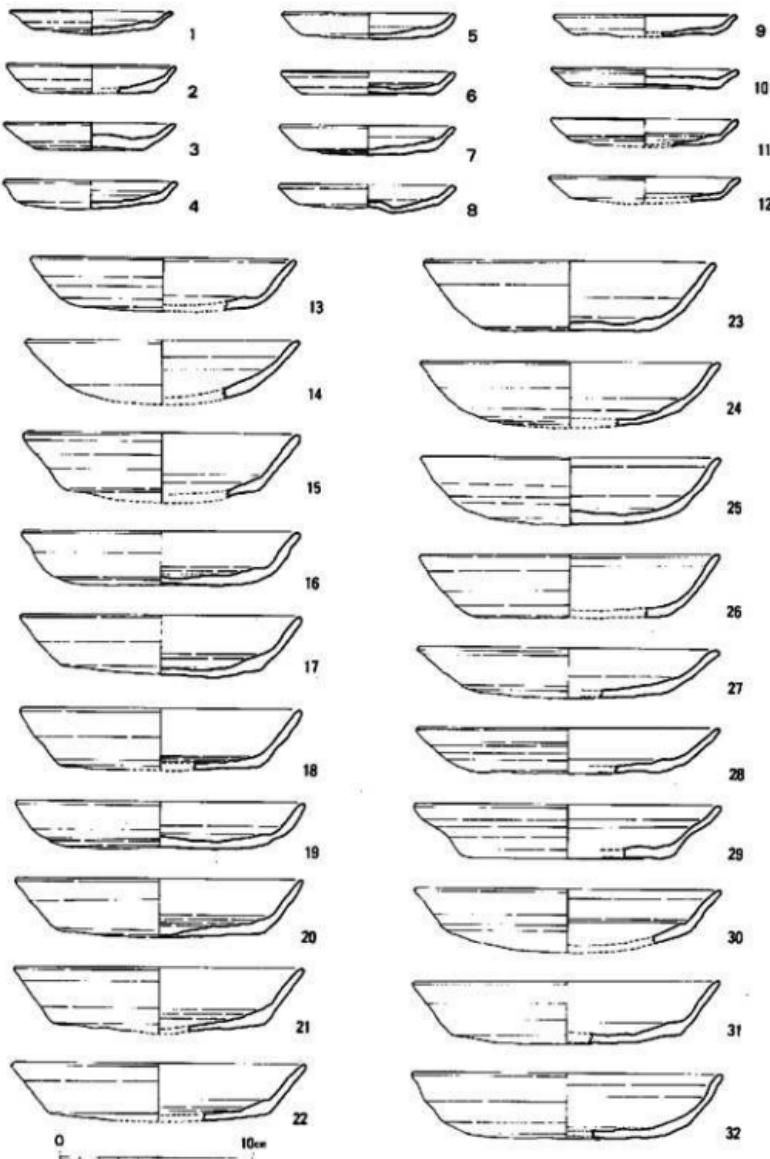
74号井戸

V面E-09区より検出した井戸である。大半が調査区外に出るので、規模は確認できなかつた。

1~32は土師器である。土師皿・壺はヘラ切り底がほとんどで、糸切り底はわずかにまじるにすぎない。1~12は皿である。5・10の底部は回転糸切りで4・5・8・10の底には板目压痕がみられる。口径8.5~10.0cm、底径5.8~7.9cm、器高1.0~1.5cm。13~32は壺である。26・29・30は底部を回転糸切りする。口径13.8~16.1cm、底径9.0~12.6cm、器高2.4~3.5cmをはかる。33~48は白磁である。33は、小壺の蓋である。鋲部から下面是露胎となる。34~38は、皿である。34は、全面施釉の後、底部を削り取って露胎とする。この露胎部分に「上」の墨書がなされている。39~45は碗である。44の見込みは、体部から段をなくして一段低く作られている。46~48は、壺である。49は、越州窯系青磁の碗である。見込みには、重ね焼きの目痕が残る。全面施釉。50は高麗青磁の碗である。胎土は淡灰色で細かい砂を含む。釉は、青味をおびた暗灰色である。外面の釉は、熱を受けて発泡している。火災にあったものと考えられる。復原口径14.0cm。51・52は、天目茶碗である。器形的法量的には類似するが、細部で異なり、別個体と考えられる。51の胎土は、灰色で砂っぽく、やや粗めの感がある。粒度はととのう。52の胎土は、淡灰褐色を呈する他は、51と似る。釉はいずれも、光沢の強い黒茶色である。51は復原口径12.7cm、951号ピット出土片と接合できている。52は、復原口径12.1cmをはかる。53は、

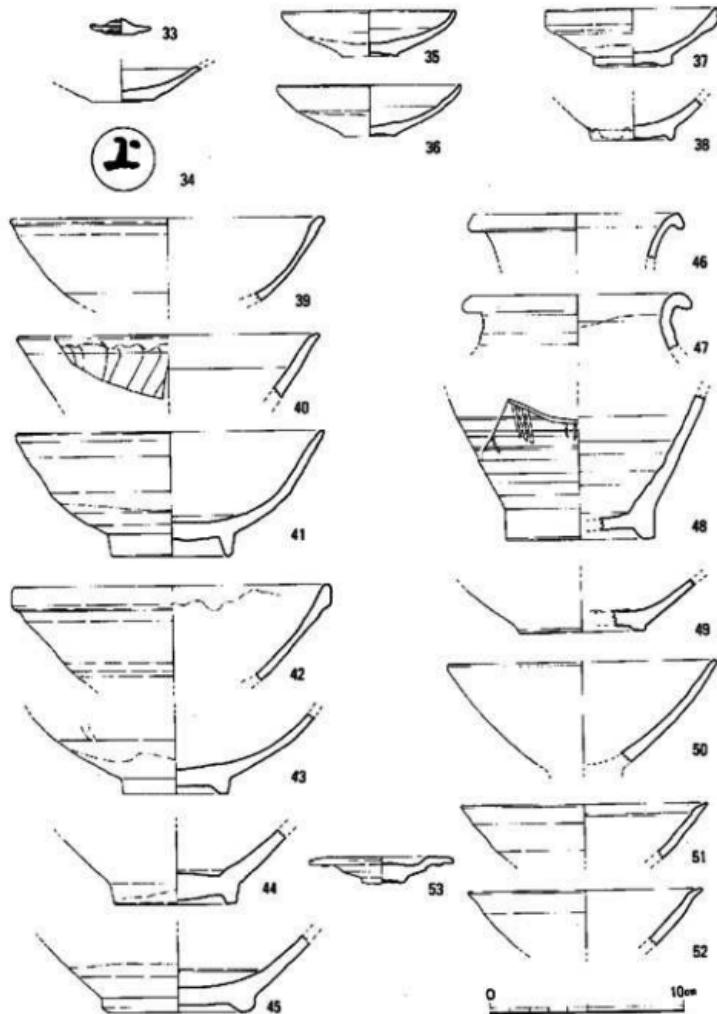


289 74号井戸出土遺物1



290 74号井出土遺物2 (1/3)

褐釉陶器の蓋である。灰白色で、白色・黒色の微砂を含む胎土に、暗褐色の釉を施す。鉢部に穿孔があるが、破片のため、その数はわからない。鉢部の下面は露胎となる。

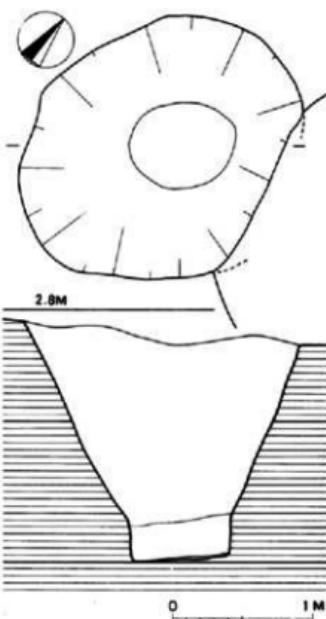


291 74号井戸出土遺物3 (1 / 3)

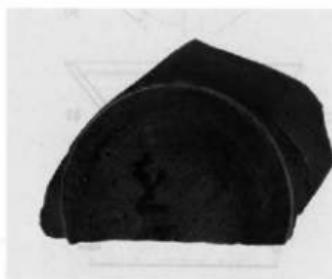
78号井戸

V面 F-03区より検出した井戸である。掘りかたは長径212cm、短径180cmの梢円形、井筒部分は長径72cm、短径60cmをはかり、深さは検出面から164cmまで確認している。

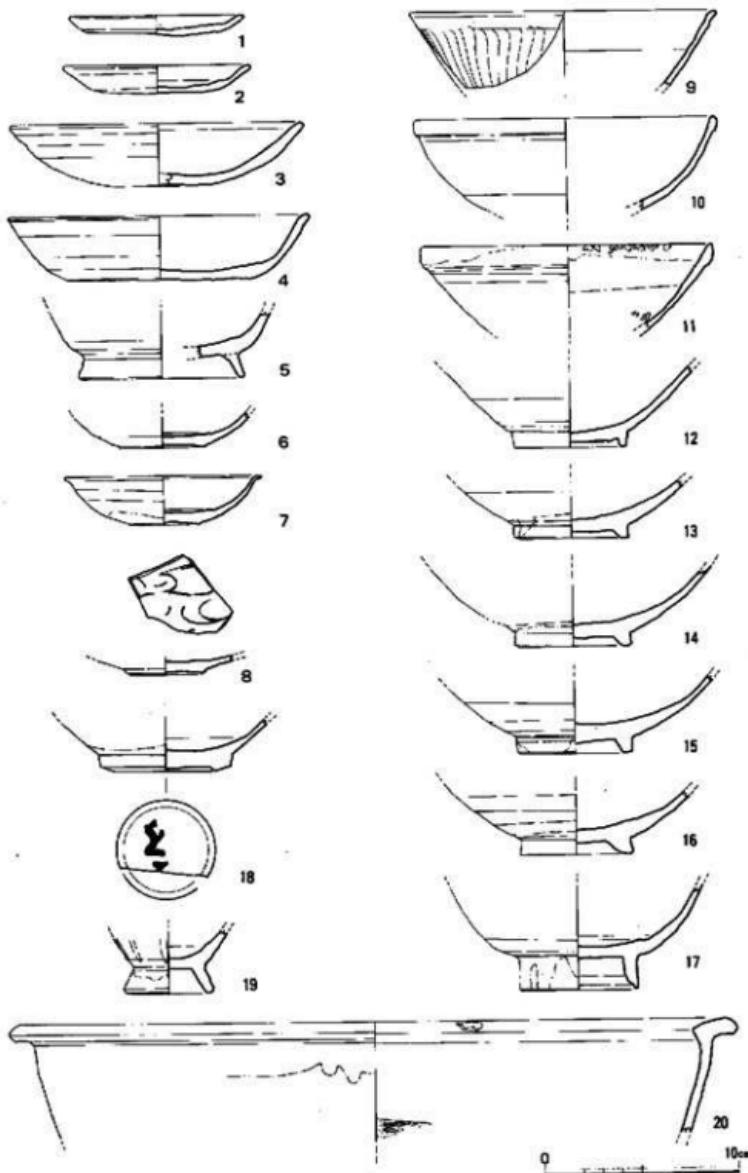
1~5は土器である。1・2は皿で、粘土紐巻き上げで整形している。外底部に板目圧痕がつく。内底部はナデ、体部はヨコナデする。口径9.1~9.8cm、底径6.5~6.85cm、器高1.1~1.45cm。3・4は环である。3は粘土紐巻き上げで、外底部には指頭圧痕がならび、その上をナデで平滑に整える。内面はコテで削る。口縁部内面から体部外面上半は、ヨコナデ。口径15.2cm、器高3.25cmをはかる。4の底部は回転糸切りで、板目圧痕がのこる。内底部はナデ、体部は内外面ともヨコナデする。口径15.5cm、底径9.8cm、器高3.35cm。5は高台付壺であろう。高く、外方に踏ん張って高台をナデ付ける。高台径8.6cm。6~19は白磁である。6~8は皿である。8の見込みには、沈線による線描文がみられる。9~18は碗である。9の体部外面には、縦線文がひかれる。18の高台内には、墨書がまとめられる。下方を欠くので墨書の全文はうかがえないが、字配りからみて、仮名文字2文字と思われ、「を□」と解読できる。碗の器形としては、おそらく幅の太い玉縁口縁を持つタイプであろう。19は、瓜形小壺の底部片である。白色の細かい胎土に、うすく緑をおびた透明釉を施す。高台外面下半から内側は露胎となる。高台内面と高台円底部は回転ケズリされる。高台径4.6cm。20は黄釉陶器の盤である。胎土は灰色で砂粒を多く含み粗い。釉は淡黄緑灰色で、全体に氷裂がはいる。体部外面の上位から内面まで施釉される。露胎部は赤褐色を呈する。口縁部上面には、重ね焼きの痕跡と思われる付着がある。復原口径37.6cmである。



292 78号井戸実測図 (1/40)



293 78号井戸出土遺物 I



294 78号井戸出土遺物 2 (1 / 3)

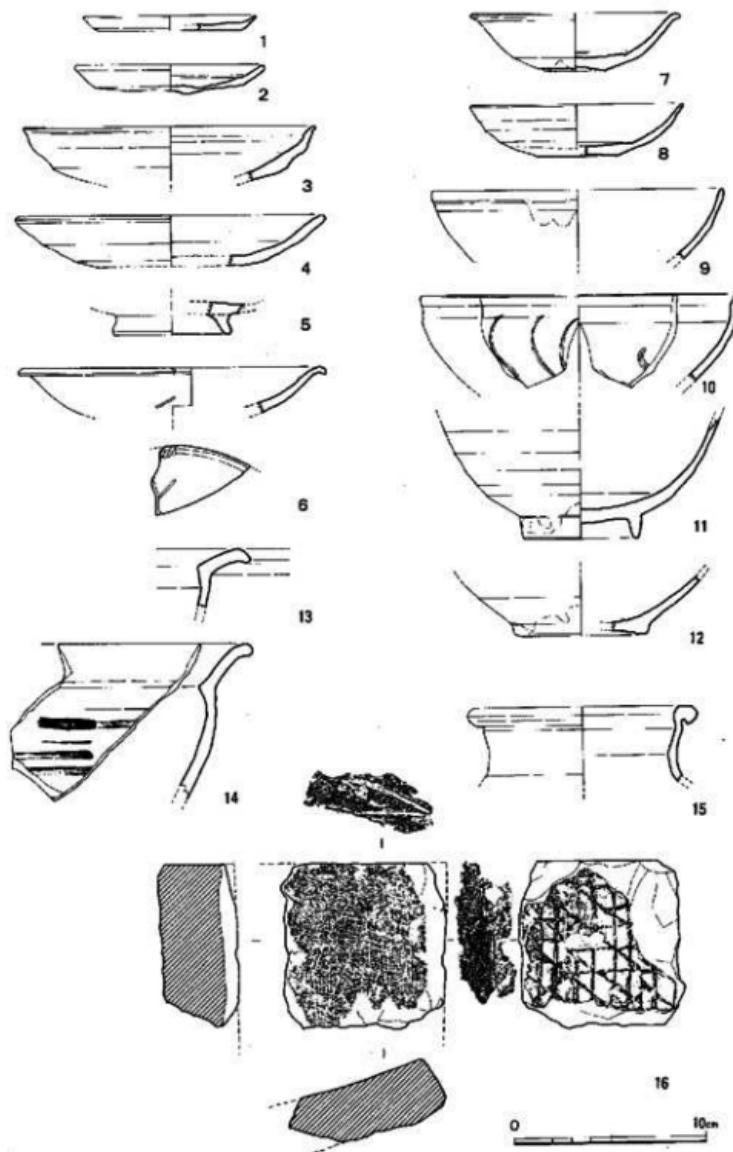
82号井戸

V面F-02区より検出した井戸で、81号井戸を切り、83号井戸に切られている。ほりかたで径160cm前後、井筒で径50cm前後をはかり、深さは220cm前後である。

1～5は土器である。1・2は皿で、いずれも底部をへら切りする。2の外底部には板目圧痕もみられる。口径9.0～9.8cm、底径7.4～7.6cm、器高0.8～1.6cmをはかる。3・4は壺である。いずれも、底部はへら切りする。口径15.0～16.0cm、器高2.8cm程度(4)である。この他、底部を回転糸切りする皿・壺も出土している。5は高台部分のみの破片である。6は縁釉陶器の皿である。暗灰色を呈する須恵質の硬胎に、鮮緑色の釉が厚めにかかる。口唇部外面に細沈線による刻み文様があり、輪花の可能性もある。また、体部外面に沈線が一本みとられるが、意識的につけているのかどうかは不明である。体部は、胎のためはっきりとはわからないが、ヨコナデを施していると思われる。復原口径15.9cm、7～12は白磁である。7・8は皿。9～12は碗である。13～15は陶器である。13は盤で、淡白色の粗い胎土に、淡緑灰色の釉を施す。内外面とも氷裂がみとめられ、光沢は純い。14も盤で、黄味を帯びた灰白色の胎土に淡緑灰色の釉を施す。福彩は淡黄褐色を呈する。15は壺の口縁である。灰色の、比較的キメ細かい胎土に暗緑灰色の施釉をする。16は平瓦片である。内面(上面)は布目、外面(下面)は格子目タキである。



295 82号井戸（左…81号井戸、南東より）



296 82号井戸出土遺物 1 (1/3)

(7) 古代 I 期の遺構

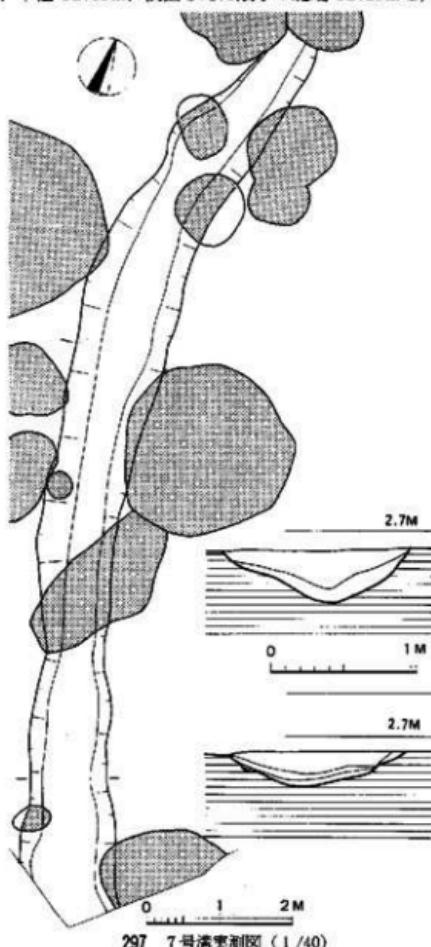
① 溝状遺構

7号溝

V面 F-01・03・04区において検出した溝である。延長にして、13.5m分を検出した。南北に、ゆるく弧を描きながらびしていく。溝幅は、最大で134cm、最小で68cm、深さは12~32cmをはかる。溝底の標高は、南端で2.43m、中程で2.33m、検出した限りの北端で2.23mと、南から北へゆるく傾斜して下っている。溝の断面は、おおむね浅いU字形を呈する。

溝の埋土は、大きく上・下の2層にわかれる。上層は、暗褐色砂質土層、下層は暗褐色砂質土に白色砂のまじった層である。堆積状況は、この溝が自然に埋っていったことを示している。

出土遺物は少量かつ小片ばかりで、図示できたのはわずか3点にとどまった。1は須恵器の壺である。胎土は精良で堅緻に焼き上り、暗赤褐色を呈する。体部外面の高台脇はヘラケズリ、他はヨコナデ整形する。口径18.1cm、高台径10.6cm、器高4.8cmをはかる。2は灰釉陶器の瓶の底部である。灰白のやや粒度のある胎土に、淡灰色の釉がうすくかかる。内底部に落ちて溜った釉は、緑灰色を呈する。体部外面はヘラケズリ、外底部には板台状の圧痕がつく（土師器などに見られる、いわゆる板目圧痕とは異なる）。内面はヨコナデを行なう。復原底径



297 7号溝実測図 (1/40)



298 17号溝（南西より）

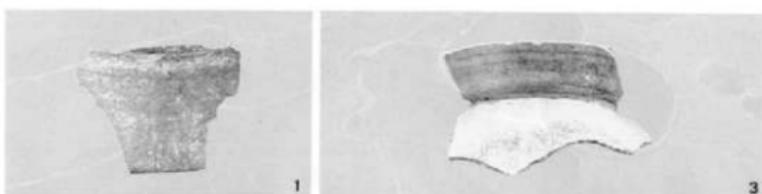
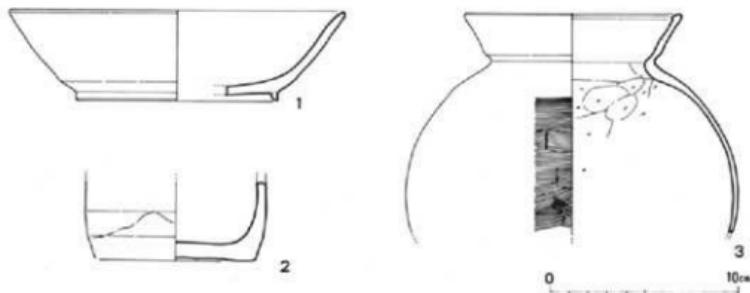


299 7号溝（南より）

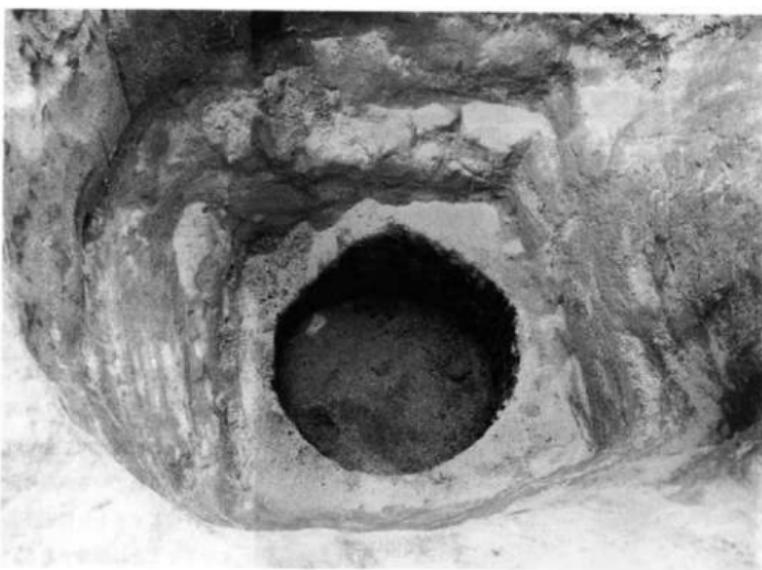
8.6cmをはかる。3は土師器の壺である。体部外面はヨコハケ、体部内面はケズリ、肩部から口縁部内外面をヨコナデする。復原口径11.7cm。

7号溝の年代は、出土遺物が少ない点から判断しがたい。上述の1は、下っても9世紀前半代であろう。2は、11世紀前半頃であろうか。3は、古墳時代にまで遡る。7号溝が、検出した範囲内で全ての遺構に切られている点を考えると、少なくとも11世紀後半まで下すことは無理である。

11世紀前半以前と考えたい。



300 7号溝出土遺物 (1 / 3)



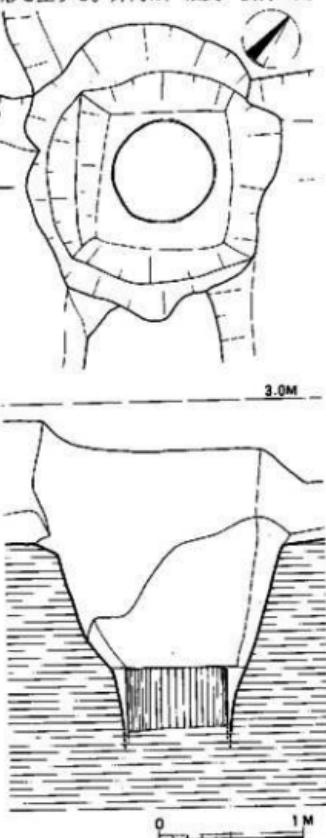
301 88号井戸 (南東より)

② 井戸

88号井戸

V面E-09区より検出した井戸である。掘りかたは方形を呈する。井筒は、細長い板材を丸く立てならべたもので、タガ等は検出されず、桶とは考えられない。ただし、板材は朽ちて遺存状態は悪く、十分な検討はできなかった。掘りかたは、一辺140~160cmをはかり、井筒の木質を検出したレベルでは、88cm四方の略正方形をなす。井筒は、径約70cm、木質の長さは、42cmまで確認できた。遺構検査面から、確認した限りで、深さ216cm、最下部の標高は0.7mである。

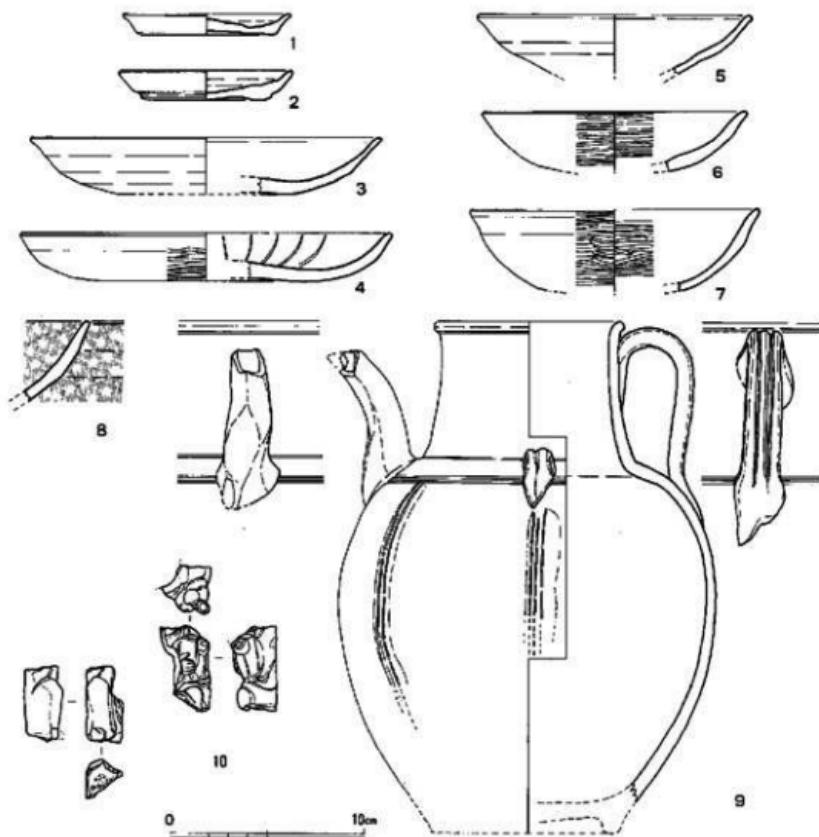
1~7は土師器である。1・2は皿である。底部はヘラ切りする。1の底部には、板目圧痕もみとめられる。口径8.7~9.0cm、底径6.8cm、器高1.1~1.55cm。3は壺である。ヘラ切り底で、体部外面はヨコナデ、内面はコチで平滑に仕上げる。4は大皿である。胎土には小砂粒を含むものの精良で、焼成も良く赤茶色を呈する。外底部及び体部外面は横位のヘラミガキを密に施す。口縁部外面はヨコナデ、内面には放射状の暗文が入る。年代的には遡る資料である。5は壺であろうか。砂粒をほとんど含まない胎土上で、白褐色を呈する。口縁部をヨコナデ、他をナデ調整する。白色系土師器で、搬入品であろう。6・7は研磨土器である。内外面とも密にヘラミガキを施すが、その単位ははつきりしない。8は黒色土器の壺である。内外面とも密にヘラミガキし、つやを持つ。9は、越州窯系青磁の水注である。88号井戸埋土の上半と下位とから、バラバラに分れて出土した。残念ながら、底部を欠いている。胎土は、青灰色もしくは灰褐色を呈し粒子は密で、精良である。釉は全面に施され、外面は緑褐色、内面は黄緑褐色で、わずかに貫入がみとめられる。体部には片切形で縦線を垂下させ、全周を六区に分す。瓜形水注の流れを汲んだ分割であろう。頸部最大径は、体部中位よりやや上にある。体部と頸部とは一条の沈線を介してつながる。頸部はゆるく外反しつつ内傾して立ちあがり、端部は丸味を持たせておさめ、口縁とする。把手の外面には、2



302 88号井戸実測図(1/40)

条の沈線がはいる。口径9.4cm、胴部最大径19.35cm、遺存高24.75cmである。10・11は白磁の水滴である。同一個体と思われるが、接合はできない。白色のキメの細かい精良な胎土に、ガラス光沢の強い透明釉をまんべんなくかける。11の底面は露胎となるが、ここには目の細かい布目がみとめられる。意匠としては人物が右膝を立ててすわり、両手で左脇に水注をかかえている像であると思われる。10が、水注を抱えて左脇付近から左膝、11が立てた右脚にあたる。潮州筆架山の出土資料の中に類品がある〔『潮州筆架山宋代窯址発掘報告』 文物出版社 1981年〕。

88号井戸の年代については、11世紀中頃（後半代でも早い時期）を考えたい。



303 88号井戸出土遺物 I (1 / 3)



9



304 88号井出土文物2



89号井戸

V面E-10区において検出した井戸である。掘りかたは、ややいびつな方形を呈する。掘りかたの一辺は205cm×250cm前後で、深さは、検出面から140cmをはかる。掘りかたの下面は、径

215cm前後のいびつな円形を呈する。

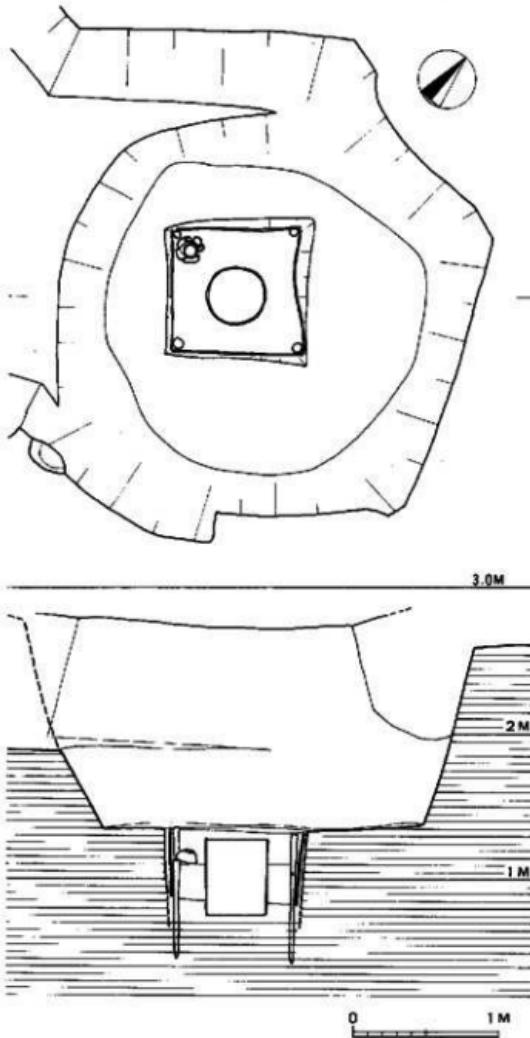
井筒は方形である。掘りかた最下面で検出した段階で、一辺約100cm程の正方形を呈していた。井筒は、その側面に板材を横にあて、4隅に木杭を打ちこんで固定するもので、板材の幅は約24cm、上下2段に重ねられていた。井筒中央部には、曲物（木質の痕跡のみから推定）が据えられていた。径42cm、高さ52cmの曲物で、底は抜いてあった。

V面検出面から井筒最下部までの深さは約200cm、標高にして約1mをはかる。

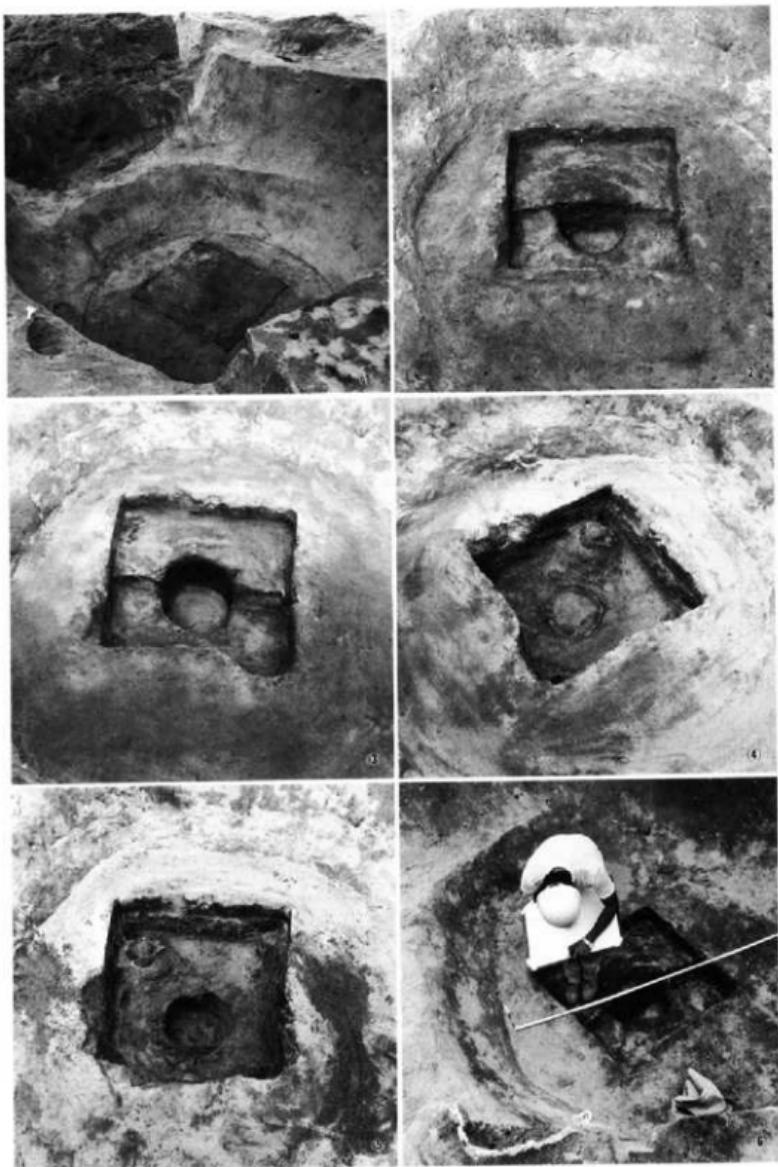
須恵器・土師器など、多量の遺物が出土した。注目すべきは、焼塙壺の多量の出土であろう。

Fig. 307～Fig. 308に図示したのは、須恵器である。

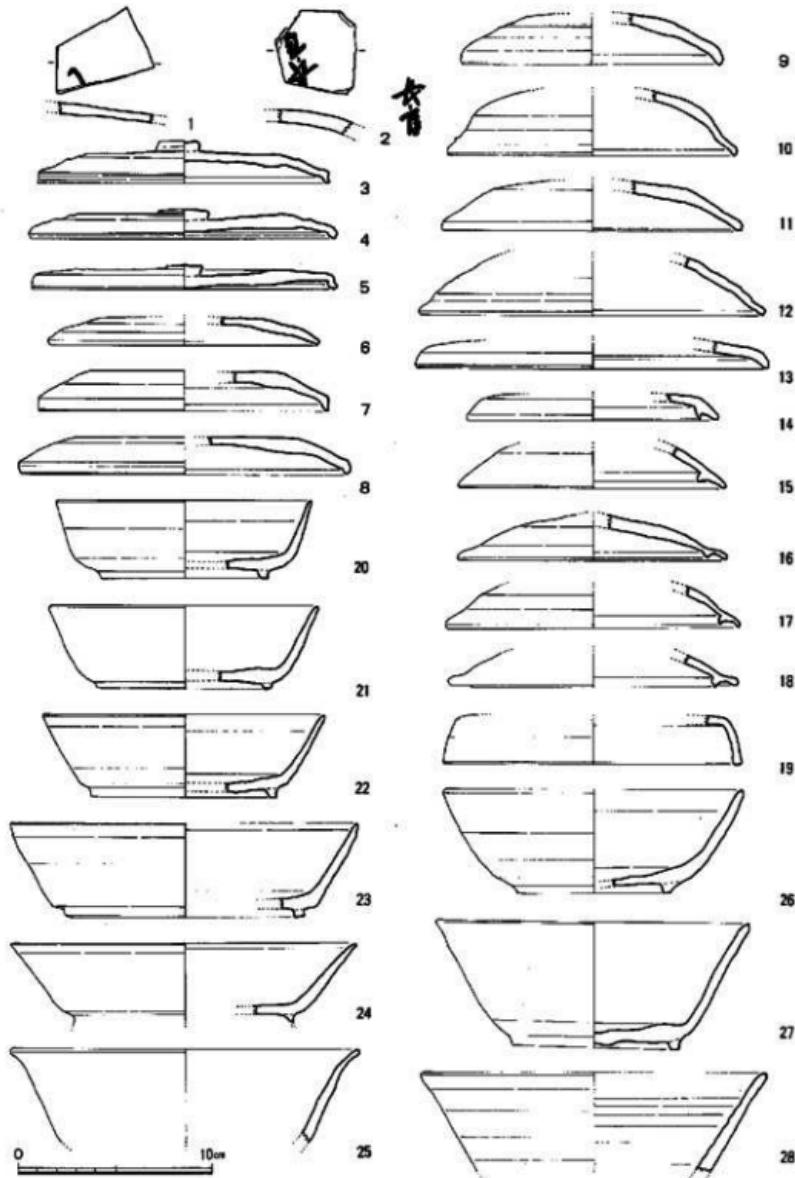
1・2は、墨書き須恵器である。いずれも壺蓋の頂部付近の小片と考えられる。1は文字の大半を失なっている為に判読できない。漢字の最終画のハネの部分と考えられる。2は



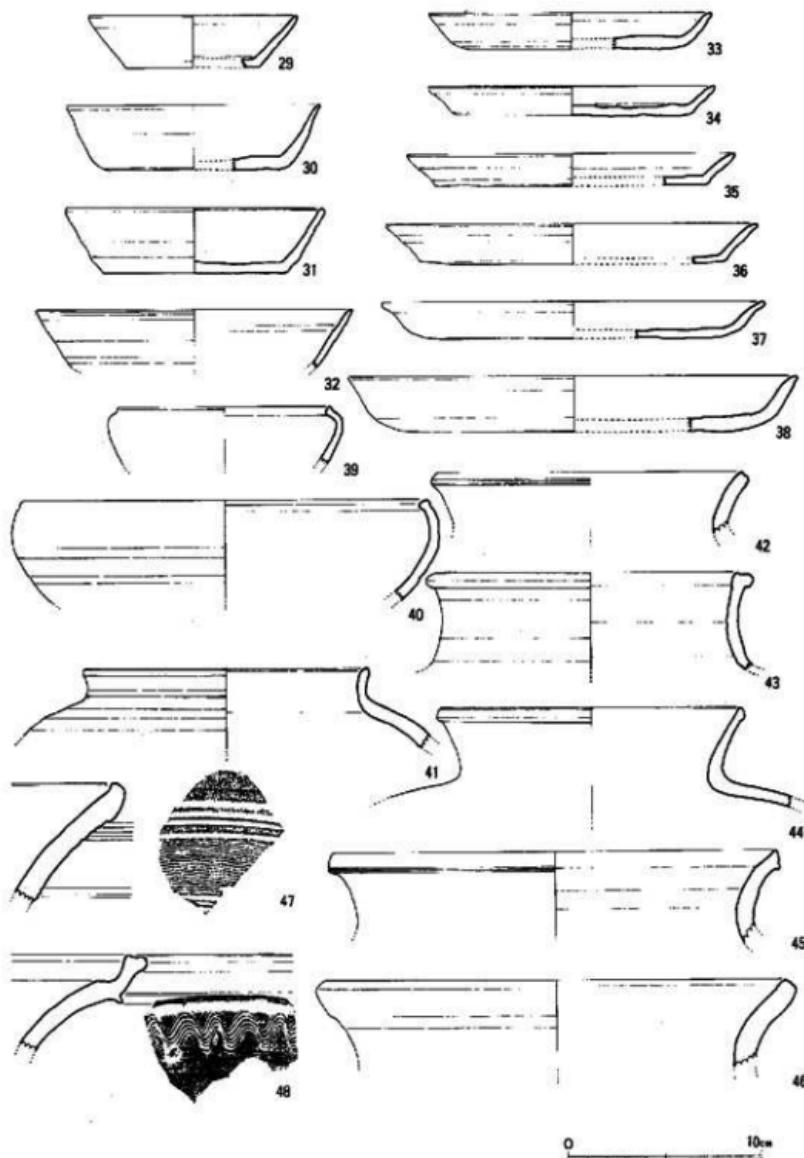
305 89号井戸実測図 (1/40)



306 89号井戸 ((1)・(4)一東より。 (2)・(3)・(5)は南東より)

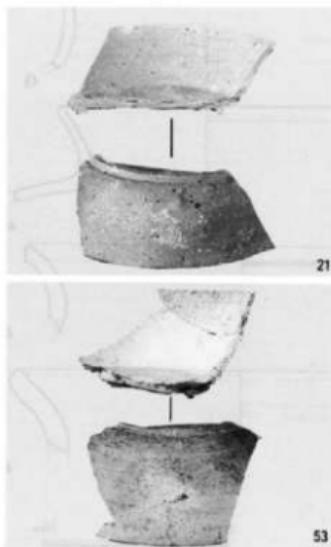


307 89号井戸出土遺物 I (1/3)



308 89号井戸出土遺物 2 (1 / 3)

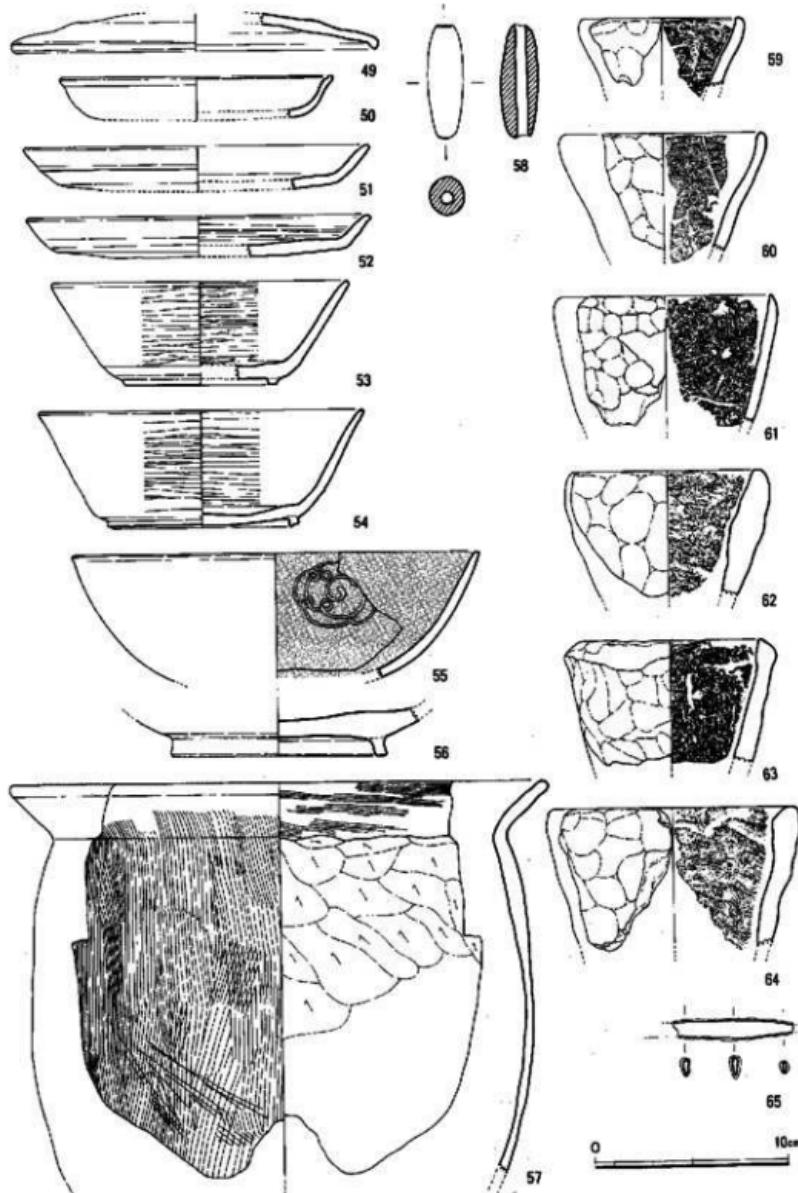
「長官」と墨書きされている。前後を欠くので、何の「長官」なのか、またはこの後に言葉が続くのかは、不明である。3~19は、蓋である。3~8は、蓋の端部を明らかに下方に折りまげるものの、9~13は、端部がゆるくカーブして下方を覆うもの、14~18は、端部の内側に、小さなかえりのつくものである。19は、壺の蓋であろう。20~28は、高台付坏である。高台は、体部が立ちあがる部分から、やや底部側に入った位置につけられる。高台はいずれも低平なものであるが、24の高台は、極めてうすくのみている。27は、井筒の木枠に接して、土圧でつぶれた形で出土したものである。調整は全面にわたってヨコナデによってなされる。口径16.2cm、高台径8.65cm、器高6.7cmをはかる。8世紀後半から9世紀初頭にかかるという時期幅の中におさまる遺物である。29~32は、坏である。33~38は、皿である。形態的には脱く外反する体部を持つもの(34・35・36)と、ゆるく内湾し、口縁部のみ外反するもの(33・37・38)とがある。39・40は鉢である。41は短頸壺である。頸部は体部との間に脱い駆けはつくらず、ゆるく外反気味に折り返して、ほぼ垂直に立ち上がる。42~46も壺の口縁である。47・48は、大甕の口縁部である。いずれも口径が大きすぎて、出土した破片からでは口径復原は不可能であった。47は口縁部復合口縁部直下に4条の平行沈線を引きその下に16条の櫛描波状文を配する。48の口縁部は復合口縁状を呈する。その口縁直下に櫛描波状文を配する。



21



27



310 89号井下遺物4 (1/3)

49~64は土師器である。49は壺蓋である。50~52は皿で、内外面とも密にヘラミガキを施される。赤褐色を呈する。53・54は高台付壺である。胎土はキメが粗かく均質で、赤褐色を呈する。内外面とも密に横位のヘラミガキを施し、高台脇はヨコナデする。55は、内黒土器である。胎土には細かい砂粒を含み（わずかに径1mmの大砂粒もまじる）、微細なキンウンモも含む。淡茶褐色である。内外面とも密にヘラミガキを施すが、その単位は、はっきりとつかめない。体部内面には、ヘラで花文様の暗文を描く。内面は炭素吸着の為、黒灰色を呈する。56は土師器の高台である。57は、甕である。27の須恵器高台付壺と重なって、壺の下から出土した。体部外面にはススが付着し、煮沸に用いられたことが知られる。胎土は、径1~2mmの砂粒を多く含み粗い。体部内面は、下から上へケズリ、口縁部内面はヨコハケの上からヨコナデ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケによって整形する。復原口径は、17.8cmをはかる。58は土鐘である。長さ5.9cm、最大径1.95cmである。59~64は、焼塙壺である。焼塙壺片は、きわめて多量に出土している。比較的破片の大きいもののみを実測したが、その中から更に、口径の推定できる口縁部片のみを取り上げた。いずれも体部外面には指頭圧痕を、内面には網目をとどめている。焼成の具合によって、茶色の土師質のものから灰色を呈して須恵質に近くなるものまで、様々である。図示したものは、口径8.6~11.0cmをはかる。

65は、鉄器である。刀子片と思われる。研ぎ減りの為か、刃などははっきりしない。

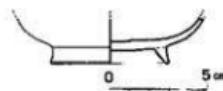
89号井戸の作られた年代を示すのは、井筒脇におかれていた、27の須恵器壺である。それによると、8世紀後半~9世紀初頭を考えられる。他の須恵器の特徴もこれを支持している。また、上述の様な焼塙壺は、8世紀代に出現し9世紀中頃には姿を消すとされている（森田勉「焼塙壺考」『大宰府古文化論叢』下巻 古川弘文館 1983年）。55に示した内黒土器が、要素としては時期の下る可能性があるが、総体として見た場合、89号井戸が設けられたのは奈良時代末から平安時代初めにかかる時期と考えてよかろう。

③ 柱穴状小土壤

1022号ビット

V面D-12区で検出したビットである。径52cm、深さ10~20cmをはかる。

綠釉陶器が出土した。胎上は暗灰褐色の硬胎で、微砂をところどころに含み、全体にきめが細かいとは言えない。釉は濃緑色でむらをもって施釉される。整形は、ヨコナデによる。高台径6.2cm。大手前女子大学の前川要氏の御教示によれば、美濃東濃地方の製品で、10世紀後半のものとのことである。

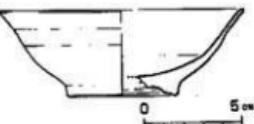


311 1022号ビット出土遺物

1054号ピット

V面E-10区で検出したピットである。径42cm、深さ56cmをはかる。

縁釉陶器が出土した。胎土は黄灰褐色を呈する土師質の硬胎で、縁黄色の釉がうすくかかる。疊付から外底部は露胎となる。整形はヨコナデによってなされる。高台は削り出し高台で、疊付は内面に向って傾斜する。口径12.75cm、高台径5.7cm、器高4.5cmである。



312 1054号ピット出土遺物

1107号ピット

V面E-10区で検出したピットである。検出後、雨にあって砂が崩れ、消滅してしまった。

須恵器の高台付壺が出土している。内底部中央付近をナデ、体部から外面をヨコナデ調整する。高台は付け高台である。高台径12.0cmをはかる。

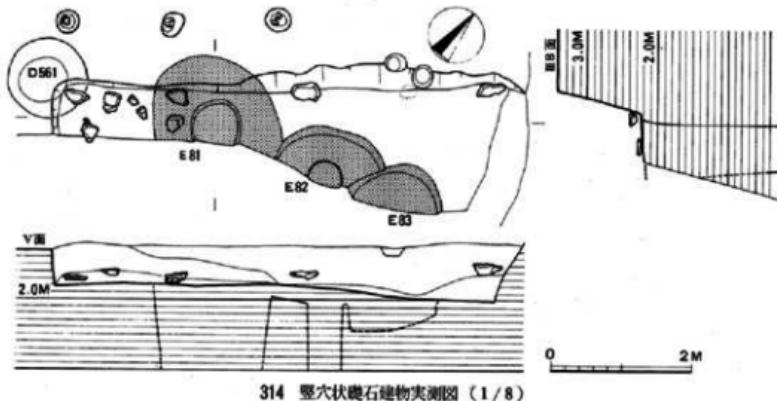


313 1107号ピット出土遺物

(8) その他の遺構

① 壁穴状礫石建物

V面 F-02区で検出した建物址である。壁穴住居址状に方形の壁穴をほりくぼめている。床面には、砾を平坦面を上に向けて並べている。方形のほりかたの一隅を検出しただけで、その規模等については全くわからないが、一辺660cm以上であると考えられる。ほりかたの深さは80cm前後をはかるが、ⅢB面調査時にこの掘りかたの位置で方向を同じくして土層の変化を把握しており、ⅢB面からの掘りかたとすると深さ125cm前後となる。また、ⅢB面で、建物礫石とは対応する位置に柱穴を検出しておらず、庇をかけていた可能性が考えられる。14世紀頃か。



314 壁穴状礫石建物実測図 (1/8)



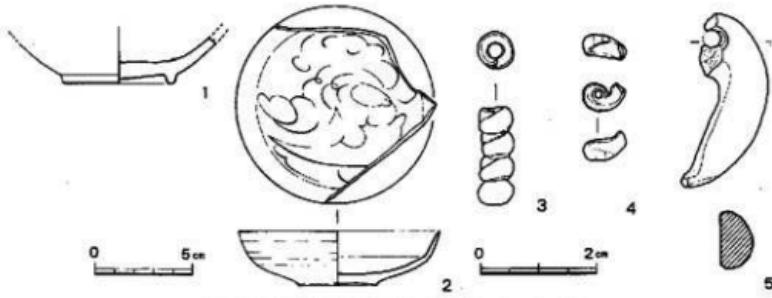
315 壁穴状礫石建物 (南東から)

② 525号土壌

4面E-08区で検出した土壌である。古代II期に含まれる土壌であるが、ガラス玉類の未製品が複数点出土しており、ガラス铸造にかかわる土壌と思われる所以、特別に取り上げた。

出土遺物は小片が多く、図示できたものは非常にわずかである。1は越州系青磁の碗である。褐色がかった緻密な胎土に、灰黄緑色の不透明釉が施される。高台付のろ露胎となる。見込みには全周で6ヶ所の目痕がみとめられる。2は白磁の皿である。見込みに沈線文がみられる。3~5は、ガラス製品の未製品である。3・4は小玉で、3は4つ連ったまま、4は型がくずれたものと思われる。5は勾玉である。頭部の約2分の1を欠く。端部はなお伸びる様相を示し、これが鋳型の湯口につながるものと思われる。3は明緑色、4・5は明青緑色を呈し、透明である。5は内部に気泡が多くみられる。

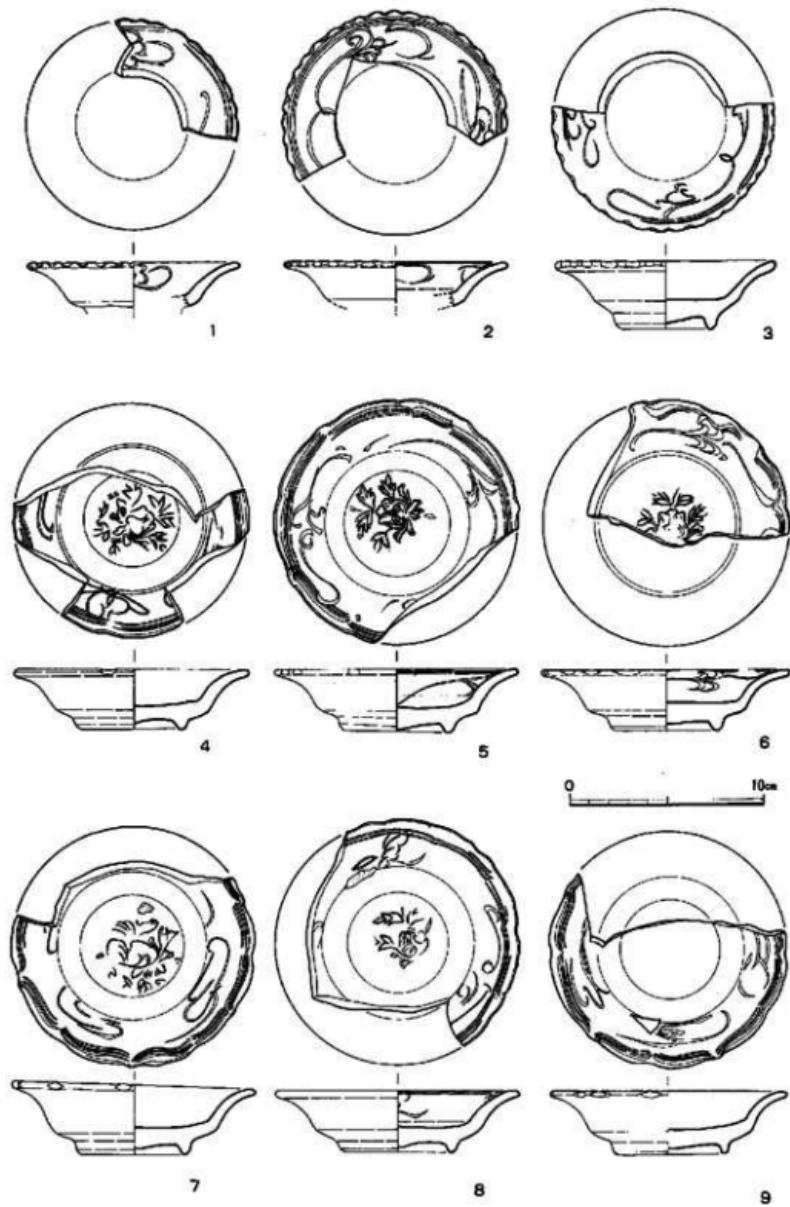
これらと共に出土した土器片には、糸切り底のものはみあたらなかった。また、525号土壌を切っている526号土壌には、糸切り底の上部器が数点まじっており、これらの点を総合すると古代II期前半の造構と考えることができる。



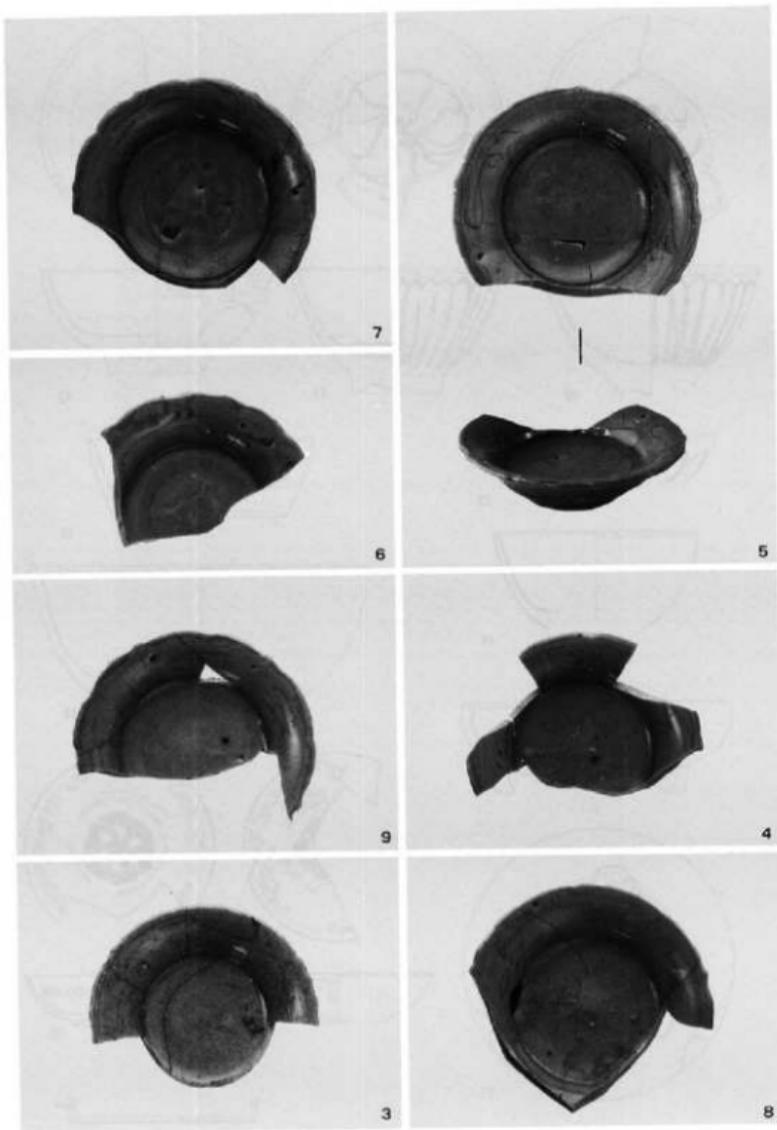
316 525号土壌出土遺物 (1/3 3~5-1/1)

③ E-08区 I面下山土遺物

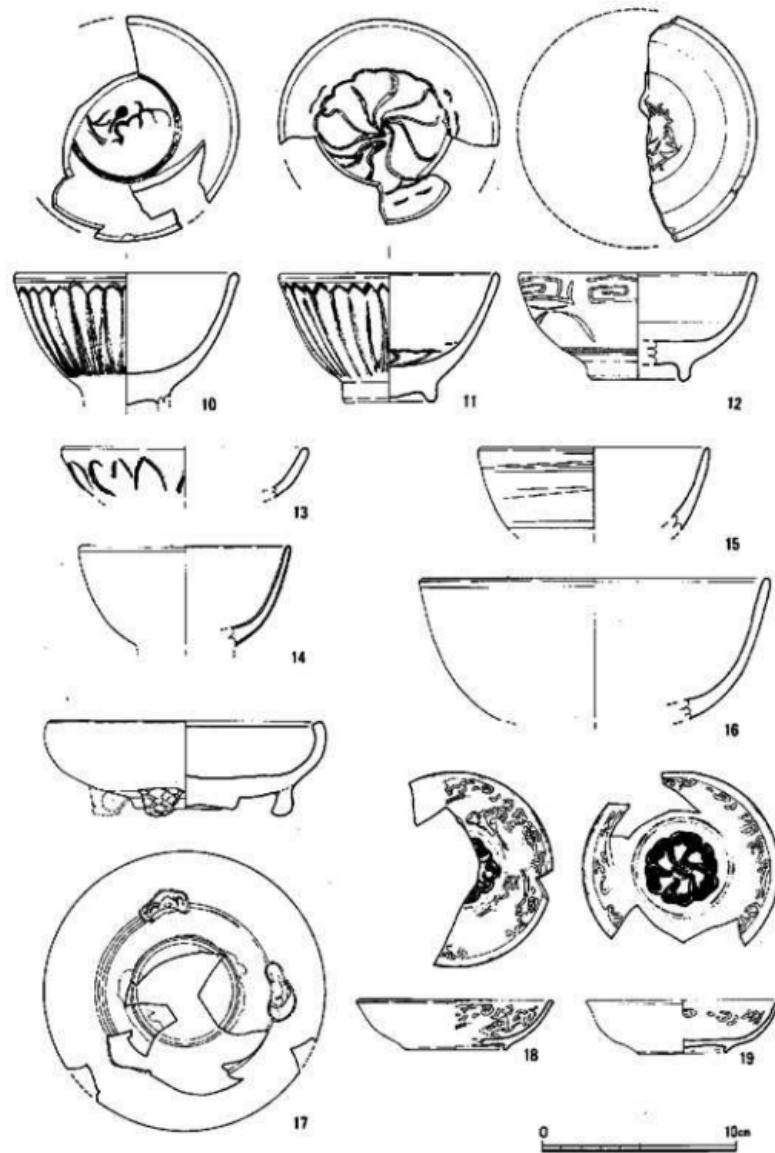
本章(3)II面の調査でふれた様に、ほとんど一括出土と言える状況で出土した中国製器の一群である。1~17・20は青磁で龍泉窯系である。例外なく灰色~灰白色の胎土に濃緑色の半透明釉をたっぷりと施している。ガラス光沢は強い。1~9は高台付皿である。高台付から外底部が露胎となる。10~16は碗である。10・11はヘラ描き沈線で蓮弁を描くものである。12は、口縁部外面に雷文帯を、体部下半に沈線で半円状に蓮弁を描くものである。13は片切形で蓮弁を描くが、鎬は立たない。17は獸足脚の香炉である。脚の中央にある外底部は露胎で、接地しない。20は算木文の香炉である。獸足脚がつくが、脚は接地せず外底部で立つ。18・19は、染付である。青花は見込み中央になされ、体部には印花文で草花様の文様をつけるが、光にかざさないと見極められない程うすい。胎土は純白に近く、釉の透明度が高く光沢も強い。



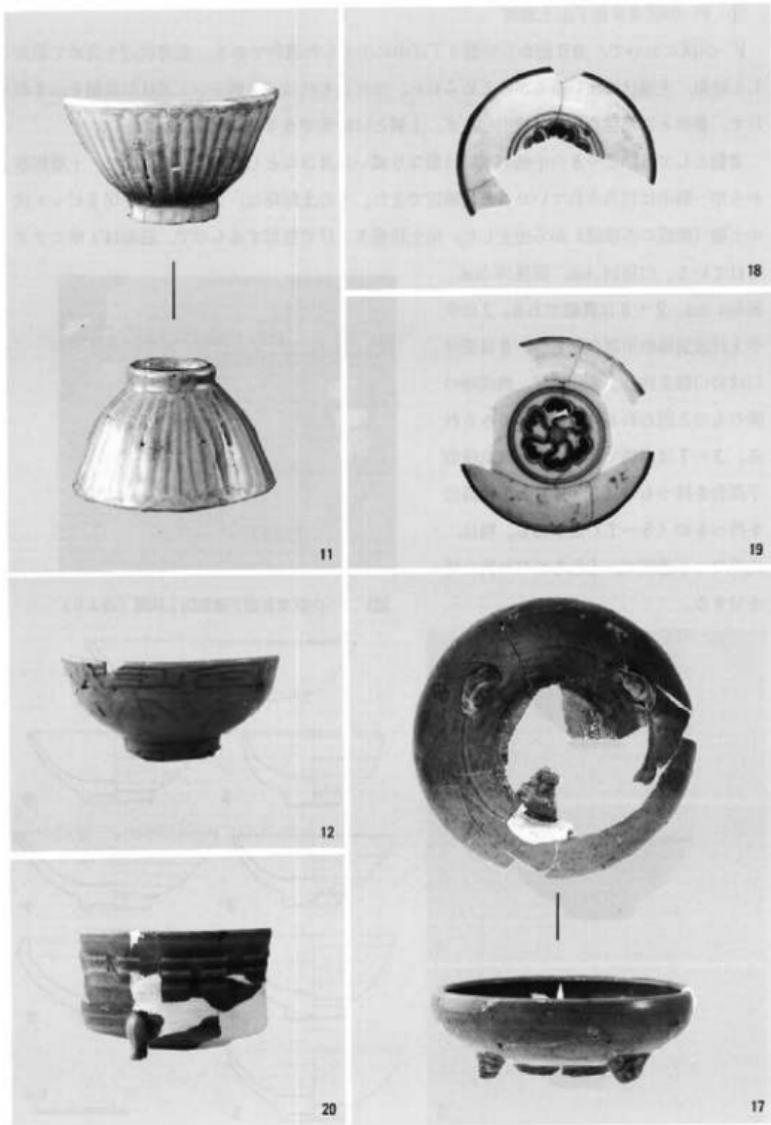
317 E—08区 I面下出土遺物 1 (1/3)



318 E-08区 I面出土遺物 2



319 E-08区I面出土遺物3 (1 / 3)

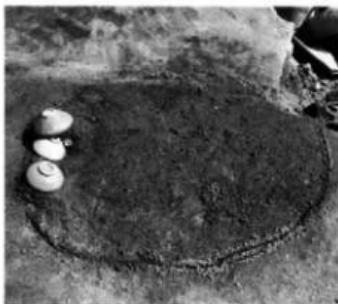


320 E-08区I面出土遺物4

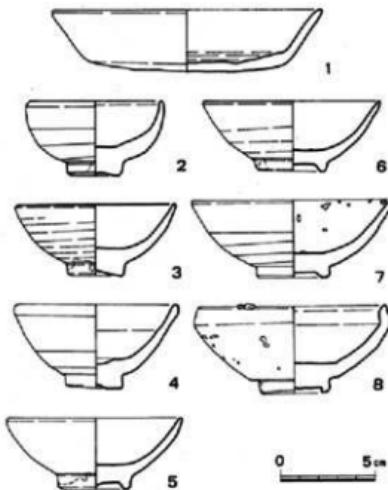
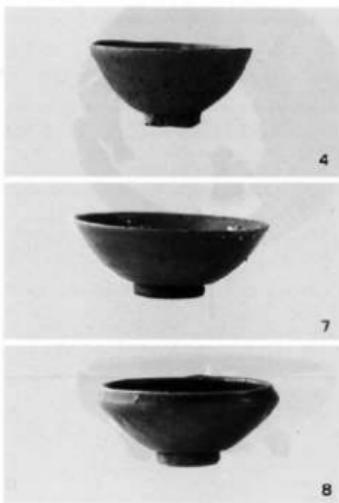
④ F-04区ⅢB面下出土遺物

F-04区において、ⅢB面からの掘り下げ中に出土した遺物である。急拠周辺を含めて調査した結果、土壤状の浅い落ちがみとめられた。ただしそれは、土層のレンズ状の堆積を示すだけで、整然とした掘りかたは検出しえず、土壤とは断定できない。

遺物としては、2~8の小碗が或いは重なり或いは並びなどして出土したもので、土層観察から単一層中に包含されていたことは確認できた。1の土師壺は、この包含層を切るピット状の土層（断面のみ確認）から出土した。粘土紐巻き上げで整形するもので、底部は丁寧にナデられている。口径14.4cm、底径10.3cm、器高3.3cm。2・8は青磁である。2はやや上げ底気味の平高台をもつ。8は受け口状の口縁を持つ。表面には、焼成時の降りものと思われる付着物が多くみられる。3~7は白磁である。上げ底気味の平高台を持つもの（3・4）と、輪高台を持つもの（5~7）とがある。釉は、光沢なく不透明で、土色をおびた乳白色を呈する。



321 F-04区ⅢB面下遺物出土状況（西より）

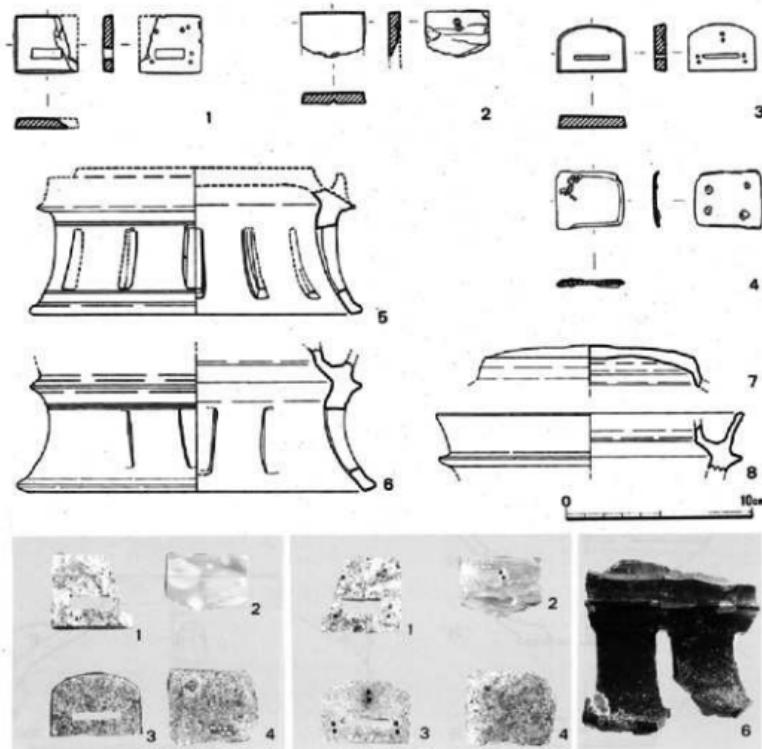


322 F-04区ⅢB面下出土遺物（1/3）

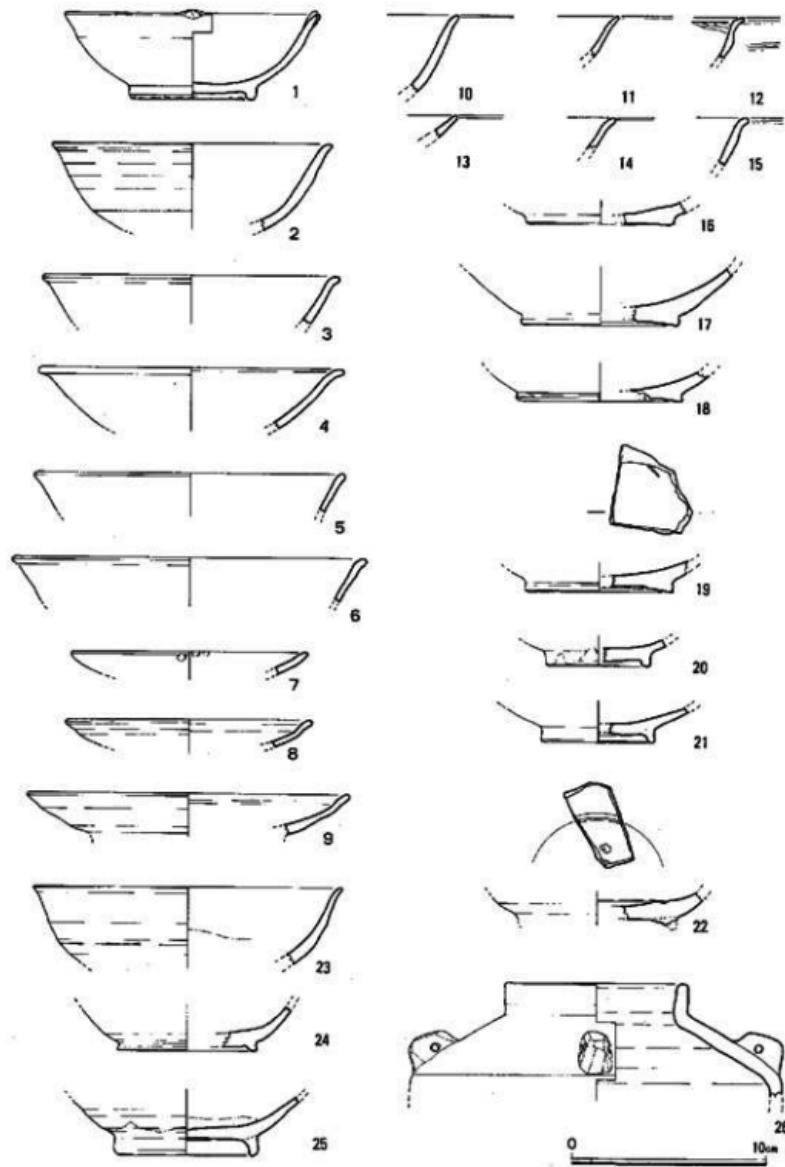
⑤ その他の出土遺物

律令期の遺物

1～4は、鎔帶である。1は錐石製石帶の巡方である。ⅢB面下E-01・03区よりの出土。縦3.1cm、横3.3cm、厚0.55cm。2も錐石の巡方である。上半のみ出土した。4面下F-03区出土。縦3.4cm、厚0.6cm。3は錐石製石帶の丸柄である。通側の丸柄と違い、下端の角が落ちていない。巡方の再生品と思われる。Ⅲ面下E-10区出土。縦2.52cm、横3.6cm、厚0.6cm。4は銅製品で鉈尾である。裏面には釘足がみられる。V面D-12区出土。縦3.15cm、横3.65cm。5～8は、須恵器の円面鏡である。ⅢB面下D-13区出土。暗灰色を呈し、胎土は小砂粒を含むが精良。焼成は堅緻である。接合できず、また器厚、細部の傾き・形状・細かい調整の施しかたを見ると、同一個体とするには無理がある様にも思う。一応別個体として考えたい。



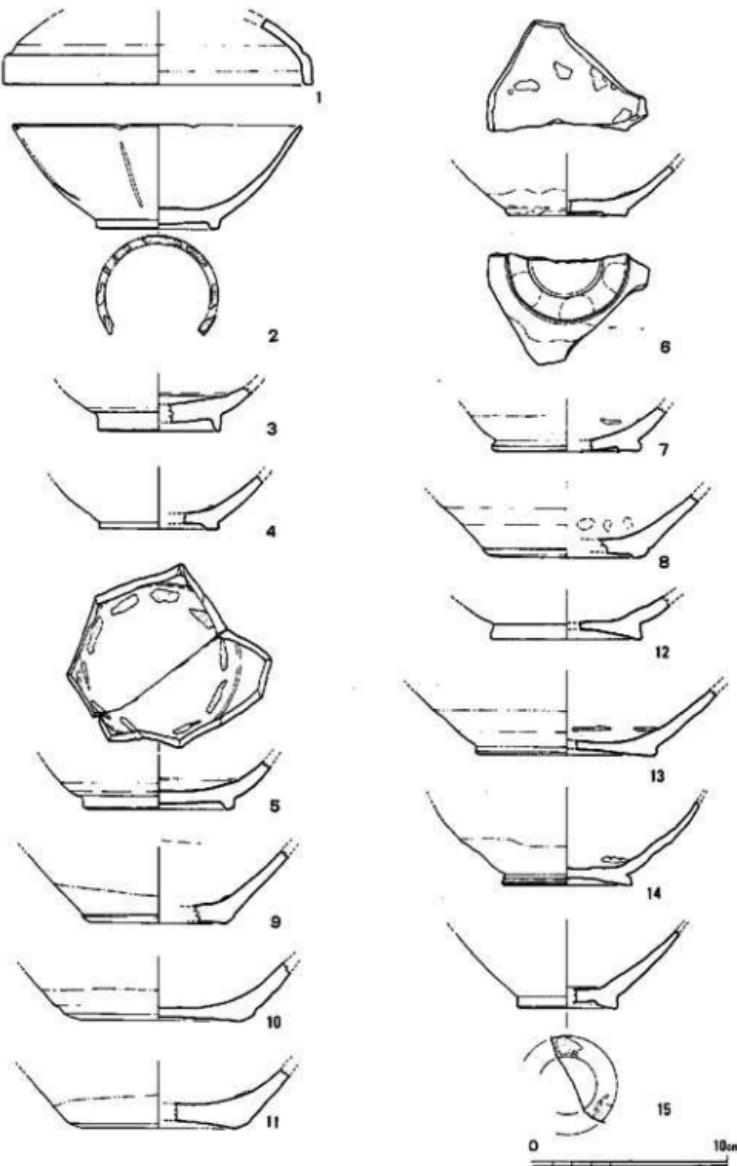
323 律令期の遺物（1／3）



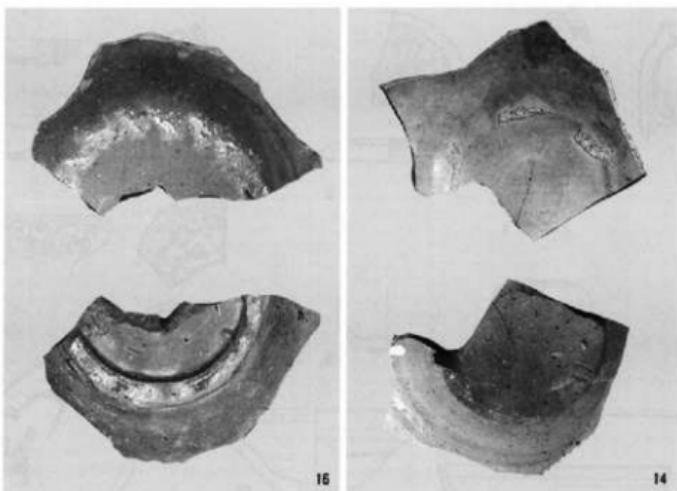
324 緑釉陶器・灰釉陶器 (1 / 3)

縁軸陶器・灰軸陶器

Fig. 324に示したのは、国産の縁軸陶器・灰軸陶器である。1~22は、縁軸陶器である。1は、灰褐色を呈する土師質の硬胎に、黄緑色の軸をうすくかける。内外面ともヘラミガキ。口縁は輪花につくる。III B面下・IV面下D-13区出土。2は、淡褐色の土師質軟胎に、黄緑色軸を施す。体部は粗いヘラミガキ。II面D-14区出土。3は白褐色土師質軟胎にうすめの緑色軸をかける。内面ヘラミガキ、外ヨコナデ。III B面下D-11区。4は、灰褐色土師質軟胎に淡鮮緑色軸をかける。内外面ヘラミガキ。II面337号土壤。5は、青灰色須恵質硬胎に緑色軸をうすく施す。体部はヨコナデ。III B面下E-08区。6は、暗青灰色須恵質硬胎にやや茶色がかった緑色軸を施す。体部ヨコナデ。V面下F-03区。7は、暗灰色須恵質硬胎に濃緑色軸があつくかかる。輪花につくる。III面下E-10区。8は、灰褐色土師質硬胎に黄味をおびた緑色軸がかかる。体部ヘラミガキ。IV面下D-14区出土。9は、灰色須恵質硬胎に光沢の強い緑色軸を施す。内面~口縁部外面ヘラミガキ。体部外面ヨコナデ。I面下D-16区。10は、淡灰褐色土師質硬胎に淡緑色軸がうすくかかる。内面はヨコナデの上にあらいヘラミガキ。口縁部はヨコナデで口器をヘラミガキ、体部外面は横位のヘラケズリである。III B面下、E-08区。11は、灰色の土師質軟胎に淡緑色の軸をうすく施す。III B面下D-13区。12は、縁軸陶器の生地かと思われる小片である。明褐色の土師質硬胎で内面と体部外面は丁寧なヘラミガキ、口縁部はヨコナデされる。III面410号土壤出土。13は、暗灰色の須恵質硬胎に濃緑色軸を施す。III B面下E-08区。14は、淡褐色土師質軟胎に黄緑色の軸をかける。内外面ヘラミガキ。III面D-13区。15は、淡褐色土師質軟胎に白黄緑色軸をかける。内外面ヘラミガキ。III面421号土壤。16は、平高台である。淡褐色土師質軟胎に鮮緑色軸を施す。もろくて剥離気味。内外ともヘラミガキ。I面下D-13区。17は、蛇の目高台。白鼠色土師質軟胎に淡緑色軸をうすく施す。内外面ヘラミガキ。II面337号土壤。18は平高台。白色土師質軟胎に、淡緑色軸をうすく施す。器壁は剥落気味。IV面下E-08区。19は蛇の目高台である。淡褐色土師質硬胎に、淡黄緑色軸を施す。疊付から内は露胎。内面はヘラミガキし、見込みに重ね焼きの日痕がつく。V面F-03区。20は、青灰色須恵質硬胎にくすんだ深緑色の軸をかける。内面はヘラミガキ。疊付から内は露胎。付高台。III B面下F-04区。21は、灰色須恵質硬胎に灰褐緑色軸を施す。疊付内は露胎。III面475号ピット。22は、やや褐色がかかった灰色の土師質硬胎に、磨りむらのある濃緑色軸を施す。疊付内は露胎。内外面ともヨコナデする。見込みに重ね焼きの目痕がある。IV面下E-06区。23~26は、灰軸陶器である。23は、白灰色のキメ細かい胎土に斑らに緑をおびた灰色の軸がかかる。胎土は、白味強くなめらかで、美濃産のものと思われる。体部内面はコテをあてて丸味をつくる。口縁部内面から、体部外面上半では、ヨコナデする。体部外面上位は、ヘラケズリ後、ヨコナデする。体部外面下半は、ヘラケズリを行なったままである。IV面829号ピット出土。24は、灰色でザラ



325 越州窯系青磁・高麗青磁 (1 / 3)

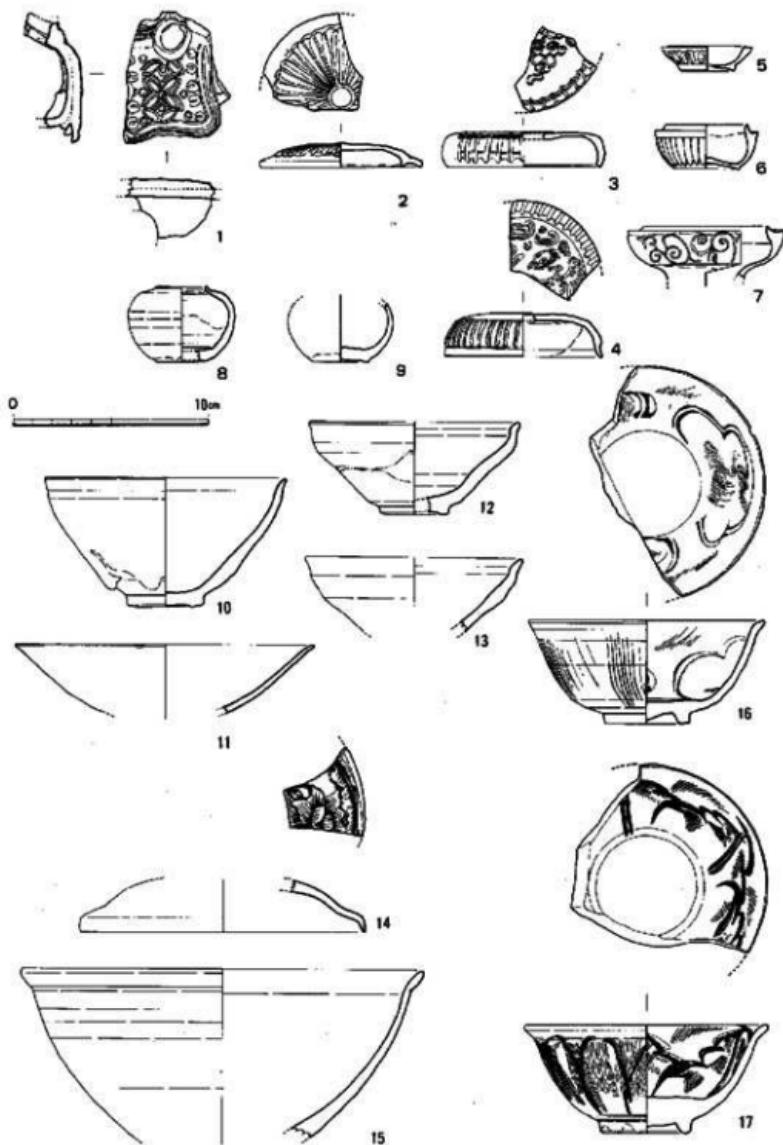


326 越州窯系青磁

ついた胎土に、むらのある緑灰色の釉が、内面全体にかかる。体部外面は、ヨコナデによって整えられる。IV面下 E-02・04区。25は、うすく茶褐色がかかった灰色の胎土に、淡緑灰色の釉を漬けがけする。内面は体部をコテ、内底部をナデた後、ヨコナデする。体部外面は中位でナデ、下半はヘラケズリ、高台はヨコナデし、高台内外底部はケズリをとどめる。ⅢB面下 D-11区出土。26は壺である。肩部につけられた耳は2個が見つかっているが、全体で何個付けられていたかは不明である。灰白色のやや粗めだが粒の整った胎土に、くすんだ緑色の釉をうすく施す。全体はヨコナデされる。V面580号土壤出土。

越州窯系青磁・高麗青磁

Fig. 325に示したのは、越州窯系青磁である。第2次調査で出土した越州窯系青磁の数は、220片を上回り、実測したのは遺構出土分を中心としたごく一部である。1は合子の蓋である。越州窯系青磁片はほとんどが碗であり、時代が下ると思われる壺。水注を除くと、碗以外の器形の出土は珍しい。ⅢB面469号土壤からの出土である。469号土壤からは、3の碗も出土している。2～5は、輪高台をもつ。全面施釉の精製品で、疊付は露胎となる。2は、口縁及び体部を輪花につくる。疊付には重ね焼きの目痕がならぶ。ⅢB面下 D-11・13区、F-04区出土。3は、高台内に目痕がみられる。ⅢB面469号土壤より出土。4は、疊付と見込みに目痕がついている。I面下 E-06区。6・7は、幅の狭い蛇の目高台につくる。胎土は緻密精良で、粗製品とは見做しがたい。6はIV面下D-13区出土。7は見込みに目痕がつく。ⅢB面459号土壤出



327 その他の輸入陶磁器 1 (1 / 3)

土。8は平底の内側を削り、輪高台状に浅く凹める。全面施釉。豊付は釉をかき取る。豊付・見込みに目痕。953号ピット。9~11は平底。体部下位は露胎。豊付・見込みに目痕有。9はIV面560号土壤出土。10はII面下E-08区出土。11はIII面下F-03区出土。12~14は、平高台につくるものである。体部下半は露胎となる。見込みに目痕がつく。12はII面下出土。13はIV面832号ピット出土。14はIV面下D-14区出土。15は、高麗青磁である。全面施釉。豊付に目痕がつく。IV面D-12区出土。

その他の輸入陶磁器

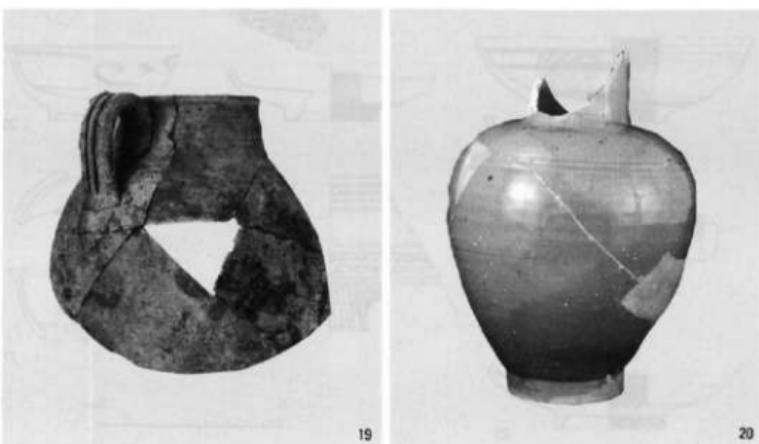
Fig. 327の1は青白磁の容器片である。頸部のつけ根から、胴部の一部で、何を形象しているのか不明。胎土、釉調とも優れている。右上の紐状部分は貼付、他はスタンプ文である。2は白磁の蓋である。頂部に印花文をつける。

328 その他の輸入陶磁器

3・4は青白磁の合子蓋である。3は花文、4は鳳凰文を印する。5・7は青白磁、6は白磁の合子身である。7は唐草文を印す。8・9は白磁小壺である。10~13は天目茶碗である。10は、黒褐色に白砂のまじった緻密な胎土に、黒色の鉄釉をかける。釉は口縁部では赤褐色を呈し、体部は青色・淡褐色等の糸目が盛んにかかる。光沢は強く優品である。11は、灰色の緻密な胎



10



19

20

329 その他の輸入陶磁器



330 その他の輸入陶磁器 4 (1 / 3)

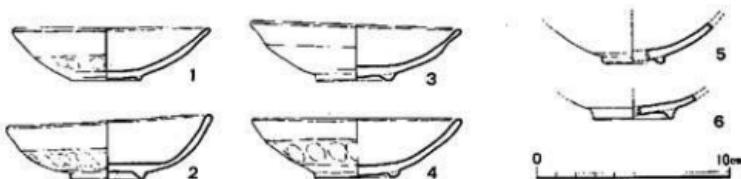
土に明褐色の釉を施す、いわゆる柿釉天日である。体部はうすく引き出され、口縁は輪花とするが、破片の為、その数はわからない。14は青磁の蓋である。耀州窯系で、印花文を施す。15は、北方青磁の碗である。釉下は化粧十状に白変する。16は、同安窯系青磁碗である。17は龍泉窯系青磁碗で、V面659号土壙より出土。18は青磁水注である。III面545号ビット、641号ビット、IV面532号土壙、V面644号土壙よりバラバラに出土した。19は越州窯系の青磁水注である。注口は接合できず、推定位置で実測している。熱をうけており、釉はある。20は白磁蓋である。21は褐釉小壺である。釉は乳褐色でうすくかかる。22~25は李朝の象嵌青磁である。26は中国南方系の白磁鉄絵小碗である。鉄絵は筆描される。胎土は白色でややキメがあらかく、釉はうすく黄味をおびて濃った透明釉で、水裂がみられる。鉄絵は濃茶褐色。III B面下E-08区出土。27は、ベトナム陶器と思われる白磁鉄絵小碗である。鉄絵は半ば剥落しているが、筆描でないことは確認できる。胎土は白色緻密で白潤した半透明釉がかかる。鉄絵は茶褐色を呈する。I面12号配石造構、III B面499号土壙より出土。

その他の国産土器・陶器

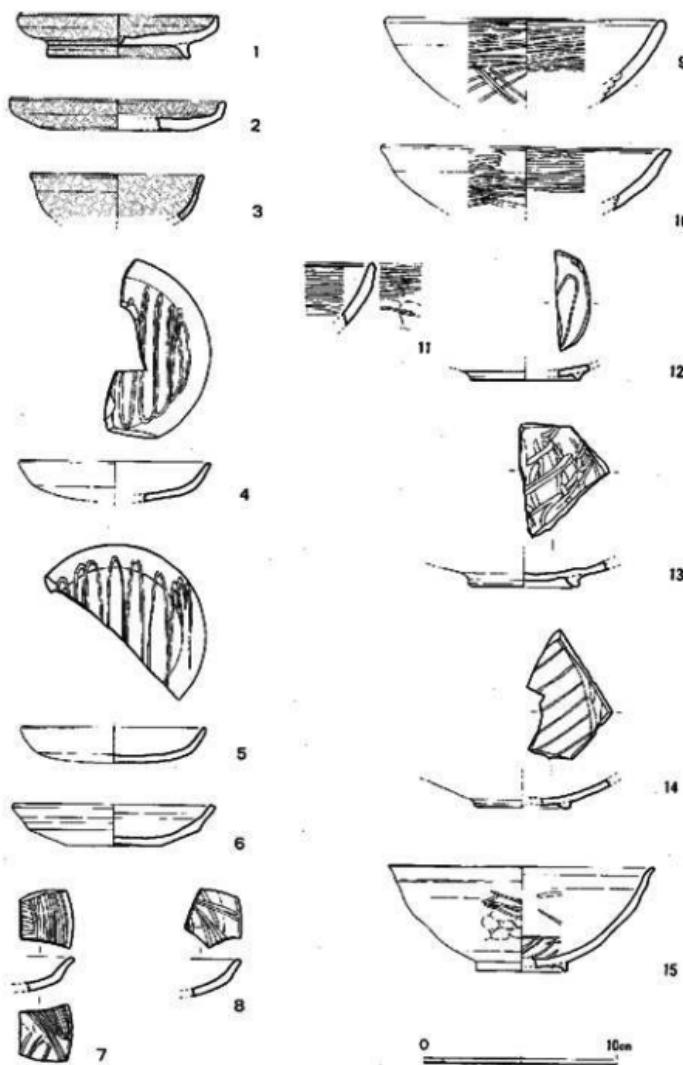
Fig. 331に示したのは、岡山県の瀬戸内沿岸を中心とした地方で生産された、いわゆる早島式土器である。内面は平滑に仕上げ、見込みには重ね焼きの痕跡がみられる。高台は粘土紐を粗雑に貼り付け、正円を呈さない。14世紀後半に編年されるものである。

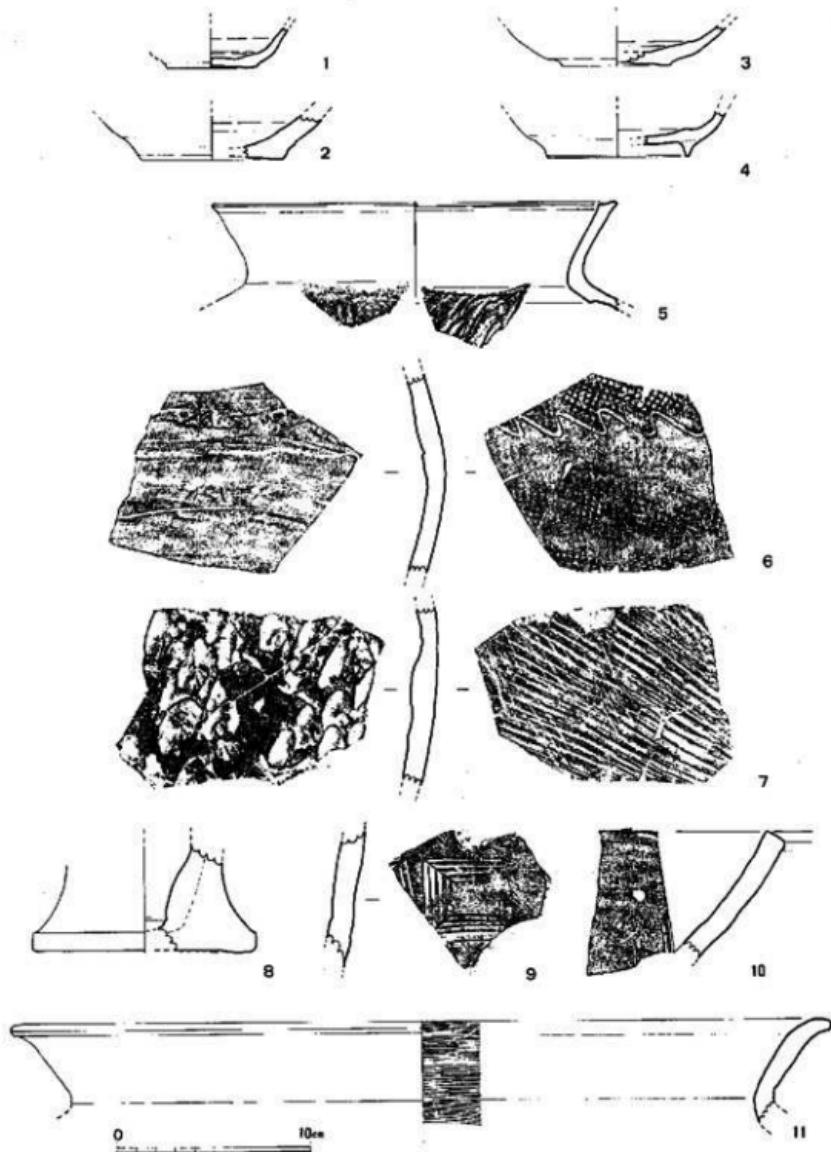
Fig. 332は、黒色土器・瓦器である。1~3は黒色土器である。丁寧なヘラミガキを行なって平滑に仕上げている。4~8は瓦器皿である。4・5は搬入瓦器(楠葉型カ)、6は底部をヘラおこしし内面をコテで整えるもので在地座である。7・8は小片であるが搬入瓦器と思われる。9~14は楠葉型瓦器塊である。15は搬入瓦器塊で、体部内面のヘラミガキは単位を把えがたい。

Fig. 333、1~7は須恵質土器である。1~3は壺、2は鉢で、糸切り底である。5は甕口縁で灰緑色の自然釉がかかる。6・7は胴部片である。6は内面ナデ、7は内面を指で強くおさえれる。8は古瀬戸の瓶子である。9は常滑の甕片である。10~11は備前で、未だ焼き締め陶器の赤褐色を呈さず、須恵質の灰色を呈している。



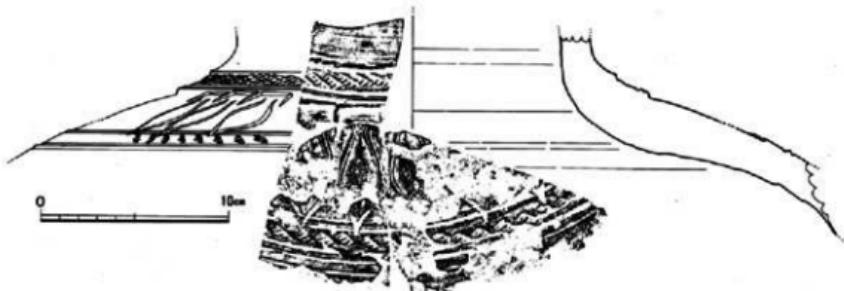
331 その他の国産土器・陶器 1 (1 / 3)





333 その他の国産土器・陶器 3 (1 / 3)

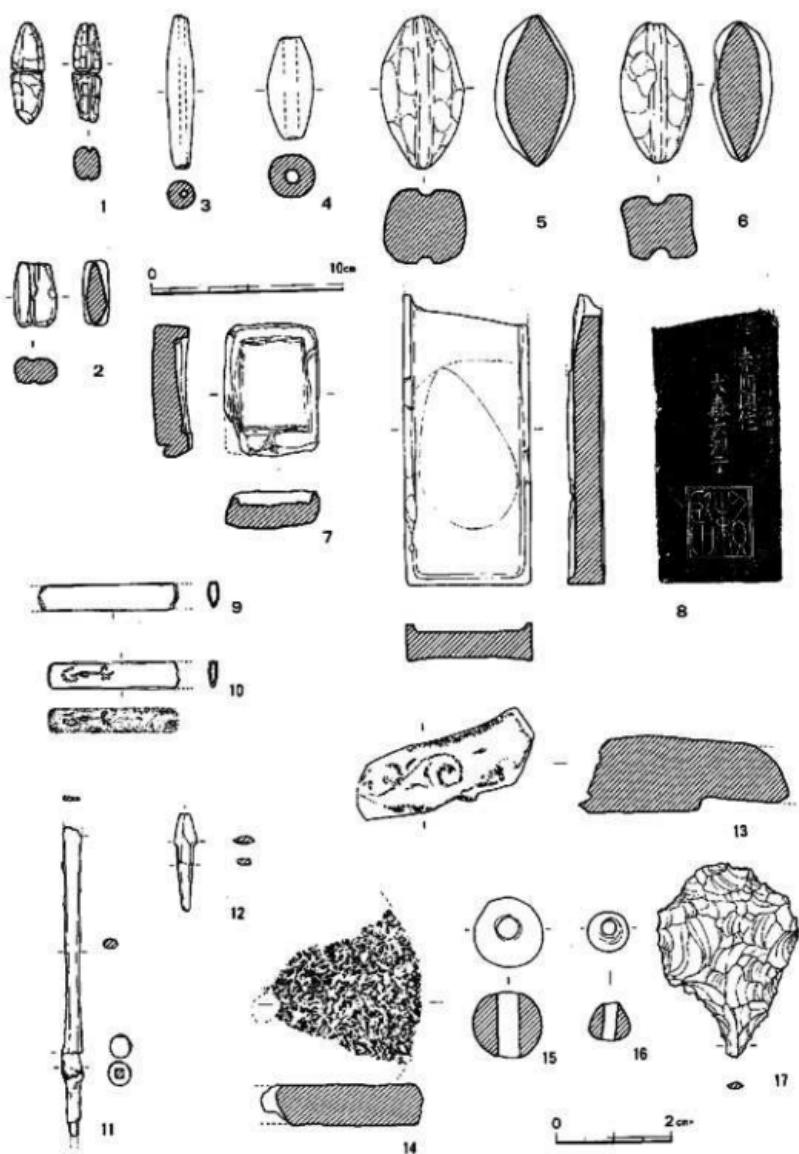
Fig. 334は、須恵質土器の大型壺片である。肩部は、上下を櫛齒刺突文帯で画し、その間にスタンプの蓮弁を打つ。櫛齒文帯は、上下を沈線で縁取る。蓮弁は、長方形の版に一弁づつ型取ったものを、横に連続してならべて押す。器壁の調整は、内外ともヨコナデである。胎土は砂まじりでやや粗い。V面 D-13区他。



334 その他の国産土器・陶器4 (1 / 3)

その他の遺物

Fig. 335. 1・2は滑石製石鍬。3～6は土鍬である。7は滑石製石硯で、陸と海は明確にはわかっていない。8は赤間石の硯である。陸部の中央は、磨滅して凹む。背面上には「赤間関住大森玄淵子」の刻銘がある。9・10は、小柄である。刀子部分は欠くが、茎が折れて小柄内に残っている。銅製である。10は仮名で「ひもしや」と判読できる陽鉄を持つ。11・12は、鉄製の鎌である。11は、矢柄の一部をとどめ、木質(竹?)の上を糸巻きしている。12は、頭部を持たず、刃部から区をなしてそのまま茎となる。刃部も小振りである。13は、鴻臚館式軒平瓦の瓦当である。14は、中央に孔を穿つ円盤状の土製品の一部である。胎土内に粗粒を多く含む。15・16はガラス小玉である。15は深緑色・16は明るいブルーグリーンを呈する。17は黒曜石の石錐である。表面は磨滅していない。



335 その他の出土遺物 (1 / 3, 15~17…1 / 1)

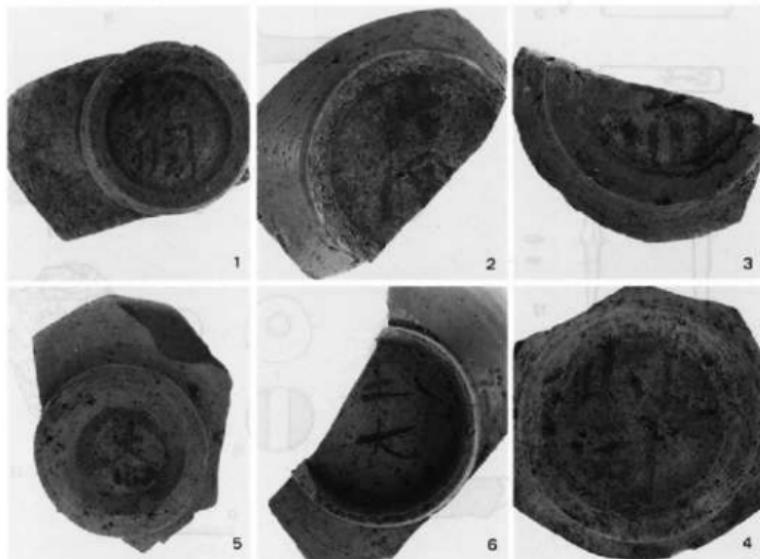
墨書き土器

出土した墨書き土器の大半をしめるのは、輸入陶磁器の底に文字を書いたもので、その他には土師器・須恵器・瓦器に小数例みられる。以下、墨書きの内容に従って略述する。

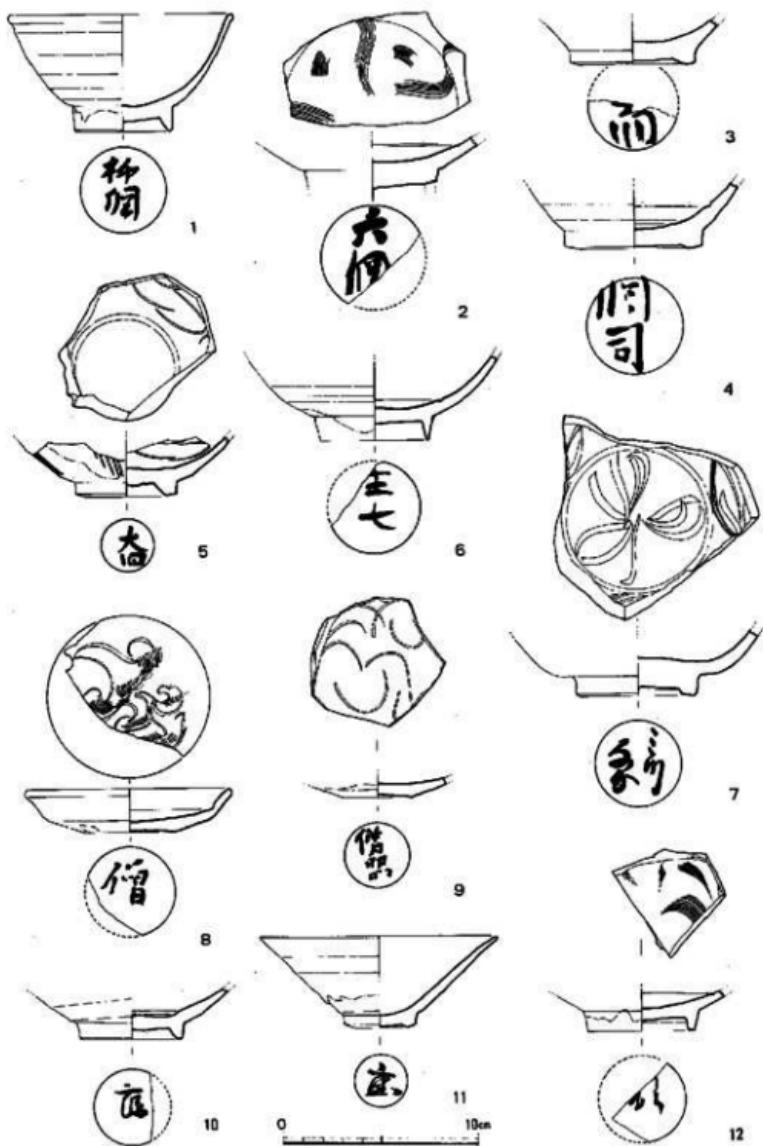
1—「御綱」、2—「六綱」、3・30—「□綱」、4・29—「綱司」、5—「大綱」または「大
次」、6—「王七」、7—「みつなか」、31—「林」、8—「僧」、9—「僧器」、10・11・24~28
—花押、12—仮名文字、13—「市」、14—「四四」、15—「十」、23—「二」、16—「!わ」(意味
不明)。以上は、輸入陶器である。1~6・9・10・12~15・23~28は白磁、16は青白磁である。
7・8・30は龍泉窯系青磁、29・31は同安窯系青磁である。11は天目茶碗である。

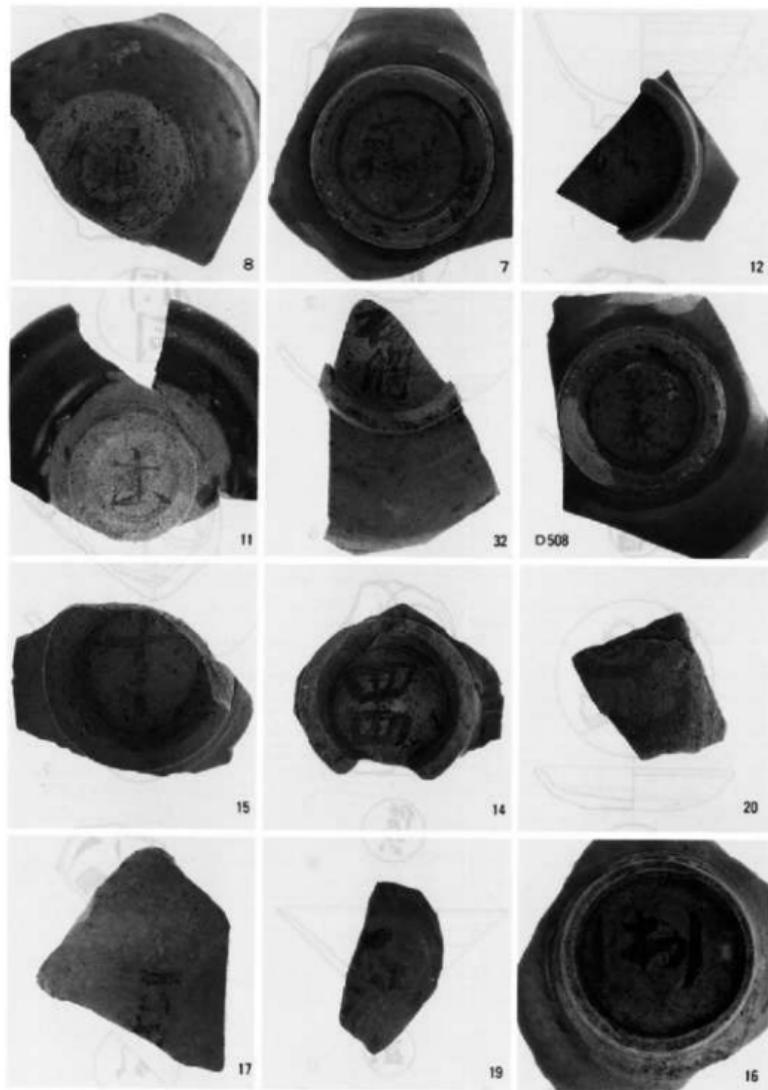
17—「山口一」、18—朱書、意味不明、19—人面墨書きか、20—人面墨書き、21—習字。17は土師
器で、坏蓋であろう。上面は丁寧にヘラミガキする。18は須恵器の坏蓋で、上面はナデ、下面
はヨコナデする。19は、土師器である。楕円形の土板の端部をひねり上げたものと思われ、墨
書きのある面の縁にそって指の圧痕がならび、その裏面は粘土がひび割れている。表裏面とも全面
に掌文がつく。緑辺(口唇)は、ナデて平らにならす。20・21は土師器の坏である。底部は回
転糸切りする。

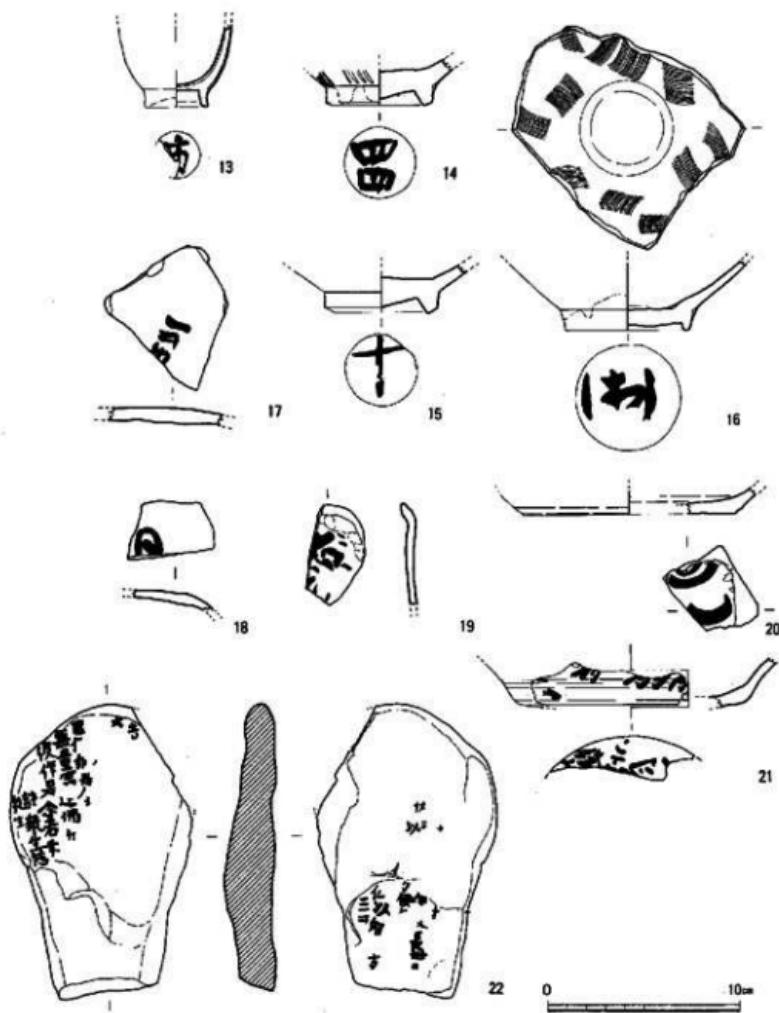
22は、扁平な石の両面に文字を書き連ねている。一部しか判読できないが、経文であろう。



336 墨書き土器 1

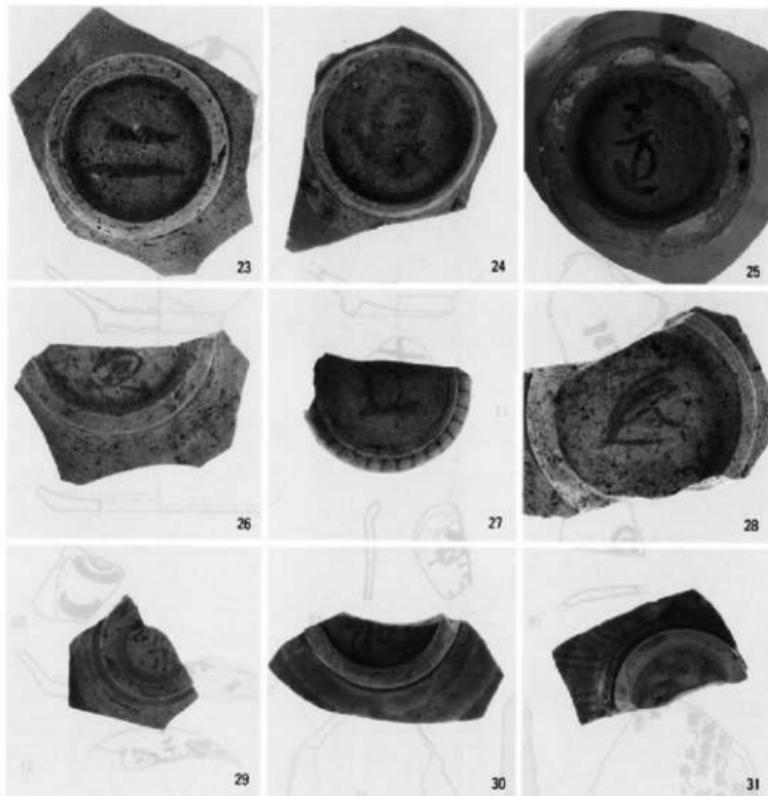






339 墨書き器 4 (1 / 3)

上にあげた以外にも、輸入陶磁器底に墨書きされたものは少なくない。判読できるものでは、「柳」1、「柳綱」2、「綱司」1、「十」2で、その他は墨痕は認められるものの、内容が解読できないもの及び花押かと思われるもので、前者が多数を占めている。

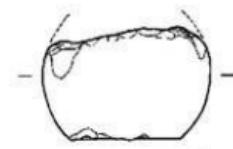
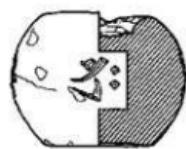
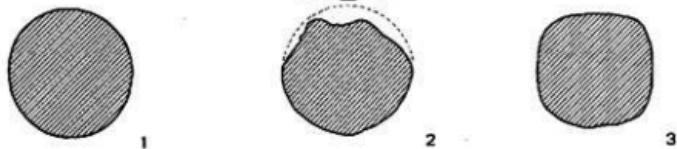
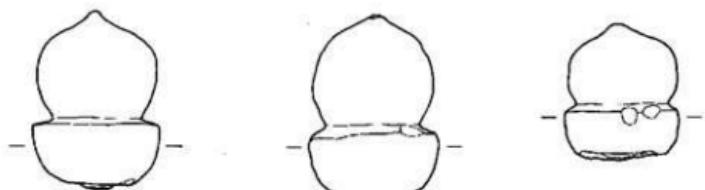


340 墨書き土器 5

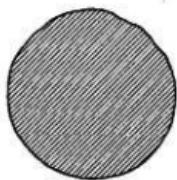
石塔

前項でも触れた様に、ⅢA面、ⅢB面を主として、五輪塔の石塔が出土している。いずれもバラバラに出土しており、現位置をとどめているとは考えがたい。

これらの内、3と5は、ⅢA面F-01区から約1mの間隔をおいて出土しており、同一レベルでの出土である点を考えると、対になる可能性は高い。6はIV面E-09で出土したもので、宝篋印塔の九輪の一部と考えられる。五輪塔以外の出土例は、この一例のみである。花崗岩製。7は、一石で彫り出した五輪塔である。砂岩で、剥落が著しい。全体に四角張った扁平な造りである。水輪の部分に梵字、地輪の左側面に銘を刻む。銘は一部しか残っていないが、「帰王」あるいは「帰一土」と読める。



4



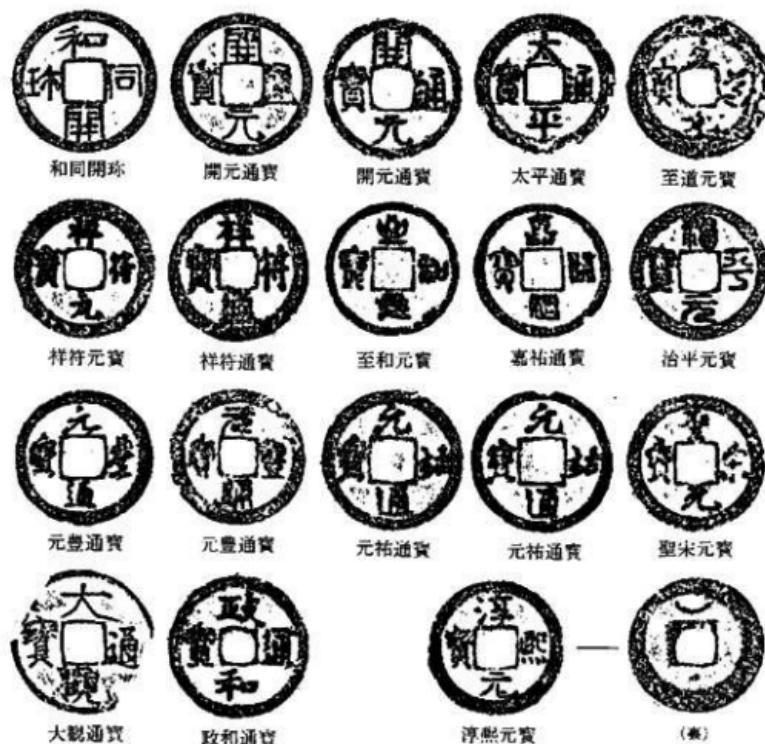
5



0 20cm

341 石塔 (1 / 8)

銅錢



342 出土銅錢 (1 / 1)

Tab. 1 山土銅錢一覽

貨錢名	時代	初	鑄	數	貨錢名	時代	初	鑄	數
開元通寶	唐	武德4年	621年	4	祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1008年	4
和同開珍	奈良	和同元年	708年	2	祥符通寶	北宋	大中祥符元年	1008年	2
太平通寶	北宋	太平興國元年	976年	2	天禧通寶	北宋	天禧年間	1017~21年	1
淳化元寶	北宋	淳化元年	990年	1	大聖元寶	北宋	天聖元年	1023年	6
至道元寶	北宋	至道元年	995年	1	皇宋通寶	北宋	寶元二年	1039年	3
景德元寶	北宋	景德元年	1004年	1	至和元寶	北宋	至和元年	1051年	2

貨銭名	時代	初	鑄	數	貨銭名	時代	初	鑄	數
嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年	1056年	1	大觀通寶	北宋	大觀元年	1107年	2
治平元寶	北宋	治平元年	1064年	3	政和通寶	北宋	政和元年	1111年	2
治平元寶	北宋	治平元年	1064年	1	淳熙元寶	南宋	淳熙元年	1174年	2
熙寧元寶	北宋	熙寧元年	1068年	4	紹熙元寶	南宋	紹熙元年	1190年	1
元豐通寶	北宋	元豐元年	1078年	10	洪武通寶	明	洪武元年	1368年	3
元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年	10	永樂通寶	明	永樂6年	1406年	2
紹聖元寶	北宋	紹聖元年	1094年	6	寛永通寶	江戸	寛永13年	1636年	1
元符通寶	北宋	元符元年	1098年	1	電二十錢銀貨	明治	明治25年	1892年	1
聖宋元寶	北宋	建中靖國元年	1101年	4	解説不能				80

Tab. 2 銅錢出土遺構一覧

検出面	出土遺構	錢貨名数	検出面	出土遺構	錢貨名数	検出面	出土遺構	錢貨名数
I面	202号土壤	洪武通寶1	II面	363号土壤	解説不能1		566号土壤	元祐通寶3
	224号土壤	解説不能1		366号土壤	開元通寶1			治平元寶1
	254号土壤	元豐通寶1			解説不能1			天聖元寶1
	256号土壤	天禧通寶1		443号ピット	太平通寶1			政和通寶1
		紹聖元寶1		68号井戸	元豐通寶1			熙寧元寶3
		解説不能2		71号井戸	解説不能1			元符通寶1
	258号ピット	永樂通寶1		31号配石造構	至和元寶1			開元通寶1
	10号配石造構	元豐通寶1						解説不能3
	12号配石造構	解説不能1	III A面	401号土壤	元豐通寶1			
	17号配石造構	解説不能1	III B面	462号土壤	解説不能1	V面	881号ピット	聖宋元寶1
	56号井戸	解説不能1		480号土壤	元豐通寶1		575号土壤	解説不能1
	59号井戸	二十錢1		488号土壤	解説不能1		577号土壤	解説不能1
	66号井戸	解説不能1	IV面	520号土壤	解説不能1		588号土壤	聖宋元寶1
				523号土壤	皇宋通寶1			大觀通寶1
				532号土壤	紹熙元寶1			解説不能3
II面	284号土壤	解説不能1		565号土壤	治平元寶1		641号土壤	解説不能1
	292号土壤	大觀通寶1			元祐通寶1		86号井戸	元祐通寶1
		解説不能1		566号土壤	祥符元寶1			景德元寶1
	320号土壤	解説不能2			紹聖元寶4			
	324号土壤	解説不能1			聖宋元寶1			
	353号土壤	解説不能						

第四章 小 結

以上、粗略ながら築港線関係第2次調査の概要についてふれてきた。築港線関係の調査報告書は、この後続いて第3次調査から第5次調査まで刊行される予定である。したがって、ここでは第2次調査地点について気付いた点、看過できないと思われる点を指摘して、本報告書のしめくくりとしたい。

律令期の遺構・遺物について 博多遺跡群における従来の調査によって、瓦・石塔・埴輪館式瓦・綠釉陶器など、律令官人の存在を窺わせる資料が出土していた。今回の調査では、これらに加えて、円面鏡、風字二面鏡、「長官」銘墨書須恵器、「和同開珎」を得ることができた。円面鏡は8世紀中頃に、風字二面鏡は9世紀後半にあてることができる。「長官」銘須恵器は少片であるが、89号井戸から出土した他の遺物から、8世紀後半におくことができよう。なお、「長官」のつく官名は令の規定ではなく、勘解由使、鑄銭司、斎院司、造寺使にこの文字が使われる。大宰府・国・郡などの地方官にも使われない文字である。ただし、「長官」の上の部分を欠く為、どの様な官名になるのかは判断できず、ここでは単に律令官人の官職名と考えるにとどめる。綠釉陶器は、半高台・蛇の目高台を削り出す山城窯のものから、10世紀前半美濃産の今まで、諸時期・諸地方のものが出土している。灰釉陶器では、黒窯14号窯式にあたると考えられるものから折戸53号窯式のものまで、少数ではあるが出土を見た。越州窯系青磁碗をみると、総数で224点を数えており、私見した限りでは、これ以上の接合及び同一個体の抽出は不可能であった。これは、博多遺跡群の他地点と比べても、決して少ないものではない。「和同開珎」は2枚出土しており、福岡市内では初の出土例である。

これら、律令官人の存在を示す遺物、とりわけ鏡・墨書須恵器が出土した点は重要で、本調査地点周辺に何らかの施設（公的か私的かは問わず）が比較的長期（8世紀代から10世紀代の範囲内）にわたって存在したことを示唆していると考えたい。なお、未報告であるが、築港線関係第3次調査（本調査地点の北隣）及び博多遺跡群第35次調査（本調査地点の東隣）において、8世紀後半頃の地鎮と思われる遺構が検出されており、本調査地点周辺が8世紀代には何らかの生活領域として取り込まれていたことを示している。

683号土壙（木棺墓）出土の化粧箱について V面683号土壙から出土した漆塗りの化粧箱は、内部の遺物を取り上げた後、保存処理のため福岡県立九州歴史資料館横田義章氏のもとに預けられている。この間、九州歴史資料館を訪ねられた東京国立文化財研究所中里壽克氏より数々の御教示を頂いているので、ここで触れておきたい。

化粧箱の意匠は、研山蒔絵の技法によって表現されている。研山蒔絵は金銀の蒔絵が多く、平安時代には金銀が対等に用いられるが、鎌倉時代には銀が減る傾向にある。また、意匠は謙

倉時代がより写実的となる。683号土壙の化粧箱は、花を銀、葉を金で使いわけて描き、意匠は写実的で、12世紀的な特徴を示している。また、漆塗りの下地は、土の粉を焼いたものを漆とまぜあわせる漆地粉で、これは13世紀まで行なわれた手法である。(室町時代以降は地粉のかわりに磁粉を用いる)とのことであった。

683号土壙については、副葬されていた土師皿・壺がすべて回転糸切り底であるという点以外には、年代比定の決め手を欠く。博多遺跡群における土師器の編年はいまだ確立していないが、大宰府における編年研究から、ヘラ切り底から糸切り底への転換は、12世紀の初めから中頃にかけてなされるとされており、それを援用すれば、683号土壙は12世紀前半には遡りえないことになる。一方、共伴した青磁碗・皿をみると、12世紀中葉から後半代におかれている蓮花折枝文や雲文を配する龍泉窯系青磁よりも古い様相を示している。(緊水道工程考古隊浙江組「山尖窯与大白岸」『浙江省文物考古研究所刊』1981年)。ここでは、683号土壙の年代については12世紀中頃にしぼって考えておきたい。

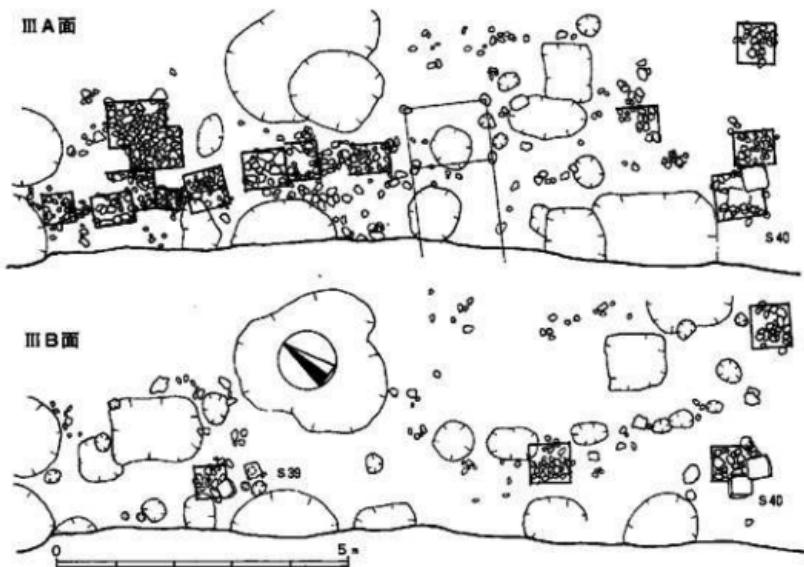
集石造構について 配石造構内の集石造構について、若干気付いた点を述べておきたい。

前章で40号集石造構についてふれた際、五輪塔の地輪をする2区画の集石が想定できるところだ。そこで、他の集石についても同様な集石のブロックを検してみると、ⅢA面とⅢB面のE-07・09区において、いくつかの小区画をみとめることができる(Fig. 344)。それは、長方形または方形に織を敷きつめるか、大きめの織を配してすき間に小織をおくもので、ⅢA面で13区画以上、ⅢB面で4区画が考えられる。再び40号集石造構を例にとると、40号集石造構からは2基の地輪が出土しているが、Fig. 343の向って左下の地輪はⅢA面においては2つの小区画の一方の下にもぐりこんでおり、これに先行することは間違いない。したがって、左下の地輪に対応するのはⅢB面の小区画であり、その後ⅢA面における小区画が作られ右上の地輪を掘えたと考えられる。五輪塔と小区画との対応は、ⅢB面において地輪と火輪を伴なったもう1基の小区画(39号配石造構として前章でふれたもの)でもみとめられる。これらの例から、集石の小区画は本来五輪塔を伴なっていたものと考えることもできよう。

一方、造構全体図(付図3・4)をみると、ⅢA面・ⅢB面のF-07・09区は、柱穴状小土壙のきわめて稀薄な部分でもある。これらを総合すると、ⅢA面・ⅢB面が比定される14世紀前半頃、F-07・09区には、小さな空地に五輪塔だけが数基ならんでいた光景がうかんでくる。五輪塔が単に供養塔であったのか墓標であったのかは、確認できていない。14世紀前半といえ



343 683号土壙化粧箱桜花文様



344 小区画集石配置図 (1/100)

は、鎮西探題滅亡にはじまって、多々良浜の合戦、南北朝の戦乱と、博多が兵火にかかった時期である。五輪塔が供養塔であったとしても、その裏に血なま臭い時代を感じるのは、あながち無理ではなかろう。

一方、これが墓標であったとすると、博多においては14世紀前半に至るまで、都市域内に点々と墓地を営んでいたことになる。683号土壙で見られる様に、平安時代末～鎌倉時代の土壙墓・木棺墓は特に集中せず、単独であちこちに埋葬されていたことが、従来の博多遺跡群の調査から知られている。他方で、15世紀代以降の墓は、寺院址を別にすれば、見つかっていない。今回の小区画集石遺構は、この間を結ぶ資料であり、12・13世紀頃単独で家の近くなどに営まれていた墓が、14世紀前半頃から市街地内のいくつかの場所に集まる様になり、やがて生活領域から出されていくという流れが想定できるのである。

時期比定について 本報告書では、記述にあたって古代Ⅰ期から近世までの6期に便宜的に区分した。出土遺物の内容による時期区分という点で、有効な方法であると思われた。ところが、特に古代Ⅱ期と中世Ⅰ期のふり分けにおいて混乱をきたしてしまった。それは、ひとえに筆者が全ての遺物を十分に把握することが出来なかったことによる。この点を今回の反省とすると共に、本書を利用される方々へのお詫びを申し上げたい。

解体移築された旧飯尾家住宅について

九州大学工学部 山本輝雄

はじめに

福岡市博多区上呉服町1番28号にあった旧飯尾家住宅は、江戸時代における数少ない博多の町家として、福岡市西区徳永にある「福岡歴史の町」（教育開発社、村上義三社長）に移築保存された建物である。

この建物の解体移築にあたり、教育開発社のご協力のもとに、旧敷地にあった際、調査する機会を得たので、この調査結果を公表して、後世の資に供するものである。

経過

今回の解体時の調査は、昭和61年（1986）5月7日から9日まで行われた。調査に加わったのは、筆者その他、九州大学工学部建築学科第九講座の方々である。

教授 前川道郎氏 助手 川上秀人氏

大学院生 松岡高弘氏 上野潤氏 五島朋子氏 吉田勲氏

この他、移築後の設計にあたられたヤナセ協同建築事務所の香月経久・高田秀徳両氏には、一方ならぬお世話になった。記して、深く謝意を表す。



1 博多の街並み（大博通り上空より北東部を見る）

ここで明確に示しておかねばならぬことがある。それは、当建物の価値がこのように正当に認められて今回の保存に至ったのは、従来から長年博多の街割りと町家を研究し続けてこられた九州人学助教授土田充義先生（現鹿児島大学教授）のご尽力のたまものである。が、今回の当家の解体時、同先生にはちょうど海外出張中であったため、止むを得ず、筆者が引き受けた調査の任にあたった。

ために、調査を行った責任上、筆者が報告を行うに至った次第である。

なお、当報告中使用の次の実測図の製図者は、松岡高弘氏である。

平面実測図 (Fig. 9) 正面実測図 (Fig. 5) 断面実測図 (Fig. 8)

さらに、復元計画図は、ヤナセ協同建築事務所で作成されたものを使用させて頂いた。記して、謝意を表す。

写真は、Fig. 1・4・27・40を福岡市教育委員会力武卓治氏が撮影し、他は筆者が行った。

3枚の占図は、飯尾寿一氏蔵のものである。

現状

博多の町並みも、近年の都市開発によって、急速にその姿を変貌させている。例えば、博多駅前から呉服町交叉点に向かう貫線道路沿いは道路幅の拡幅によって、街の姿は一変してしまうことがある。が、この貫線道路から一步街区の中へ足を踏み入れると、特に、御供所町あたりには、狭い路に面した古い町家がまだ残っている。



2 旧飯尾家位置図 (1/5,000)

当飯尾家も、そうした道幅の狭い桶屋町の通りに面している。前面の道幅は3,640mmしかなく、敷地の間口も6.0mとかなり狭いが、奥行は深くて25.3mもある。ただし敷地割りが、狭い道路に対して直交していない。これは、道路で囲まれる街区自身が平行四辺形を呈しているからであろうか。あるいは、各敷地の割り付けが一つ一つ複雑となっているからであろうか。この点については、街区全体を実測していないので不明である。

次に建物自身の現状について述べる。主屋部分では、正面5,916mm、奥行11,774mm、切妻造、正面庇付、桟瓦葺の部分が古い。が、今日、背面には縁側より新設された階段より上の3階まで増築された部分が付設されていた。

平面では、道に面した前面の部屋のみ非常に広く、正面幅2.5間、奥行3.5



3 桶屋町通りの旧状①



4 桶屋町通りの旧状②

間の一室であるが、床は前方8帖分は板敷、後方6帖分のみ畳が敷かれている。この「ミセ」(以下、この室をミセと呼ぶ)と考えられる一室の北西側壁に接して、奥行0.5間の押入が付設される。この奥入の中には梯子が置かれ、建物幅全幅にわたり奥行2,920mmだけ2階が板敷としてつくりられている。1階には、ミセの奥にもう1室8帖畳敷きの「ザシキ」(以下、この室をザシキと呼ぶ)があり、このザシキには縁側に接して平書院が付され、北西側壁に接して天袋があり、置床が備えつけられる。

2階としては、縁側からの階段を上ると、すぐ左手に3帖畳敷きの部屋がある。

正面向かって左手の引違いのガラス戸から入ると、奥行約1.5間までは2階があるため低い根太天井であるが、その先2.0間分は小屋組と垂木まで見える吹きぬけの化粧屋根裏となっている。(一階平面実測図中の一点鎖線で囲まれる部分)。

正面と背面における建具は、今日全てガラス戸となっている。なお、建具では、正面2階の出窓のあり方、ミセでの北西側押入の舞良戸、平書院上部の透かし彫影刻入り欄間が古いもの

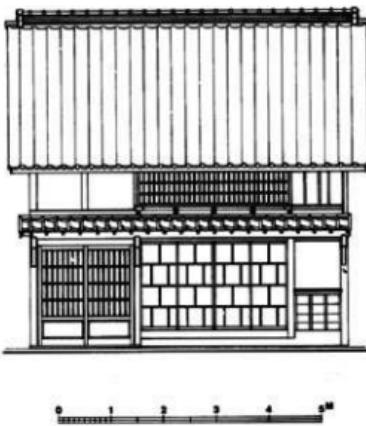
であろう。

天井も、ミセ・ザシキとも旧状を残していると考えられる。

和小屋の小屋組も、ほとんどが変わっていない。ただ、背面部分において、2・3階を増築した際、垂木より上を取り除いてあったが、それも全てではなく、ザシキの天井裏にはまだ古い垂木が残存していた。

屋根葺材料としては、近年主屋前面のみ古い桟瓦から新しい桟瓦に取り替えられていた。

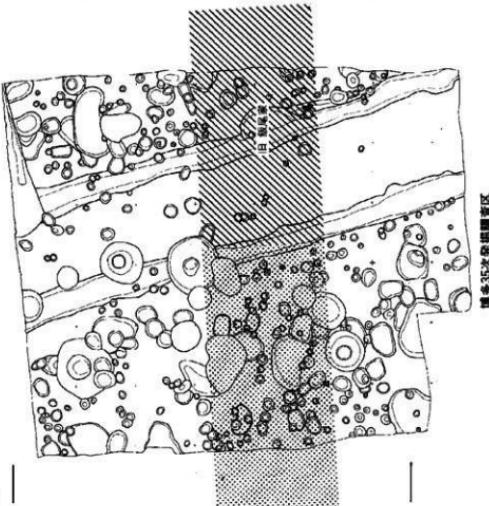
屋根下地の現状は、かなり曲がった材も含んだ扁平な垂木を母屋に打ち付



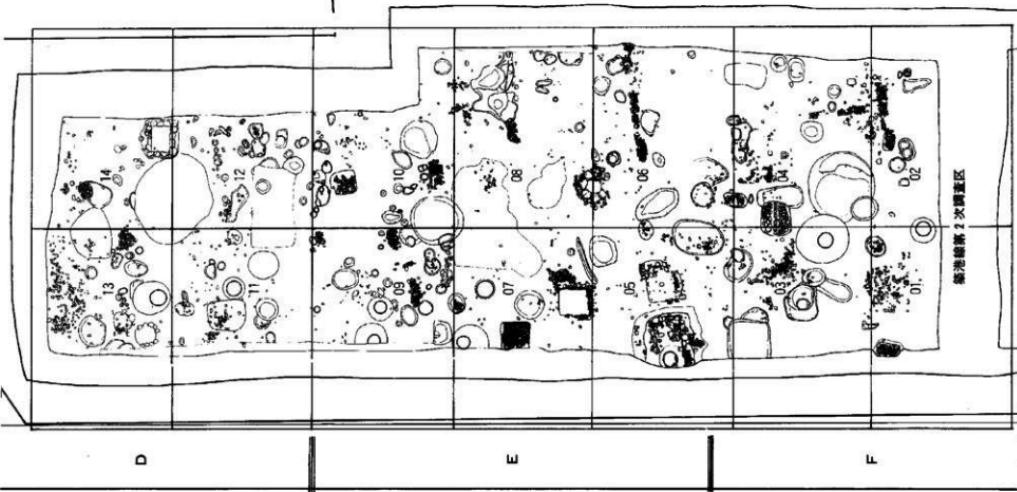
5 正面実測図（松岡高弘氏製図）

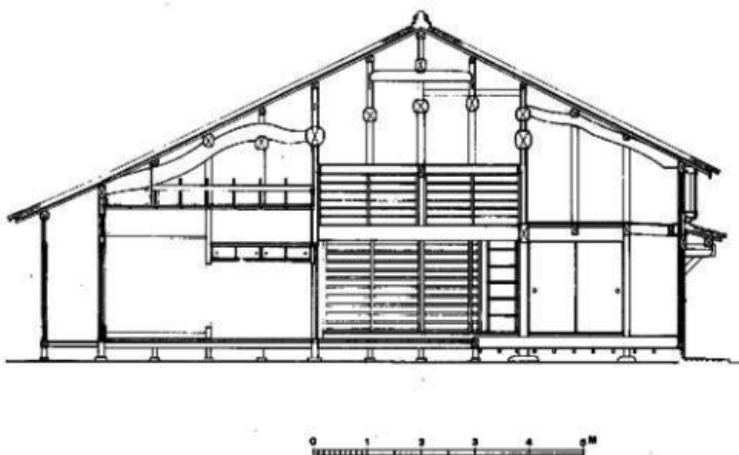


6 解体工事前の正面



発光検出 2 次調査区





8 断面実測図（松岡高弘氏製図）

け、その垂木の上に篠竹2本づつ小舞として角釘打ちないしは萬で編み付けているし、約3尺間隔には板材を釘打ちしてあり、これらの上に長さ約3尺の桧皮を敷き込んでいる。この構法が棟瓦葺にとって妥当なのかどうか速断できない。類例の収集をまって、再検討したい。

さらに、現在使用の瓦であるが、前面庇の瓦は確かに古いが、この瓦でも明治時代まで通り得るかどうかというぐらいのものである。

なお、正面庇が後世になって1段高く改変されていることは、軒桁の持送りの腕木が2本重ねて使用されていること等によっても分かる。

神棚は古いものである。

建設年代について

建設年代については、これを確定する資料を、現段階では見い出しえない。飯尾家のご当主壽一氏は、同家蔵の家系図等を参考にすると、8代目となっており、初代油屋小兵エは宝永7年（1701）卒である。当家に再建や焼失の伝えは、まったく残っていない。

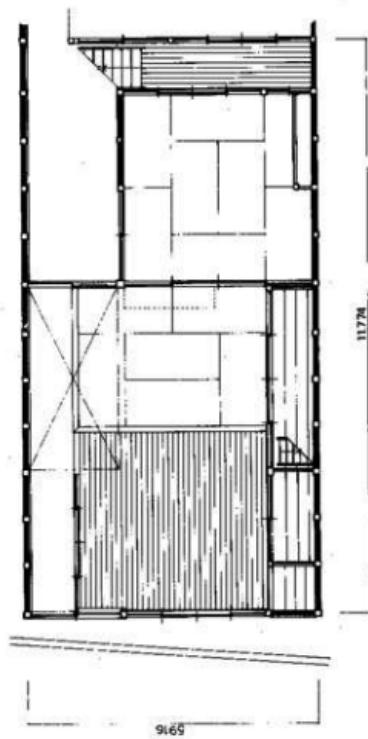
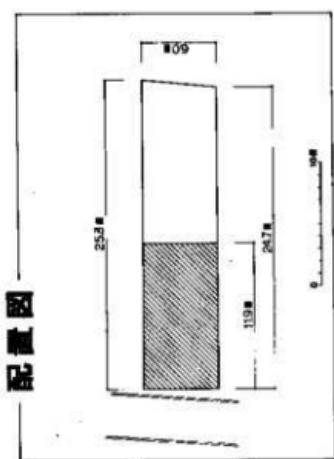
年代判定の比較的しやすい彫刻の文様、例えば、正面の古い柱に付けられた2階の出窓下の持送りにおける若葉彫刻の形態からは、19世紀中頃をとても通り得ない。

次に飯尾壽一氏蔵の慶応元年（1865）の年紀のある家相図の平面と、建物の痕跡調査からの復元平面とは一致するので、この古図の年代は慶応よりも遅るものと考えられる。

しかも、同じ頃、当家は記録にあらわれ、次のような記述が見い出される。

「……町きっての豪家は油、半子油製造の油屋次平で、慶応二年には一六〇匁の運上銀を

254



9 平面剖测图 (松尾高弘氏制图)

納めている。……」(『福岡町名散歩』中の桶屋町の項、井上精三著、1983年1月 章書房)と紹介されているからである。

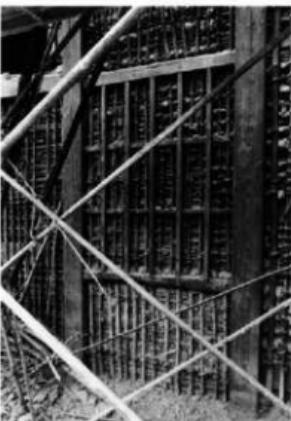
ただし、この家相図の慶応元年(1865)よりもずっと古い建設年代を示す様相も、今回の解体工事にあたり出現している。即ち、この家相図中では隣接する棟があるため相接している壁位置において、まったく必要のない古い窓が土壁の中から発見された。また、柱脚に筆で書かれた古い番付があること、小屋組において主要な構造部材が意外と細く、垂木にも曲がった材があり、これらは、少なくとも慶応頃豪家であったという博多の町家の実態であろうかとの疑問も残るのである。

しかし、以上の疑問を解明する類例資料の学問的蓄積がない今日、出窓の持送りの細部形態より、19世紀中頃と推定しておくのが妥当と考える。

古図について

この建物が描かれる家相図には、飯尾壽一氏が所蔵される2枚がある。ともに、年記記載があり、この建物の研究にとって、大変貴重なものである。

古い方の1枚は、横778×縦521mmの大きさであり、「慶応元歲丑六月日」の年記があるのである。



10 新たに発見された旧窓

当図では、通り(図の左)に面して4軒の建物が平行して描かれているが、今回の調査対象の建物は、通りから建物へ向かって左から3軒目(図の上から3軒目)の建物である。

通りから向かって最も左側の棟は、「板場」と書き込まれ、大きなカマドが図示される。次の1軒は通りに面して「粉部屋」があり、背後に2室がある。以上2棟の背後には、巨大な「倉庫」があった。

通りから向かって左側から3棟目が当建物であるが、通りニワ(図中の「土間」)の背後に今はなくなっている炊事場が付設している。この建物に関しての書き込みの文字は、次の通りである。

十帖半	二階上り口	押込	押込	神棚	仏前	八帖	トコ	土間
油売場	火	勝棚	火	水流	水	火		

さらに、背後の縁側から眺められるところに、次の文字がある。

築山 センスイ

さらに、後方に別棟の「油置所」が描かれる。

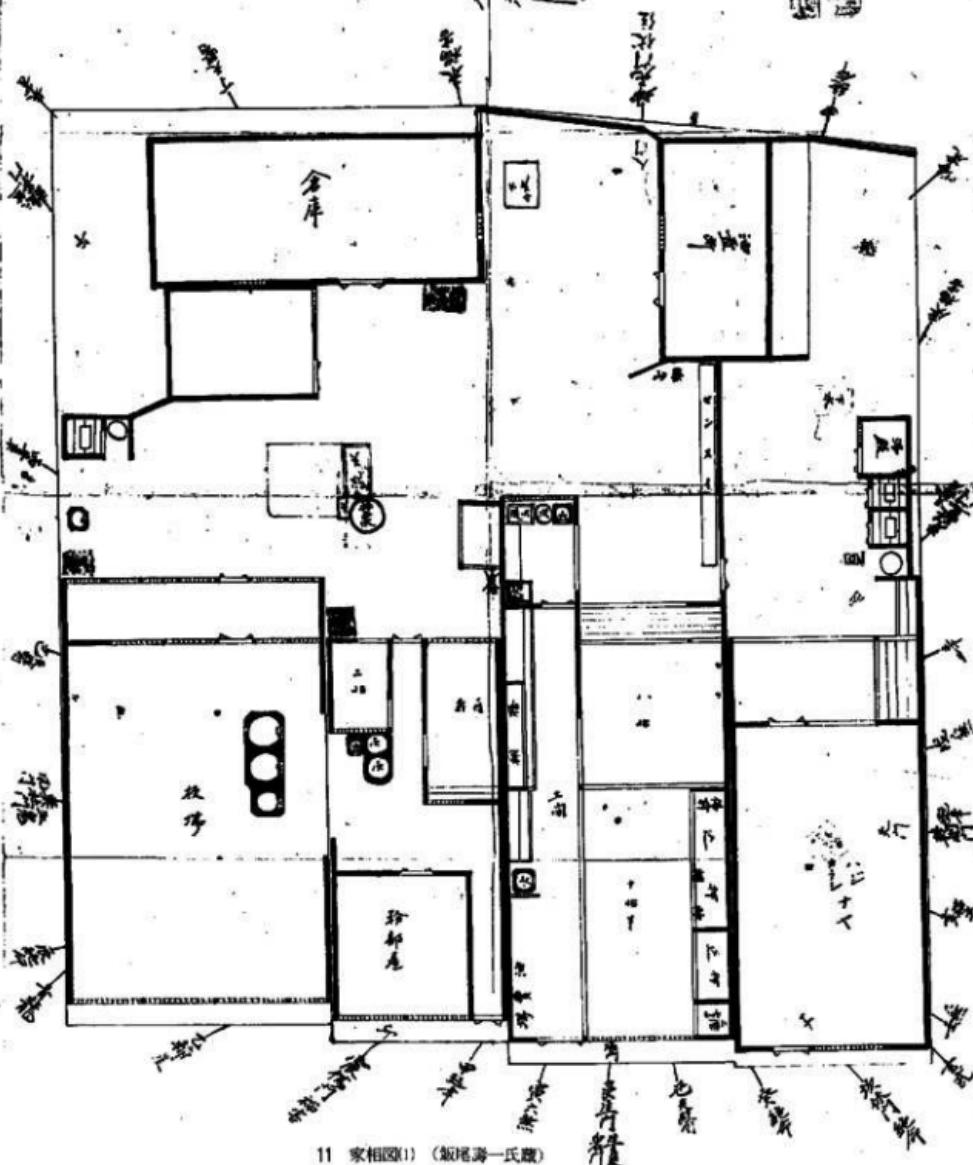
通りから向かって最も右側の棟は、「ハジ・カラシナヤ」とあり、背後に「湯殿」と便所が

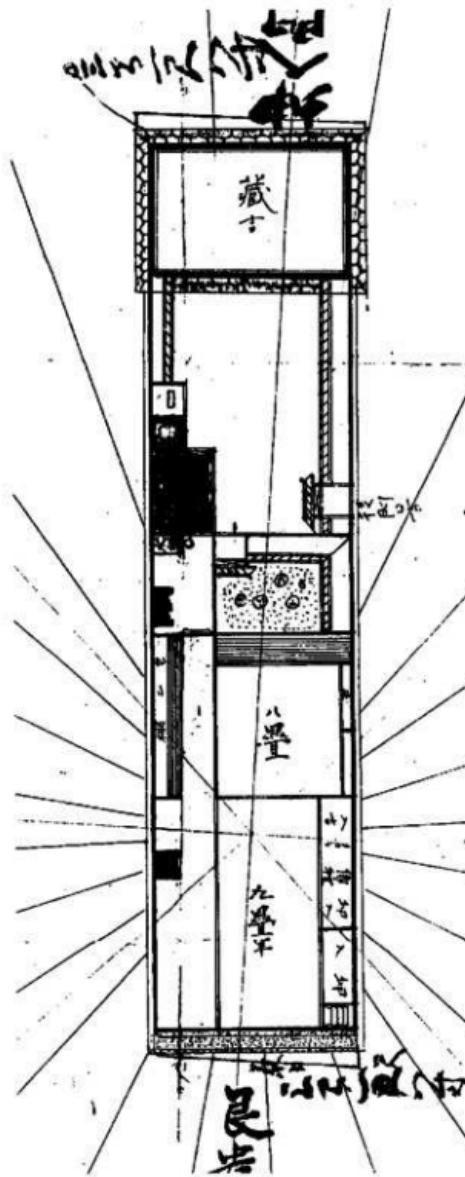
主人翁富貴

地理家毛五於夢壇上圖

午時 庚之元九

金鑄堂卷一標





12 家相図の部分（飯尾壽一氏蔵）

付設されている。

当図は、この建物を復原するにあたっても、大変貴重な図である。

もう一枚の家相図は、横665×縦490mmの大きさであり、年紀は「明治三十七年九月吉日」とあり、今回調査の建物のある敷地部分のみが描かれている。主屋の他には、敷地のもっとも奥に「藏」がある (Fig. 12 は家相図の一部)。

主屋における建物に関する書き込みは、次のとおりである。

九疊半 押入 押入 仏壇

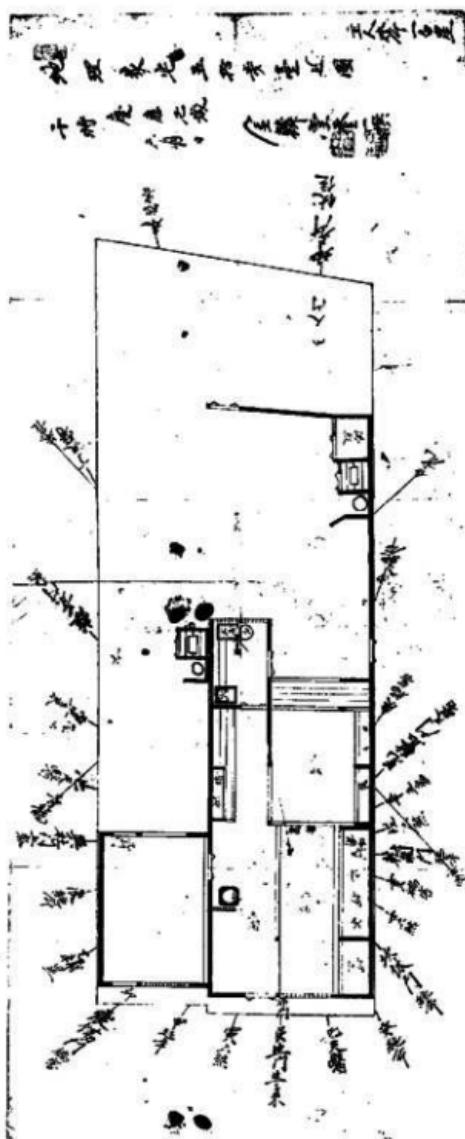
タカラ入 八疊 セニ棚

水棚 後門

「八疊」の縁側に面しては、方形に囲いの堀を巡らして、中庭を作成している。

当古図もまた、この建物の変遷を知るために、貴重なものである。

その他も、飯尾壽一氏の所には2枚の古図があって、この2枚はともに博多にあった分家のものと伝えられている。古い方の「慶応廿歳六月日」の年紀のある1枚のみ掲げる (Fig. 13) が、当建物と極めてよく似た平面構成をとっているので、今回調査をしたこの建物が江戸時代末期における博多の町家の典型例の1つとしてよいことを示しているようと思われる。



13 家相図(3) (鹿尾第一氏蔵)

復元について

まず、計画寸法については、次のように考えられる。

床上の部分、即ち、ミセとザシキにおいては、 6.3×3.15 尺の大きさの畳が敷き詰められるよう、内法寸法が定められている。現状では、ミセ部分には畳が敷き詰められていないが、実測寸法から考えると、当初は慶応元年の記載がある家相図に記述されているように、「十畳半」の畳が敷き詰められていた、と思われる。

次に、通りニワの「土間」は、復元すると家相図の通り、幅1.0間のニワとなるが、この1.0間は柱真々間距離が6.5尺で納めてある、と考えられる。

平面については、古い部材に残る痕跡をたよりに復元すると、階については、慶応元年銘の家相図とはほぼ同じとなる。ただし、この家相図にある背面の炊事場部分は既に無くなっている。この部分については、家相図をたよりに想像復元するより他、致し方なかった。

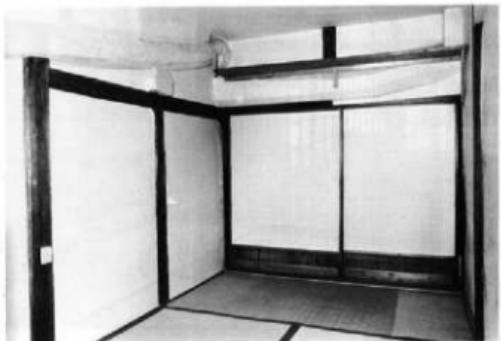
大きな変更は、ミセ部分の改造である。通りニワが幅1.0間分前面から背面までずっと続いていた復元になっている。これはザシキの床高より一段低い上り樋の取り付く痕跡が、出入口脇の古い柱およびザシキ・ミ



14 ミセ(1)（道路側）



15 前方にある二階



16 後方の二階

セ境の大黒柱に明確に残っていることによる。

出入口の幅についても、現状のように、通りニワ全幅ではなくて、正面に向かって左側には小さな脇壁を設けて柱が建っていた痕跡が残存していた。古図の通りである。

ミセから2階へ上の梯子（階段）の位置は最も前面である道路側にあったことが、かつてこの部分の2階の床板が無かったことを示す痕跡と梯子あたりの痕跡によって、判明した。

ザシキの縁側より2・3階へ上の階段は、この位置に土壁のあった痕跡をザシキ南隅の柱に見い出したので、かつては無かったことになる。

さて、2階であるが、道路に面した奥行1.5間の部分は、床板も古いし、旧状を保っていたので、その存在は確実である。

が、通りニワの後方にある2階については、注意深く痕跡を探した結果、4帖の疊敷きの部屋が存在したことが知られた。この室の南東側壁には解体時、新たな格子窓の存在が判明した。しかし、この部屋に上の階段がないことが疑問として残った。

この点については、当部屋の床

位置にある出入口部側にある胸差しの上面^{アーチ}角が向かって左側のみ大きくすり減っておることから、この位置を出入に使用したことが考えられる。この位置ならば、博多における聞き取り調査でも箱階段で上るもののがかつて見られたということであるので、復元計画図のような箱階段が納まることになろう。

こうして、当室の存在が知られたが、かつても主屋であったこの建物にとっては、部屋数が少ないだけに、当室の確認は大きい。

断面においては、縁側の屋根が大屋根から一段落ちて旧状と異なっていたことが、縁側の柱と東に残る切り欠き痕跡とピタリと合う垂木掛の部材が発見されたので、これによって復元したものである。

なお、屋根葺材が当初から現状のような桟瓦であったかどうか、現研究段階では判断できない。

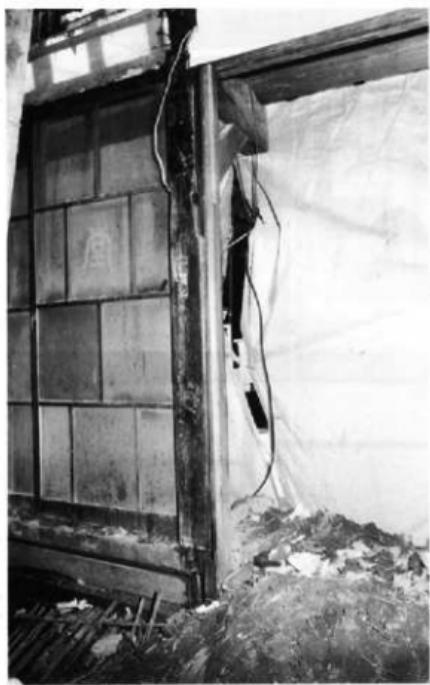
建具については、外に面しているところではすべてガラス戸に変更されていたので、旧状に復元するようつとめた。ザシキの縁側については、恐らく雨戸仕立てであったろうことは、古図より推測される。

建具の復元で注目されるのは、前面における掲げ戸方式の復元である。博多においては、既に失われた江戸時代の掲げ戸の復元では、柱や2階床等に残存している痕跡をたよりに復元す





18 揚げ戸痕跡



19 揚げ戸方式の入口部痕跡

ると、次のようなものと考えられる。ミセの前面におけるものは、上下3枚の格子戸（ないしは板戸）を左右2列に並べたものであり、柱間中央には、この格子戸（ないしは板戸）が上り下りするための縦溝をもった取りはずし可能な柱を配す。なお、上へ押し上げた戸は、柱にある縦溝が切り開かれた上方において手前の方へ引き込んでしまう。こうすると、上中下3段の格子戸は、2列とも1階天井に取り付けられた箱内に納まってしまう。

次に、出入口部においても、柱にのこる縦溝と2階床板に開かれた方形穴の存在から、揚げ戸方式が推定された。しかし、この部分では内法高すべてが1枚戸とすると、上方へ押し上げた際、上方へつかえてしまい、内法高すべてが開口しないことになる。そこで、上下2段に分離した建具を考えることによって、上段の背の低い戸は押し上げて上方の縦溝の切り開かれた部分より取りはずし可能となり、下段の恐らく潜り戸の付いた板戸はこれを押し上げてみると、今度は内法高すべてが開口する結果となって、満足すべき建具となった。

なお、神棚は古いものだが、膳棚はなくなっていた。膳棚は類例を博多においては探し得ず、聞き取り調査によって推定復元したものである。

以上の復元に関する考察をもとに、復元計画図を作成し、古材はできるだけ使

用して、土田充義先生のご指導のもとに、「福岡歴史の町」への移築が無事完了したと聞いている。

おわりに

このように、貴重な文化財としての建造物が保存されて今日公開され、多くの人々によって暖かく迎えられているのを見るにつけても、この旧飯尾家住宅の保存に力を尽くされた多くの人々への感謝の念を深くする次第である。

江戸時代末期におけるこの博多の豪家は、慶応元年（1865）の家相図に見える通り、確かに間口を4棟分も構えて広大な敷地を占めているが、この建物以外は作業場とか納屋であり、この建物こそが住居の中心であることは明白である。

住居、しかも豪家の住居が博多においては、復元して判明したような、わずかな部屋数しか有していないことは、今後、江戸時代の博多の町家を考える上で、重要な資料となってくることであろう。

ただし、この狭い空間であってこそ、そこには緊密性をもち機能性の高い、極めて合理性の高い住居が建設されている。例えば、8帖のザシキでは突出した座敷飾りはとれなかったものの、置床とし、吊り下げた天袋をもち、平書院も設けているのである。

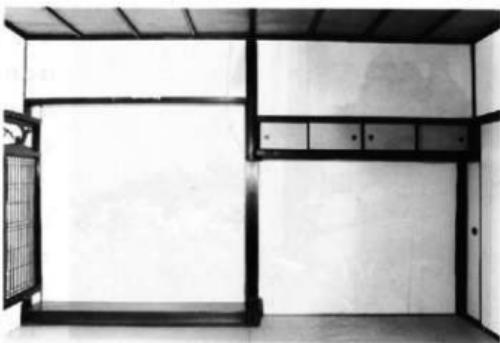
しかも、経済性のみ追求したものではないことは、ザシキにおいては、面皮柱を用いており、平書院の欄間に梅の木の透かし彫り彫刻を入れるなど、数寄屋造をも目ざしている。

この旧飯尾家住宅の、江戸時代におけるこのあり方が、正しく後世に伝わり、今後の人達の文化創造の糧となることを祈念して終わりとしたい。

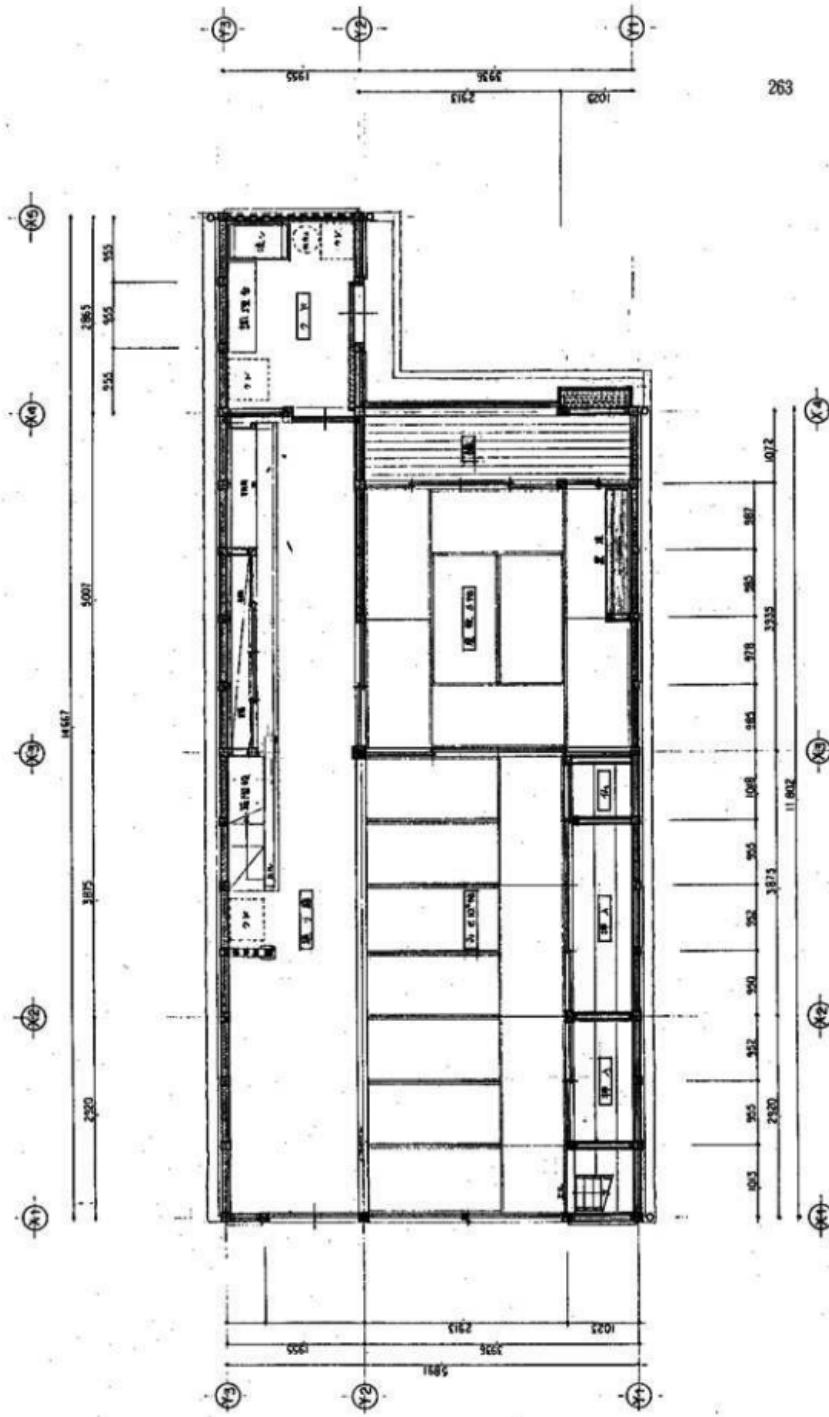
（昭和62年7月4日了）



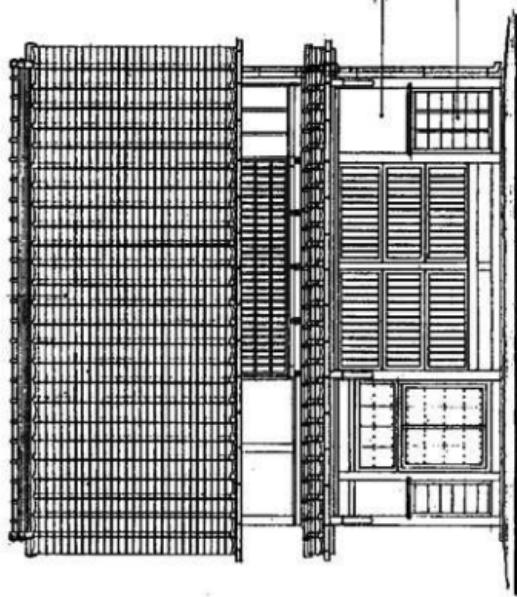
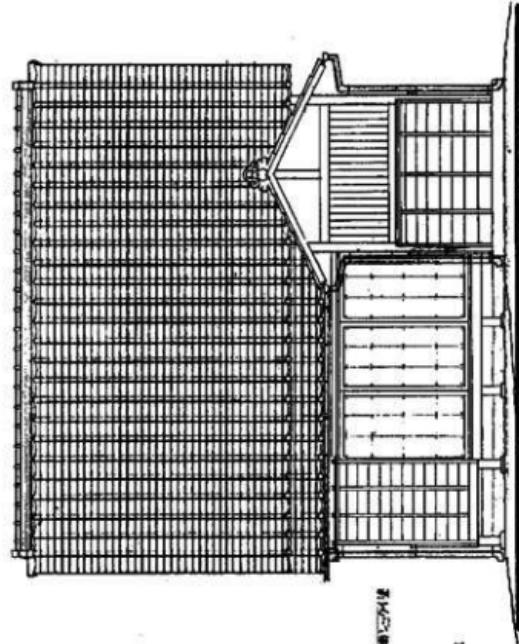
20 ザシキ(1)



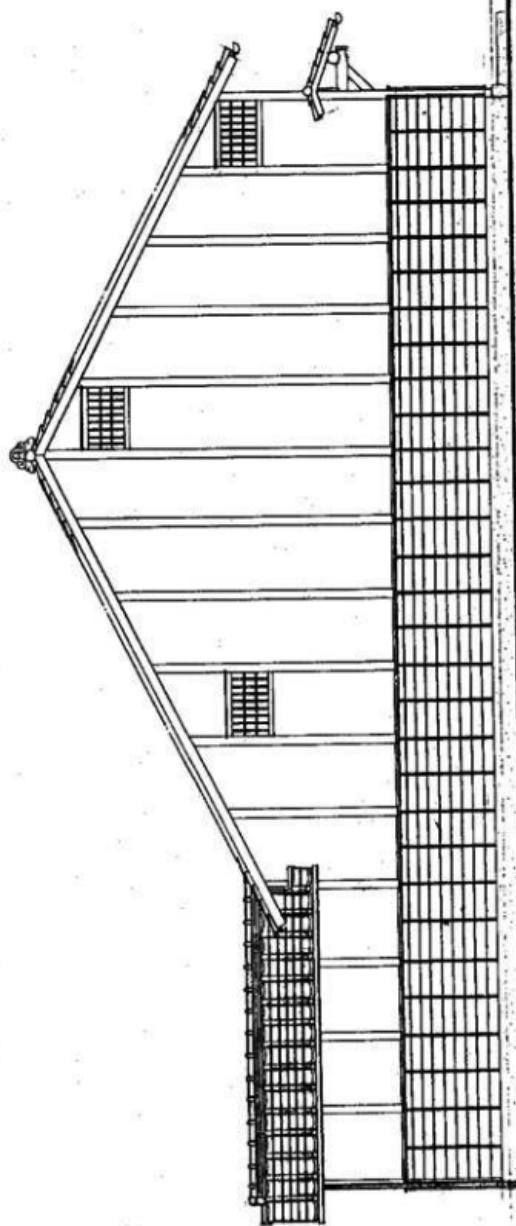
21 ザシキ(2)



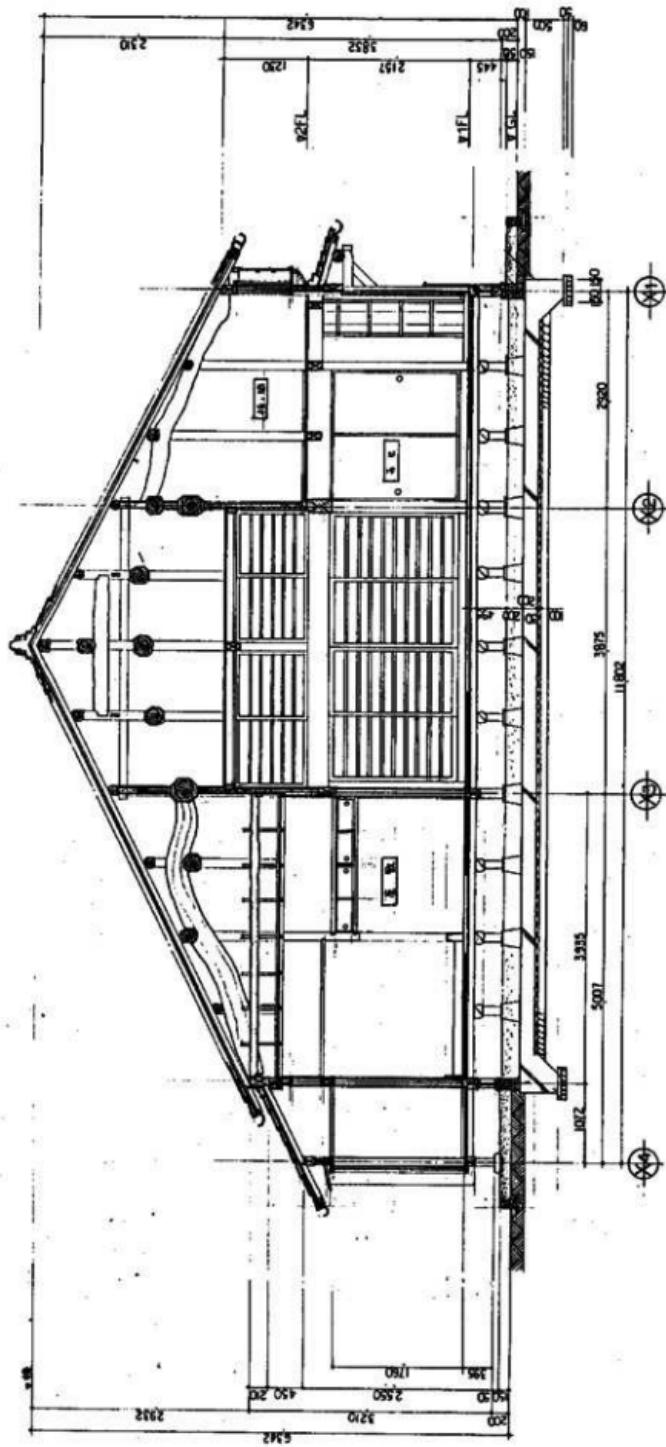
22 復元計画図① (ヤナセ路同様事務所)



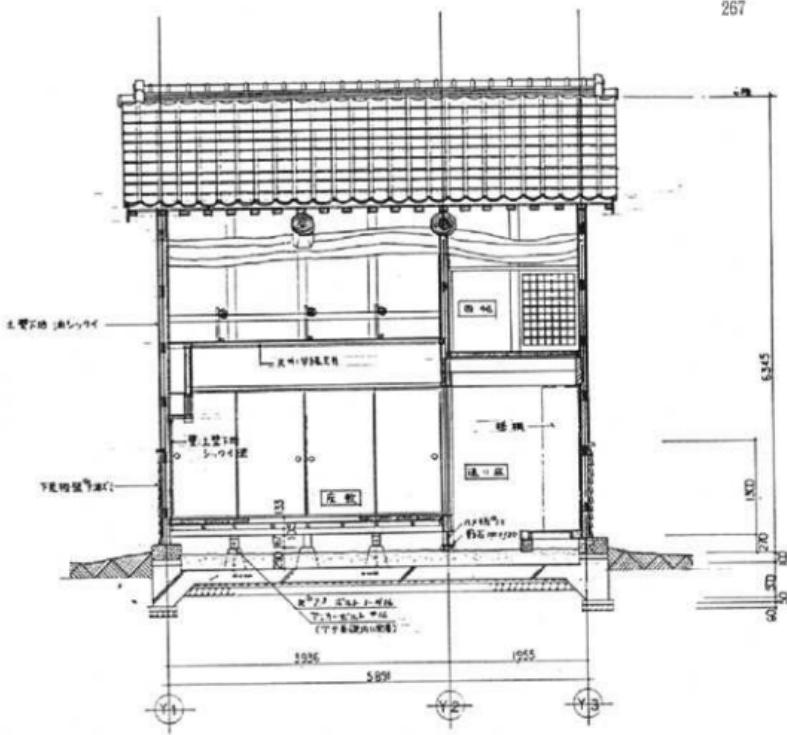
23 復元計画図② (ヤナセ協同建築事務所)



24 復元計画図③ (ナセ哲司建築事務所)



25 後元計画図①(ヤナセ協同建築事務所)



26 復原計画図⑤
(ヤナセ協同建築事務所)



27 玄関（移築前）



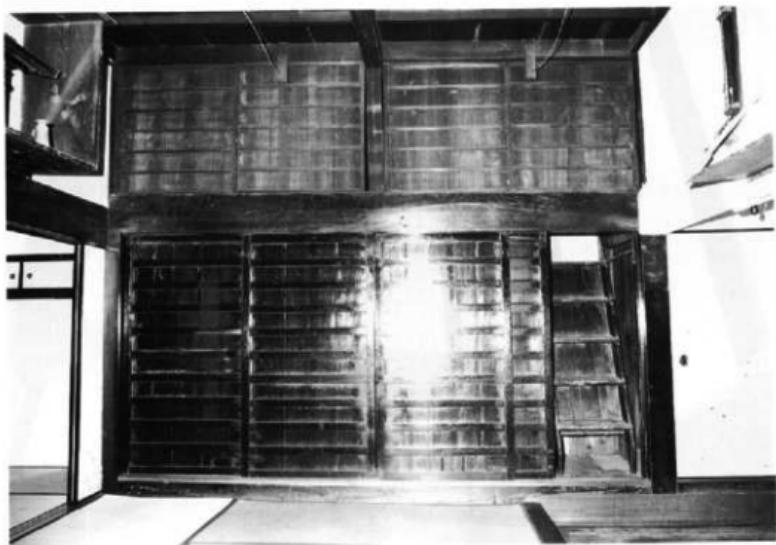
28 正面



29 里中(3)



30 三才(4)



31 三才(5)



32 ミセ(6) 吹きぬけ部見上げ



34 緑樹



33 正面庭



36 デンキの床構造



35 後方2階の正窓の短時



37 小屋組



38 残っていた旧垂木等



39 屋根下地



40 移築された旧飯尾家

都市計画道路博多駅築港線関係
埋蔵文化財調査報告(II)

博 多

福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集

1988年（昭和63年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

印刷 株式会社 川島弘文社

